

真剣で甚爾に恋しなさい！

ハリボー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれ落ちた時より背負った呪縛

しかしそれは一匹の化け物を生み出した。

マジ恋と呪術廻戦のクロスオーバー作品になります。

目次

EX

武闘家殺し	1
スカウト	5
その時まで	12
梁山泊	19
史文恭	26
たどりついた場所	35
歪んだ愛	42
隠れ里	54
【生誕】	68
新たな動き	80
リユーベック	91
決行	102
大黒天	121
いつときの別れ	139
禪院家	155
託された者・仲直り	170
14対1	185
宴	199
方針	217
転入・再会・連なる者	242
川神学園	259
醤油とカラシの割合7:3	273
束の間	292

E
X

敵は

ヤンデレ？不可解

325

312

302

EX

武闘家殺し

ハアハア…

丑三つ時に差し掛かった時間帯、キャンプをしたことがあるものならば想像しやすいだろう夜の森はそれはもう暗い右も左もわからなくなるくらいに暗い風が吹く音、その風で揺れる木々の枝そして川が流れる音闇の中にあるのはそれらのみただの森でこれなのだではそれが樹海となるとどうだ？

ハアハアツ…クソツ！

ここは静岡県にある青木ヶ原樹海月の光をも遮る中を一人の男はひた走るまるでそれは

何者からか逃げるかのように

どれだけ走った？

分からない

奴はまだ追ってきているのか？

分からない

狙いは何だ？

分からない

では、何ならわかる？

追いつかれたとして勝てるか？

否

交渉することは可能か？

否

俺は殺されるのか？

「正解だ」

目の前にいたあり得ないずっと後ろから追ってきていたはずだ、しかも足場の悪いそして木々の枝で月明かりさえもろくに届かないこの樹海の中でどうして、どうやって先回りができる！

クソツタレ噂は本当だったガキだと思っただけでなめていた、それがこんな

「化け物め」

「失礼なおっさんだなあ、まあいいどうやって追ってこれたか気になっただろ？教えてやるよ」

「.....」

「そう睨むなまずどこから追ってきたか簡単だ、木々の枝を足場にして追ってきた森の中の鬼ごっこは後ろだけでなく上にも注意を払ったほうがいいぜ？」

この少年、簡単に言っているがことはそう単純ではないまず何度も言うがここは月明かりさえもろくに届かない樹海、その中で人が乗っても大丈夫な枝を瞬時に見極め飛び移るとしても2〜30cm幅の枝踏

み外せば終わる

「だが、足跡も姿すらまともに見えない中でどうやって追ってこれた」「ん？ああそんなことか。お前も武術の世界に生きてる身だ聞いたことくらいあんだろ？」

天与呪縛

生まれ落ちた時よりその身に宿る縛り何かを失う代わりに膨大な何かを得る。例であげるなら身体的な欠損がある代わりに膨大な気を扱えるなどがある

「俺の場合は気が一切ない、そう一切だ。天与呪縛で身体能力が高い代わりに、気が一般人の十分の一以下なんて症例があった。が俺にはそれが無い、俺はまさに天与呪縛のフィジカルギフト。お前が俺の追跡に気が付かなかつたのはそのせいさ、お前は俺の気を感じしようとは必死だったが一切ない俺には意味がない。加えて気配を完全に絶てばお前にとって俺は透明人間というわけだ。まあ壁越えの奴ほど気で探ってくるからそんな奴らにとっても同じだな、だから落ち込むことあねえよ」

「そんなことじゃねえ、俺が聞きたいことはどうやって俺を見失うことなく追ってこれた？呪縛で視力が常人の倍以上だとしても難しいはずだ」

「確かに呪縛でも光が届かない中で20m以内に入らないと体の輪郭すら見えないが、人が残す痕跡はそれだけじゃない。臭跡やその場に残るお前の気を辿った。呪縛で五感なんかも強化されてんだよ、そのおかげで俺は気を全く持たないのに感じることで見ええるからな」

「ハハッなんだそりゃ？チートが」

世界中で壁越えを果たした武術家は必ず気を操る。気を身体能力強化や技えと昇華させるのだしかし目の前の少年は逆に気がない代わりに化け物じみた五感で見ることができた

「さてお別れだ、なんか言い残すことあるか？」

「…じゃあ一つだけ…死にさせ武闘家殺し!!！」

「やなことだ」

首と体が分かれたる消えゆく意識で

「(あいつ刀どこから出した?)」

死にゆく瀬戸際に男が思ったことだった

スカウト

愛知県 名古屋市

樹海でターゲットの男を始末してから三日、武術家殺しこと伏黒甚爾は名古屋に来ていた。時刻は現在昼の12時を少し過ぎた頃、昼飯時だいくら天与呪縛で人を超越した身体能力を持つていようと甚爾も人間当然腹が減る。ゆえに現在、甚爾は何をしているかというとな古屋名物ひつまぶしを食べていた。

「おかわりくれ〜」

「は…はい！ただいま！」

「おいあの兄ちゃんすげえぞ、もう四人前も完食しちゃった」

「嘘でしょ…あれだけ食べてるのにあのスタイル?! あたしの日々のダイエットって…」

店に居合わせた客も定員も甚爾の食欲に注目を集めていた

「いやしかし名古屋名物にははずれがねえな天むす・みそかつ・手羽先・きしめん・味噌煮込みどん、どれも美味かったなあ」

「「「「「「え?」「」「」「」」」」」」

そうこの男この店に入る前に他の名古屋グルメを満喫していたそれも各店でかならず五人前は食している

「お待ちせいたしました、お代わりをお持ちいたしました」

「ども〜さしてひつまぶしはこれで最後にしてはカレーうどんの人気店に行きますか!」

「「「まだ食うんかい!!」「」」」

「うお！なんだ？」

甚爾以外の客と店員の心からの声であった。

「ありがとうございました〜」

「さて次の店に行くか」

《……》

「まったくしつこいなあ。三日前から勘弁しろよめんどくせえ、しかも店に入る前とまた見張りが変わっていやがるそれに見張りが変わったとしても必ずフォーマンセル、誘いにも乗ってこねえどうすつかねえ」

甚爾はこの三日間何者かに監視されていた。最初に気が付いたのは樹海を出てすぐだった、初めこそ敵意がなかった為に小動物か何かの視線かと気にも留めなかったが町中に入っても感じる視線に流石に監視されているとわかり依頼で振り込まれた大金を使って名古屋グルメ堪能ツアーを装って監視者どもを誘い出そうとしていた。だが誘いに乗ることなくそれもフォーマンセルで動き二時間ごとに監視者が変わり視線はばれている前提かつこちらが天与呪縛で五感が化け物じみているのを知ったうえで、気配を断ち視線は感じるが気を悟らせない範囲を一定に保ったままこの三日間監視し続けていた。

「(相当訓練を積んでるな、並の練度じゃないしかも必ずフォーマンセルを組めるほどの組織規模でこの日本で監視といえどもこれだけ大々的に動ける組織とくればおそらく…はあくめんどくせえ)」

ここまで徹底して監視されているとなるときさすがにストレスが溜まるそれは甚爾とて同じそして我慢の限界もピークにも達していた、ゆえに甚爾がとった行動は

「……………ぞくツ……………」

「！！！！」

それは死を体感させるほどの強い殺気それを一瞬放ったのだ、鍛え上げた者たちでさえも0.1秒にも満たない間の殺気で己の死を明確にイメージ出来てしまうというのに周りにいた一般人は無事で済むのか？当然無事で済むはずがない、脳が死んだと誤認し心臓も活動を止めた。半径約50メートル内の約400人も集団ショック死である。

「じゃあな」

邪魔がなくなり逃走経路が確保できた甚爾は即座にその場を離脱した

「へえ、判断が早い二手に分かれて俺を追う役と救助と連絡役即座に分けたかこいつは少し楽しめるかもな」

愛知県 どこかの工業地帯

「さて、出て来いよ九鬼従者部隊ども」

「ファック!! テメエどういふつもりだ 一般人をあんなに殺しやがって
!!!」

「ステイシー 落ち着いてください、私達では彼には敵わない時間も稼
げて最大でも2秒が限界です」

この3日間甚爾を監視していたのは九鬼従者部隊たちだった

「生かす気も殺す気もなかったから運が良ければ助かんだろ、つーか
そもそもお前らが原因なんだぜ? 3日も前からここそこそとなんで俺
を監視している?」

「んだとー」

「待てステイシー」

「あずみ」

「また増えた」

「あたしは九鬼家従者部隊序列1位忍足 あずみだ、そして二人が同
じ従者部隊16位の李 静初と15位のステイシー・コナーだ。まず
私たちの話を聞け」

「まさか従者部隊の上位陣が来るとはねえ) だがそいつはできねえ
な、さらにあと五人隠れてんだろ? 出て来いじゃねえとこの三人殺す
ぞ」

「「「「!!」」」」」

甚爾の警告にさらに五人姿を現す

「慧眼感服いたしました。私は九鬼家従者部隊序列3位クラウディオ・ネエロと申します」

「同じく4位ゾズマ・ベルフェゴール」

「同じく42位桐山 鯉と申します」

「同じく184位シェイラ・コロンボ」

「序列零番ヒューム・ヘルシングだ」

これでこの場所に集う者たちが全員でそろった。警戒する中クラウディオが口開く

「まずは倒れた一般の方々ですが皆さん無事蘇生され後遺症の心配もございません」

「あつそ、どうでもいいがな」

「そしてお詫びをこの度は誠に申し訳ありませんでした。この三日間あなた様を監視していた理由をご説明させていただいても？」

その言葉に甚爾は無言で続きを促す

「我々九鬼財閥は1年後にあるプランを計画しているのですがその計画に協力していただきたいのです。詳細は詳しくお教えすることはできませんがどうでしょう？報酬はあなた様の提示する金額で構いません、もし金銭でなくともお望みのものがあるならばそれをご用意いたしますよう」

「それだけじゃあないんだろう?」

「フフツ流石です、はいもう一つございます武神 川神 百代と戦つていただきたい」

「なるほどある程度読めてきたな、こいつらの本命の目的は計画の協力ではなく武神と俺が戦うことそしてそのデータを欲している監視もデータを取るに十分な時間耐えられるか見定めるため……くくツ、クカカカ」

「そして最後に九鬼に就職いたしませんか?あなたならば従者部隊序列上位になれるでしょう」

まさかもスカウトまでしてきた。だがその言葉は甚爾には届いていない自分を当て馬として使おうとしている彼らに明らかな殺意をもって殺気を放つ

——ぞぞぞツ——

「お前ら余程死にたいらしいな」

その瞬間彼らが見たのは首と体が分かれた自分だった。腰が抜け膝をついた衝撃で意識が戻る、繋がっている生きているだがもうこの場には奴の近くにはいたくないと本能で理解する。自分達は虎の尾を踏むどころの話ではない、開けてはならぬパンドラの箱を開けたのだ。だが一人だけ獰猛な笑みを浮かべるものが一人その者が見たのは片腕が落ちる自身の姿だが殺気のみで己にそこまでのイメージを見せるものは片手で事足りた、しかしどうだ?今まさにその片手に新たに加わるものが目の前にいる笑みを浮かばずにはいられない

「面白い！面白いぞ禪院甚爾!!!」

「今は伏黒だ」

「失礼した。では改めて伏黒甚爾、我が名はヒューム・ヘルシング私と勝負をしよう此方が勝つたら九鬼に就職し依頼も受けてもらう」

「俺が勝つたら二度と関わんじゃねえ」

空気が張り詰める緊張の中で二人同時に仕掛けた

「くらうがいい！【ジェノサイドチェンソー】」

甚爾は天与呪縛によって気が一切ないだがその代わりに得た化け物すら屠れるであろう力と他の追従を許さない戦闘センスその二つに合わせ強化された五感で気を知覚し触れることができた自然が発する気その三つが合わさり本来ならばあり得ない使うことすらできない奥義をその肉体は可能にした。打撃との誤差0.000001秒以内に気が衝突した際に生じる空間の歪み、威力は平均で通常の2.5乗、打撃との誤差0.000001秒以内に気が衝突した瞬間、空間は歪み気は黒く光る。この技を狙って出せるものは存在しない。はずだった・・・だが圧倒的戦闘センスはそれをも可能にした

【黒閃】

その時まで

【ジェノサイドチェインソー】×【黒閃】

2つの奥義がぶつかった同時刻各地にて

―神奈川県― とある寺院

「っ！これは！」

「総代！」

「わかっておるわい、落ち着けい」

「これほどの大きな気のブツカリ！一体ナニガ!? ソレニ…」

「うむ、一つは嵐のような気はおそらくヒュームじやろうて…お主が言いたいのはもう一つの気、まるで空間自体を飲み込み…いや全てを歪ませ壊し尽くしそうな気だが分かん、これは人の発する気かろう？まるで大気に漂う気が弾けたような…そんな感じじゃ」

「まるで自分が、体の中から歪められていくようナそんな感じがシマシタ。多分ぶつかり合った場所は遠いでしょうが、一瞬自分の死を垣間見れマシタ」

「一応、備えるとするかの」

「ハイ」

「(歪み破壊する…はて？何処かで似た経験をした気がするがもしや)」

―とある河川敷―

「おいおいヤベエなあ、距離はあるがそれでもこの俺が死を垣間見るほどの殺気がここまでどんなバケモンだよ」

「zzz！しっ師匠く！」

「わっ！どうしたんだよタツ姉」

「どうしたんだい？タツ？師匠も？」

「師匠く腹減った」

「感じ取れたのは辰子だけか、違うな感じ取れなかった奴はもし間近で余波でも浴びたら感じ取る間も無く死ぬ。壁越えもしくは壁越えに近いもの達は感じ取れるが対処はできねえ」

「基礎から俺自身鍛え直したほうがいいなあ」

ーとある廃ビルー

「アハハハハッ！」

「「「「！」「」」」」

「いきなりどうしたんだ？姉さん？」

「これが笑わずにいられるか！面白い誰だこの気を発しているのは」

「誰も鬨気なんて出してないわよお姉様？」

「ああかなり遠いからな多分県をいくつか跨いでる」

「えっ！そんな先の気も感じ取れるのか先輩、やっぱスゲーな」

「いや、普通なら私でも無理だ：だがこれは普通じゃない」

「それだけやばいつて事？それは大変大和結婚して」

「お友達で」

「（誰だか知らないが川神に来てくれないかな？多分じじいも気がついてきている、心当たりがないか聞いてみるか？フフツク々に血がたぎってきた！」

ー石川県ー

加賀市

とある屋敷

「お父様！」

「落ち着きなさい、発せられている地は遠い安心しなさい」

「は、はい…」

「けどやべーぜ、オラも今までこんな禍々しい気感じた事がねえよう」

「はい、お父様はあ言っていましたでしたが暫くは注意しましょう松風」

「(この気の爆ぜ方はもしやあの家の技では…)」

―京都府―

「ッ！」

「(な、なに？今の一瞬意識が持っていかれた…気になるけど絶対下手に突いたら虎どころか龍が出てきそう。ええいやめやめ！今は」

「なつとうく体に良い納豆！松永納豆いらんかね」

―九州― 福岡にある学園

「(なんだ今の感じ、オレが一瞬で意識を持っていかれた！クソッ師匠なら何か知ってるかもしれねえ)」

ピポパ プルルル プルルル ガチャ

「もしもし師匠…」

―ドイツ― とある邸宅

「！今のは！」

「君も感じたかね」

「はいっ！戦場でもこれ程の殺気は感じたことはありません」

「私もだよ、直ぐに部隊を招集してくれ作戦会議を行う悪いがこれからすぐにでもこの発端を調査に出てもらいたい」

「了解しました」

「2人ともどうしたんだ？」

「いいえ、何でもありませんよお嬢様」

―中国― とある隠れ里

「指示が下ったこの鬨気を発した者を調査せよとのことだ」

「エエーヤダー部屋に籠もってポテチ食ってコーラ飲んでネットゲしてたーい、ということに任せた」

「ダメだ」

「そんな事より…パ…パンツちよ…う…だい」

「見つけてどうする？」

「勧誘とか力づくでも連れて来いと」

「いや無理じゃね」

ー別の隠れ里ー

「お呼びですか当主」

「貴様も感じたであろう先の鬨気を、奴らより先に見つけ出し連れ帰れ」

「はっ」

「(フツツさてどれほどの奴が」

ー東京ー 郊外にある屋敷

「……甚爾か」

また別の屋敷

「お嬢様支度が整いました」

「わかりました下がちなさい」

「かしこまりました」

「……甚爾様」

世界各地でマスターランクもしくはその一步手前のものたちそしてどちらかを知る者達は感じ取っていたそしてこれまで何処に隠れ潜んでいたかわからないまだ見ぬ怪物に対しある者は備え、ある者は陣営に取り込もうと画策し、ある者はただ思い世界は今はまだ静観を決めた。

―愛知県―

―従者部隊 side―

「んん…私とした事が気を失っていましたが、他の方々は」

クラウドデイオは数分とはいえ気絶していた自分自身を恥じた、しかし今はそれどころではない事態は深刻だ先程まで工業地帯であった場所は今はただのゴミ廃棄場と言われても誰も疑問に思わないほどに様変わりしていた。

「クラウドデイオこつちだ!」

「ゾズマ無事でしたか」

「ああ、だがなんてこつた余波でここまで…俺は他のものたちを探すクラウドデイオは…」

「ええ私はヒュームの援護に、何処まで役立てるかは分かりませんがいないよりかはマシかもしれません」

各々役割を即座に決めて行動に移った

―従者部隊 side out―

土埃が舞い視界が悪い僅かに感じる己の同僚を探し回るクラウドデイオ

すると折れた木に背を預け立っているヒュームを見て安堵する。

今自身がいる場からは見えにくいが見る限り外傷は見当たらない

「ヒューム無事ですか?」

「クラウドデイオか、他の奴らはどうした?」

「現在ゾズマが探しています。私は貴方の援護に、それで彼は?」

「目の前にいるだろう」

指摘されヒュームの視線を追うとそこには口元に笑みを浮かべ両手をポケットに突っ込みこちらを見ている甚爾がいた。彼の方も外傷はないヒュームの本気のジェノサイドチェンソーと打ち合って5体満足で立っている生き物を初めて見て驚きを隠せないこの少年相手に己の技が何処まで通じるか

「ハハツなかなか、流石マスターランクってどこか？まあいいやじゃあ俺は帰るぜ」

「ッ！」

このまま帰して仕舞えば主人からの使命を果たせない慌ててクラウディオは止めようとする

「お待ちくだ「ああ、そうだ」さッ！」

「まあギリギリ引き分けてことにしといてやるよだから間を取ってお前たちの依頼は受けてやる、だが指示は受けねえ俺のやりたいようにやるそんで九鬼には就職しねえ。一年後だったよな？なら時期が近くなったらまた使いをよこせ」

そう言つて今度こそ本当に去つて行く。混乱する頭で必死に整理し理解する引き分け？間を取つて？そんな事はいいとりあえずは依頼は受けてもらえる。では最後に伝えねばならない事とがある

「お待ち下さい、局様より伝言を預かっております」

「死ね」

そう言つて呪縛の身体能力を使いこの場から消え去つた

「やれやれひとまずは依頼を受けてくれたことを喜びましょう。それでヒューム引き分けとは？」

「…奴の技をそらすのが精一杯だった、暫く右足は使い物にならん」
「？……！」

ここでやつと理解する引き分けと言つた意味、先程まで空中に舞つた土煙で見えなかったが晴れた今分かった。ヒュームの右足が血まみれで膝が笑っている事に

「奴に借りを作ってしまった、本当ならば俺の負けだが奴はさっきの一撃で我を始末するつもりだった、だがギリギリそらすことに成功し奴にとつても負けゆえに引き分け…という事だろう。ハハツいつぶりだろうな完膚なきまでに骨を折られたのは」

確実に仕留めるために放つた一撃がヒュームを仕留めることができなかつた。己の中で仕留めきれなければ負けそう考え甚爾は引き分けと言つたのだ

「恐ろしいですね」

「全くだ、だが次はこうはいかんぞ」

「(結局、局様のお言葉をお伝えする事が出来なかつたですねえ。局さまのおっしゃる通りでした)」

―羽田空港国際線ターミナル―

身体能力をフルに使い甚爾は東京に戻り空港に来ていた

「依頼まで一年かそれまでに面倒くさい用事とか片付けとくか、
ハアーめんどくせえな」

「ひとまず飛ぶかね中国に」

梁山泊

バババババババババツ

キキキキキキキキキッ

銃弾の嵐の中を両手に持ったサバイバルナイフで弾を斬り落としはたまた逸らしもしくはは避けながら一直線に走り抜け銃を持った男達をも抜き去る。男達が振り返り追撃をかます事はない、全員喉か額を一突きされ物言わぬ屍と成り果てた

「ハァー依頼とはいえかったるい、狙われるってわかってんなら初めからパーティーなんざ開いてんじゃねえよ」

「おッそつちも終わったか」

「……ああ、パツじゃねや史進か」

「おいッ！今なんて言いかけたッ！」

ザザツ

史進が持つ無線機に通信が入る

『二人共おつかレーライス』

「おう、まさる屋上から侵入しようとしてた部隊は？」

『武松と楊志が片付けた、パーティーもつつがなく進行中だよ。あーもう帰ってゲームしたいコーラ飲みたいポテチ食べながらアニメ見て辛口評価したい』

「だーもうるさいな！この仕事が終わったら林冲到新作ゲームを買って貰えるじゃねえか我慢しろ！」

『こちら林冲、護衛対象が一度別のドレスに着替えるために会場を出る。私も同伴するから誰か会場警備を交代してくれ』

『こちら黄信、私が行こう』

「しかし、うわさに聞いてたが本当に梁山泊って女しかいねえんだな」

今回の甚爾が受けた依頼は中国の財閥令嬢の誕生パーティーの護衛だった。かなり古くから歴史がある家のように敵も多く家族や友人が狙われることもしばしばあるのだという。現在の当主のたった一人の孫娘の10歳の誕生パーティーを五つ星ホテルを貸し切つて取り行っている。そもそも狙われるとわかっていながらこの規模で行うのだからバカとしか言いようがない。だが金を受け取った以上仕事はこなす。そして今回甚爾の他に依頼を受けた者たちがいた、**【梁山泊】** 歴史が動く陰には彼女たちが必ずいたといわれるほどの傭兵集団。全員が異能といわれる力を有している顔合わせの際、隣にいる史進に勝負を挑まれ手加減の上勝負し史進に勝ったことで彼女達に認められていた。

「そーいやさ何で甚爾はこの依頼受けたんだ？」

「もともとある人物の子孫に会うために中国に来たんだが、いかにせん情報が少なくてな何人かの裏社会に詳しい情報屋を訪ねてみたら一人情報を持つてるやつがいたでも…」

「なるほど想定よりも高額ですぐに大金が手に入るこの依頼を受けたと」

「そういうことだ」

「ちなみにさあその人物って誰？」

「李書文」

「はあッ！あの八極拳の！」

「おう」

「そりや大金が必要だわ」

「まあそれだけじゃないけどな（これは別にいいか）」

「？」

「なんでもねえ」

「そうか？あつそうだ！なあ甚爾ここに来る前日本にいたならあれ知らねえか？」

「あ？」

「少し前にとんでもない気のぶつかり合いがあつたんだたぶんだけど世界中の壁越えもしくはそれに近い者たちは気が付いてると思う、でさわつちらは本来この任務に就く前にそれを調べてたんだよそしたら占いの異能を持つ奴が気を放った奴が日本にいるって何か知らないか？」

知るも何もそれは自身とヒュームの衝突の際に起こったこと馬鹿

正直に話すわけもなく

「さあな、そもそも俺は気が一切ないんだぞ分かるわけねえだろ」

「あつそつかそうだったい、いや気もなしにあんだけ強かったから忘れてただよなそうだよな」

「おっい二人とも」

「楊志か屋上はいいのか？」

「んゝ交代で引き継いできたから大丈夫」

「武松はどうした？」

「公孫勝のところ私はパンツを求め徘徊しながらついでに二人に交代の時間を過ぎても戻ってこないから呼びに来た」

「は？」

史進と甚爾は二人揃って疑問を浮かべる。時計を見ると確かに楊志の言う通り予定の交代時間を少し過ぎていた。だが次の見張りの者たちが来ていないこの時三人の考え方が一つになる、何かイレギュラーが発生した。このタイミングで梁山泊のメンバーが時間道理に來ない、否來れないとなれば無線機の故障？想定していない場所での接敵？最悪殺され敵の侵入を許した

「楊志はまさるに連絡してここで見張り、甚爾はパーティー会場にわっちは交代で来るはずだった者たちを探す」

「了解」

「めんどくせーな」

本来戦い専門の史進だがさすがは梁山泊に名を連ねるだけはある。とつさの判断と役割の振り分け瞬時に二人に指示を出した

『こちら黄信ツ！全員に通達。パーティー会場に敵が侵入、数は50人以上応援求むツ』

「！」

50人以上の敵が懐に侵入一体どのようにして侵入を許したか、考えてる暇はない今はともかく護衛対象の安全と敵の排除が最優先

「甚爾！」

「チツ！」

「まさるわっちだ史進だ護衛対象は！」

『大丈夫！今さっきブショーと林冲が連れて離脱した、史進も敵の排除に向かって他の奴らには参加者の避難を誘導をさせてる』

「了解、楊志も今隣にいるからつれてくぜ」

『わかった』

「楊志わっちらも会場行くぞ」

「了解」

ーパーティー会場ー

「クソツ数が多い」

黄信は連絡を入れた後一人奮闘していたしかし多勢に無勢いくら己の【成長】の異能を使おうとも数に圧倒されていた

「終わりだッ」

「！しまじ」

ガシッ

「！」

「終わってんのはお前だよ」

「え？うぎよあ！」

ブチッ ブチチチッ

黄信のピンチを救ったのは地下の己が担当していた場所から駆け付けた甚爾だった。70階からなるこのホテルの60階にある会場に地下から真っ当向かったのでは間に合わないかと判断した甚爾はエレベータードアをぶち破り左右の壁を交互にけりあがって60階まで最短ルートで来たのであった。会場に着くと後ろを取られた黄信がいた。考えるよりも早く甚爾は敵の頭を鷲掴み力のまま引きちぎった。これには目の前でその光景を見ていた黄信だけでなく会場内にいた敵も目を疑い固まってしまった。そのすきを見逃すはずもなく甚爾は会場内にあつた食事用のナイフとフォークを使い喉や目に突き刺しけりで体を貫くなど僅か9秒という秒台二桁にも身たない時間で殲滅を終えた。

「あッやべ皆殺しにしちまったクソツタレ情報聞き出せねえ」

「九紋竜、史進！推・参ってもう終わってんじゃねーか!!」

「おう遅かったな」

「甚爾これお前が一人でやったのか!？」

「別にフツーだろこのくらい」

確かに史進も過去にこのくらいの敵を一人で相手取った経験はあるしかしこの制限された空間で自分達が来るよりも早く瞬殺し終えた甚爾、これで本当に気を持ちえない人間かと疑問にさえ思うだが今は味方であることに心から安堵していた

「わりーな皆殺しにしたから情報が聞き出せねえ」

「!ああ、大丈夫だまさるが敵の正体を突き止めた」

史進は己が考えうる中で一番想定したくなかった答えを口にした

「敵は長年わっち達と敵対してきた傭兵集団曹一族、今回奴らを率いてきたのは史文恭、曹一族の戦闘指南の師範代にして奴らの切り札だ!」

史文恭

甚爾達は先に護衛対象を連れて脱出していた林冲達と合流を果たし、各々の報告となぜあの場に突如として敵があらはれたのかが話し合われていた

「まず私から報告する。護衛対象は無事だ、今は隣の部屋で武松が護衛についている。依頼人である家族にはすでに報告を済ませ後ほど合流する手筈になっているそこからは依頼人の自宅で護衛を継続する」

「次はあたしだ敵は参加者に紛れ込んでいた。お嬢ちゃんと林冲が戻ってきた途端に変装を解き強撃された」

「こつちでも会場内に仕掛けた小型防犯カメラで確認してるから事実だよ」

黄信の報告に公孫勝がさかさず相槌を打つ

「けど会場に入る前に身体検査に持ち物チェック参加者に事前に送られたICチップの参加状を確認してんだろ？いくらなんでも侵入しすぎだとわつちは思うね。みんなもそうだろう？」

「てことは考えられる事は絞られてくるな」

「内通者」

「……」

入り口で確認した上で通し、屋上に地下通路も見張りで固めていたにも関わらず易々と多くの敵の侵入を許せる状況を作るには内通者がいると言う考えは皆反論もしようもなく納得せざる得なかった。互いが疑心暗鬼になり重い沈黙が起きる

「やはり伏黒甚爾貴様が内通者かつ！」

梁山泊の1人が内通者は甚爾なのではないかと言い出した、しかし考えてみると確かに1人だけ部外者である為、その可能性はどうしても高い1人の発言により集団内でその考えは伝染し次第に甚爾が内

通者だという声が強くなる。しまいに各々、武器や異能を用いて甚爾を包囲し出した

「ま、待てみんな甚爾はずっとわっちと地下で見張りをしていたんだぞ」

これに待ったをかけたのは、甚爾とペアを組んでいた史進だった
自分と一緒に楊志が来るまでずっといたと弁護する

「けどそいつは事前に警備態勢や参加者名簿を把握できてるのよ、それを伝えて向こうからも金をもらってこの依頼でも金をもらって雲隠れするつもりかも」

「それはないだろう」

今度は黄信が待ったをかけた

「そいつは私を助けてくれた、仮に向こうと繋がっているとして50人も殺せば曹一族も黙ってはいないはずだそんなリスクを甚爾が犯すはずがない。自分に置き換えて考えてみる、現にこうやって疑われている状況を想定できないわけがないだろう？」

「……」

またも場に沈黙が降りる

「まあ俺が内通者でもなんだったっていいが、俺はここで降りるぜ」

「何を言っているんだッ！」

突然の甚爾が任務を降りるといって、林冲が慌てて声を上げる

「は？そもそも俺が任務を受けた内容は××日の午後0時まで誕生パーティーでの護衛と警護今は？」

甚爾の言葉に林冲は時計を見ると日付が変わって0時04分最初の任務内容で行けば侵入されたものの護衛対象は無事で依頼は達成であるといえよう、だが自身が疑われているというのにさらに疑われる発言に林冲だけでなく史進や黄信も頭を抱えうなだれる、そんなことはお構いなしにと甚爾は依頼主である少女の祖父である人物に電話をかける

「あーどーもー、あ？何怒ってんだ爺さん血圧上がってぽっくり逝っちゃまうぜ？ハハツ要件ね依頼は達成達成したんだ約束の口座に振り

込んでけよ……おいおいまさかこんな時にボケが来るとか笑えねえぜ、依頼の期限は昨日までだろうがもう日付は変わってんだよ…はあッ！んだとこじじい！まてふざけんな！おい！チツ切りやがった」

「依頼主はなんだって？」

「依頼内容は変更、孫娘の安全が確保されるまでだとよこれに不満があるなら降りるのは構わないが報酬はなしだと。お前らも同様らしいぜ」

「だろうな元よりそのつもりだ」

依頼内容の変更に甚爾は不満げだが報酬は惜しいので渋々新たな任務達成のため梁山泊と共闘することに決めた

「林冲てめーが今回梁山泊全体の指揮権持つてんだろ？じゃあ伝えとけ俺の戦闘には手出しはするな死にたけりや別だが」

「しかし曹一族、特に史文恭は「あ？」何でもない」

「（〃〇〇グスンこわいよーなんで私が今回指揮権持つことになってるんだーふええん）」

顔は凜としつつ心で不満と涙を垂れ流す林冲これが一人だったのならば座り込み泣き出していたことだろう意外とメンタルが弱い少女であった

「で？林冲どうするんだ？」

「とりあえず護衛する者と史文恭達を搜索する者に分けるただし、発見したとしても仕掛けるな速やかに報告に戻れ全員で仕掛ける。それでは初めに護衛するものは…」

護衛する者たちと搜索する者たちに分かれ史文恭率いる曹一族の搜索する者たちに分かれ行動を開始した

「つーか、なんで俺が護衛なんだよッ!!」

「だ…だって甚爾は見つけたら即座に戦闘を始めそうだし…:…ぐすん」

「…はー、なんで泣くんだよ」

「だって…:…」

護衛のメンバーは林冲・武松・楊志・史進・公孫翔・甚爾の六人、理由としては少数精鋭で索敵のほうに力を入れるのとも指摘に変装され護衛対象に近づかれる可能性を下げる為である

現在は依頼主の家に場所を移し二人は庭を巡回しており他の三人は捜索隊と連絡は公孫勝が行い史進と武松は護衛対象についていた

「そーいや史文恭もお前らみたく異能を使うのか?」

「ああ、奴の異能は【眼力】、凄まじい程の動体視力を持っていて些細な筋肉の動きから相手の動きを読み取ることができる」

「動きを読み取るねえ…:…」

天与呪縛によって人間離れた自分の動きをもみ切ってくるほどのだろうか、考えるだけで顔がにやけるほど甚爾は期待が高まっていた

「だがあれから三日奴らは襲撃してこない一体なぜだ?」

「それもだがな何かおかしいと思はねえか」

「なにがだ？」

「依頼だ」

「？」

「いいかまずお前たち梁山泊に依頼を出しているにもかかわらず外部にも依頼を出していたことそれもたかだか一日だけの為にだ」

「確かにどうかと思うがあの様子だとかかなりの親ばかならぬ祖父バカだ、しかし孫の為に大金を惜しいものなどいないだろう。より万全を期すため私たちだけでなく甚爾にも依頼が来たのだと思うが」

「それなら事前にお前らのところに増員しろだとか言えばいいだろう外部からなんぎどうぞ入り込んでくださいって言うてるようなもんだぜ？」

甚爾の言っていることが的を射ているため林冲は黙って考えを聞く

「それにまだ分からない事ないことがある、なぜいきなり会場に現れたのか屋上や地下は見張りが常にいた入り口では身体検査に当日のホテルは貸し切りスタッフも依頼人が用意した者たちばかり」

「ああ、身体検査ではこちらで【見破る】異能を持ったものが行ったから少なくとも入り口ではない」

襲撃を受けた時の謎がまだ解けずにいた。スキはなかったネズミ一匹入る余地すらしかし突破されたその謎が解けない限りこの自宅での護衛も危険だと考えていた

「しかし甚爾はほんとにすごいな！気がないのにあれほどの敵を史進たちが向かうまでに全滅させるなんて」

「？そーういや言っただけか、おれはへババツーン＜あ？」

「あれは武松の敵襲を知らせる火柱！あれっ!!」

武松が敵襲を伝える火柱を上げるそれに気が付いた林冲は甚爾に声を掛けるがすでに隣には影も形もなかった

「はあッ！」

「くらえ」

「ふん、前より火力が変わっていないな武松つまらん」

「クッ」

「ならこれならどうだー！」

「後ろから攻撃するならば静かに行え史進」

ガキンッ

史進の攻撃は史文恭が持つ巨大な金棒によって防がれる

「さてお前たちどの遊びも終わりにして楊志が連れて行った少女を追うとするか」

「！」

「はあッ！」

二人たりはまとめて薙ぎ払われたしばらく戦闘はできないであろうダメージを負う

「さてとどめだ」

グサツ ぽた ぽた

突如として感じる腹部の痛みそれは段々と熱くなる、見ると自身の腹を貫通している中国剣があつた背後を見る

「てめえの言う通り静かに黙って攻撃したぜ」

「貴様！」

背後に金棒を振り回し甚爾から距離をとる剣を抜きスカートを破り巻き付け応急処置運よく内蔵は避けているがこのままでは出血で気絶する

「貴様は何者だ」

「依頼で雇われてる」

「日本人か名は」

「日本の礼儀で相手に名乗らせる前にまずは自分が名乗らなくちゃいけないんだてめーが名乗れや」

「ここは中国だこちらにはそれはない郷に入つては郷に従えこれには

日本のことわざだろう？。では貴様はこれに従うべきでは？」

「はーよくそんなの知ってんな」

「読書が趣味なものでな」

「別に聞いてねーよ、伏黒甚爾でてめえは史文恭でいいな？」

「いかにも」

「ならとつと終わらせて報酬をもらおうとするかね」

「来い」

甚爾は距離を詰め左の牽制から足払い着地を狙い胴体に右ストレートをかますしかし史文恭は異能を使いすべて見えていたジャブは手の甲で払い足払いには飛んでよけストレートは体を少し左によけ回避する互いに仕掛け仕掛けられての繰り返し甚爾の攻撃を史文恭は完全に見切っていた

「大したものだその動きなかなかやるなどうだ私と共に来ないか歓迎してやろう」

「断る」

「そうか残念だでは貴様もあの二人のように沈めてやる！」

「そうはさせない！史文恭！」

「豹子頭、林沖か！」

「ここでやっこのことで追いついてきた林沖も戦闘に加わる

「ふん出血とお前たち二人を相手か、少し分が悪いここは引く」

「まで！」

「一つだけヒントをくれてやる灯台下暗し」

その言葉を最後に史文恭は夜の闇に消えていくのであった

たどりついた場所

「また襲撃を受けただとツ!? 一体いくら貴様らに出していると思っ
ている!!」

声を荒げるこの男、依頼主である財閥の会長を務める男である。男は2度の襲撃に大層ご立腹だった。それはそうだろう裏世界ではかの有名な梁山泊に大金を支払ってまで孫娘を守らせているのに二度も襲撃を受けている、もしかしたら命がなかったかもしれない

「それについては申し訳ない……。だが私たちも必ずお嬢さんの命は守る。梁山泊の名にかけて」

「それならばいい、貴様はどうなのだ」

「あ? あー最初の報酬に上乘せしてくれんなら嬉しいねえ」

「構わんだが確実に守れ」

「へいへい」

「それと一つ頼みがあるのですが、屋敷の中を巡回させてもらえないでしょうか? お恥ずかしながらこれだけ奇襲を許した以上隅々まで把握しておきたい」

「……好きにしろただし、他に余計なことはするなお前達の仕事は娘を守る事だ」

そう言つて男は部屋を出て行った

「なかなか貫禄のあるご老人だったなリン」

「ああ、よし許可ももらった事だし早速「ねえあなた達」……君は?」

突然声をかけられ見てみるとそこには護衛対象の少女がいた

名は宝ホウと言うらしい。幼いながらもどこか子供離れした話し方や所作で教育がしっかりとされていることが分かる。

「どうかされましたかお嬢様」

「ホウでいいと言っているでしょう林冲」

「やっほーホウ」

「ええご機嫌よう楊志」

「ヨッス! ホウ」

「ご機嫌よう史進」

「ホウ」

「ご機嫌よう武松」

「おおうホウだ」

「ご機嫌ようまさる」

「ううー、みんなー……」

「ぐずるなよ林冲本人がいいって言うてるんなら良いじゃんわっちも堅苦しいの嫌いだしさ」

「ハアーもうわかった」

3人を丸め込まれて林冲もついに観念した

「あなたもご機嫌よう甚爾」

「……」

返答はしない甚爾はこの少女に違和感を感じていた見るからに子供それ以外に表現し難い姿、だが何故だろう甚爾には人の親ほどに見えた。

「……じ？……と……じ！………甚爾！」

「！……ああ、何だ？」

「急に黙り込むから驚いたぜ、どうかしたか？」

「別に」

「それでどうかされましたか」

「いいえ、話し声が聞こえたから声をかけただけよ、ねえ誰か話し相手になってももらえるかしら暇なのだけれど」

「わかりました。よしこれからこの屋敷を見て回ろうと思う私と公孫勝に楊志は二階を

武松と甚爾は三階、史進はおじよ「ホウ」…ホウ様の護衛兼話の相手を1時間後に一度集まろう」

こうして役割が決まり屋敷の中を手分けして把握して回ることになった

「……」

「……」(じー)

「……」

「……」(じー)

「おい何か言いたいならさっさと見えやブシヨ」

甚爾は武松と行動を開始してからずっと視線を受けていた流石に鬱陶しくなり質問を試みた

「すまない。いや何ずっと難しい顔をして何かしら考えて歩いているようだったから気になってな」

そう屋敷の中を巡回し始めてから甚爾は考え事をしながら動いていた、まるで心ここに在らずといった感じだ。甚爾の中では男のある一言が引っかかっていた。確証はない単なる勘だ、当てにはならない。だが無視も出来ない、自問自答を甚爾ずっと繰り返していた、己の考えで新たな疑問を生むわけにもいかない

「いや……なんでもねえよ」

甚爾は己の考え過ぎだと結論づける

「そうかと、ここだ次はこの図書室だ」

ガチャ：ブワツ

扉を開けると一瞬強い風が吹きホコリが舞う

流石は財閥、屋敷の中に図書室を作ってしまったというとは蔵書の量が尋常ではないこれを全て読み込んでいたとなると尊敬に値する量だった。大図書館とまではいかないが小規模の図書館を開けるくらいの蔵書量は部屋に入った二人もその量に感心する。

「こりやたまげた」

「ああ、私も個人所有でここまで集めているの初めて見たよ」

「おいこれ1900年初版って書いてあんど、こっちは1907年、1908年……って1800年!!これ売ったらいくらなんだ」

「おい甚爾するなよ?」

「……ああ、やんねえよ」

「なんだ今の間は」

「それよか早く中を見てまわんど」

「そうだな」

少し脱線してしまつたが二人は図書室の中を見て回る、だが特に何があるという訳ではなく多少時間がかかつてしまつたが図書室の中を回り終えた

「ここは何もなかったな次に行こう」

「・・・」

「甚爾どうかしたのか」

「やっぱ変だな」

「何がだ？」

「匂い」

「におい？」

「(部屋の奥と手前で匂いが違う、それになんだこの風の感じ方は室内での感じ方じゃねえぞ)」

甚爾は図書室の奥に戻っていく慌てて武松は後を追いかける、途中に甚爾は武松に己がこの部屋で感じた違和感を教える

「俺が最初に変だと思つたのはさっきも言ったが匂いだ、奥に行つて部屋の入口まで戻つて確信した奥と手前では匂いが違う、手前では本の匂いが強かつた、だが奥に行けば行くほど匂いがしない」

「それは鼻が慣れただけなんじゃないか？」

「最初は俺もそう思つたけど違つた、インクだ」

「え？」

「真新しいインクのおいがした」

「いやインクって、ここは図書室だインクのおいがしても普通じゃないか？」

「かもな、だがこの室内の本の並びを見ろ入口から奥にかけて最近の新書から古書に並んでる、だが奥に行っても古書特有の劣化しカビと合わさった匂いがしなかった。さつき匂いがしないって言ったのはそういう事、代わりに奥には真新しいインクの匂いがする。な？変だろ？」

「いや… 私には分からないんだが」

「それに」

「まだあるのか!!」

「お前がこの部屋の扉を開けた時に風が吹いただろ？ただの気圧の差って言ってしまえばそれまでだがこの部屋に冷房装置もなければ気温もそれほど違いがあるわけじゃない、ならなぜだ？俺の答えはこの部屋のどこからか風が吹く場所がある、例えば隠し通路とかな… っとここだな」

甚爾は奥にある一つの本棚の前で止まる

「ハハツ見ろよ武松こんだけ整理されてんに本の高さが中途半端にされてるのがあんど、これをきれいに並べてっと」

本の高さをそろえると次は本棚の板に0〜9までのボタンがでてくる

「今度はパスワードね、ならこいつを使おう」

甚爾が取り出したのはブラックライト

「準備がいいな」

「まあな、さてさて***となんだあの嬢ちゃんの誕生日と一緒にじゃねえか不用心だねえどんだけ孫好きだよ」

ピピ… 「認証しました」

機械音声とともに本棚が床に埋まり通路が現れる

「!」

「ビンゴ、行くぞ」

二人は通路の中に入っていくしばらく歩きやがて薄暗い光が見えてくる、そして二人は一つの部屋に出た。それはまるで研究室のような所だった、薬品だなに注射器に診察台と奥にはもう一つ部屋があり

中には別途と机泊まり込みも出来そうだ。実験で遅くなれば休憩をとるためだろうか。

「空気が来てたのはここの空調が回っていたからか、それにインクも机の上にあるやつで間違いないな」

この時、武松は顔には出さないでいるが内心驚いていた。自身も他ともに認めるほど鼻がいい、だがこの男は己ですら分からなかった極々わずかな匂いを嗅ぎとりおまけに空気の流れの異変にさえ気が付いた。気が一切ないにも関わらず己以上の身体能力に加え人を超えた五感、一体何者なのだろうか確信があるとすれば梁山泊全員でかかったとしても負けるのはこちらだと言うこと、これまでの経験と自身の本能がそう訴えていた。そのようなことを考えているとは知らない甚爾は隠し部屋の物色を始めていた。

「おつこりや日記…いや何かの実験の観察経過を記したもんか…」

棚にあった観察記録を手に取り読む。

「……………
マジか!？」

そこに書かれていたのは驚くべき内容だった。ならば今回の事件、不自然な部分と甚爾が感じた違和感そして史文恭が言った「灯台下暗し」このすべての説明が付く。そして何よりこの件を裏から手を引いているのは!!

プルルルル!

その時、武松のスマホが鳴る

「リンか私だ」

「敵襲だ！史文恭が曹一族を連れ攻めてきた！」

「！わかったすぐに向かう、甚爾！」

「ああ」

事件は佳境に入る

歪んだ愛

「リン！」

「武松！よかった甚爾も」

「状況は！」

「大丈夫ッ！ホウ様は無事だ今は史進たちがついてる。史文恭は早々にどこかに消えた、私も今捜索しているんだが曹一族の連中に邪魔されてな早く見つけないと」

「なら奴はもう目的を達成してる頃だろうな」

「甚爾それはどういうことだ」

「行くぞ」

甚爾の言葉に林冲と武松は疑問を浮かべる。奴らの今回の目的は宝の殺害だが、宝はいまだ無事で史進達が現在護衛についている。二人は言葉の意味が分からないまま甚爾の後を追う、甚爾は歩きながら二人に説明を始めた。

「さつき武松と図書室にいたんだがそこで隠し部屋を見つけな、どうも何かの研究室兼実験室みたいでよ、わけわかんねえ薬やら器具がたくさんあつたそれに研究記録もな」

「甚爾それを持ってきたのか！」

緊急事態だというのに隠し部屋にあつた記録を持ってきていたことに二人はあきれた。

「続きだ、それでまあ読んでみたんだがどうもあのじじい老化を止める薬の研究をしていたらしい」

「！」

老化を止めるそれは人間の道に反する行いだった。

「その研究に自分を使われたとあっちゃ殺したくもなるわな」

「・・・確かに望んでもいないことに無理やり実験のモルモットにされたのではそれが普通だろう」

「そうだな、復讐で憎む者の最愛のものを殺す事で同じ苦しみを味合わせようと」「ああ違う違う」・・・は?」

「だからあの嬢ちゃんは大丈夫なんだよ、てか護衛もぶっちゃけいらね」

「?」

そうこうしているうちに三人は大きな扉の前に着いた、ここは依頼主の男の書斎だった。

「そもそも最初から狙いは嬢ちゃんじゃなくて」

扉が開き三人は入っていく・・・。

「その男を殺す事が本当の依頼だったんだろ・・・なあ史文恭」

「遅かったな」

中に入るとそこには、おびただしい程の血を流し死んでいる老人とこの惨状を作り出した史文恭がいた。

「史文教!」

「フフツそう吠えるな林冲、私の仕事は終わったこれで引き上げるとするさ」

「まあまでよ、もう争う理由は互いにならないわけだし答え合わせに付き合っていけよ」

「・・・まあいいだろう」

互いに警戒はしつつも甚爾の話に興味を惹かれ三人とも聞き入る。

「こいつは図書室に隠されていた隠し部屋から今さっき拝借してきたものだ、今からちよつと朗読すつから聞いとけ」

ー**月**日ー

妻が亡くなった。

子供のころからずっと一緒だった、君とは死ぬときも一緒だと思っていた。

なぜ私と生まれたばかりの娘を置いて先に行ってしまったんだい？

置いていかないでくれ、私はもう二度と失いたくはない。

こんな思いはしたくない。

もう二度と・・・。

ー**月**日ー

そうだ、死ななければ老いなければいいんだ。

なんて単純なことだったのだろう。

老いなければ死ぬことはない。
大切なものと離れ離れにならなくとも済む。
私の財力とわが社の技術があれば……。
だが、おおっぴらに動くわけにはいかない。
まずは資料を集めなければ。

ー**月**日ー

だいぶ資料が集まった。

この部屋の設備も充実してきた、そろそろ始めるでしょう。
試作品1号が完成した。
試験用のマウスに投与し経過を観察しよう。

ー**月**日ー

マウスが死んだ。

細胞を調べて分かったことは、試作品1号は老いる薬だった。
それもわずか1週間で30年。
失敗だ、だがこれは僥倖だった。
なぜなら新たな試作品の効果を見るのに時間をかける必要がない。
悔やんでいる暇はない、待っていてくれ。

「ここから長いからはしよらせてもらうぜ」

ー**月**日ー

10年妻がなくなってから10年たった。
ようやく、ようやく完成した。
体の細胞の成長を止めていつまでも若々しいままでいられる薬。
ずいぶん待たせてしまったねごめんよ。
10歳になってますます妻の子供のころに似てきたね。

君と肌を合わせるたび喜びがこみ上げる。

そうだ、あの娘に兄弟をつつくて上げよう。

それがいい君もそう思うだろ。

愛しい妻…宝。

「とまあこんな感じで、続きはもっと胸糞悪いから割愛すんぜ」

沈黙が場を支配する。誰も言葉を発せる空気ではなかった。

「ちなみにこれが書かれているのは30年前だ、もう分かったら？今回の黒幕は、てめーだろお嬢ちゃん」

「ええ、そのとおりよ」

そこには、史進達を連れだ宝がいた。3人も話を聞いていたのだから、信じられないといった表情をしている。

「あなたが、かたくなに私と言葉を交わさなかったのは、気が付いていなかったからかしら？」

「初めからてめーには違和感があった、というよりほぼ勘だ」

「そう」

「誕生パーティーを開催するようにそそのかしたのは、お前だな」

「なぜそう思うのかしら？」

「あのじじいのでめーへの感情は度が過ぎてる、命を狙われているなんて知ってフツー開くか？それに狙われてるって情報もお前が依頼して流させたデマだろ？」

「・・・」

「会場のスタッフや客曹一族をに紛れ込ませたのもお前、招待状は自分で用意するだのなんだの言って、曹一族の分を作り難なく会場入りさせた。そして、奇襲で俺たちにお前が狙われているという意識させ注目を自身に集めてカモフラージュ古典的だが有効だ」

「そして、史文恭にヒントを伝えるよう指示し俺たちにあの隠し部屋をみつけさせた、たくビビったぜ？読んだとき鳥肌もんだ。あの時じじいが娘を守れて孫娘じゃなく本当の娘の事とはね。道理で依頼主が親ではなく、祖父であるあのじじいだったのか納得もいった、そもそも、あのじじい孫いねえもんな」

「そう、私はあの人の娘亡き母の代わり・・・最悪の30年だったわ。訳の分からない薬を打たれ体の成長が止まり毎年経過観察のために裸にされ隅々まで写真にとられ、毎晩毎晩あの部屋で抱かれるの、最初は抵抗したわお父様やめてって、まだ12歳の時よ。それから毎日よ、犯されてそれを記録されまたそれを見させられながら犯される、私わもう諦めて死のうとした・・・でもそれも出来なかった、見えて」

そういうと宝は書斎の机まで行くとき引き出しをあさりナイフを取り出しそれを自身の喉に突き刺した。林冲達は突然の行動に急いで助けようと近寄るが、宝は血を流しながらも立ち上がった。そしてハシカチで血をぬぐうと傷は最初からなかったかのように綺麗にふさがっていた

「ではな甚爾、また会おう」

梁山泊の面々は梁山泊の総本山に帰っていった。互いが思うほど早くに再会を果たすことになるとは、まだこの時は知る由もなかった

「ねえ甚爾、本当に雇われてはくれないの？あなたの言い値で私は構わないのよ？」

「約束通り、てかあのじじいとのだが最初の報酬に上乘せでもらったし、それに目的もあるからな」

「そう：仕方がないわね」

「つーか気になってたんだが、お前致命傷すら治るならあっちのほうも治ってんだろ？」

「あら、それを女性の口から言わせる気？こう見えて貴方より年上なのよ私」

「アラサーしょ」それ以上はお口にチャックよ、と・お・じ？」へいへい」

「まったく」

「まあ何かあったら連絡しろ、気が向いて金次第では手伝ってやるよ」

「ええお願いするわ。そうだ甚爾、少しついてきて」

そういわれ二人で屋敷の中に戻る、階段を上り奥のほうの部屋に通された。そこは多種多様な武器の数々、実に100種以上まさに壮観

「ほくこりやすげえや刀に双剣・弓・ハンマー・ナイフ・手甲・槍・鎌
etc.」

「これもあの男の趣味でね、残しておいても仕方がないから好きなの
を選んでちょうだい、貴方にあげるわって・・・もう聞いてないわね。」

甚爾は宝が言い終える前に物色を始めていた。どれもこれも一級
品といっても過言ではないものばかり、最低でも何百万の値はつくで
あろうものばかりだ。だが甚爾の足は他の物には目もくれず視線は
一点に注がれ足は自然とその武器の前まで進めていた。

「・・・」

「その武器の名は【游雲】売れば五億はくだらない代物よ。その武器に
は気が宿っていてね、たとえ達人であつても持つことさえできないら
しいわ。過去に壁越えの何人かが挑戦したらしいけど誰一人持ち上
げることさえできなかつたって、だからここに収めるのには苦労した
みたいよ。コンクリートに埋めてそのまま床にはまつた感じで収納されてるの」

甚爾はこの時話を一切聞いてはいなかった。いや、すべての音や
色・匂いに至るまですべての五感を総動員して游雲を見つめていた。
そして一步前に膝をつき游雲を握る

「ハハッ」

そして持ち上げた。今この時より游雲の所持者は甚爾となった。
感じる重み数回試しにふるう、まるで小さいころから扱ってきたかの
ように馴染む。

「これ貰っていくぜ」

「ええ、じゃあねそれと最後に今度から私のことはハウと呼んで私もトージと呼ぶわ」

「へいへいじゃあなハウ」

新たな武器を手に入れ屋敷を去る。

屋敷を去ってから甚爾は、腹ごしらえをするために屋台に来ていた。注文したのは大餅ターピンチユエンロウ巻肉薄餅に豚肉やネギ、キュウリなどを巻いて焼いたものだ。焼きたてをほおぼる！口の中であふれる肉のうまみ、それにもちもちの皮が絶品だ。コチュジャンと豆板醤に醤油と少しの砂糖を溶かした特製のタレこれに付けたらまたうまい！こうして絶品屋台飯に舌鼓をうっていた甚爾だったが自分のいる屋台に真っ直ぐ向かってくる気配を感じ警戒する。だが、極々最近というか、つい数時間前まで顔を敵同士としてだが突き合わせていた者だとわかり警戒を解く。

「ここにいたのか探したぞ伏黒甚爾」

「何の用だ、史文恭」

近づいてきていたのは、曹一族の師範を務める史文恭その人だった。「まあそんなに邪険にしないでくれここのお代は私が持とう、店主！私にも同じものを」

史文恭はそう言って甚爾と同じものを注文し隣に座る

「てめーにおごられる理由はねえはずだが？」

「なに単なるお近づきの印だ、それに私の夕食も兼ねている遠慮することはない、他に食べたいものがあれば頼んでくれ」

「そういうことならご馳走になろうかね…… 後で話せよ」

「フフツ」

こうして突如として食事会？が始まったこの後に甚爾は大食漢をいかになく発揮し店主と史文恭の財布を泣かせたのちに彼女はこう語る

「… 安易にカッコつけておごるものではないな、あの時の自分の安易な発言を後悔しているよ（；；ω；；）」

隠れ里

「あく食った食った〜」

「それはそうだろうな、あれだけ食べれば… おかげで私の財布は空だよまったく、その体のどこに入っていくんだ?」

「奢るって言ったのはテメーだろ史文恭、文句たれんな」

二人は、屋台の飯を食い尽くし（9割は甚爾）近くの公園に移動していた

「で? 要件はなんだ」

「前にも言ったと思うが、私と共に来ないか?」

「前にも言ったと思うが、断る」

「私と一緒に曹一族の隠れ里に行き、当主に会ってもらいたい」

「なあ… 俺の言葉聞いている? 行かねえって言ってるの!」

「お前は、李書文の子孫に会いたいのだろ?」

「おい、なんでお前がそれを知っている」

「お前が訪ねた情報屋は私達の仲間でな、たまに情報屋に扮し町で情報などを集める。それに売って資金を得たりな、町のうわさ話もこれまた馬鹿にできないんだ。時々とんでもない情報を拾ったりする」

「人の口には戸は立てられないからな」

「そういうことだ。でだ、話は戻るが李書文の子孫は先月亡くなっている」

「・・・まじ」

「まじだ」

そう、甚爾の目的の人物は御年81歳を迎える高齢で結婚はしておらず先月の中旬に老衰で、天寿を全うされていた。

「老師は私と同じで曹一族の師範を務めていた方だな、皆で看取ったよ」

「なるほどね。それならあの膨大な情報料にも納得だわ、そりやちやちな金で隠れ里の場所は教えられんな。てか、もともと追い返すためにあの額取ろうとしたのか？」

「まあな」

伝説の傭兵である曹一族、その隠れ里なればおいそれとばれてはいけない。高額な情報料を要求したのはその為であった。

甚爾は、目的の人物がすでに亡くなっていた事を知りこれからどうするかを考えていた。今回の依頼で手に入れた大金で観光旅行をしようか、それとも游雲の扱いにさらに磨きをかける為に、所らの有名な格闘家と野良試合でもしようか。史文恭の誘いに乗る選択肢も出てきた、ついに行って礼として史文恭や曹一族の精鋭と游雲を扱うために、鍛錬するのも悪くない。そこで甚爾は、史文恭が自分に里まで来てほしいのかが気になった。

「なあ、どうしてお前は俺に里まで一緒に来てほしんだ？」

「ああーまだ説明していなかったな。実は当主が今回の件で50人を瞬殺した者の「じゃそういうことだ」までまで」

「それ明らかに家の者がやられた報復じゃねえか！」

「話は最後まで聞け、そうではない当主はお前に報復など考えていない。確かに我々は任務遂行の上で邪魔が入れば執拗に追い報いを受けさせるが、今回は互いに依頼を受け仕事上相まみえるに至ったのだ。ゆえに仕方があるまい。心配するな」

「報復じゃねえなら何だってんだ？」

「ただ単純に興味が沸いたからだそうだ。だがそれも仕方あるまい、我々、曹一族の精鋭を瞬殺した者となれば気にもなる。それが、それらの一番上に立つものならなおさらな」

曹一族は梁山泊と並ぶ裏世界に有名な傭兵集団、裏世界に通ずる者たちにもすでに今回の件は既に知る者もいる。

早々に勧誘の声や依頼もかかるだろう、そうなる前に話しておきたいとか、あわよくば陣営になどもありそうだと甚爾は考えていた。

「それに…だッ」

ガッ！

急に史文恭が立ち上がり、隣に座っていた甚爾の前に立ったかと思うと、両手で甚爾の両側を塞ぐよう背もたれに手を置き顔を近づけてきた。史文恭の髪がたれて甚爾の顔にかかる。互いの吐息すら感じられる距離、史文恭は甚爾の目を真っ直ぐと見つめる

「それに私個人としてもお前に興味がある」

「あ？」

「お前からは闘気が一切感じ取れない。だが私の目と経験がお前が只者ではない、危険だと本能に訴えてくるんだ。子供の頃から戦場に身を置いてきたがこんなことは初めてだよ。今こんなにも危険だと感じているのに、あの時、お前に背後から攻撃を受けるまで一切何も感

じなかった。私の異能については林冲達から聞いているだろうか？私の異能は【眼力】、この龍眼で人の筋肉の微細な動きや闘気や殺気すらも見える。だが、お前は私に攻撃を当てるまでそのすべてが視認できなかった。」

話を続ける史文恭、興奮しているのか少し息が荒い。甚爾は黙って聞き手に徹する。

「あの後の攻防もそうだ、あの時は内心冷や冷やしていたよ。この私が受けに回るのが精いっぱい、筋肉の動きを見たと同時に攻撃が目の前に来ている。クククツ… お前、あの時の動きがお前の本気ではないだろう。本気ですらないお前を捉えることができなかった。悔しい！長らく培ってきたプライドがズタズタだ!!だが… 同時に見てみたいと思った、思ってしまった」

そして史文恭は甚爾の頬をなでる

「本気のお前を私に見せてはくれないだろうか？肌で感じたいのだお前の… 熱い本気を！」

「…とりあえずお前それ、なんも知らない奴が見たら告白と勘違いするから気をつけろ、というかここ公園だから！もうすでに何人かに見られてるから！恥ずいだろうか！」

「何がだ？」

「…ああもういい、分かったよ行ってやるよ曹一族の里に」

「おおそうか！」

「ただし、里にいる間は鍛錬に付き合えそれが条件だ。そこでお前の

お望みも叶えてやる」

「無論かまわんとも！」

こうして甚爾の次の目的が決まった。向かうは伝説の傭兵集団、曹一族の住む隠れ里。

次の日の朝、甚爾達は合流し長江に向け移動していた。なんでも里に行くには長江を遡らなければならぬらしい。途中に寄り道を少しばかり挟みつつ二人は長江に到着した。

「やつと着いたか」

「まだこれからだぞ、とーじ」

「分かってるよ、キョウ」

いつの間にか二人は互いを愛称で呼んでいた。昨日の後に何かがあった、とかではなくただ単に甚爾がめんどくさがったからである。

―数時間前―

「いちいちフルネームで呼ぶのめんどくせえな」

「そうか？ならばお前の好きに呼べ」

「ああ？じゃあキョウで、短くて楽だ」

「ふむ、では私もそれに倣ってとーじと呼ぶことに使用」

「お前は別にいいだろう？まあいいか」

そんなこんなで互いに愛称で呼んでいた

「さつきから何探してんだ？」

「このあたりに迎えを寄こすよう昨日の夜のうちに伝えておいたんだが…… ああーいたぞ、あそこだ」

「お待ちしておりました、お勤めご苦労様でございます師範。ささきッ中にどうぞ、軽くつまめる物も用意してございますゆえ伏黒様も」

「ああ、とーじこつちだ」

「へいへい」

「それでは出発いたします。到着までごゆっくりおくつろぎください」

そう言つて手下の男は下がっていった。

「フーしかしました長時間の移動か」

「だがここに来るまでのほどではない、二時間程度だ」

「なら少し仮眠すつかね」

そう言つて甚爾は寝ころび、史文恭は本を取り出し読書始めた。こうして互いが到着まで思い思いに過ごすのであった。

「曹一族の隠れ里」

「お疲れ様でございました」

「やつとかよ、まあ寝てたぶん長江に着くまでよりは短く感じたが」

「着いてそうそうに悪いがついてきてくれ、当主が呼んでいる」

史文恭に言われいやそんな顔はしてはいないが、めんどくさそうな顔全開だった。

「そんな顔をするな、何すぐに終わるさ」

「だといいいけどな」

史文恭に案内され一つの屋敷に入る

「当主今戻った、客もつれてきている」

「ゴホッ、入れ」

入るとそこには、一人の男が布団の上で胡坐をかきこちらに体を向けていた。病でも患っているのだろうか、体調はあまりよさそうには見受けられない。

「ご苦労だったな史文恭。そして初めましてだな、ようこそ曹一族の隠れ里へ。武術家殺しこと伏黒甚爾」

「へえ、あんた俺を知ってんのかい」

「これでも裏世界に住む者だ、情報源はいくらでもある。しかし、噂に

たがわぬ実力のようだな。主は、我が一族の精鋭を一人で相手取り傷一つ負うことなく瞬殺するとは、いやはや人生楽しからずや、なにが起るかわからんのう」

「あんたも昔は相当やりそうだな、見たらわかるぜ。座つていようとも決して隙を見せない。武器は拳ではないだろうが、それでもかなりの高い練度で修めている」

「昔のことだ、今の私は既に一線を引いた老いぼれだ。それに最近では床に防ぎがちだな」

「で？俺をわざわざ呼んだ理由はなんだ？」

「一目見ておきたかった。いや驚いた、噂には聞いたことはあれどこの歳まで見たことがなかったが、これが天与呪縛か。気を持たぬ代わりにこやつのも目でも捉えることが出来ぬほどの身体能力……ハハハッ長生きはしてみるものだな。だがこの気は何だ？おぬし何を持っている？」

「ああ、こいつだろ」

そう言つて甚爾は、肩にかけていた長方形の長いケースから游雲を取り出す

「！それは、ハハハハハハハハハハッまさに鬼に金棒。天与呪縛に続いて【游雲】を見ることが叶うとは今日は何と良き日かゴホッゴホッゴホッゴホッ」

「当主！まったく興奮しすぎだ」

「ああすまんな史文恭。だがふし「甚爾でいい」では甚爾よ【游雲】は確かに素晴らしいが、お主自信自信気が付いておるだろう？」

「ああこいつを持つことで今までのようにはいかねえ、こいつの気で探知され隠密性が失われた」

そう、今までの戦いでは相手の気を探り戦ってくる相手などは甚爾にとつてはカモでしかなかった。しかし、游雲を持つことにより、游雲の気で居場所がばれる。ただの壁越えなどでは問題にもならないがヒューム・ヘルシングや武神相手となるといささかめんどくさい

「そのことについてだが当主、凜の異能で解決できるのではないだろうか？」

「フム、確かにな。では明日紹介してあげなさい。凜は今お使いに出ている、戻るのは遅くなる」

「了解した」

「では甚爾着いたばかりだというのにこの老いぼれの話に付き合わせて悪かったな、ゆっくり体を休めるといい」

「ああそうさせてもらう」

二人は当主の家を後にし、里の中を見回っていた。もつと先週民族のような暮らしぶりを想像していた甚爾だったが、電気にガス、水道はたまたWi-Fiも、里というよりかは一つの市町村とたとえたほうがいいだろう。

そしてしばらく歩き、当主の家ほどではないが立派な家の前に着いた。ここが甚爾が宿泊する場所であった。

「おお立派なもんだな！」

「移動で疲れただろう、さあ入れ」

史文恭に促され中に入る、そこはコテージのような作りで二階建て、空調設備も完備少しの間とはいえ過ごすには十分すぎるものだった。早くも目の前にあったソファアに寝転がる。

「トイレは廊下に出てすぐ風呂はその隣、冷蔵庫の中は好きに飲んだり食べたりしてくれ。W i | F i のパスワードはこれだ」

「サンキュー」

「風呂のほうは部下の女たちにすでに準備させてある、もう入るか？」

「じゃ、せっかくだし入るとすつか」

そう言って甚爾は風呂場に向かう。脱衣所で服を脱ぎ「コンコン」ドアがノックされる

「洗い物はそこの洗濯機に入れておけ」

「あいよー」

「ご丁寧に洗濯機まであるとは来客用の建物とは思えないほどの充実さ」

ガラガラガラ

「おお〜」

入るとそこにはヒノキ風呂床もきれいにヒノキが敷き詰められている。風呂の広さは甚爾が二人はいつでも余裕なほど。かけ湯をしてさっそく湯につかる、46度くらいだろうかちょうどいい湯加減、

今日の移動の疲れも湯に溶けていく。壁にはガラス窓がハメられており開けて外を見ると、ちょうど夕日が沈んでいた。これも風流だといえよう。しばらく久しぶりの湯舟を満喫する甚爾であった。

「(*、旦那*)ー」

「どうした？溶けているぞ、のぼせたかトージ？」

「いや、湯船につかるのは久々でな。いつもシャワーで済ませてたし」

「たまにはいいものだろう」

「ああ」

「それより食事の支度が出来た、こちらに来てい」

「はっ？」

するとそこには豪華な食卓が、エビチリ、トンポーロー、棒棒鶏、チヨギレサラダ、生春巻きetc.

「すげーな」

「お前の口に合うかはわからんが食べてくれ」

「お前が作ったのか？」

「他のだれがいる？」

何とこの料理の数々、史文恭が一人で作ったのだという

「マジか、こいつ戦いのみで家事なんて一切できないと思ってた。これが所謂あれか、人は見かけによらないという…。いやまて、実は見た目は完璧でも味は壊滅的だったりなんてことも)」

「どうした？席に就け、早く食べるとしよう」

「ああ、そうだな」

甚爾が席に着くと史文恭がグラスに酒を注いでくれる

「おい、俺は一応まだ未成年なんだが？」

「しかし、初めて飲むわけではあるまい」

「まあそりやそうだが…。正直にいうと酒嫌いなんだよ」

「なぜだ？」

「全く酔えなくてな」

「ならば仕方あるまい」

「一緒に酔ってはやれないが付き合いで飲んでやるよ」

「悪いな」

※お酒は二十歳になってから

「カンパイ」

ゴクツゴクツゴクツ

「へえコイツはなかなか…。これで酔えたらな」

「さあ、遠慮なく食べてくれ」

甚爾はさつそく料理に箸を伸ばし一口ほおぼる。そして酒を飲む。食べて飲み食べて飲みを繰り返し

「うめくくくく」

「そう口にあつたようで何よりだ」

終始無言になるほどのおいしさに箸は止まらず、瞬く間にカラになった皿が積みあがる。小一時間ほどして二人は食事を終えた。

史文恭が皿洗いを終え風呂に向かつていった。自分の家に戻る前に入つていくつもりなのだろう。甚爾はその間に寝室に移動し、寝室にあつた本棚から適当に手に取つて別途に腰掛け読み耽っていた。

切りのいいところまで読み終え、少し休憩がてら部屋の中を物色してみようと思ひ手始めに目の前のダンスに手をかける。しかし、なぜ来客用の施設にダンスがとも思ったが気にしたのは一瞬だった。そしてダンスを開ける。そして静かに閉じた。見間違いだらうか、などと思ひもう一度開ける。そして閉じる。嘘であつてくれ、最後の希望を抱き先程までの幻は嘘であつたと。だがしかし、三度目の正直で開けても結果は変わらなかつた。中には女物の下着が入っていた。色は黒に赤なかなか情熱的だ、加えてTバックにレースをあしらつたものなどもある。いいね！なかなかに好みだ。つてそうじゃない！すぐさま思ひ直し考える。なぜ来客用の屋敷に女物の下着が、何かの罠？

さて・・・そういえば史文恭や他の者たちはここを来客用の屋敷だと言つても言つていただらうか？最初から妙に生活感のある屋敷だとは思つてはいた、もし考えが間違つていなければ、この屋敷の住人でこの下着たちの持ち主は・・・ガチャ

寢室の扉が開く。甚爾はゆっくりと振り返る、そこには風呂上りで乾ききっていないのだろうしつとりと濡れた髪が肌に張り付きタオルを首にかけただけの、そう素っ裸の史文恭がいた。

お互いに無言。方や素っ裸、方や女物の下着を持っている。そこでようやく甚爾から口を開く

「なんで裸なんだよ」

あきれた声で指摘する。すると恥ずかしげもなく裸を隠そうともせずに史文恭が近づき、甚爾が持っていた下着を取りその場で着始める

「下着を脱衣場に準備するのを忘れてしまったな。お前こそ私の下着で何してたんだ？」

「お前の家だとは知らなくてちよいと探検しようとしたら見つけてな。てか、ここお前の家だったのかよ」

「言ってなかったか？」

「ねーよ！… おいまさかとは思うが俺のベッドは？」

「このベッドならば私とお前が寝てもまだ十分にスペースはあるだろう？」

「…もういいです」

「？」

こうしてハプニングはあったが、二人はともに寝るのであった

【生誕】

チウンチウンチウンツ

朝の小鳥のさえざりを聞きながら、いまだにまどろみの中をさまよう甚爾は夢を見る。まだ小さな頃の、生家の広い庭で父から武術を習い、姉と母がそれを優しく見守っている。場面が切り替わり、怒りの激情のまま暴れ回る。名とともにとうに捨て去った過去、「……じ」あの時の怒りは既にないが戻りたいとも思わない「……じ」どうでもいい既に捨てたのだから「とーじ」意識が覚醒する。

「あ？」

「やつと起きたか、朝食にするぞ。顔を洗ってこい」

目を覚ますとそこには、ノースリーブのシャツに下はパンツだけの格好をした史文恭が甚爾を見下ろしていた。

「……なんで下を履いてねえんだ」

「ああ、朝食の後に着替えるからなそれまで他の服を着てまた着替えるのは面倒だろ」

かなり扇情的な格好だが、今は空腹が勝った。テーブルに着くと2人分というには些か多いと思われる量の朝食が準備されていたが、そこは武術を嗜む2人、米一粒残さずに完食する。

「さて甚爾、今から凜の元へ行くぞ」

「昨日言っていた奴か？」

「そうだ、道すがら説明する」

準備を整えた2人は家を出て凜という人物の元へ向かう。その道中史文恭から凜の異能について説明を受けた。

「凜の異能は【生誕】血を媒体に様々な生物を生み出す。現存する生物の形したものだったり、空想上のものであったり様々だが、特徴的なのは生み出した生物は大なり小なり固有の能力を持っているんだ。」
「ほう、そりやすげーな。その異能を使えば核に匹敵する能力を持つ

た生物とか作れんだろ？最強じゃん」

「事はそう単純ではない。能力を持って生まれはするが能力を決めることができない、どんな能力を秘めているかは生み出してからでないと分からないんだ。」

「完全なランダム制御ね、そりゃハイリスク・ハイリターンなことって」

「着いたぞここが凧の家だ」

説明を受けながら歩いて、凧の家に到着した。さっそく史文恭が家の扉を叩く。

「おい！凧！いるか!?!?」

「は、はい！ただいま！」

ドタドタドタツ

「お師匠！お待たせしました！貴方が伏黒さんですね、当主からお話は伺っています。私の異能が必要だとか」

「ああ」

「詳しくは中で話す、邪魔するぞ凧」

中に入りさっそく詳しい説明をする、話を聞き終えた凧は納得といった表情だった。

「お話は分かりました。つまりは私が生み出した生物で、その武器に宿る気を隠すわけですね」

「そうだ。凧、今いる生物でそのような能力を持っているのはいるか？」

「申し訳ありません師匠、今の手持ちでそのような能力を持っている子は……」

「そうか……」

残念ながら凧が現在使役しているもので目的の能力を持っている

ものはいなかった。

心から申し訳に顔をする凜に、史文恭は仕方のないことだと声をかける。もともと望み薄だったことであり、もしかしたらと考えていたため、凜に協力の感謝こそすれ責めようなどは微塵も思っていない。

「しかしそれでは私の気がすみません！」

そう言っつて凜はいきなり立ち上がる。

「師匠、私にチャンスをください！明日はちょうど前に異能を使つてから二か月経ちます。明日に気を隠すための能力を持った子を召喚します！」

この発言に史文恭は、目を見開いて驚く。

凜の異能【生誕】で二か月のインターバルが必要なことは、甚爾に話してはいないが知っていたので問題はなかった。理由は気を隠す能力を持った子、つまりは望んだ能力を持った生物を生み出すといったのだ。

「だが凜、お前の生み出す生物の能力はランダムだと」

「はい、けれどこれまでに生み出してきて一つだけ新たに分かったことがあるんです。それは、贄にしたものに起因する。」

「贄」

「そうです。もっと正確に言いますと、贄にしたものの起源や魂、そして思いです。これまで私は、私の血でしか召喚してこなかった。ですが前に任務で殺した者の血を使ったことがあつたんです。そうしたらその子は、殺した者の得意な武器を生み出す能力を持っていたんです。最後にとどめを刺した時、相手はせめて武器があればと言っていました、それが流した血に宿り、得意だった武器を生み出すという能力になったのだと私は思っています。」

史文恭と甚爾は黙って聞いている。つまりは気を隠すという強い意志を持ちながら血を流すということ。しかし死の直前の思いとた

だ思っただけでは無理がある。二人はそう考えていた。

「お二人の考えは分かります。ですが、甚爾さんは気がありません。贅にしたものに起因するといいましたよね。つまりは天与呪縛に似た能力、気を隠すのではなく封じる能力を持った子を生み出せるかも」

「!!」

凜は甚爾の血を使って召喚することで、甚爾の起源である天与呪縛に似た能力を持った生物を生み出そうと考えた。これには二人も絶句する。もしそのような能力を持った生物が生まれれば、游雲の気を封じるだけでなく相手の気を封じることが可能かもしれない。このことに二人の期待は高まる。召喚するのは明日の正午、玄関で凜に見送られ二人は史文恭の家に帰った。

―その夜―

「何を考えているんだ？」

「ああ？」

夕食を食べ終え、風呂にも入りまったりとした時間を過ごしていたが、突然の質問に意識が戻され先ほどまで読書をしていたくせにいきなりなんだと思ったが口には出さない。体の向きを上にして史文恭の顔を見ようと見上げるが、見えない。代わりに見えるのは二つの丘、顔は見えないが声が聞こえるのは丘の向こう、顔も合わさずしゃべるのはいけない、どうしたものかと考えていると一つの天啓。

見えぬならば、見えるようにすればいい

これだ。

そう思ったならばさっそくこの二つの丘をどうにかしなければ、そう思い右手で丘をどかさうと触れる寸前へパシッ〜手首が捕まれる

「何ナチュラルに人の胸を触ろうとしているんだお前は」

「人と話すとき胸を挟んでしゃべるのは良いことか？いいや、良くな
い！」

「反語否定で言えば説得力があるとしても？いいや、ない」

「・・・」

「・・・」

「わり」

「ハア〜まったく・・・ボソツ別に言ってくればいつでも」

「あ？」

「何でもない」

「・・・そうかよ」

「で？何を考えていたんだ」

「もし明日、目的の能力を持った生物が手に入ったら最初の約束通りお前と勝負がてら鍛錬して、そのあとはどうするかって考えてた」

「ちゃんと覚えていたか。まあそれを決めるのはお前だ、じっくり考えたらいい。さあ0時を回ったそろそろ休もう」

「おやすみ」

「おいここで寝るつもりか？」

「そうだが？」

「ふざけるな、早くベッドに行くぞほら」

「だからな、いくらためーでも危機感を持って。俺は男でお前は女、手を出さないとは限らないんだぞ？」

「フム確かに、お前の寝相は実は起きているのではと思うほどに激しかった」

「え」

「後ろから私を抱きしめ、胸に引き寄せて足を絡めたら頭にキスを落とす。それ以外にもいろいろされたが、これが起きていたら本気のお前はどの様なことをするのだ？」

「・・・」

まさか昨夜、眠りに落ちた後の己がそのような事をしていようとは思わず開いた口が塞がらない。

「・・・冗談だ」

「ふざけんな！」

「あははは、ほら早くしろベッドで寝なければ明日は朝食抜きだ」

「チツ」

朝食を人質に取られしぶしぶベッドに向かう。今夜も我慢しながら眠りにつくと思うとそれだけで疲れる甚爾だった。

「あまりに驚いていたからとつさに冗談と言ってしまったが、とーじの奴それなりに私を意識しているのか？・・・まあそれはなさそうだな。」

こうして夜は更けていく。

無事朝を迎え、なぜか起きたら顔を少し赤らめた史文恭が睨んでいたが、気にすることなく朝食を平らげて凜と合流するべく凜の家に向かう。

合流したのち三人は安全を考慮して森の中へ、少し開けた場所に出たのでここで召喚を行うことにした。

「では甚爾さん、この針で指をさして血を少しだけ出していただけますか。」

「そんな少量でいいのか？」

「はいー」

そう言われて凜から針を受け取る。さっそく血を出すため指に刺すが・・・パキイ

「え」

「やっぱり」

当然のごとく針は折れた。仕方がないので甚爾は指の皮膚を噛みちぎって血を出す。

「ほれ、これでいいんだろ」

「は、はい……では失礼しますね」

「はっ？」

「あむ」

「！」

凜は甚じの手を取ったかと思うと、血を流している指をくわえた。これに二人はそれぞれ異なる反応を見せる。

甚爾はいきなりの行動に困惑の表情、対して史文恭は何とも言えない悔しそうな嫉妬のような難しい顔だ。

「んちゅっ……じゅるる……ちゅうー……んは……はむ……ちゅる」

「くっ……」

指の付け根から先まで丁寧に舐められる、血を一滴もこぼすまいと丁寧に丁寧に。

「んん……ちゅる……ちゅちゅ……ちゅぱ……はあはあ」

血を舐め終え指を離れた凜、そのあと下唇をひと舐めする。その姿に甚爾は少しばかり欲が沸くがこれから本題に入るために即座に抑え込んだ。

「形亡き者よ、今この血を捧げよう、肉体を得たも者よ、仮初の命を授けよう」

凜の両手から赤紫色の煙が上がり空中で集まっていくな、次第にそれは大きくなり中に何かの影が見えてきた。

「生れ落ちるは力、その力を持つてして我が敵を滅ぼせ！」

煙はどんどん集まりそして、弾けた。生まれたのは龍だった。姿は東方の龍、四神の青龍を想像してもらおうとわかりやすいだろう。青龍と違う点としては鱗は青ではなく黒、そして体は史文恭の半分程度しかない。

史文恭のの身長が172cmなので約86cmほどだろう。生まれたばかりでこちらを見降ろしながらゆったりと空中を漂っている。

「なー！」

突然の凜の叫び。

「どうした？」

「……すみません師匠、失敗しました。」

「そうか」

「お二人で納得すんな」

「ああ済まない、凜には生み出した生物がどのような能力を持っているか生み出した瞬間に分かるんだがどうやら失敗したみたいなんだ」

「どんな能力だったんだ？」

「・・・」

ふよふよと龍が凜によって来る。まるで遊んでと言いたげに

「この子の能力は【格納】です」

格納つまりは物を入れることが出来る能力たしかにこれはハズレかもしれない

「容量とかは決まってるのか？」

「いえ、たぶんないと思います。ですがただ格納するだけで気は隠せません。申し訳ありませんお二人とも、あれだけ啖呵を切っておきながらこの始末、いかなる罰も受ける覚悟です」

「凜、自分を責めるな。私たちは別にお前に罰など与えるつもりはない。こればかりは運だ、仕方がない」

二人が話すのをしり目に甚爾は黒龍と向かい合う。黒龍も甚爾の目をじっと見つめ返す。

「こいつ貰うぜ」

「え」

「ありがとよ凜。こいつはいいー！」

「え？でもこの子は」

「おい黒龍てのはつまんねえな・・・よしお前の名前はクロな」

「安直だな」

「いいんだよ」

黒龍を改めクロは己が主と認めたのだろう、甚爾にすり寄り最終的に体に巻き付いた。しかしそれは動きを阻害することのないように配慮されている。この龍賢い。

「よしさっそく試すか、クロこれ仕舞え」

するとクロは游雲を飲み込んだ。他にも仕舞えるか試す、すると甚

爾が持つてきていた武器をすべて飲み込んでしまった。

凜が言うには格納する大きさや量に制限はないらしく無限に格納できるようだ。一家に一台クロだねなんて思っけていても課題が残る。すべて取り込んだはいいが、やはり游雲の気がクロから感じる。仕舞えてもこれでは意味がない。

「クロお前小さくなれるか？」

甚爾が言うときクロは、自身の体を尻尾から飲みこみ始めた。どんどん飲み込んでサイズが小さくなっていき、最後には飴玉サイズになっていた。

そして甚爾はそれを自身の口に入れ飲み込んだ。

「！」

するとさつきまで感じていた游雲の気が消えた。史文恭と凜は驚愕する。

そしてクロを吐出し元のサイズに戻すと、また游雲の気が発せられる。

「ハハッやっぱりな。思ったと通りだ」

「どういうことだ」

「簡単だ、透明人間ってのは臓物まで透明だろ？だからクロにサイズ落とさせて俺の腹の中にしまえばいいと思っけてな、これで問題は解決だ。ありがとよ凜」

この男、かなりの力技で問題を解決してしまった。だがそれがこの男らしいといえればそれまでであり、そうでなければおかしいときえ思っけてくる。

かくして目的は果たした。そして

「それじゃあさっそく戦^やるかキヨウ？」

「ああっ！待っていたぞこの瞬間を！」

「え？ちよ、ちよつとまだ私いるんですけどっ！！！」

「早くどかねえと死ぬぞ」

「ですよね！！」

一目散に凜は離脱を図る、そして二人はついに激突する。

新たな動き

ブオンツブオンツブオンツブオンツ
遊雲をまるで体の一部かのように扱い、甚爾は史文恭との合間を
図る。

対して史文恭は、興奮が抑えられないとばかりにこちらに突っ込ん
できた。

狼牙棒を振り上げそのまま振り下ろす。

どおおおおおんっ

辺りが揺れる。甚爾は体を少し右にずらすことで避けた。反撃と
ばかりに遊雲で反撃！

ガンツ キンツ

甚爾は続けざまに遊雲の真ん中をもつて棒のように∞字に回しな
がら攻撃する。

史文恭も何とか避けはするが反撃に転じることが出来ない。

「どうしたキョウ、まだギアは上がりきってねえぞ」

「こちらはまだ本気ではないよ、しかしそれは愚の骨頂か…先に仕
掛けさせてもらうぞ」

「お好きにどうぞ」

真っ直ぐに突っ込んでいく、直前で止まり狼牙棒で地面をたたき土
で視界を遮る。

「」

視界を遮る向こう側から狼牙棒による無数の突きが迫る

「天狼突」
てんろうとつ

視界が遮られた直後の正面奇襲、背後に警戒を強めていたことがあ

だになり一瞬の硬直、数打防ぐも残りを食らってしまい吹き飛ばされる。

追い打ちをかけるように史文恭、吹き飛ぶ甚じに追いつき

「狼爪ろうそう」

今度は斜め上から振り下ろす、だがそれを甚爾は空中で体をひねることで回避、続けて史文恭の腹にけりを食らわせそのまま距離をとる。

史文恭も異能を使い蹴りを空いているほうの手でガードする。

「(私は得意とするのは中距離に対して、とーじは近距離だ。懐に入られたら勝てない)」

再度仕掛ける。

狼牙棒のリーチを生かし攻め立てる

「はあああああああああああああ！」

上下左右、狼牙棒を巧みに操り仕掛ける。気は十全に込め一撃でもかすればそこはまるで爪でえぐられたような傷ができる。

本来ならば

「そろそろぶつちぎるぜキョウ」

「！」

史文恭の目が最後に取りられることが出来たのは残影のみだった

「(バカな！あり得るのか、人であろうと車であろうといきなりトップスピードになれるはずがない！それなのに)」

甚爾がやったことは単純、停止の状態から最高速度に一気になったというだけだ。普通ならばあり得ない、本来ならば徐々に加速して至る最高速度にいきなり入るなど。

「(クソツ！とーじは！)」

史文恭は游雲の気を探る。

「！」

気を探れはしたが速すぎる。感じとつと思えばまた違うところで感じる、同時に十か所以上で気を感じては消え感じては消えを繰り返す。

「(集中しろ、こちらに攻撃を仕掛けるならば必然的に接近する。ならタイミングを合わせるまでだ！)」

史文恭はいつでもタイミングを合わせられるよう構える。

そして背後から一瞬でおのれに急接近される。

「(っ)だっ！」

ガキンツ

見事攻撃を防ぐ。しかし、そこには甚爾の姿はなくあるのは游雲のみ！

「しまったー！」

今度こそ本当の背後、拳を固く握った甚爾。

「(游雲の気をわざと探らせて私の背後に投げて攻撃、一瞬にして回り込み本命！このためにわざと最初から游雲を使っていたか！)」

人を超えた身体能力と五感、加えて持って生まれた戦闘センス。自然より発せられた気を五感で感じ引つ掴んで無理やり纏う。常

識？そんなものは知ったことかと唾を吐く。

戦闘時の集中は獣のそれだ、黒い火花の確率が1,000,000分の1だろうが関係ない。

他人にとつては1,000,000分の1でも伏黒甚爾にとっては絶対確率。

【黒閃】

「がああああああああああああ」

粉塵を巻き上げ吹き飛ばされる。

やがて止まる。

史文恭は動かない

「師匠！」

凜が史文恭に駆け寄る。凜は己の【生誕】で生み出した生き物で、視覚を共有する能力を持ったものを使いこの戦いを見ていたのだ。

「安心しろ凜」

「気絶してるだけだ」

甚爾がねらったのは、史文恭ではなく史文恭の持つ狼牙棒のほう。史文恭は狼牙棒の破壊の余波で気絶したのだ。だが逆に直撃していたら？余波のみで気絶をしてしまうなら、当たればどうなっていたのか凜は想像するだけで恐ろしかった。

「キョウは俺が連れていく、凜悪いが先に行ってキョウの家でこいつの着替え用意してくれるか、あと着替えさせてやってくれ」

「八、ハイ」

「さて」

屈んで史文恭の太ももの裏と脇の下に腕を回して持ち上げる、最後に首が辛くないように己の肩に倒してお姫様抱っこの完成。そして、ゆっくりと歩き出す。

「・・・お前さ、昨日の聞こえてねえと思ってるだろ馬鹿が」

昨夜、甚爾が史文恭の胸を触ろうとふざけた時の言葉。

『ボソツ（別に言ってくれればいいつでも）』

「俺が天与呪縛で五感強化されてるの忘れてたろ。まったく、何がいつでもだよ。今触れねえじゃん・・・」

甚爾が史文恭を覗き込む、その顔は……

「んっ・・・ここは」

「よう」

「とーじ」

夜、2人が戦って5時間ほど経ちすっかり暗くなっていた。

「負けたよ、最初からお前の掌の上だったとはな。分っていた事とは言え、やはり悔しいものだ・・・敗北は」

「だが、俺が今まで戦ってきた奴の中では、三本指には入るぜキョウ。負かして何だが、自信持っていないんじゃないの？俺とじゃれ合える奴はそういない」

「ふふ、そうかお前にそう言われるとは、そうだなそうするとしよう」
慣れないことは言うもんじやないと、少し恥ずかしいと思ってしまう甚爾。

「あれがお前の技か、【黒閃】凄まじい威力だ」

「キョウ：俺は」

「言うな分かってる、私のためを思って全力ではなかったのだろうか？」

甚爾は本気で攻撃を仕掛ければ、史文恭を殺してしまうと分かっていた。故に速度も、游雲で攻撃をする時も、最後にはなつた黒閃も全力ではなかった。

全力でなくとも黒閃を当てれば史文恭は死ぬ、だから狼牙棒に狙いを定めた。

その事を史文恭は全て知っていたのだ。

「お前との約束を守らなかった事は、素直に悪いと思ってる。だが初めてなんだよ、今までは、他人も自分すらもどうでもいいと思って生きてきた。

自尊心こころはもう捨てたはずだった、捨てたと思ってた。

他人も自分も尊ぶことをしないそんな生き方を俺は…。」

「とーじ、私は嬉しかったよ。全力ではないにしろ、お前は本気を見せてくれようとした、それだけでも私は嬉しかった。」

「キョウ」

「しかし、それでは納得はしないのだろうか？お前には罰を受けてもらう。覚悟はいいな？」

「ああ」

その言葉を聞き、史文恭は甚爾の腕を掴みベッドの中に引き摺り込んだ。抵抗も何もする気もなかった甚爾は、いきなり引き摺り込まれ困惑する。

「キョウ？」

「罰は朝まで私の抱き枕でいろ、いいな？」

罰を受け入れると言ったのは自分だ。ならば甘んじて受けようと思うって無言で肯定の意を示す。

「ふふ、実を言うと昔は弟が欲しかったんだ。もつと言えば甘やかす対象だな。こうして一緒にのベットで抱きしめ頭を撫でながら眠る、悪くない！」

「おいおい」

少し呆れてしまう。こんな可愛げのある奴だったか？と思い返し

てしまう。

「とーじ」

「あ?」

「私は強くなるぞ、そしていつの日かお前と並び立つ!その時は、もう一度戦ってくれるか?」

「また這いつくばらせてやる」

「ふふふ」

「ははは」

いつの日かの再戦を約束し眠りにつく、互いの絆は確かなものとなっていた。

朝日が少し登ったあたりの時間、史文恭は己の腕の中で眠る男の寝顔を堪能していた。口元の傷を少し撫でると、モニョモニョと唇を動かし少しくすぐったそうな表情をする。髪は黒く艶があり、女の自分から見ても綺麗だと思ってしまう。そしてその強さは己が知る中で最強だ。現在、はたまた未来においてもこいつに勝てるものは、出てくるのだろうか?だが、そんな強さを持つ者も今自身の腕の中で眠り、見せる表情は年相応か少し幼いくらい。

「(こいつ・・・絶対に年上に好かれる!そんな気がする!)」

女の感がそう予言していた。

「(今、この時だけは)」

甚爾が目を覚ます時まで、史文恭の密かな楽しみ時間は続く。

「ふー」

呼吸を一つ吐き游雲をまるで槍のように構える。

そこからの本来の三節棍の使い方にシフトし木々を薙ぎ倒していく。

「シッ!」

ドンッガンッガンッバキッ

己の膂力のまま振るい破壊する!

そして大きく跳躍し、落ちる時の重力と空中で体を捻った遠心力も利用して...

<ドカーカーカーンツ>

地面に直径にして約6メートルのクレーターを作る。

現在は13時を少し過ぎたところ、甚爾は森の中で游雲を使い鍛錬に勤しんでいた。クロは甚爾の体に巻き付いている。初めは動きのスピードで振り落とされなかつたかと思っていたが、そんな事はなくジツと甚爾に巻き付いたままである。そして時々、武器を入れ替えようと思っていると先読みして、口を開き出し入れを同時に行ったりしてくる。

「(こいつマジで優秀だな)」

滅多に他人を褒めない甚爾が素直にこの龍に賛辞を心の中で送った。

曹一族の里に来て一ヶ月が経とうとしている。

滞在させてもらう代わりに、時折仕事を請け負ったり、里の者達の手伝いや史文恭と一緒に鍛錬を見てやるなどして過ごしていた。

また、甚爾に関わるちよつとしたトラブル？もあつたが、それはまたの機会にしよう。

そして今は、今後の動きについて考えていた。

「(1ヶ月か意外と長くいたもんだ、だけどこのままってわけにも行かないよな、そろそろ次の進路決めねえと)」

などと考えを巡らせていると背後に気配を感じる

ブウォンツ

勢い良く己の首を落とそうと、振り下ろされた柳葉刀りようようとうを握る手首を掴み、そのまま腕を捻って投げ飛ばす。相手は尻餅をつくが、すぐに起きあがろうとして止める。何故ならば、持っていたはずの刀は取られ、あまつさえそれを自分の首に添えられている。

「！・・・お見事です、参りました師父！」

「師父はやめろって言ったろ」

「そんな！我々は師父その武に惚れたのです！師範と同じく尊敬して然るべきお方だと！」

そう甚爾は里の者に手ほどきをしてやっているうちに、いつしか師

父と崇められら様になっていた、史文恭はどうせならここで私とこいつらを鍛えるか？それも悪くない、などと本当か冗談かもわからないことを言い出す始末だった。

「で？何かようか？」

「はっ！当主様がお呼びです！」

「ふくん、当主がね、なんか仕事かね。お前は少し休んでから戻れ」

「お気遣い感謝致します、師父！」

そう言い残し甚爾は、持ち前の脚力を生かし姿を消した。

それを見た門下は改めて尊敬の意を抱くのであった。

「来たか、とーじ」

そこには史文恭もいた。

「そろったな」

「当主、私達を招集するほどの問題でも起きたのか？」

「ああ、依頼が来た」

「内容は？」

甚爾が早く聞かせろと催促する。

「主にドイツでテロ活動をしている組織からの依頼でな、戦力が欲しいそうだ。相手はドイツの猟犬部隊」

「最近、いろいろと有名になってきている部隊だな」

「ふくん」

「向こうは少数精鋭を希望しているゆえに」

「諜報も戦闘も高水準かつ、悟られぬようドイツ入りを果たすには、私達二人が適任というわけか」

「なるほどね」

戦闘面に関しては二人とも条件など軽く飛び越え、諜報に至っては気を感じされず動ける甚爾がいる。

まさに適任の人選であった。

「しかし、甚爾よお主はこの依頼を降りても構わんぞ」
「はっ。」

「そろそろ里を出ることを考えていたのではないか？」

「・・・」

「とーじ・・・」

「いや、やるさ。この任務を最後にこの里を出る」

「そうか、すまん」

こうして二人のドイツ入りが決まった。

テロ組織「ブルー」との合流は二日後とのこと、二人は相談して別々にドイツに向かうことにした。

史文恭の顔は裏世界では知るものも多い、猟犬達のリストにも入っている可能性が高く、一緒に行動していれば甚爾が諜報活動をできる可能性がある為だ。

「では甚爾、二日後にドイツのリューベックで会おう」

「ああ、じゃ二日後に」

こうして二人はそれぞれドイツに向け里を発った。

ードイツー

「お呼びでしょうか、フランク中将」

「ああ、休暇中に呼び出してすまなかったねマルギツテ」

「いえ、お呼びとあればいつでも」

「ふふ、優秀な部下をもつて私は幸せ者だ。さて、マルギツテ今しがた情報が入ってね、奴ら曹一族を雇ったそうだ」

「曹一族をー」

「ああ、曹一族の切り札でもある史文恭がドイツに入ったことも確認された」

「クツ奴らー」

「マルギツテ、事は動き出した猟犬部隊に出撃命令を下す、作戦難度S殲滅戦だ、心して懸かれ！」

「はっ！」

まるで見本のような美しい敬礼をしてマルギツテは執務室を出ていく

「覚悟するがいい」

Hasenjagd!
ウサギども狩ってやる

リユーベック

「やっと着いたかここがリユーベック、流石は有名観光地だけあるな古い建築物が丁寧に保存されてやがる。」

曹一族の隠れ里から史文恭と別ルートで甚爾は、ドイツのリユーベック入りを果たしていた。

「(キョウも既に来てんだろ、ならさっさと合流しちまうか。」

「グウー」その前に飯だな」

辺りを見渡すと、出店やレストランに世界的チェーン店など様々見受けられる。しかし、ここまで来てその地の名物を食べないわけには行かない！だが、ここら辺での有名な食べ物を知らない。

「まあ、そこら辺歩いてる地元民か出店のやつに聞けばいいだろ」

腹が減って考えるのも面倒なので、行き当たりばったりで早速行動を開始した。中々に美味しそうなものが多い、至る所から空腹を刺激する匂いがする。そんな時、周りに目を奪われ前方不注意なっていた事もあり、前から来ていた女性とぶつかってしまった。

ドンツ

「あ?」「きやつ!」

甚爾はぶつかられた程度で転ぶことはないが、ぶつかった女性は盛大に尻餅をつく。

「イタタ・・・あつ!ごめんなさい」

「ああ」

「大丈夫ですか?どこか怪我はしてませんか?」

「ああ」

「そっかよ良かった」

むしろ怪我してそうなのはお前だろう。そう思った甚爾だったが、口には出さなかった。

「あ、あの?」

「?」

「手を貸してもらってもいいですか?」

そう言って目の前の女性は、こちらに手を伸ばす。

甚爾は、まあいいかという面持ちで素直に手を貸す。

「・・・」

「えへへ、ありがとう」

手を貸してもらい立ち上がった、女性を見て甚爾は驚く。

高い、多分180cmは超えていよう。自分と目線の高さがほぼ同じだった。

「(でかいな、キョウも女の中じゃあでかい部類に入るが、それ以上かコイツ。俺とあんまし変わらねえな)」

「私ジークって言うの！ジークルーン・コールシュライバー！ジークって呼んで、あなたのお名前は？」

「・・・伏黒甚爾」

「とうじちゃんか、よろしくね」

満面の笑みで自己紹介され少し戸惑う。

まるで毒気を抜かれた感じだ。変な奴だと思っていると、あることに気がついた。ジークが着ている服それは軍服だった。

「(まさか)」

「どうしたの？」

「お前、軍人か？」

「そうだよ、なんで分かったの？」

「そりゃ軍服着てたら誰でもわかるだろ」

「あっ！そっかく！うんうん、そうだよ！猟犬部隊って所に所属してるんだ〜」

「！」

まさか依頼目的の部隊の一員だとは思わず、表情には出さなかったが内心驚愕する。しかし、どこからどう見ても弱い。今までの強者達のような雰囲気もなければ、圧も感じない。これで隠しているのなら相応な者だ。そんなことを考えていると、いきなり黙り込んだ甚爾を心配したのか、ジークが話しかけてきた。

「とうじ君どうかしたの？お腹痛い？やっぱりさつきぶつかった時、どこか怪我したの!？」

「いやどこも怪我してねえ。だから泣きそうな顔すんな。あれだ、そう腹減ってな、何買おうか考えてただけだ。」

「そうなの？よかった〜！じゃあ私のオススメ教えてあげるよ！」

そういうと、ジークはいきなり甚爾の手を握り歩き出す。

「あ？おい！」

「こつちこつち！」

「(聞いてないなこいつ)」

手を握りどンドン歩いていく。そして一つのお店の前に止まる。

「ココだよ！……このクロワッサンがとっても美味しいの！」

案内されたパン屋からは、パンの焼けるいい匂いが漂い空腹を刺激してくる。クロワッサンならばどこでも買えるが、せっかくの好意というよりも、すでに空腹が限界な為さっそく店に入る。

「焼きたてを買えてよかったね！」

甚爾が店に入った直後に、丁度焼き上がったパンたちが並べられ、焼き立てを買うことができた。紙袋からはあま〜い匂いが漂う。

「ほらよ」

そう言つてクロワッサンを一つ取り出し、ジークに投げ渡す。

「え？」

「礼だ」

「ありがとう！とうじちゃん！」

いまだ湯気が立ち上がるクロワッサンを、2人並んでかぶりつく。

「おいしく!!!」

「……うまつ！」

「でしよでしよ！」

外はカリカリ、中はふんわりした食感。

ほんのり甘く優しい味だ。

オススメするのもよくわかる。

こうして2人がクロワッサンに舌鼓を打っていると、人が近づくと配がした。

「ジークいた！」

声の主を見るとこちらは、ジークとは対照的に小さい。

150cm位だろうか？ やつと見つけたとばかりにやって来た。

「コジちゃん」

「ジークが集合時間になっても来ないから、コジマ迎えに来た！」

「え？ あっ忘れてた！」

どうやらこのコジマという少女は、集合時間になっても中々来ないジークのことを探していたらしい。

「ごめんねとうじちゃん、私行かなきゃ！」

「おう」

「ジークこの人誰だ？」

「伏黒甚爾君！ リューベックには・・・えつと」

「観光だ、それより行かなくていいのか？」

「あ、そうだった！ ジーク行こう！」

「うん！ じゃあねとうじちゃん！ クロワツサンありがとう」

そう言って2人は走って行った。

（それにしてもアイツが猟犬部隊ねえ、どう見ても戦うタイプには見えなかったが、後方支援が役割とか？ 対してあのチビ、アイツは何と言うか俺と似たタイプの気配を感じた。よし、アイツらを追って猟犬部隊とやらを拜んで見るとするか。）

そう考えた当時は、気配を完全に断ち2人の後ろをついて行くのだった。

「遅いー！」

「ご、ごめんなさい隊長」

「隊長、ジークな、困ってた観光客を助けてた！ だからなあんまり怒らないであげて。」

「コジちゃん」

「なるほどそうでしたか。であれば、致し方ない。」

しかし、ジーク次は気をつけるように良いですね？」

「はいー！」

「ではこれより！ 今回の緊急招集の理由から説明する。皆も既に知っているの通り、最近活発になって来ているテロ組織ブルーがまた動きを見せた。」

「では隊長！すぐに殲滅に向かいますよう！」

「テル、まだ隊長のお話の途中だ。静粛に。」

「申し訳ありません副隊長」

「つい数時間前に追加情報が入った、奴らは傭兵集団の曹一族を雇ったそうだ。既にドイツ入りしていることも確認されたとのことだ。」

「マジか」

「今回の任務の難度はS」

「！！！！」

「テル喜べ、殲滅戦だ！奴らを叩く！」

「作戦は明日再度改めて連絡します。それまで各員待機、隊長他に何かありますか？」

「いや大丈夫だ、それでは解散！」

マルギツテの号令で猟犬部隊は解散していく。

一連の流れを甚爾は離れた塔の上から見物していた。

「まさか、部隊全員が女とはね」

猟犬部隊は女性のみで構成された部隊だった。

「(何人か異能持ちがいたな、異能を持つてる奴の気はほんのごくわずかだが普通の奴らとは違う。林冲と言ってやっと思分けがつくようになったな。あの眼帯が隊長か、隊長があレベルだと他の奴らはたかが知れるな。)」

見物を終えた甚爾は、塔から飛び降り手も着かずに着地する。

正直ガツカリしていた。事前情報では、ドイツ最強の部隊だと聞いていたのに隊長があ程度の気ならたかが知れる。依頼はすぐに完了しそうだ。そう考えている最中に鳥が甚爾に向かって滑空してくる。

「あれは」

鳥は速度を緩め甚爾の肩に止まる。鳥の足には手紙を入れるような筒が付いていた。

「(苦勞さん)」

手紙を取り出し読むと考えたと通りの人物からだった。

「とーじ、私は依頼組織の奴らと合流を果たした。組織のリーダー

と依頼内容の確認をしたが、今回の依頼はフランク・フリードリヒ中将の愛娘の誘拐だ。故に今回、お前はこちらに合流せず外で動いて欲しい。既に了承は得ている。なお情報やり取りはこの様なやり方と、ブルーの奴らが伝えに行く。お前の方でも何か情報を得たら教えてくれ。では健闘を祈る」

と書かれていた。

「なら情報を集めつつ指示を待って、本当に観光でもしますかね」

そうして甚爾は街中に戻っていく。しかし、重大なことを失念していることに、この時は気が付いていなかった。

どっぶり夜も老けた時間、甚爾は遂に気がつく。

自分が宿泊するホテルを取っていない事に。

「完全に忘れてた」

元々は合流してブルーのアジトで寝泊まりする予定だったのでホテルは予約していなかった。野宿確定である。しかしリユーベックは寒帯に位置していて日本は暖かい季節でも、こちらは昼は少し肌寒い程度だが夜は寒い。いくら天与呪縛のフィジカルギフトとは言え気温はどうしようもない。

「今から泊まれるホテルあるか?」

そんな絶望的な状況

「あれとうじちゃん?」

「あ?」

「あーやっぱりそうだ!何してるの?」

そこにはジークがいた。

昼間と違い軍服ではなく、私服に着替えており買い物袋を持っている。何かの買い出しに出ていたのだろう、と考えているとこちらをじっと見つめるので今の状況を話した。

「えー!そうなの、じゃあじゃあ私の部屋来る?」

「いいのか?」

「うん!私が借りてる部屋すぐ近くなの!」

「じゃ世話になる」

まさに九死に一生、今夜はジークの部屋に世話になることが確定し

た。

「いらつしやい！ここが私の借りてる部屋だよ！」

古い建物を改装したのだろう、外見は街の外観を損なわない見た目だが、中に入ると現代的で綺麗な作りだ。そんなアパートの5階にジークの部屋はあつた。

「邪魔する」

「今紅茶淹れるね」

「ああ」

「なにか食べる」

「いや良い、夕飯は済ませた」

そんなやり取りをしながらもこれはチャンスだと考える。

ジークからそれとなく情報を聞き出そう。そう考えて待っているとジークが戻ってきた。

「お待たせ」

「サンキュー」

体が冷え切っていたので、温かい紅茶が体に染み渡る。

一息ついたところで、甚爾はジークに質問を試してみる。

「コールシユライバー、あの後は間に合ったのか？」

「むー（*、ω、）」

「？」

「ジークだよ」

「だからジーク！」

「（めんどくせえ）」

「じく」

「分かったから口に出して言うのやめろ」

女性の無言の圧力には、男に生まれたのなら逆らえぬ。

「ジーク……………ルーン」

羞恥がまさった

「ジークッ！」

「ジーク」

「うん！よく言えました、えらいえらい」

そう言つて頭を撫でられる。頭を撫でられるなどいつぶりであらうか。

まだ小さい頃に、亡き母に撫でられて以来だろうか？

手を払いどける事なく、受け入れる。

「ふふ」

「何だよ」

「弟がいたらこんな気分なのかなつて」

「・・・」

ゴーンゴーンゴーン

壁にかかった振り子時計が夜の11時を告げた。

「そろそろ寝よつか」

「じゃあ、そのソファアー借りるぜ」

「えっ！ダメだよ！風邪ひいちゃうよ、ちゃんとベッド使つて」

「体は丈夫な方だ、それにお前が寝る場所がなくなるだろ」

「うゝそうだけど・・・あっ！そうだいい事思いついた！」

何故だろう、己にとつては悪い予感しかしない。

「とうじちゃん！」

「一緒には寝ないからな」

「一緒につてええゝ」

甚爾が予感した通りのことを、言おうとしていたジークは先に釘を刺され不満を口にする。

「なんでゝいい案でしょ？」

「なんでだ」

「一緒に寝たい！」

「今日初めて会った男とか？ビッチ？」

「そうだけど、それと私ビッチじゃないよ！」

「・・・」

「なんて言うかその、なんかねとうじ君を見てるとね、甘やかしたくなるって言うか、甘やかしたい！」「キリッ」

「キメ顔で断言しやがった」

「ね？いいでしょう？」

「お前な、俺も男だぞ。ちよつとは警戒しろよ。」

「それは大丈夫だと思うな」

「はあ?」

「だって、とうじちゃん優しいもん!」

満面の笑みで断言される。優しい誰が?俺が?

初対面の男に何故そこまで、言い切れる?

分からない思考がまとまらない。ストレートに伝えられた事を甚爾は理解出来ずにいた。

「さっ寝よ寝よ」

思考に耽っているうちに、あれよあれよと寝室に連れて行かれてしまった。

「お休み」

そのまま就寝。

ジークに抱き着かれ、ベッドから出ることも出来ない。

でかい図体をしているのに、そこいらの少女と変わらない。

不思議な奴だと思いつながら目を閉じたのだった。

ーテロ組織ブルーのアジトー

「(とーじに何かよくない虫が近寄っている気がする!)」

何かを感じ取った史文恭であった。

朝

ジークは目を覚まし、昨夜まで己の腕の中にあつた温もりがない事に目を覚ます。するとリビングからいい匂いが漂ってくる。

「いい匂い」

「起きたか・顔洗って来い」

「とうじちゃんおはよ」

ダキッ

「・・・なんで抱きついてくんだよ」

「エへへ、何となく?」

「もう色々諦めたわ、そらさっさと行け」

「ハ〜イ」

3分ほどでジークは戻ってくる。

「わー美味しそう！あれ？でもウチにこんなに材料あったっけ？」

「朝市で色々買ってきたんだよ」

「え！いくらだったの!?!」

「いらねえよ、泊めてもらった礼だ」

「じゃあ食わないって事でいいな」

「食べる食べます」

「いただきます」

食べないと言う選択肢はなく、甚爾が用意した朝食を笑顔で食べ進める。少したべてる姿を見て、可愛いと思ってしまったことは墓まで持って行こうと固く誓う。

「・・・」

「~~~~♡」

それにしても

「~~~~♡」もつきゆもつきゆ

効果音が聞こえてきそうな顔で食べ進める。

「どうしたの？あっ！」

「？」

「あ〜ん」

「(なんでそうなる)」

色々朝から疲れ果てる甚爾出会った。

朝食を食べ終え、食後のコーヒーを飲みながら今日1日どう過ごすのかを互いに話す。

ジークは仕事、甚爾は猟犬部隊の情報収集だが馬鹿正直にそんなことを言えるわけもないので、今日から滞在する為のホテルを探しながら観光をすうと言うと「ええー!!」突然ジークが声を上げる。

「なんで~~~~ここに泊まって良いんだよ？」

「いや・・・」

「ここならお金かからないよ」

「そう言うことじゃ・・・」

「あっ！冷蔵庫の中のものとか食べていいから！」

「違う、そうじゃない」

「？」コテン

首をかしげる仕草がまた可愛らしい。

「昨日も言ったが・・・」

「とうじちゃんは優しいからそんな心配してないよ」

真剣な眼差しと言葉を向けてくる。

これは負けたと諦める。どうしてこうなったのか。

「分かった、世話になる。ただし泊めてもらう分の金は払う。これだけは譲れねえ。」

「うん分かった、それでいいよー！」

こうして甚爾は、ジークの家を身を寄せる事となった。

しばらくしてジークは、狩猟部隊の作戦会議に参加すべく出かけて行く。その後を甚爾は気配を断ちついて行く。

ジークは昨日も狩猟部隊が集まっていた、大きな屋敷に入っている。く。

外観は城といった方が近いだろう。

「(外見もスゲーがセキュリティも大概だな。防犯カメラ、赤外線センサーに網膜認証、指紋認証、音声認識 e t c . . . 最新警備のオンパレードかよ)」

あまりの警備設備に悩んだ挙句

「よし、美味しいもん食いに行こう」

観光する事にしたのであった。

「てか、アレが狩猟部隊の基地？と言うよりかは誰かの邸宅みたいな感じがしたな、キョウに報告飛ばして情報を貰うか」

方針が固まり、いざリユーベック観光へ!!

決行

「ほー立派な教会だこと。なにに？パイプオルガンが見所ねえ。」

狩猟部隊の作戦会議潜入調査を諦めた甚爾は、パンフレット片手にリューベック観光に乗り出していた。街並みから観光名所を見て周りながら散策。途中に露店で食べ物を買って食いしながら歩く。

「俺のことは気では探れないが、カメラとか体温はどうしようもないしな。穴掘って行くか？現実味がねえかアホらしい。あの屋敷より高い所から、飛び降りる感じで窓から行くか？悪くねえ。あの建物とか、無理だな。距離があり過ぎる。」

観光を装ってはいるが、有効な侵入経路を模索しながら回っていた。

あの屋敷の侵入するにあたっての問題点が二つ存在した。

1. カメラやセンサーなどの防犯機器
2. 屋敷の周囲に建物がない事

甚爾とて人間、カメラにも映るし、体温などもある。気を探ることはできないが、姿を隠しているわけではないのでこう言った、現代の科学の前では透明人間ではなくなってしまう。

ならば、周囲の建物から飛び移って屋敷の上に行こうにも、周りに屋敷より高い建物どころか、外観を損なわないためか、建物が一切ない。

「まあいいか。情報の入手は諦めて、指示が来たら強引に突破。向かって来た奴から殺していけばいい。後はさっさと誘拐しておさらばだ。うだうだ悩むなんて俺らしくない事をしたもんだ。」

だいぶ歩いた所でベンチに腰を降ろす。

「で？さっさからなんだお前？」

「！」

「人がせつかく観光と洒落込んでんのによ」

「それは済まなかったな。だが今後の指示を伝えにきた。」

後ろ側のベンチに座ったメツセンサー。声からして女だろうか

？

「どうでも良いかと思いい早速指示を聞く。」

「まずは意見を聞きたい。あの屋敷を見てどう思った？」

「屋敷って事はやっぱり誰かの家か？」

「ああドイツ軍中将フランク・フリードリヒの屋敷だ。狩猟部隊の本部でもある。狩猟部隊は奴が組織した部隊だからな。」

「なるほどね、故にあの警備か」

「ああ」

「まさに堅牢と言っていていいかもな。まあ別に潜入とかじゃないなら話は別だが。」

「ここで甚爾は気になったことを聞いてみる。」

「なあお前らの目的ってなんだ？」

「それはお前には関係のないことだ」

「少しばかり怒気を含んで返された言葉に、確固たる決意を感じた。」

「まあなんだって良いさ。」

「これ以上は、どれだけ聞いても無駄だと悟り話を戻す。例え今ここで、この女を半殺しにして聞き出そうとしても無駄だ。」

「要注意人物は6人だ」

「資料を渡さる。人物の詳細を説明されるが、ほぼ資料に書いてあることの説明と同じだろうと、説明を聞き流し資料に集中する。」

マルギツテ・エーベルバッハ

狩猟部隊 隊長

トンファーを用いた近接戦闘を得意とする。

普段は左目に眼帯をつけることにより、力をセーブしている。

クリステイアーネ・フリードリヒとは幼少期からともに育った仲であり、姉妹のように接する。

フィーネ・ベルクマン

狩猟部隊 副長

主に後方にて、全体を把握し指示を飛ばす。

敵の正確な力を割り出し、隠し持っている武器すら見破る。
マルギツテ・エーベルバッハ、リザ・ブリンガーとは士官学校の同
期である。

リザ・ブリンガー

狩猟部隊 偵察担当

上記の2人とは士官学校同期。

主に諜報、偵察の役割を担う。

【欧州ニンジャ】【西洋ニンジャ】などの異名を持つ。

コジマ・ロルバッハ

狩猟部隊 戦闘担当

戦闘において攻撃の役割を担う。

小柄な姿に反し、尋常ではない力を有する。

何かしらの異能を持っていると考えられる。

テルマ・ミユラー

狩猟部隊 戦闘担当

戦闘において守備の役割を担う。

防衛戦の達人であり、常に鎧を着込んでいる。

ジークルーン・コールシュライバー

狩猟部隊 医療班

戦闘能力は皆無だが、独学で得た医療の腕が高い。

見るだけで何処が悪い、どう処置すれば治ると言ったことがわかる

異能を持っていて後方支援において厄介極まりない。

目を通してみて、一癖も二癖もある連中だと言うことはわかった。

「他にもいるがその6人が最も厄介だ。」

「中将はどうなんだ？それなりにやるんだろ？」

「基本あまり家にいない。そこまで心配することではないから気にす

るな。」

中将という立場もあり、忙しく基本あまり家で過ごす事が多くないと言う。

「他に何か聞きたいことはあるか？」

「作戦の決行は？」

「近日中には。近くなればまた知らせに来る。準備だけは整えておけ。」

そう言うと、メッセンジャーは去っていく。

甚爾は再度資料に目を通した後、近くの露店の店主が目を離れた隙に、火の中に投げ込み処分した。

「・・・」

どれだけ時間が経っただろう。日が少し傾き始めている。

街には明かりが灯りだし、夜の街へと変わり出す。日本で言う大衆酒場は客が入りだし、少し賑わい始める。

それを横目に只ぼうつとベンチに座る。

「あれ？とうじちゃん？」

声のする方を向けばジークと他にも人がいた。

「(たしか、リザ・ブランガーとコジマ・ロルバツハだったか)」

資料で見た者達だと言うことを思い出し、少し警戒する。

「おっ！この少年がジークの所に厄介になってる日本人？へー結構イケメンじゃん！」

「あつ、この前の人だ！」

「とうじちゃん、この2人はね私と同じ猟犬部隊なの。リツちゃんとコジちゃんだよ。」

「どうも」

「おうー！」

「コジマはコジマな！よろしくー！」

「とうじちゃん、こんな所で何してるの？体冷えちゃうよって！わあ！顔こんなに冷たいよ！いつから居たの!?？」

「あー昼くらいから？」

「おい、今夜の6時だぞ。軽く6時間はここに居たってことじゃない

か。」

「それは冷えるな。コジマもそんなには無理。」

「早く帰ってお風呂入って暖まらないと！」

「別にこんぐらい」

「ダメ！」

力強く否定される。普段はあんなに抜けている彼女がここまでハッキリと言葉を発する姿を見て、リザとコジマは少し呆気に取られる。

「2人ともごめんね、食事はまた今度でいいかな？」

「そっちの用事あんなら構わず行けよ」

「そうしたら絶対とうじちゃん家に帰らないで、ここに居るつもりでしょー！」

「・・・そ・・・んなことねえ・・・よ？」

「ホラ〜絶対ウソ〜」

このやりとりを見ていたリザが提案を持ちかける。

「なら少年も一緒にどう？店に入れば多少は暖まるだろうし、スープも飲めば大丈夫でしょ。」

「リザいいこと言った！コジマも賛成！」

「いや、なんで俺も？3人で行けば良いだろ」

「遠慮すんなよ少年、お姉さん達が奢ってやるからそれに」

「それに？」

「どうやってジークの所に転がり込んだのか知りたいしきー！」

「コジマもそれ気になってた。」

「だろー！」

「決定！さあ行こう！コジマもうお腹ぺこぺこ。大丈夫、大丈夫ちゃんとお姉さんが奢る、心配するな若者よ。」

グイッ！

「！」

甚爾は資料で見たコジマの情報を思い出す。

何かしらの異能を持ち、見た目からは想像ができない力を持つ。

「へえ、確かにな。だが、さして問題じゃねえな」

こうして3人に連れられて、酒場に入る事になった。

入ってまず驚いたのは、注文の量だ。軽く10人前を注文。この8割はコジマの胃袋に収まるのだとか。食べ進めるうちにさらに、追加注文。

その体の何処に入っていく。そしてリザも酒が進み、若干オヤジ臭さを出しながら質問をしてくる。ジークとの出会い。リユーベックに來た目的。など様々、されど本当の目的を話すわけにも行かないので、目的はあくまで観光と話した。ジークとの出会いはそのまま伝える。

それにコジマも「あの時2人でクロワツサン食べてたな！」など相槌を打つ。ここで此方からも質問を試みることにした。

「2人も軍人なんだろう」

「まあねー」

「あんた達と同じ軍服を着た人達が、大通りを抜けた大きな屋敷に入っていくのを見たが、ドイツの軍の基地つてのはみんなあんな感じなのか?」

「あーそっか。確かに、他の国の軍基地とか見ると不思議に思っちゃうか。別に甚爾が思っている事は間違っちゃいないよ。現に他のドイツ軍基地を見ると、他国同様の作りさね。ウチはちよつと特別だね。」

「別に詳しく聞く気はねえ。」

「へー、結構あれやこれや気になって聞いてくると思ったけど、引き際は弁えてるか。」

「とうじは良い子だな。コジマが褒めてあげよう!偉い偉い」

「つか本当に年上なのか?あんた?」

「コジマ、何処からどう見ても立派な大人のお姉さん」

「・・・」

「とうじちゃん、もう体冷えてない?大丈夫?」

「ああ」

「それはよかつた〜」

「ホント、構いたがりの姉とそれを鬱陶しそうにする姉弟みたいだね」
ギロツ!

「ごめんごめん。お詫びにちよつち教えてあげる。あの屋敷は私達の上司である人の家なんだ。私たちの部隊は近隣に部屋借りたりしてるけど、あそこで寝泊まりもする。寧ろ部屋を借りるなんてしなくても、リユーブックにいる間はここに住んでも良いって言うんだよ。だから甚爾が見たのはその子達じゃないかな?」

「なるほど」

「まあそれを抜きにしても、私達の本部って言うのも間違いではないけどね」

「すまない、少々遅れました。おや?」

現れたのは赤いロングの髪、トレードマークの眼帯をつけた獵犬部隊の隊長!マルギツテ・エーベルバッハその人だった。

「おう!マルやつと来たか!」

「隊長!お疲れ様!」

「お疲れ様です。隊長」

「ああ、書類整理に少し時間がかかってしまいました。それで?そちらの少年は?」

「こいつが例の少年だよマル」

「ああ、ジークが拾ってきたという」

「ちよつと待て、どういう風に伝わってんだ俺の事!」

「初めまして、マルギツテ・エーベルバッハです。貴方のことはジークから聞いています。」

「伏黒甚爾」

「聞けよマル。甚爾の奴さこの寒い中、歴史散策地区の川沿いのベンチに半日いたらしいぜ。」

「なんと!見た感じかなりの軽装ですが、その格好で?風邪をひいてしまいます。」

「それを私たちが見つけてさ、その時のジークの顔。プククツ!」

「この世の終わりみたいだった。ゴジマ腹抱えて笑った。」

「なんで写真撮ってるの〜」

「なるほど読めました。それで風邪をひくと心配したジークが連れ帰ろうとしたが、リザと一緒に食事でもしている内に温まるから問題ない。とでも言って誘ったのでしょうか?」

「正しく解く」

「何なら今からでもお暇するが?」

「問題ありません。そういうことでしたら一緒に食べましょう。それに日本について色々聞きたい」

「日本に行く予定でもあるのか?」

「来年お嬢様が… 私達の上司の娘さんですが、日本の学校に留学をしたいそうです」

「細かな地域とかは無理だが、俺が言ったことある場所とかでいいなら」

「ええそれで構いません。感謝します。」

こうして5人の会食はゆったりと流れていった。

しかし美女美少女が四人も集まると面倒ごとは寄ってくる。

「おおハーレムとは羨ましい」

「俺たちにもおこぼれくれよ」

「そうそう。てかこんなガキほつといてさ俺たちと飲もうぜ?その後もつとたのしいこともな。ガキてめえは家帰って一人でマスこいて寝ろ」

バリインツ!

「「ぎやははははははははははは」」

男の一人が中身の入ったビール瓶で甚爾の頭を殴る。瓶が砕け中身は甚爾にかかる。

「とうじちゃん!」

「なあマル」

「隊長こいつらぶつ飛ばしていい?」

「ええ、殺さぬ程度に痛い目に合わせてあげなさい」

三人がナンパしてきた男たちに制裁を加えようとした瞬間。

「あ？何だガキ怖くてちびったか」

「なんとか言えよ。ギヤはは」

男が甚爾の肩をつかんだ。だが、つかんだ腕はまるで水を絞った後の雑巾のようにねじれていた。

「へ？」

「「え？」」

店にいた者たち男たちもマルギツテ達も固まる。ただ一人を除いて。

「安心しろ殺しはしないさ。殺しはな。」
目が覚めるかどうかは知らねえがな

ゾワッ

一瞬放たれる殺気に、皆金縛りにあつたかのように固まる。

甚爾はテーブルにあつたナイフとフォークをつかみ一人の男の両眼に突き刺す。そのまま喉をつぶし意識も刈り取る。腕がねじれた男のもう片方の腕もねじる。そして床に顔面を強打させるように踏みつけこちらにも意識を刈り取る。最後に残った、茫然としている男。そいつの鼓膜を両手の中指で破り最後に顔面鷲掴み。

「二度とそのきたねえ面で表を歩くんじやねえよカス。」

そう言つて男の顔面の皮を力のまま剥がしとつた。

「ああ、良かったな。きたねえ面取れたぜ。聞こえてねえか、やったの俺だけぞ」

「ジーク急いで治療を！」

「は、ハイッ」

まるで流れる水流のごとく行われた一連の流れに呆気にとられるが、さすがは軍人。

いち早く復活し指示を飛ばす。そしてジークが行う治療を目の当

たりにし驚く。すでに男たちの血は止まり、包帯がまかれた後だった。早くそして正確にどこをどうやったら治るのか。資料にあった通り彼女にはそれがわかるのだろう。

男たちは病院へと運ばれ、店の騒動は落ち着き食事が再開された。店からはお礼と称し一番高いメニューが振る舞われた。なんでも彼らの迷惑行為は今回が初めてではなく、ほとほと困っていたそうだが、感謝を述べられている甚爾に色々聞きたいマルギツテ達であったが、聞くに聞けずそのまま時間は流れていった。

酒も時間も進みそろそろお開きの時間に差し掛かり、自分の分は出すと甚爾が言うとマルギツテに日本の話を聞かせてくれたお礼だと遮られた。あまり納得のいっていない表情の甚爾に、貴方は子供で私達は大人。こういう場面では素直に聞き入れておくものです。こういわれてはぐうの音も出ないので奢ってもらった。

「では、おやすみなさい」

「またな！」

「寝る子は育つ！」

「お休み、みんな」

「ご馳走様でした。おやすみなさい」

こうして互いに帰路に就くのだった。

ーマルギツテsideー

「どうしたんだよマル？」

「いえ別に」

「甚爾の事か」

「・・・ええ、あんな人間初めてです。気を一切感じなかった」

「感じないほど微弱だとか？」

「だとしても、席が隣の距離で感じることはないなど初めてでした。」

「けど、驚いたよな。あれ相当場数を踏んでる動きだ。多分だけども殺してる。」

「でしようね。伏黒甚爾、少し調べてみる必要がありそうですね。リザ頼めますか？」

「おうよ！任せな！」

「出来ればあの戦闘力実に欲しい人材です。」

「私と似たタイプかもな。」

「確かにコジーと似てるかも」

マルギツテは考える。わずか数秒にも満たないあの時間で行われたあの動き。果たして自分にできるだろうか？

もし、あれほどの使い手が襲ってきたらお嬢様を守り切れるだろうか。そして一瞬だけ放たれたあの殺気、動けなかった。恐怖してしまった。久しく感じた己の死。

「訓練量増やしますか」

「えっ」

狩猟部隊の訓練が翌日より、さらに過酷で量も倍以上になった。

l s i d e o u t r

「・・・」

「・・・」

コツ コツ コツ コツ

テク テク テク テク

「・・・」

「・・・」

互いの歩く音だけが聞こえる。
ジークと甚爾は、帰り道何もしゃべる事無く無言のまま歩いていた。

そしてそのままジークの家に着く。だが、甚爾は中に入ろうとしない。ただ黙って俯き立つ。

「どうじちゃん？」

「・・・」

「どうしたの？早く入ろう、また体が冷えちゃうよ？」

「・・・」

「ほら・・・ね？入ろう？」

ジークが手を引き家の中に入ろうと促すが、甚爾は頑なに動かない。
い。

「なぜだ」

今まで何もしやべらなかつた甚爾が話し出す。

「なんでお前は、変わらないんだ？さっきの見ただろうが、殺しはしてないがそれでも重傷は負わせた。なぜだ？」

「うん・・・怖かつた。あの時のとうじちゃんすごく怖かつた。」

「お前は言ったな。俺は優しいと、そんなわけねえだろ。さっきの三人は殺さなかつたが、俺は過去に何人も殺してる。」

「うん。隊長たちも気が付いてると思う。」

「なら・・・」

「でも、私は今でもとうじちゃんのに対する考えは変わらないよ。」

ガシツ

甚爾はジークの首に手をかける。

「最近分からなくなる。キョウもお前も・・・なんで俺にやさしくする。今まではこんなうだうだ悩むことなんてなかつた。お前らのせいだ！！」

ギリギリギリツ

少しずつ首を絞める。しかしジークの目は真っ直ぐに甚爾を見つめる。あの時と同じだ。

「なんでそんな目で俺を見る！」

「クツ・・・と・・・うじ・・・ちや」

「！」

パツ ドサツ

「ケホツケホツ」

「世話になったな」

「とうじちゃん！」

振り返ることなく甚爾は霞のごとく消え去っていった。

ジークの家からかなり離れた場所で甚爾は、向けようのない苛立ちを抱えたはずんでいた。

「伏黒甚爾」

ブオン!!!

振り向きざまに放たれる裏拳。それはメッセンジャーの横顔寸前で止まる。

「!」

「てめーか」

「・・・私がこの距離まで接近しても気が付かないとはな。」

「黙れ」

「指示を伝えに来た。決行日が決まった、急だが明日だ。」

「あ?」

「明日、猟犬部隊は要人をイタリアまで護衛する。その時にあの屋敷は手薄になる。そこを狙ってお前には」

「娘をさらって来いってんだろ。分かってる、失せろ。」

「・・・これがターゲットの写真だ。方法は任せる、しくじるなよ。」

メッセンジャーは去っていく。写真を見るとそこには、金髪ツインテールで華やかな笑顔を浮かべる少女が写っていた。

「俺の何がわかる。」

言葉は夜の闇に溶けていった。

「…とうじちゃん」

「ジークの奴どうしたんだコジーク?」

「実は甚爾が出て居ちやったらしい」

「へ?」

「昨日帰ってから喧嘩したんだって」

「マジ! まあそれでよかったのかもな」

「おはよう」

「おはよう隊長」

「おはよう」

「…おはようございます」

「リザ昨日頼んだことは？」

「そのことだけど結構すごいことが分かったぜ」

「それは重畳です。さあ作戦会議を始めますよ。」

「(とうじちゃん。どこ行っちゃたの)」

ピーザザツ

『聞こえるか?』

「…ああ」

『そろそろ猟犬部隊が要人を連れ出発する。作戦開始は奴らの乗った専用機が飛び立った後だ』

「…ああ」

『おい、貴様本当に「黙れ」ッ!』

「てめーらの事はどうでもいい。情報だけ寄せせ」

『ターゲットの部屋は、お前がいる場所から見て三階の一番左の窓が見えるだろう。その部屋だ。』

「よく屋敷内部の構造を入手できたもんだな」

『次の無線が決行の合図だ』

ピッ

無線が切れる。最後にリユーベックの街を見渡す。滞在した日数は少ないが中国と負けず劣らず濃い数日だった。

とうじちゃんは優しいから

「(くだらねえ)」

30分ほど経っただろうか、とうとう無線が入る。

『奴らの飛行機の高度が上空3,000メートルを超えた。作戦開始だ。』

「フン、用心深いこった。」

そして甚爾は、肉体能力をフルに使い駆け出した。

1 km離れた位置から駆け出した甚爾は、顔隠すフード付きのコートを靡かせながら僅か数秒で屋敷の門の前に迫る。だがスピードを緩めることなく門を飛び越える。着地と同時に再度一直線に駆け出す。

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ

警報が鳴り響く。だがそんなことは関係がない。今ここを守る狩猟部隊は上空だ。残っているのもごく少数。屋敷に入り一気にターゲットの部屋を目指す。はずだった。屋敷の扉を正面から殴り飛ばし入った直後、足を止めた。あり得ない。いるはずのない奴らが目の前にいた。

「おいおい。今は上空で要人を警護してるんじゃないやねえのかよ。」

「その任務は我々が準備した偽の任務です。あなた達ブルーにとってはおいしい話だったでしょう？ノコノコと屋敷を出て行ってくれるのですから。」

「チツ！偽の情報つかまされてんじゃないやねえよ。使えね依頼主だ」

「そちらにも私達の仲間が潜入しているのですよ。ではそろそろ、そのフードの下を見せてもらいましようか。総員かかれ！」

一斉に猟犬部隊の猛者たちが、四方八方から甚爾に襲い掛かる。

「はあああああっ！」

「くらえー！」

思わぬ待ち伏せ。もしここに立っているのが自分ではなかったら、諦めおとなしく捕まっていただろう。

ガシッ！ガシッ！

「！」

ブオンツ　　ドガンツ

正面と背後から来た二人の腕を掴みそのまま壁に放り投げる。投げ飛ばされた二人は、壁にめり込み壁の彫刻と化する。そのまま動かなくなってしまう。

「おいおい」

「これは…」

「よくも！」

「まて！テル！」

全員の足が止まり、壁にめり込んだ二人を見て絶句する。予想だにしていなかった敵の力に驚愕をあらわにする。

テルマ・ミュラーはそれを見て怒りをあらわにし、甚爾に迫る。鎧の手に握られているのは特注のモーニグスターメイス。それを振りかぶり……。

「よくも二人を！」

ドンツ！つと重い一撃が振るわれる。しかし。

「へく意外と軽いなコレ」

「！！！！」

片手でメイスを握る甚爾。甚爾がやったことは振り下ろされたメイスを受け止め、そのまま太刀取りの要領で奪ったのだ。されどあまりに流れるように行われたため、テルマも奪われたと気が付かなかった。

「おい、鎧。こんな玩具で何しよってんだ？」

ギイイイイイ

鉄がひしゃげてメイスは形をとどめぬ程に曲げられた。

「それと、俺の間合いで突っ立ってると死ぬぞ？お前。」

誰もが言葉をはすることが出来ない。あり得ないその言葉すらも。人の拳が鎧を貫くなど。

「がはっ」

「テルマアアアアアアアアアアアアアア」

そこからは一方的な蹂躪。

固まり動けない者たちを

「ひっ！」 ドゴッ

蹴りで壁に埋め込む。向かってくるものも容赦なく。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!

ゴキユバキブオンバコンツ

殴打殴打殴打の嵐。腕を折り投げ飛ばす。背後の敵は裏拳で沈める。

「くらえー!」

コジマが真正面から迫る。

「馬鹿が」

迎え撃とうと拳をふるう。

「っ!」

「えい!」

ドゴオン

強烈な一撃が突き刺さる。手加減一切なしのコジマの一撃。その威力を知る猟犬部隊はこれで勝利を確信する。

「これでコジマ達のか? ドガアン”ギャア!”」

「コジー!!」

「そのちびの一撃なんぞ、毛ほどにも効くかよバカが」

コキコキツつと首を鳴らしながら甚爾がたたずむ。

「(つかなんでさつき一瞬動きが・・・糸? ああそういう)」

甚爾の姿が掻き消える。

「糸はてめえだろ、リザ・ブリンガー」

「しまっ!」

「リザッ!」

「がはっ」

放たれる鋭い蹴り。意識を刈り取るには十分だった。

「貴様よくも!」

「隊長さんあんたじゃ無理だよ」

「黙れええええええええええええええええ!」

眼帯を捨て、本気で殺しにかかるマルギツテ。しかし甚爾にとつては遅すぎる速度であり、すでに攻撃は終わっていた。

「ガフツ」ボタバタバタ

いきなりの吐血。そして腹部より感じる激痛。

「何を一体私は何をされた？攻撃？一体いつ食らった？」

「あんた眼帯を捨てる一瞬だけ右目を腕で遮ったろ？そんな時だよあんたの腹に攻撃を加えたの」

「あの……あのわずかな……あり得るはずが」

「現に膝をつけてんのは誰だよ」

そしてマルギツテにゆっくりと近づく。

「殺しはしねえよ」

マルギツテの意識はや三重と沈んでいった。

「さてと」

「まって！」

振り返ればジークがいた。

「馬鹿かてめえは！お前は戦闘なんざからつきしだらうが！」

「よくもみんなを許さない！」

チャキツ

ジークが拳銃を構える。それを見て甚爾はジークに向かって歩き出す。

パンツ！

躲すことなく歩く。普段の訓練でも戦いに関する事に才能がないのだから、狙いがブレブレだ。

パンツ！

一歩

パンツ

一歩

パンツ！

また一歩

そろそろ距離が詰まる。発砲数も10を超えた。

「っ！」

パンツ！

パシッ！

至近距離で弾丸をつかみ取る。球を捨て去りそのまま……
バチイイイイイン

ジークの頬をたたく。

「俺を攻撃する暇があるなら、こいつらの治療に専念するこつたな」
そう言い残し、ターゲットの部屋へ向かった。

「まあいねえわな」

しかし部屋ものの家の殻、あれだけ盛大に待ち構えていたのだから当然といえば当然である。

「どうするか『びび…伏黒甚爾』あ?」

『ターゲットはこちらで確保した。すぐに脱出を図れ』

何と別で動いていたブルー構成員が確保したと連絡が入る。

「そのまえによ、情報と違いすぎんぞ。ゴミが! 猟犬部隊一同で歓迎されちまったじゃねえか」

『それについてはこちらのミスだ。報酬に色を付けよう』

「あと俺に情報を寄こしたやつもだ、殺す。」

『わかった』

通信が切れる。もうここには用はない。ジークは今頃猟犬部隊の皆を治療しているだろう。

「じゃあな」

悲しげな姿はもうどこにもいなかった。

大黒天

「何故、奴らを殺さなかった。伏黒甚爾、貴様ならできたはず」

「俺が受けた依頼はあくまでも誘拐。だから別に生かす気も、殺す気もなかったからなあ。殺して追加報酬もらえんなら別だったが。」

「キサツ… うっ！」

「それ以上とーじにないか言うつもりなら、お前達の頭を潰す」

史文恭が狼牙棒をブルーの構成員に突き付ける。

「だが、史文恭殿！この男のせいで我々は同志を1人殺されているのですー！」

「それはそちらの落ち度だろう。誤った情報を渡し危機に晒した。寧ろとーじに感謝しておけ、この場の全員殺されても文句は言えんぞ？」

「それでも！「やめろ」リーダー」

尚も食い下がろうとした構成員を止めたのは、ブルーのリーダーである女であった。

「失礼をしたな」

「なら殺して良いか？」

「それは勘弁してくれ」

歴戦の猛者と分かる雰囲気。このテロ組織、何処となく軍隊じみている。何処かの国の元軍隊だろうか？規律はしっかりしているし、保有する武器や資金もそれなりの物だ。

「君が猟犬達を引きつけてくれたおかげで、今回の我々の目的は達成できた。謝罪と感謝こそするが、これ以上は君と争いたくはない。君にかかれれば我々など、そこらの雑草の如く刈り取られる。」

ボソツ「とーじ」

ボソツ「ああ、かなり場数踏んでるな。力量の差を見る目も指揮官には重要な要素の一つだ。こりや確定だな。」

2人はある予想をしていた。そしてそれが当たっていると確信する。

事前に屋敷内の内部構造を入手できる。武器や資金。規律の取れ

た動き。そして構成員の練度とリーダーであるこの女の力量。

「やっばお前ら軍人か」

「元軍人だ。伏黒君」

このテロ組織ブルーは全員が元軍事であった。

「それも同じドイツ軍」

「お見それしたよ。なぜ分かった？」

「ドイツH&K社のHK417の16インチ銃身モデルに、7.62mm×51口径の短距離狙撃銃（Sch t z W a k R w）、他にも含めてここらにある武器は全部お前らドイツ軍御用達の物ばかり。これわからねえ方が間抜けだ。」

「お見事。そう、我々は元ドイツ軍だよ。ご褒美に熱い抱擁でもしてあげようか？」

「絞め殺すけど、いいか？」

「つれないね」

「さて、依頼は達成された。私達は引き上げる。後はそちらの問題だ。」

「ああ、今回の依頼を引き受けてくれたことに感謝する」

敬礼で見送られながら甚爾達は、ブルーのアジトを去った。

「リーダー」

「勘付かれるなよ」

リユーベックの街まで戻ってきた甚爾達。まだまだ夜はこれからと言う時間。

「とーじ」

「・・・」

「少し付き合え」

「行くぞ」

史文恭が甚爾の腕を取り歩き出す。甚爾はただ引かれるがまま歩く。

そして一軒のBARに入った。

「私はそうだなチャイナブルーを甚爾はどうする？」

「・・・」

「コイツには何かいいのはあるか？」

「それでしたらドルトムンダーなどいかがでしょう？【ブロンド・ビール】とも称されていて、口当たりの軽いさっぱりとした味わいが楽しめます。」

「では、それを頼む」

「かしこまりました」

マスターは少し離れてカクテルとビールを用意する。30秒程でそれぞれの品が届き「ごゆっくり」と一言だけ言って離れて行く。2人の雰囲気を感じての事だろう。史文恭は感謝の意を込め少しチップを多く渡した。

「さあ飲もう、とーじ」

「・・・」

甚爾は動かない。史文恭は自分のカクテルを持ち「カチイン」と甚爾のグラスと乾杯を交わす。

「ずっと機嫌が良くないな」

「・・・」

「その怒りは、何の怒りだ？」

「・・・」

「とーじが我慢することはない、したいようにすれば良い。」

「・・・キョウ」

「ああ」

「お前から見て俺はどう写って見える？」

「私から見たお前か・・・」

カクテルを一口飲む。口を湿らせてから返答を返す。

「ツンデレ」

「・・・」

「そう睨むな、ちゃんと説明する。すまない今度はブランブルを頼む」
「かしこまりました」

「宝の一件でもそうだ。彼女が黒幕だと知り私達の前で推理した時、無自覚だったんだろう。お前はあの時、少し悲しそうだった。お前がどう思っていたのかは知らない。けどお前は、お前自身と・・・」

誰かのために怒れるそんな男さ

「そのお前が、そこまで怒りを露にしている。ここにいる間に、余程いい出会いがあった。そうだな、その者にもお前が知らないお前を言い当てられでもしたか？なあとーじ。君がウダウダ悩むのは合っていないよ。理性と本能はまるで違う。人だって生き物だ、いくら理性を得た生き物でも本能に逆らう理由にはならない。時には本能のまま進むのも必要だ。だから私は言ったんだ、したいようにすればいいと。」

「お待たせいたしました。ブランブルでございます。」

「ありがとうございます」

話の区切りの段階でカクテルを出す。史文恭が、わざわざ作るのに時間のかかるカクテルを注文した理由を察し、二人から離れ奥で作り区切りの段階で品を出す。本当にできるマスターだなと感心する。そしてまた話の聞こえない場所まで下がっていった。

沈黙が流れる。だが先ほどまでの暗い雰囲気ではなく、どこか雨上がりの夜空のような空気だった。

史文恭が席を立つ。見るとグラスは空であり代金が置いてあった。史文恭はそのまま扉に向かって歩く。

「長々と話したが、店に入る前よりいい顔になった。悩みは晴れたか？」

そして扉に手をかける。

「先に里に戻っているぞ。・・・その顔だとーじ。飄々としていながら瞳の奥では鋭い斬撃が敵を殺すために輝いている。」

扉を開け外に出る。

「キョウ」

外に出た史文恭が振り返ると、何かを投げ渡される。見ると先ほど自分が置いた代金と最初の代金まで投げ渡された。

「・・・ありがとうよ」

「掃除をして、お前の帰りを待つとするよ。」

外に出て史文恭は狼牙棒を肩に担ぐ。

「さあ、ごみ掃除だ。青いごみ袋にまとめて入れてやろう」

パタンツと扉が閉まる。同時にマスターが戻ってくる。

「いい顔になられましたねお客様。この短時間でここまでにさせる、お連れ様はさぞ素敵の方なのですな。」

グラスを洗い水気をふきながらマスターが言う。そして甚爾は……。

ガッ！　ゴクツゴクツゴクツ　ダンツ！

目の前にあったビールを一気に飲み干した。

「俺には勿体ないほどのいい女さ」

そのまま席を立ち、店を出て行った。

「またのご来店をお待ちしております。」

閉まった扉に向けマスターは静かに一礼するのだった。

ーフリードリヒ邸ー

現在、会議室となっている部屋に猟犬部隊は集まって作戦会議を行っていた。しかし、皆一同暗い面持ちだ。数々の戦場を潜り抜けてきた彼女たち、だが一人の謎の襲撃者によって全滅させられ、クリスマで攫われる。静かに涙を流す者。怒りを抑えようと拳を握りすぎ血を流す者。嗚咽を漏らす者など様々。

「いい加減にしなさい！お前達！」

マルギツテが声を張り上げて言う。

「今この時、泣いている暇などありません。これは私達の失態！お嬢様を救出し……その後、皆で罪を償おう。」

静かに涙を流しながらマルギツテは言う言葉に、部隊の皆に先程までの陰りはない。それを見て一つ頷き会議の再開を告げた。

「ブルーアジト」

「リーダー」

「どうした？」

「伏黒甚爾と史文恭を追っていた者たちから、連絡が途絶えました。恐らく……。」

「そうか、やはり」

「再度追っ手を放ちますか？」

「いや、いい。それよりも人質は？」

「今は薬で眠っています」

「そうか、では準備に取り掛かれ革命の時は来た！」

「はっ！」

甚爾は、以前に半日以上座っていたベンチに腰掛けていた。あの時のようにただ座ってはおらず、何かを待っている。そして瞳は標的を定めた獣のような瞳をしていた。

「挨拶もなしに人の体に糸巻き付けてんじゃねえよ、リザ」

「そこはリザお姉さんだろう。せめてさん付け」

「動くな伏黒甚爾！」

テルマとコジマが甚爾にメイスと拳を向ける。

「まさか、まだドイツにいるとは思いませんでしたよ少年」

マルギツテが副官のフィーネを伴い歩いてくる。

「よう。意外と早かったな。」

「その様子では、認めるということですね。」

「ちなみに聞いていいか？俺が襲撃者だとわかった要因は？」

「以前食事をした際に、貴方から一切気を感じ取ることが出来ませんでした。普段の私生活ならば気を抑え生活保護をする者もいる。で

すが戦闘時においてまで抑える者はいない。」

「なるほどね」

「私達だけではなく、狙撃手や後方部隊もお前を包囲している。おとなしく観念しろ！」

「で？」

「なにっ！」

気が付けば糸を抜け出しマルギツテの横に並ぶ甚爾。

「噂通りか、ファイネ」

「はい。伏黒甚爾、貴方について少し調べさせてもらった。まあ正確にはリザが」

「イエー！」

「伏黒甚爾、裏の世界では武闘家殺しの異名で知られる。戦闘方法はさまざまでまさに変幻自在。奇襲・暗殺を主としながらも戦闘能力は壁越えクラス。過去には一個師団を塵殺。」

「懐かしいな。確かそれ三年前にスペインに行った時だっけか？相手の師団長が壁越えでよ、一歩手前の奴も何人かいたなあ。」

「・・・」

「化け物」

「お前はこの話を聞いてどう思う？」

視線を向けた先にはジークがいた。甚爾はジークの前まで移動して顔をなでる。

「よかった。腫れちやいないな。」

「うん。とーじちゃんが手加減してくれたから、私は何ともないよ。」
頬をなでる甚爾の手に自分の手を重ねる。決して離すまいといつかのように。

「話は聞いただろ、それでもお前は・・・」

「私は！私は・・・とーじちゃんにこれ以上その力を使ってほしくない。とーじちゃんに他の人も、とーじちゃん自身にも傷ついて欲しくない！」

涙を流しながら言葉が続く。

「でも、それは無理なんだって本当は分かっているの。私達を攻撃して

きた時も、とーじちゃんからは悲しい感じがした。本当ならあの時あ
の時、私達を皆殺しにだってできた。でもそれをしなかった。皆ケガ
はしたけど、私が治療して直ぐに動ける程度のけがだった。」
「・・・」

「わざと派手に動いて、私らに印象付けをしたんだらう？」

リザが続ける

「それにお前が受けた依頼、確かに殺しもあるけどそれは依頼した側
の敵討ちや救出の為にだ。私が調べた限りだけだ」

「普通に殺しの依頼も受けたことあるぞ。西洋忍者の名が泣くな」

ガーンという効果音が聞こえてきそうなほど、落ち込み膝をつき項
垂れてしまいうりざ。

「ジークお前は、これでもまだ俺が優しいとか言うつもりか？」

返答はない。しかし

「…んツ／＼／」

「！！「キヤッ♡♡!!」」

返されたのは口づけだった。

「ぷはあ・・・はあはあ・・・これが私の答え／＼／」

「・・・そうかよ」

お返しとばかりに、今度は甚爾からジークにキスをする。先ほどの
ような触れるだけのキスではなく、深い深いキス。

「んんっ、んじゅる、ちゅくちゅくちゅく…んんん、とーじちゃ…
んん、ちゅるくちゅぬちゅ、じゅる…ぷはっ…まっんんっ…
じゅるるるう」

「ゴクリッ」

皆の生唾を飲み込み二人のキスを見守る。

「んちゅっ、れるれろれるろ、…ちゅう、ちゅっ…はあはあはあ」
甚爾が唇を話すと腰が抜けたのか、ジークはぐったりと甚爾の塗値
に寄り掛かる。

「…んんっ」

ジークと自身の口周りに付いた唾液を、親指で拭う。

「…ちそーさん」

「ううッ／＼／」

羞恥で顔が赤くなり見られたくないのか、甚爾の胸に顔を押し付け隠す。

「コ、コジマすごいものを見てしまった。」

「は、破廉恥な！」

「スツゲエエ」

「／＼／」

「少年、時と場所を考えなさい。∴その2人がそういう関係だったとしても、今は違うでしょう。」

「先にキスしてきたの、こいつだけど？」

先程までのシリアスな空気はどこへやら、二人のキスシーンを見せられて皆ゆでだこのように顔を赤くしてしまう。

「なあ、マルギツテ」

「何でしょう。」

「俺はこいつに借りが出来ちゃった。」

「そのようですね」

「取引しねえか？」

「取引ですか。」

「俺がお前らの姫さんを連れ戻す。そのあと俺を煮るなり焼くなり好きにしろ。その代わりジークは許してやってくれ。頼む。」

甚爾が頭を下げて頼み込む。

「なぜ取引をする必要が？今あなたを捕らえ尋問し聞き出してもいいのですよ。」

「俺の事、調べたんだろ？なら分かってるはずだ。」

「天与呪縛ですか。まさかそのようなものがあるとは、思いもしませんでした。」

渋るかと思われたが即座に返答が来る。

「分かりました。」

「悪いな」

「いいえ。私も可愛い部下を罰したくありませんから。それに、もともとあなたに協力を仰ぐために、ここに来たのですよ。」

「襲撃者はまず間違いなく、伏黒甚爾でしょう。」

「天与呪縛。その様なものがあるとは、異能とは違うのか？」

「天与呪縛は代償に、甚爾の場合は気を一切持ちえない代わりに、驚異的な身体能力を得たんだ。その点、異能は代償がない。まあエネルギー消費が激しいとかはあるけど。」

「それだと異能持ちのほうが強いな」

「あんたバカ？代償が有ると無しとじゃ全然違うでしょうが。カードゲームにたとえてみなさい。ポーカーで例えると異能がフルハウス。天与呪縛がロイヤルストレートフラッシュ。どっちの役のほうが強い？」

「そりや、ロイヤルストレートフラッシュだろう？」

「ええそうよ。じゃあ揃いやすい役はどちらかしら？」

「フルハウス」

ポーカーにおいて、フルハウスが成立する組み合わせは52通り。それに72をかけると3,744。そしてそれを全ての組み合わせで割り、最後にかける1000をする。

$$3,744 \div 2,598,960 \times 1000 \doteq 0.144\%$$

対してロイヤルストレートフラッシュが成立するのは4通りしか存在しない。

$$4 \div 2,598,960 \times 1000 \doteq 0.00015\%$$

「これだけ言えばわかるでしょ？」

「私も伏黒甚爾の実力の一端を垣間見ている。」

「隊長」

「何ですかジーク」

「私がとうじちゃんにお願いしてみます。お嬢様を返してもらえよう。だからー」

「ジーク」

「だから、とうじちゃんに刑罰を与えるのはやめてください。お願いします。」

皆黙り込み、マルギツテのほうを見る。連れ去った相手に返してくれと頼む？そんなことはできない、とだれもが思う。

「正直に言いましたよ。私でも彼には敵わなかった。」

「しかし、それは不意を食らって、それに情報もありませんでした。」

「黙りなさい。言い訳などしません。私は、猟犬部隊は彼に負けたそれが事実です。」

「それに、敵のアジトすらも掴めていない子の状況で唯一の糸口は彼です。私はお嬢様を助けたい。たとえ恥ずべきことであつたとしても、お嬢様の命には代えられません。」

「」「」「」「」「」「」「」「」

「そうだな、隊長」

「フツ、仕方あるまい」

「リザ。フイーネ。」

同期の二人が賛成の意思を見せる。

「隊長がそう仰せられるのなら異論ありません。」

「コジマもクリスたんを助けたい。それにトウジは悪い人じゃないと思う。」

「テルちゃん。コジちゃん。」

そしてほかの人達も、次々に賛成していく。

「ジークそういうことです。」

「ううっ。隊長」

「では猟犬部隊の総意として依頼します。」

―現在―

「ということですよ」

甚爾は話を聞くと、いつの間にか寄りかかりから抱きつきにシフトしていたジークを、抱きしめ返す。

「少年、返答は」

「決まってる。受けるぜ、その依頼。」

「感謝します。報酬は・・・」

「なら・・・ことが終わった後、少しこいつと話をさせてくれ。」

話がまとまり、早速クリス救出が開始されることとなった。

甚爾達は車に乗り込みバルト海を目指していた。

「潜水艦！」

「ああ、あいつらのアジトは潜水艦。六艦あつてそのうちのどれかにいる。」

「潜水艦に元ドイツ軍・・・そうか、ブルータイガー！」

「隊長それって確か。ナチス志向が強すぎて、消された部隊じゃ」

「ええ。かつて我々が殲滅した。違いますね、したと思っていた。」

「なるほどね。やっと話が読めたぜ。」

元々ブルーは狩猟部隊とタメを張るほどの部隊であったが、世界大戦時代のナチス志向が強く、国と軍上層部から極秘任務を受けた狩猟部隊が殲滅したのだった。

「海底にいる奴らをどうしろってんだ？」

「手はあるぜ。リザ・・・さん」

「惜しい」

「その作戦は？」

「史文教から聞いたが、奴らは週に一回海上に出て食料やらの備蓄や必要なものを補充するらしい。前に補充したのが一週間前。」

「つまり今日奴らは会場に上がると」

甚爾は頷く。

「それとこれ使え」

「これは？」

「あの嬢ちゃんに取り付けた発信機の端末。史文教がああ嬢ちゃんに付けた」

「(キョウの奴、俺がこうすることを分かって・・・本当にいい女だ。)」
「よし！では作戦を伝えます。奴らの潜水艦を発見次第に潜入し、お

嬢様の救出。」

「おう！任せときな。」

「他の者はバックアップ。」

「了解」

「そして少年は」

「奴らを潰す」

「頼みます」

「とうじちゃん」

ギョツ、心配なのだろう、不安の表情を浮かべるジークに対し甚爾は、肩に抱き寄せ頭をやさしくなでる。

「心配ねえ」

「うん」

「ヒューヒューお熱いねえ」

「リザお姉さんにもやってやろうか？うん？足腰立たなくなるまで貪ってやろうか？」

「ごめんごめん」

「各自準備を怠るな！」

ーバルト海ー

猟犬部隊と甚爾は手配した軍艦で、発信機の反応を頼りに海上からブルーの潜水艦隊を探していた。

「いました全六艦」

「よし！リザ頼みます！」

「了解！」

これより救出作戦が開始！！

ー潜水艦ー

「潜入成功」

「反応は近いな」

「ああ、これなら・・・」

「あ？どした？」

リザは本来ならば、作戦上いはいはずの甚爾を見て驚く。驚愕し、声を上げなかったただけ賞賛に値するだろう。流石は西洋ニンジャ。

「甚爾！お前何してんだ！」

「ちよいとブルーのリーダーさんに用があるのを思い出してな。」

「用ってお前」

「リザは作戦通り救出したら脱出しろ。騒ぎ起こして引き付ける。」

「死ぬなよ」

チュツ、甚爾の頬にキスをして救出に向かうリザ。

「どうせなら口にしてけよ」

さあ、ちよいとお話しようぜ。テロ組織のリーダーさん。

「もうすぐだ。憎き狩猟部隊と我々を貶めたこの国に復讐を」

リーダーである。女は、もうすぐ自分達の悲願が叶うと確信し、これまでの道なりを振り返っていた。

コンツコンツ

すると扉をノックする音が聞こえる。補給に出た者たちが戻ったのだろう。そう思い入る許可を出す。

「入れ」

「よお」

「伏黒甚爾！」

ここにいないはずのない人物の登場に戸惑う。しかし、それも一瞬のことで即座に机の裏の緊急ボタンを押して、侵入者がいることを知らせる。同時に隠ししてあった拳銃も手に取る。

「どうしてここにいるのかな？」

「人質返してもらおうと思って」

「どういうことかな？」

「同族嫌悪ってやつかな。まあこれは、あんたらには関係ねえか。」

「話は分からないけど、早い話が獵犬部隊に雇われて来たということ
でいいかしら？」

「後は、お前らのやり方が気に食わねえ。」

「何ですって。」

チャキツ、拳銃を向けられようとも、甚爾の飄々とした態度は変わ
らない。

「以前に依頼で復讐を成した女がいた。そいつは誰の手をも借りず、
誰を使うことなく、自分自身を人質に復讐を成した。約三十年かかっ
た復讐だ。柄にもなくスゲーと思つたよ。だが、お前らは違う。お前
らはただ、駄々をこねるガキと一緒に。」

「黙れ！」

言葉と共に、構成員達がなだれ込んでくる。瞬く間に甚爾は包囲さ
れた。

「お前みたいなガキに、何がわかる！我々は忠誠を誓った国に裏切ら
れた。今の軍は腑抜けている。我々は、正しい在り方に戻そうとし
ただけだ。上の者たちは恐れをなし、我々を裏切つた。何もかも地に落
とされた。獵犬部隊、奴らがいなければ！ここからだ！ここから我々
の時代を作る。そのために、死ぬ。伏黒甚爾。撃てえ。」

「力説どうも。けど、ちゃんと回り見てから指示だな。一応指揮官
だろ？」

辺りを見渡し絶句する。先程まで包囲していた構成員は皆、苦悶の
表情を浮かべ死んでいた。

「どういうことだ！なんで！」

「いくら電気がついてるといっても、この部屋暗すぎ！」

ピンッ

甚爾が腕をひくと首が落ちた。

「糸か！一体いつ！」

「この部屋に入った直後」

そう甚爾は部屋に入るなり、糸を部屋中に張り巡らせていた。

ウウウウウウウウウウウウウウ

突如警報が鳴り響く。机の裏にあつた警報ボタンは、リーダーの部屋の上に危機が迫っていると、構成員を待機させている部屋に伝えるものだったが、今回ののは艦全体に響いている。

へ全構成員に通達！侵入者アリ！人質が奪われた！繰り返す…

リザがうまくやったようだ。その考えに至り、甚爾も即座に脱出することにした。

「ハハッ、さて俺もおさらばするか」

「まて！」

即座に駆け出し、視界から消える。そのまま入ってきた場所を目指し走る。数秒で着き脱出。すると目の前にクリスを抱えたりザがいた。

「お前まだこんなところにいたのか」

「甚爾！ナイスタイミング！ヘルプ！」

「ちっ、舌噛むなよ」

「へ？」

ガシツ、二人を抱えそのまま潜水艦から飛び降りる。

「ギヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！」

「うるせえ！」

「とと、とお、うううう、うみ、うえ！」

パチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャ！

「ありえない」

リザはテンパリ、構成員たちも唾然とする。甚爾はクリスとリザの二人を抱え海面を走っていた。速度が落ちることはなく、むしろ上がり続け、あつという間に猟犬部隊の待つ軍艦にたどり着く。

「ホラよ」

「アババババババ」

「もう食べれない」

「マジかこの女、寝てやがる」

リザは混乱、クリスは眠り、甚爾は呆れ顔。猟犬部隊も絶句する。

「本当に人間ですか？貴方は？」

「そんなことはいいから。さっさと海域を離脱しろ。」

「何を言っているのですか貴方は！」

「巻き込まれたいか？」

「必ず戻りなさい。待っている者たちもいるのです。」

「隊長！」

「ああ」

甚爾はまた海面をかけだし、潜水艦に戻っていく。

「聞こえましたね。直ちにこの海域を離脱します。」

マルギツテの指示に従い、軍艦は即座に離脱を凶った。

潜水艦に戻ってきた甚爾は、甲板に上がってきていたリーダーにこれでもかと、嫌み全開の顔を向けていた。

「伏黒甚爾！」

「うるせえな聞こえてるよ」

「貴様はここで、絶対に殺す！」

「いいや、俺は死なねえ。ちよいとお前らには付き合ってもらおうか」

そう言うお腹の中からク口を吐き出し、体に巻き付ける。そしてク口の口から游雲を取り出す。

「龍だと！」

「こいつの能力は格納。何でもかんでも格納できんだよ。大きさや形に制限はない。生物なんかもな。だから、こうして普段はこいつに武器を入れて、俺の腹の中に入れてんだ。でよ、こいつはあるものから格納できる。何だかわかるか？ヒントをやろう、俺が唯一持っていないものだ。」

「・・・まさか！」

嘘だと信じたい。答えに行きついたリーダーは願う。しかし、真実は残酷だ。

ク口の口から膨大な量の気が吐き出される。それは可視化できる程の密度。気の総量は依然増え続ける。

「こいつには、普段から自然に発生する気を格納させてる。戦ってる相手のを食わせたりもするけど。要は今、こいつに格納させてる分全部をこの游雲に込める。」

とてつもない気を全て注ぎ込まれた游雲。

「さて、仕上げだ。俺が天与呪縛だつてことは知ってるよな。気と引き換えに人智を超えた身体能力。これも知ってるだろ？情報の開示。自分の情報を、相手に晒すという縛りが俺の身体能力を底上げする。その力で、さっきの気を取り込んだ游雲を振るえばどうなるかな。」

「全員！艦内へ！急いで海底に！」

即座に潜水を開始する。

潜水に合わせ甚爾は上に全力で跳ぶ。

「(情報の開示も済んだ。後は全力で振るう)」

「急げ！もつと深く！」

「いくぞ」

「海底へ！もつともつともつと深く！」

「海の藻屑となって死ぬ」

ただでさえ強力な気を宿す游雲。それを甚爾が振るえば大惨事だ。しかし、それが今は極大の気を取り込んだ游雲。そして情報の開示を済ませた、正真正銘の全力で甚爾が振るう。起こるそれはまさに…

天変地異

【大黒天】

いつときの別れ

「そんなに海底が好きなら、底でくたばれ！」

「大黒天」

海上に突如として黒い星が飛来する。海面に激突したそれは、直後に大きな暴発を引き起こし、海震を引き起こす。大きな揺れは、海だけに留まらず大地に、空に、世界に、黒く歪な、ヒビが入った。それを見た者たちは、誰もが思った。世界が砕ける。

― 狩猟部隊 side ―

「なんだあれは！」

「考えてる暇はない！皆何かにつかまれ！振り落とされるな！」

迫りくる大きな津波。それは軍艦であろうとも、転覆してしまう可能性があるほどだった。

「空に黒い歪み？」

「一体何なんだよあれは！」

「あれを人、一人が起ここしてるですって？ありえないでしょ！」

「化け物」

かつてない経験に猟犬部隊の精鋭たちであつてもパニックに陥る。それと真逆にマルギツテは、世界に走る黒い歪みを見てあることを思い出していた。それは数か月前、突如として世界を駆け抜けた、何もかもを消し去ってしまうような、殺気と気の衝突。あの時は、世界のどこかで壁越えクラスの者同士が引き起こしたものだと思っていた。だが今、確信する。ヤツだ。甚爾だ。

「間違いありません。これほどの、何もかもを歪ませてしまう気の衝突。貴方でしたか伏黒甚爾。いくら壁越えの者達の、最新の対戦情報を集めても分からないはずです。なにせ……気を一切持ちえない者に、こんな天変地異を引き起こせると考えますか。しかもこれは！以前感じたものよりもデカい！！……フツ。この私が恐怖している。伏黒甚爾。少し惹かれてしまいますね。」

やがて黒い歪みは消えて空が戻る。だが、大黒天がもたらした爪痕はまさに天災。

「海が蒸発した」

「底が見えてる」

「おい・ブルーの艦隊は？」

「そんなことを言っている場合ではない！急げ！この海域を離脱する！」

「副長？」

「この広大な海に大穴が一つ開いた。ならば、その穴を修正するため水はその穴に流れる。」

このままだと水流で海底に引き摺り込まれるぞ！

この直後海上が揺れ、軍艦が後方に流され始める。

「全速力で離脱しなさい！」

だが軍艦は一向に前には進まず、徐々に大穴に向かう。このままでは落ちる。

パチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャ！

「どうじちゃん！」

そこに海面を駆け甚爾が軍艦後方に回った。

「軍艦は確実に壊れるが、弁償はするつもりはないんでな。先に謝つとくぜ！」

「どうじちゃん！」

「クロー！」

カパツ、口を開け吐き出したのは金砕棒【鬼木】をつかみ軍艦を打つた。

「ホームランってな」

約12万トン以上もある軍艦を、プロ野球選手顔負けのスイングで

陸側に向けて打った。うなる轟音。そしてそのまま港に直撃した。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

皆とは騒然とする。突如として空に黒い歪み、それが消えたら今度は軍艦が降ってきた。神の怒りだ。世界の終わりだと騒ぎだす。だがそんなこと彼女達には関係ない。

バコンツ！軍艦の装甲を破り出てきた狩猟部隊。皆一様に、なぜ助かったのか分からないという表情だった。

「皆無事ですなね？」

「はい！隊長」

「絶対に甚爾だろ！こんな馬鹿げたことが出来んの！」

「りっちゃんの言う通りだよ」

「やっぱり！」

「今のフワツてなって面白かった！コジマもう一回やりたい！」

「テル、何うずくまってんだ？」

「鎧の中で転げまわって気持ち悪い」

「ドンマイ」

ぞろぞろとマルギツテに続いて出てくる。皆ケガのほどは軽症のようである。至らなかつた。

「隊長！とうじちゃん私達を助けるために！」

「分かっている。すぐに別の軍艦とヘリの用意。すぐに創作隊を編成します。」

自分達を助けるために残った甚爾を搜索すべく動き出す。すぐに要請を受けた、駐屯地から軍艦とヘリが回された。

「ジーク貴方はここに残りなさい」

「そんな！私も行きます！」

「ジーク貴方にはここで近隣住民のケアと、軍艦の衝突でケガをした住民、それに漁師たちのけがの手当てをお願いします。」

「・・・」

「どうだ？約束通り、無事に戻ったぞ？」

「おかえり」

「おう」

2人の影だけがただ、静かに重なった。

後日、ブルーの捜索が開始されることはなかった。ブルーを攻撃し一時的に天変地異を引き起こした張本人はこう語る。

「は？生き残ってるわけねーだろ。真剣^{マジ}に殺しに行ったんだからよ。残骸一つ残らず消してやった。」

この証言により、一度確認のため航行して終息した。誘拐されたクリスだが、ずっと眠っていたらしく自分が誘拐されたことを知った時、なぜその状況で眠っていたのかと酷く落ち込み、復活させるまでマルギツテが頑張ったそう。そして現在、甚爾はまだドイツに留まっていた。

ピピピピピピピピピピピピピピ

カチツ

「ううん。。。あれっ！」

朝、目覚ましの音と共に目を覚ますジーク。起きて早々何かを探す。昨日の夜、確かに一緒だったはずの者がいない。夢なはずがない。なぜならば絶対に忘れられない日となったから。キヨロキヨロと辺りを見回すがいない。ベットの下のもない。すると寝室の扉が開き、目的の人物がいた。

「起きたか」

「とうじちゃん。。。んちゅっ」

起き抜けにキスを交わす。改めて甚爾の格好を見ると、すでに着替

えておりキッチンの方からはいいにおいが漂う。朝食の準備をしてくれていたのだろう。しかし、ジークとしては一緒に起き、一緒に朝食を作りたかったため、少し不満気だ。

「むー」

「むくれてるけど、お前立つのきつくねえの？」

「うっ、チョットだけ」

「だから一緒にやるのは今度だ」

「約束！約束だからね！」

「へいへい。さつさと食うぞ。今日フランク中將から呼び出しの日なんだろ？」

「そうだった。．．ねえ、とうじちゃん」

「あ？」

ジークはこちらに両腕を伸ばし

「／／だっこ／／」

「．．．」

しばし硬直していたが、復活しジークに近づく。そしてお望みのお姫様抱っこ。腕の中のプリンセスは実にご満悦だ。そしてそのままリビングに移動。しかし通り過ぎる。ココで降口してもらえると思っていたため、疑問に思うジーク。甚爾は止まることなく進み止まる。そしてジークを、お湯の張ったお風呂に投げ入れた。

ドパーンツ!!

「わっぷー」

「さつさと流して来い。他の奴に匂いとかでバレたくないだろ。」

「はーい」

足音は去っていく。自分の為にしてくれたことに、ジークは朝から幸せオーラ全開で、フリードリヒ邸に向かうのだった。

ーフリードリヒ邸ー

「みんな朝早くにすまないね」

「いえ。中将お詫びをしなくてはならないのは我々の方です。中将の留守を守れず、誘拐まで許すとは」

「マルギツテ。その話は、散々したはずだ。伏黒甚爾君を含め話はいただろう。」

「しかし」

「俺も納得がいつてねえ」

「君もか。伏黒君」

「なぜ俺を罰しない。処刑でも俺は受け入れるつもりでいるんだが」

「とうじちゃん」

「フム。確かに最初は私も君を刑にかけるつもりだった。しかし、娘に止められてね。」

皆一同疑問を浮かべる。

『彼は依頼を受け敵側にいたに過ぎない。それに、最後は私を助けてくれた。彼を罰するのは間違っている』とね。」

「・・・」

「お嬢様、ご立派です。」

「そういうわけで、伏黒甚爾君。君の罪は水に流そう。」

「感謝する。」

「礼は娘とジーク君に言うといい」

「そうだな」

こうして本当の意味でこの事件は終わったのだった。

「それでは中将。今回の招集は」

「ああ、来年のクリスマスが日本の川神学園に留学することは皆知ってるだろう。その護衛を発表する。マルギツテ、君に頼みたい。」

「はっ！了解いたしました！」

「これにより一時的にだが、隊長が不在になる。フィーネ君。その間の部隊の指揮を頼むよ。」

「はっ！」

「そしてここからが今回の本題だ。これから狩猟部隊にはイタリアのフィレンツェに向かってもらいたい。」

「イタリア…なぜ突然？」

「…あつ！式典！」

「その通り。この度イタリアのフィレンツェで行われる、式典に首相が参加成される。しかし、その式典を爆破すると予告が入った。」

「爆破予告が！」

「狩猟部隊には先に現地に入り、爆発物の処理と警護に当たってもらう。」

「了解しました。任務を遂行します。」

「出発は午後だ。それまでに準備しておきなさい。」

「はっ！」

そのまま解散し、各自準備に入る。準備が終われば出発時間までは自由だ。甚爾とジークは、その時間を他愛無い話で潰していた。そこにマルギツテ達がやってくる。

「あつ、隊長〜」

「今日はずっと機嫌がいいですねジーク」

「えへへ、そうかなあ？」

「隠すなよジーク。要はアレだろ？どうだったんだよ、甚爾のアレは！」

まだ真昼間だと言うのに、下世話な話をし出すリザ。少し懲らしめてやろうと思い、ついでに疑問も解消すべく質問する。

「おい」

「んー？」

「お前、あの時、なんでキスしてきたんだ？」

「ちよつ、おまー！」

ガシツ！

「ひっ！」

「リザ…キスつてどういう事？」

突如として、リザの体に包帯が巻き付き、身動きが封じられる。

振り向くと、笑顔とは裏腹に、見たこともないオーラを発するジークがいた。

「ちよつと向こうでお話…しようか？」

「え、ちよつと待つてジーク。違う誤解！確かにキスしたけど誤解！」
「5回も！」

「ちがーう！」

そのまま連れていかれてしまいうりざ。断末魔のような声が聞こえるが、皆気にしないことにするのだった。

「甚爾」

「何だマルギツテ」

「私達が任務に赴いた後、貴方はどうするのですか？」

「一度、戻ろうと思ってる。」

「そのことをジークは。」

「昨日言った。」

「そうですね。貴方たちの間で話が付いているのならば、何も言いません。余計なお世話でしたね。謝罪します。」

「別にいい。」

「もしまた、ドイツに来ることがあれば寄りなさい。歓迎します。」

「戻りました」

物言わぬ屍？となったリザを引きずったジーク。

「生きてんのか？これ？」

「ちよつと眠くなっちゃったみたいなの。」

嘘つけ

誰もが心の中で叫ぶ。

「でもジーク。本当にあなたはいいの？」

「テルちゃん。本当は嫌だけど、とうじちゃんを縛る権利は私にはない。でもいつか絶対にとうじちゃんの隣にいる！」

「コジマも応援する！」

「ありがとう。コジちゃん。そうだ！クーちゃん。」

クーちゃん？それは誰だと思っていると、反応を示したのは甚爾に巻き付いていたクロだった。ジークは初めてクロを見た時、怖がりもせず寧ろ、可愛がり、撫でまわしていた。クロも嫌ではないようで、

ジークのされるがままだった。

「クーちゃん。私がそばにいられない間、とうじちゃんをよろしくね。」

「♪」

撫でられて機嫌よくジークの周りを飛ぶクロを見て、主の自分より懐いてないかと思ってしまう甚爾。

「クーちゃんが私ととうじちゃんを繋ぐ架け橋なんだから。」
「？」

言葉の意味が分からないのだろう。小首をかしげる姿も愛らしいクロ。和気あいあいとした、この時間も終わりが迫る。

「さあ、名残惜しいですがそろそろ時間です。どうしますか？空港まで送りますよ。」

「いい。迎えが来る。」

「そうですか。では、また会いましょう。」

互いに思うところはあれど、一時の別れにすぎない。それがわかっているから、これ以上の言葉は必要ない。

互いに背を向け、それぞれの方向へ歩き出す。

「待たせたな。」

「師父、お待ちしております。準備は整っております。」

「キョウは？」

「里にてお待ちです。」

「何だ来てねえのかよ。…帰るぞ。」

陰に潜んでいた、曹一族の迎えと共に甚爾はドイツを後にした。

「♪」

「鼻歌なんてご機嫌だな。」

「リザ」

「それなんだ？」

「私ととうじちゃんを引き合わせてくれる架け橋」

「?…ッ!」

ジークが持っていたのは、史文教がクリスに仕掛けた発信機の端末だった。

「架け橋…ジーク!まさかあの龍に!」

「とうじちゃん。傍にはいられないけど…」

ずっと見守っててあげるからね／＼／

―とある屋敷―

「若様に手紙を送り、すぐにお知らせするのだ。このままでは、禪院家は終わる。」

「はっ!直ちに!」

「それと一応、九鬼にもだ。」

「かしこまりました。」

事はすぐそこまで迫っていた。

―曹一族の隠れ里―

「師父、長期の任務。お疲れ様でございました。師匠と当主がお待ちです。」

「ああ、凜か」

里に戻って早々、当主の家に向かう。

「遅かったな。」

「悪かったな。だが、蹴りはついた。」

「ならばよい。で？いつ里を発つつもりだ？」

「明日」

これはもともと、今回の依頼を受ける前に言っている。その時は何も言わなかったが、なぜか今回は違った。

「甚爾、史文恭を娶る気はないか？」

甚爾は真顔のまま硬直する。ついてきていた凜は顔を真っ赤にし、手で口を覆う。

「お前たちが一緒になってくれれば、曹一族もさらに強固になる。」

「最初に言った通り、俺は今回の任務が終わったら里を出る。その考えは変わらねえ。」

初めから答えは決まっていた。その提案がたとえ、魅力的であろうとも。

「そうか。無理強いはしない。戻って早々悪かったな。今日はゆつくり休め。明日の船は手配しておこう。」

踵を返し外に向かう、途中で片手を振り挨拶をしてから外に出た。

甚爾はそのまま史文恭の家へと向かう。久しぶりの再会に、自分らしくないと思いつつも、気分が浮足立つ。

「ッ！」

突如として背後からの一撃を、振り返らずに受け止める。そのまま武器をつかみ取りお返しとばかりに背負い投げる。相手も動きを讀んで受け身をとり、再度仕掛ける。今度は正面。地面をえぐりながら下からの攻撃。

「狼突」

舞った地面を目隠しに使い無数の突き。それら全て紙一重でかわす。このとき相手は一つミスを犯した。甚爾相手に視界を塞ぐのは、同時に自分の視界から甚爾を隠すということ。

「ホラよ」

「！」

気が付けば背後をとられ、腕をひねり上げられる。武器を落とし、そのまま押し倒され。

「んっ」

「んんっ！ちゅう」

押し倒され唇を奪われる。徐々に力が抜け、抵抗する気もなくなったのか、そのまま受け入れる。

「んちゅっ、ピチャ、チュツパ・・・んっ」

「んっ・・・はあ。久しぶりだな、キョウ。」

「ああ。久しぶりとーじ。まさかキスをされるとは思はなかったぞ。」

相手は史文恭。最初から気配で分かっていたとはいえ、久々の再会がどちらも、別々の意味で過激であった。

「腹減った。飯は？」

「準備してある。だが、もう少し余韻に浸らせろ。」

「浸るなら一人でどうぞ。俺は飯を食う。」

「つれない奴だ。」

互いに言い合いながらも、腕を組み家の中に入るのであった。

夜。ベットの上には、二人が一糸纏わぬ状態で寝ていた。心地よい疲れに身を任せ互いに身を寄せ合う。

「またしばらく、お前とは会えなくなるな。」

「そのうち会いに来るさ。」

「そうか。ではこちらからも時間が出来れば会いに行くとしよう。」

「んっ」

再会の約束。静かにキスをして二人は眠りについた。

準備を済ませ船に乗り込む。最後に忘れ物はないかと確認していると、当主がやってきた

「甚爾これを持っていけ。」

そう言って渡されたのは、片方はこ黒く、もう片方は白い、双剣だった。

「干将・莫耶」わしがまだ現役の頃使っていたものだ。お前にやろう。」

甚爾は持った瞬間に理解する。これは游雲と同じ気を宿す武器。だがそれだけではない。

「多少癖はあるだろうが、お前ならばすぐに使いこなせる。」
「ならありがたく貰うわ」

「では後は若い二人に任せる。」

「とーじ」

「じゃあな、キョウ。また来るぜ」

「ああ、その時はまた可愛がってやろう。」

「ハッ、そりや逆だろ。」

船はゆっくりと動き出す。甚爾と史文恭は、互いの姿が見えなくなるまで、目を離すことはなかった。

そして甚爾は、半年後の依頼までにどう過ごそうか。中国から日本

行きの飛行機の中で考えながら眠りにつく。

禪院家

―九鬼本部ビル―

世界の九鬼と称されるほどの財閥。九鬼財閥。わずか一代で築き上げられ、世界に瞬く間に広まった。

九鬼 帝

九鬼家当主であり、世界に九鬼を知らしめた男。ここは日本にある九鬼の本部。そして九鬼一族が住む場所でもあった。

九鬼 局

帝の妻。多忙な夫を支え、帝が日本を留守の時、九鬼を仕切る女王。しかしそれは、火急的速やかに、事態の解決が望まれる場合の話であり、普段の些細な事態は九鬼家従者部隊がことに当たる。

現在の日本時刻の午後3時。局は1人、ティータイムを楽しんでいた。

そこに九鬼家従者部隊序列3位クラウディオ・ネエロが現れる。

「失礼致します。局様。お楽しみ中に申し訳ありません。」

「よい。要件はなんだ？クラウディオ。」

「はい。禪院家の八咫様より火急の文が届きました。」

そう言われて手紙を受け取る局。丁寧に開き内容を熟読。2分程度で読み終え、手紙を再び丁寧に閉じる。

「八咫様からは何と？」

「お爺さまが、禪院家当主が亡くなった。」

九鬼 局。 旧姓 禪院 局。

禪院家当主 禪院 重国の孫娘であり、伏黒甚爾の、年の離れた実の姉である。

「二昨日の夜、天寿を全うされたそうだ。」

そう言って静かに涙を流す局。クラウディオは何も言わずにハンカチを差し出す。

「すまん。」

「いいえ。お気持ちお察しいたします。」

「クラウディオ、あの子の居場所はわかるか？」

「はい。一時期ドイツに居られたようですが、今は日本に戻ってきているようです。」

「そうか。ん？なんだ、まだ何か言いたそうな顔をしているな？」

「・・・日本に入った直後に、監視にあたった19位と28位が殺されました。監視に入った数十分後に。」

「・・・」

九鬼は、甚爾が日本に戻ってきた直後に監視を放ったが、放つてすぐに瞬殺され、甚爾が日本にいることは分かっているが、所在までは掴めていなかった。

「あの子の事だ、監視も不快だったから殺したのだろう。我の事もさぞ憎んでいるだろうな。あの子が辛い時にそばに居てやれなかった。愚かな姉の事を。」

「それは仕方のない事でございます。あの時は、九鬼も今ほど万全ではございませんでした。局様が気にやむ必要は・・・」

「それでも我は！あの子の姉なのだ！」

「主人に対し、差し出がましい口を失礼致しました。何なりと、罰をお与え下さい。」

局をフオローしたつもりが、彼女の感情に触れてしまった。従者としてあるまじき行為。クラウディオは自分を叱咤する。

「良いクラウディオ。・・・あの子を探せ。大至急だ。八咫の手紙ではあの子はこの事を知らないらしい。向こうも所在を掴めていないよいな。」

「かしこまりました。」

そう言っつて静かに退室する。局は息を一つ吐き、すっかり冷めてしまった紅茶を飲み干す。

「甚爾」

曇天の空を見上げて、愛する弟のことを思うのだった。

曇天の空の中、雨が降り注ぐ。

ここは北海道の札幌市。秋口とは言えかなりの寒さ。加えて雨に濡れば、体は冷えて動きは鈍る。しかし、そんな事は関係ないとはかりに、甚爾は向かって来る敵を殺す。今回の甚爾が受けた依頼は、とある商業企業の社長家族の抹殺。依頼主はこの会社のライバル会社。たかだか一般人の抹殺。つまらない仕事だと思っていたが、思わぬ敵がいた。

どうやら裏の世界と伝手があったようでヤクザが家族の護衛についていた。

「君すごいね。その若きで、だいぶイカれてるよ。」

この女。ヤクザ者はどうでもいい。この女はいい。壁越えに近い実力者。安い依頼料でつまらない依頼だと思っていたがまさに棚からぼた餅。

「いいな。楽しくなってきた。」

「こっちは楽しくないけどねっ！」

女が一気に距離を詰める。真正面からの正拳。

「(馬鹿が。俺の間合いに入るとか、張り合いがなさすぎる。)終わりだな。」

「君がね」

女は甚爾の懐にまでは入らず、数歩手前で急停止。そこから己が鍛え上げた、必殺技を放つ！

「遠当てー！」

「!!」

拳を素早く突き出し衝撃波を生み出す。しかし、それだけでは終わらなかった。

「一発だけじゃないよ。ハアアアアッ！」

なんと女は連発で放って来た。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドオンッ！

衝撃波は、周りの建物も巻き込む。土埃が舞うがこの雨ならすぐに晴れるだろう。この技で倒せなかった敵はいない。油断はしないがこれで終わり。

そう思っていた……。

「終わりか？」

「え!？」

そこには無傷の甚爾が立っていた。

即座に構え直し、もう一度技を放つ。

「遠当て！」

女が放った技を全く同じ技で相殺する甚爾。その事実には驚愕を隠せない。

「嘘でしょ。私の遠当てをみただけで真似たっていうの？」

「要は、ただ早く拳を突き出して衝撃波を相手に飛ばす技。連発はできるが、その分の攻撃力は落ちる。ブラフを貼るには、ちょうど良いだろうが、あんま俺には必要ねえな。」

己が25年かけて磨いた技は、自分の娘と同年代、ひよつとしたら下かもしれない少年に、アツサリと真似をされ相殺される。その事実に分かつてはいたが、自身と甚爾の彼我の差を思い知らされた。

「はあ。ここまでか。良いよ、一思いにお願いね？苦しむの嫌だし。」

「注文が多いお姉さんだな」

「あら嬉しい。それでも貴方のお母さん世代よ私。娘いるし。多分あなたと同年代。君はいくつ？」

「15。今年16になる。」

「あら。じゃあ娘の一個下ね。そっか世界は広いね。」

「もういいか？」

「うん」

こうして女の意識は闇へと沈んで行く。

眩い光に目が覚める。意識がボウつとする。私は何をしていたんだっけ？そうだ。護衛の依頼を受けて、娘の一個下の歳の子と勝負して負けて殺……？

「殺されてない!？」

「朝っぱらからウルセエな。」

「あつごめん」

隣で眠る甚爾からのクレームに少し冷静になる。部屋を見渡すと、何とも豪華な内装をしている。恐らくとてもグレードの高い部屋なのだろう。しかもこのベッド。とんでもなくフカフカで、自分と甚爾の二人で寝ても、まだスペースがある。

「…ん？二人？」

もう一度横を見る。そこにはふかふかのベッドに身を沈め、未だまどろみの中をさまよう甚爾がいた。

「なんで一緒のベッドで寝てるのおおおお！」

「だから！朝からうるせえ！」

ーホテル内 レストランー

「…」

もぐもぐもぐ

「…」

「なあ。」

「…何かしら？」

「いつまでその鬱陶しい雰囲気にいるつもりだ？」

「だって！」

バンツ！テーブルに手をつき立ち上がる。しかし、あまりの大きな音で回りの視線が集中してしまう。それに気が付き、再び座り直し、今度は甚爾に顔を近づけ小声で話す。

「だって…2回りも下の子と一緒に寝たなんて、しかも裸見られるとか。」

「じゃあ手当てしない方がよかったか」

「それは…ありがとう。でも…」

そう甚爾は目の前の女を治療する為、衣服を全て脱がし手当てしたのだ。

「チツ。別に変なことなんざ、何一つしてねえよ。それで納得しとけ。」

てめえも女なら傷痕、残したくはねえだろ。」

ぶつきらばうな発言だが、その中に含まれる甚爾の優しさが垣間見えた。思わず年甲斐もなく心が揺れる。

「…本当に何もしてない?」

「よし、殺す」

そんな殺伐?とした話をしながらホテルの朝食を食べ進める。女の方はバランスを意識したもの。対して甚爾は肉・肉・肉となぜかモツ鍋。

「待って」

「あ?今度は何だ?」

「うん。百歩譲ってお肉オンリーなのは分かるわ。うん。男の子だもの、朝からそれくらい食べないと力付かないものね。けどね。お姉さんそれはどうみても違うって分かるわ。…なんでモツ鍋ツ!てかどこにあったの!」

「リクエストがあったらなんでも言えって、あそこのシェフが言ってたぜ。だから試しに言ったら出てきた。」

「ありえへんやろ」

どこまで、お客のリクエストに答えるプロ根性を発揮しているんだあのシェフ。そう思ってしまうのは仕方がないだろう。

「そう言えば、君の名前まだ聞いてなかったわね。ね、ぼーやお姉さんに教えて。」

「年考えて言葉選べ」

「殺されはりたいんどすな?小僧」

「(京都弁。この女、西の出か)」

「まあ、君みたいなお子様に?大人の魅力を、理解しなさいって方が無理な話かな?」

「アンタなら、二十代でも通るだろう。肌もそんだけ白いんだ。色と形、張も悪くなかったぜ。」

「なー!?煽って何考えてんのかな?…まって、悪くなかったってどこの話よ!」

「伏黒甚爾」

「この流れで言う?というか、君があつた武闘家殺しとはね。」

「あんたは?」

「おっと、そうね。私の名前は松永 ミサゴ。よろしくね。」

そう言つて、妖艶な笑みを浮かべるミサゴ。まためんどくさそうな女と、知り合いになつてしまった。内心ため息をつく甚爾だつた。

自己紹介を済ませ、朝食を食べ終えた二人は食後の珈琲を堪能していた。

「そういえば、とう君。」

「おい」

「私が護衛してた家族はどうなつたの?」

「その前に、とう君つてなんだ!」

「やつぱ、とう君が殺しちゃつたの?」

「…ああ。あんたを気絶させてから、あいつらが逃走用に使つてた車ごと潰した。」

「そつか…」

「あと、とう君止めろ。」

「えー、なんで?いいじゃない別に!」

周りに人は、あまりいなくなつていたので、構わず普通の声量で言い合いをする二人。その2人に近づいてくる気配がある。2人は言い合いを止めて、一人は警戒を、もう一人は殺意をもつて気配のほうを見る。

「そう警戒をなさらずとも結構ですよ。初めまして松永ミサゴ殿。我は九鬼局と申します。」

「私の事をご存じで?」

「ええ」

「それは光栄ですね。では改めて松永ミサゴです。初めまして。局さん。」

互いに余裕のある挨拶を交わす。次に局は甚爾の方を振り向き、少し悲しげな表情で話しかける。

「久しぶりね甚爾。大きくなったわね。息災だったかしら？」

声をかけても返答はない。

「実はね、今日はあなたに用事があったの。日本に帰ってきているのは知っていたんだけど、貴方の所在がつかめなくて、いろんなところを探したのよ？」

ただ、黙ったまま局を見る。

「立ち話もあれだから、何か頼んでから話しましょうか。ミサゴさん。貴方もよかつ「何しにきやがった。」たら…。」

ここでようやく、甚爾が口を開く。

「ここに何をしに来やがったんだテメエ。俺に殺されにでも来たか？そうじゃねえなら消えろ。」

その目を見た二人は確信する。本気だと。甚爾は本気で局を殺す気だ。

「ちよつと、とう君！一回落ち着こう、ね？いい子だからさ!？」

聞こえていないのか、反応するそぶりも見せない。そして局に近づき片手で首を締め上げる。

「…ッ！」

「とう君！」

カゴメがやめさせようと近づく。しかし、近づいてきたカゴメをも締め上げる。

「ガッ…！」

力は徐々にゆっくりと強くなる。意識が朦朧とする。息が出来ず力が入らない。死ぬ！

「とう…じ。おじ…さまが…な…くな…た」

「…あ？」

ドサツ！いきなり甚爾の力が抜け、二人は解放される。しかし、うまく呼吸が出来ず息が整うまで時間を要した。

「はあはあはあ」

「ゲホツゴホツ」

そんなことは知らないとばかりに、局に再度聞く。

「おい。今なんて言った。」

「お爺様が、先代禪院家当主がなくなった。」

「じじいが…死んだ？おい、新車のジョークか？あのジジイが、そう簡単にくたばるわけねえだろ。」

「コレを」

局が渡して来たのは、局に届いた手紙。甚爾は手紙を開き読み始める。

「これで分かったであろう。お爺様が亡くなったのは紛れも無い事実。」

「で？俺にどうしろって？」

「我と共に葬儀に出よ。お前が、あの家のことをよく思っていないことは、重々承知している。しかし、お爺様はお前を常に気に掛けておられた。お前とて分かっているはずだ。」

「だがあの家には」

「奴等がいる事は分かっている。」

「どう君」

ここで今まで口を挟まなかったミサゴが甚爾に声をかける。

「部外者の私が、口を挟むべきではないことは分かっている。でもね、貴方の顔。今とても寂しそうよ。最後に会っておくべきだわ。後悔しないようにね。」

言われて初めて気がつく。自分が泣きそうな顔になっていることに。

「甚爾。」

「分かった。」

「すまぬな。」

こうして甚爾は、一度自分の生家に戻る事に決めた。

次の日、車に揺られながら窓の外を眺める。隣には局。そしてこの車を運転しているのは。

「東京も郊外に来ると意外とフツーね。」

「なんでテメエが運転してんだよ。」

そう松永ミサゴが運転していた。

「それは我が依頼したからだ。」

局が詳細を話す。

「我がミサゴに依頼したのだ。帰省の間の護衛役をな。」

「あの従者どもは。」

「いくら実家に戻るとは言え、九鬼より歴史は遙かに長く、暗い話も多い。故に連れてくる事は、最初から選択肢にはない。ミサゴならばその点で言えば、ボディガードとして守秘義務等の事はきっちりこなすと判断した。」

名家ならではの理由だった。確かに他家の従者を連れて来たら、何かを探ろうとしている、と勘違いされてもおかしくはない。九鬼は、九鬼帝が一代で築き上げた。故に歴史で言えば浅すぎる。比べて禪院家は約1000年以上続く。

13時間後―

「うわ〜立派な御屋敷。」

着いたのは純日本家屋のお屋敷であった。規模にして東京ドーム2つ分と言えば分かりやすいだろう。すると、門の前にズラツと人が並び出す。

「なになに!」

「お帰りなさいませ、局様、若様。」

黒く艶やかな黒髪。喪中の為、黒い着物を着ている。後ろに並んでいるのはこの家に使える者達だろう。ではこの女は？

「久しいな八咫。出迎えご苦労。」

「勿体なきお言葉」

局に頭を下げて言葉を紡ぐ。そして甚爾に向き直る。

「お帰りをお待ちしておりました、若様。」

「チツ」

「…」

「えつと〜」

「松永ミサゴ様ですね。ようこそ当家へ。局様より当家にいる間の護衛をなさると伺っております。」

事前に局が連絡を取っていたらしく、どうやらミサゴもそこまで警戒はされていないらしい。

「こちらへ、重国様がお待ちです。」
「うむ」

八咫に案内され着いた部屋に入る。

そこには八咫以外の禪院家に使えるものたちがいた。

誰もが甚爾を見て目を見開く。

「若！」

「若様！」

「おお！若様がお帰りになられた」

誰もが甚爾が戻つて来たことに驚愕している。するとこちらに近づく者がいた。

「若様、お久しぶりでございます。」

「夜蛾か」

「奥へ。護衛の方には申し訳ないが、ここで待つてもらおう。」
「初めからそのつもり。」

ミサゴはこの場に留まり、局と甚爾の2人で奥に進む。

襖を開け中に入るとそこには重国が眠るように横たわる。

「お爺様、お久しぶりでございます。局と甚爾が今帰りました。」

「じじい。」

「若様、実は「ええい！退かんか！」あの女！」

突然、外から喚き散らす声が聞こえてきた。すると襖が開き一人の女が入ってくる。その女は喪中だというのに、煌びやかな着物を身にまとい、おまけに化粧までしている。

「お待ちください、要様」

「黙れ八咫。私を誰と心得る。禪院家の時期当主の母であるぞ。」

「要様。ここは重国様が眠っておられるお部屋です。今は若様と局様が面会をなさっておいでです。しばらく待っていただききたい。」

「夜蛾。主もいつからこの私にそのような口を利けるほど偉くなったつもりだ？」

「夜蛾。よい下がれ。」

「局様。…はい。」

局に下がるように言われ、夜蛾は大人しく下がり甚爾の横に待機す

る。

それを見届け、局は入ってきた女に向き直る。

「お久しぶりでございます。継母上《ははうえ》。」

「ふん。あのわけも分からぬ男に惚れ、家を出た売女がよう帰ってこれたのう。」

「…継母上も、お変わりないようでは何よりでございます。」

「白々しい。この家の金でも目当てで帰ってきたか？それとも地下蔵に眠る、気を宿した武器を取りにでも？噂には聞いておるぞ？九鬼は、クローンの実験に手を出しておると。ならば、あのような武器も研究したかろうて。どうだ？当たってあるだろう。」

ニヤニヤと、下劣な笑みを浮かべ喋る女。八咫も夜蛾も怒りを必死に抑える。局と甚爾が、怒りを露わにしていけないのに、自分達がことを起こすわけには行かない。

「いいえ。今回は、お爺様を最後まで見届ける為に、弟と共に帰ってきた次第でございます。」

その言葉を聞き、女は甚爾の方を向くと鼻を摘む。

「おお。通りで獣臭がすると思つたら、ここに猿があるではないか。これはお前のペットか？」

「!!」

その言葉に皆が驚愕し、我慢して顔色も変えず耐えていた八咫が声を上げる。

「要様…その御言葉は無礼に当たります。そしてこの場合は、重国様がお休みになつておられるのです。そのような格好で、本来ならば立ち入ることなど許されません。即刻が退室を！」

「貴様！よくも私にそのような口を聞いたな。許さぬ！」

その時

「どうしたの？ママ」

突如として甚時より3、4歳程年上であろう男が入って来た。この男も要と同様に、煌びやかな格好をしてピアスマまで付けている。

「綺羅か。どうかしたかえ？」

「部屋の前を通りかかったら、ママの怒鳴り声がしたからさ、何かと

思つてね。なるほどその猿のせいだね。よくも人様の家に入つてこれたな。猿が！」

バファ

そう言つて男は、甚爾にその場にあつた、線香の灰をぶちまけた！
「これで多少はマシ……にはなんないねえ。クサツ。さあママ。こんな部屋さつさと出て、僕の当主の継承の準備をしなくちゃ！」

「そうね！さあ行きましょう！」

そう言つて親子は去つていく。去つた後にすぐさま皆が甚爾に駆け寄る。

「若様!!」

「甚爾！」

「とう君」

局が甚爾についた灰を払い落とす。

「ミサゴ。アンタいつからいたんだ？」

「あの女が入つてきた時からよ。文句言つてやりたかつたけど我慢してたの！」

どうやら要が来た時かららしく、誰もが我慢しているのと部外者の自分が、言葉を挟むのは筋違いだと思ひ、必死に我慢していたのだつた。

「なんなのアイツらは？親子だつてのはわかつたけど。」

「禪院要とその実の息子、禪院綺羅。私達の継母であり、義兄弟です。」

禪院要。2人の父、先代当主の禪院重国の息子である、禪院健の再婚相手である。元々は分家に嫁いで来た身であつたが、突如その夫が死亡。実家は、禪院家に貸しを作りたいがため、他の分家と結託し、当主の直系の健と再婚することになる。その時に、分家に来た時より連れていた、綺羅も家に入る事となる。だがその年、甚爾の母と健は甚爾を産んで、すぐに流行り病でなくなつた。このことで問題になつたのが、次期当主問題。この時にはすでに、揚羽を生み、家を出て英雄を身ごもつていた局はおらず、甚爾はまだ赤子。加えての天与呪縛により今日が一切ない。要はそれらを理由に、万が一にも甚爾に当主の座が渡らぬよう、裏工作に動き出す。分家の当主たちに、綺羅を当主

「もしや、禪院甚爾様ですか！」

「今は伏黒だ。誰だおまえ？」

「覚えておられませんか。うちの事。」

女は喪服であるにも関わらず着こなし、それに加え、艶やかで長い髪。そしてデカイ。推定Gカップはありそうな胸。腰はくびれており、尻もいい。まさにボンキュッボン。といったスタイル。こんな女に出会っていたのなら、忘れるはずもないのだが、と思っていると突然、女が笑い出す。

「アツハハハ」

「あ？」

「申し訳ありません。他の方々はこの体をチラ見するか、舐め回すように見るので。正直、真正面からジッとガン見されるとは思いませんでした。笑ってしまった無礼をお許してください。」

「??？」

本当に何だこの女は？会った記憶もない。要からの刺客かと思い少し警戒すると、それを察したのか自身の正体をさらした。

「どうやら。本当にうちの事は覚えておられないご様子。では改めて自己紹介をさせてもらいます。今度はちゃんと覚えてくださいね。旦那様。」

禪院家

二十八家が一つ

香本家が長女

香本 涼音《こうもとすずね》

これからよろしく願いますね。旦那様♡

託された者・仲直り

「は？許嫁？お前が？俺の？冗談だろ？」

「いいえ。紛れもない事実ですよ。」

カポーン　カポーン　カポーン

どこからともなく、どこかで聞いたことがあるようなエコー音が聞こえた気がした。

風呂に浸かりながら話す二人。風呂場もなかなか広い。だといふのに二人の距離はゼロ。というよりも涼音が一方的に、甚爾にくつついていた。

「そんな話、聞いた覚えはねえ。」

「それは旦那様が出ていかれた後ですもの、知らぬのは当たり前。ですが以前私達はお会いしているのですよ。10年前の新年の集まりの時に。」

10年前。その時より既に、要からの虐待を受けていた。1月の雪の降る夜に、当主からその子や孫に至るまで、中で豪華な料理に舌鼓を打ち、酒を飲み楽しんでいた。だが、そこに甚時の姿はない。要が集まりに出ぬよう指示したからだ。集まりが行われている部屋には近づくなと、厳命され甚爾は、1人指示された部屋からは遠い庭で、1人鍛錬をしていた。そこに偶々通りかかったのが涼音である。

「あの時は驚きました。ウチらは要様から、旦那様は、体調を崩されて寝込んでいる。そう聞かされとったものですから。」

「…」

すぐに声をかけようとした涼音。しかし、それをしてはいけないと、即座に影に隠れる。美しいのだ。流れるような足捌き。正拳、蹴り、一つ一つの動作があまりにも滑らかで目が離せなかった。自身も鍛錬をしているからこそわかる。この歳でここまでの武。果たして分家当主で、今の甚爾に勝てるのはなんにんだらうか。しばらく見とれていると宙に何か飛び散っているのがわかった。答えは足元を見ればわかった。血だ。冬空の中、素手と素足で雪が積もる庭で、鍛錬をしていれば霜焼けが起き、最悪血も出る。これは隠れている場合

ではない。即座に飛び出し声をかけようとするが、またしても躊躇する。甚爾が、一つの構えのまま動かなくなつた。そして、空中の何かを掴むような仕草をして、握り拳を放つ。

【黒閃】

屋敷全体に歪に歪んだ気が迸る。涼音は固まつたまま動けない。すぐに足音が聞こえてくる。きっと先程の気を頼りに大人達が向かっているのだろう。そう考えてると甚爾がいつの間にか隣にいた。「おい、俺がいた事は言うんじゃないぞ。喋ったら殺す。」

そう言つてさつていく後ろ姿に涼音は。

「待つて、私は分家の一つ香本家の長女、涼音！私、絶対に君のお嫁さんになるから！」

そう言い切つたタイミングで甚爾は曲がり角の陰に消えた。

「あの後は大変でした。大人達が来て何があつたの大騒ぎ。ですが重国様は、何となく察しておられるようでした。そして一月後、旦那様がこの家を出て、私は香本家現当主のお婆様と一緒に、重国様に呼ばれそこで旦那様の許嫁と言う名誉を拝命したのです。」

涼音が向かい合う形で、甚爾に跨つて枝垂れかかり、首の後ろに手を回す。

「要様は三年前に二十八家のうち十八家の当主を変えました。それも次期当主候補だつた者ではなく、候補になり損ねた者。達ばかりです。」

「大方、当主にしてやる代わりに、自分に着けてことだろ。あほらし。」

「はい。それで意見を多数決で決める時など、必ず要様の意見が通り、やりたい放題です。」

大事な決議の案など、家の方針を決める場においても要と綺羅は、自分達の陣営に票を集めさせていた。

「そして重国様にも、禪院家次期当主は綺羅にするよう言ってきたのです。分家当主たちにも推薦状を書かせる始末。」

その状況を容易に想像できてしまい、甚爾は思わず鼻で笑つてし

まった。正面にいる涼音には、当然見られてしまう。

「ハッ。」

「何かおかしかったですか？」

「容易にその場面を想像出来ちまったから、思わず笑っちまった。」

「なるほど。なかなか悪いお顔をしておりましたよ。とても好ましかったですがね。」

そう言って涼音が静かに顔を近づける。

「んっ……ペろ」

涼音は甚爾の口元の傷跡を舐める。

「おい。」

「フフツ。難しいお話はここまで。せつかく二人きりなので、楽しみませんと。」

「…」

ザバアアア。甚爾は黙って涼音を降ろし、体を洗いに向かう。

「あらあら。」

その後ろに涼音も続く。

「お背中流しましょうか？」

「…ああ。」

甚爾が椅子に座り、涼音はその後ろに椅子を持って来て座る。甚爾の引き締まった肉体に、思わず感嘆の溜息が漏れ、目をとろんとさせる涼音。

「ハっ……んっ……んちゅ。」

そして思わず背中にキスを落とす。

「おい。洗わねえのならどけ。」

「あらあら。ちゃんと洗いますよ。少しくらい、いいではないですか。うち達は夫婦になるのですから。」

パンツ!!!

突然、風呂場の入口が開く。

「「いいわけあるか！」」

「あ？」

「あらあら。」

局、ミサゴ、八咫、先ほどまで争っていた三人がいた。

「お初にお目にかかります局様。私は……」

「八咫から聞いておる。必要はない。」

「そうですか。」

「しかし、夫婦にもなっていないうちから何をしておるか！」

「そうよ！とう君はお姉さんと入るの！」

「いいえ。お三方はどうぞおあがりください。若様のお背中私が
！」

「許嫁であるうちが当然かと！」

三すくみならぬ四すくみ。

「勝手にやってろ。」

「「え？」」

四人が威嚇しあっている間に、洗い終わってしまった甚爾は、さつ
そうと風呂から上がっていった。

風呂から上がると、銀が待つており甚爾が止まる部屋へと案内され
た。甚爾が昔使っていた部屋は、要の指示で今は別の部屋になってい
ると聞かされた。通された部屋は、高級旅館顔負けの部屋で、一人で
止まるには勿体ないほどだった。さつそく中に入って布団に仰向け
になる。

些か今日はかなり疲れていた甚爾は、すぐに睡魔が襲う。

「(ねむ。この家で寝んのも10年ぶりか。……じじい。)」

|||||

「(ここは？ 禪院家か？ 俺はさつきまで部屋で横に、てかなんで仕事着
着てんだ?)」

先程まで夜であったのに今は昼頃と言った時間帯だろう。そう当
たりをつけた。眠っていた部屋とは別の部屋を出る。しばらく廊下

を歩くと、何やら忙しそうに準備をしている侍女がいた。

「おい。」

声をかけるが無視され素通りされる。要の命令で、無視されるのは慣れたものだが、少し違和感があった。

「今の女。僅かでも俺に気が付いた素振りもなかった。多少なりとも視界に入れば、目線なんか動くはずだが。まるで見えていないかのように。」

そこに夜蛾が通りかかる。だが姿がほんの少し違う。頭は坊主でトレードマークのグラサンをかけていない。これで甚爾は確信する。

「あつ、夢かこれ。」

桜が咲いているあたり、季節は春。侍女達が忙しくしているあたり、春の茶会の準備だろう。

「俺には関係ないことだったから、忘れてたな。」

しばらくウロウロと廊下を歩く。すると何かを振る音が聞こえてきた。その庭には、幼いころの甚爾がいた。

まさか、幼いころの自分を見つけるとは思っておらず、その場で固まってしまう。

※ここから幼いころの甚爾をとうじにいたします。

しばらく様子を見てみると、とうじは先程まで刀を振っていたが、今度は鉞をもって振り始めた。それを見てこんなこともやっていたな、と懐かしい気持ちになる。

どこからか笑い声が聞こえてくる。きっと春の茶会が始まったのだろう。本当なら茶会に出て、分家の子供たちと遊んだりする時期。それが離れた庭で一人武器を振る修行。手の豆が破れて血が出ていようと、構わず振るう。せめて、自分だけは、見届けようと過去の自分を見つめ続ける甚爾。だが、自分以外にもとおじを見つめる視線があることに気が付いた。

「(八咫に夜蛾、それにあいつら。)」

当時はまだ、高校生だった八咫。成人はしていたがスキンヘッドでグラサンをかけていない夜蛾。そして、他のいつも甚爾を思っていた者達。八咫など、とうじが鉞を落としその手から血が流れてい

るのを見て、泣きそうな顔で駆け寄ろうとするが、夜蛾に止められている。止める夜蛾の顔も、唇を噛み悔しそうな、泣きそうな顔を必死にこらえている。

「あいつら…。」

知らなかった。当時は全てが自分を否定し、のけ者にされていると思っていた。あいつらも重国の命令で自分と話しているとはばかり思っていた。だけどそれは大きな間違いだった。八咫達は、いつも甚爾を思ってくれていた。影ながら見守ってくれていた。

「馬鹿だろ。あいつら。ハハツ…お前らホントばがだな。」

声が震える。これが夢でよかった。誰にも見られることはない。最後に涙を流したのはいつだったか。手で目元を覆う。

「とうじ。こんなところで何してる。」

すると突然、野太く力強い声がとうじを呼ぶ。

「じじい。」

とおじと甚爾の声が重なる。そこには、茶会に出ているはずの重国が立っていた。

「おじいちゃんと呼ばんかー！ー！ー！！」

ドカツ！とおじの頭にゲンコツが落とされる。それをとおじは鉈の側面で受ける。

「ぐうっ！」

「ほう。よく受けた！これはどうだ。」

すると重国は刀を手にとり振りぬいた。

「禪院家奥義が一つ【神無】」

その衝撃は受け止めた鉈からではなく、とうじの体から走る。神無は武器を通して相手に直接衝撃を与える技であり。実質、防御不可能の技であった。

「ちよいとやり過ぎた。とうじ大丈夫か？」

「いてえ。」

「ほれ、休憩だ。こっち来い。」

そう言われて重国の傍に行く。

「もう昼時だ。腹減ってるだろ？飯食うぞ。」

そう言つて近くの部屋へ入る。そこには昼食が用意されており、二人は向かい合つて食事を始めた。

「なんでモツ鍋？」

「わしが好きだから。」

「（そーいやじじいも、好きだったなあ。モツ鍋。」

夢の中で思い出すことになるうとは、思わなかつた甚爾。しばらくして二人は食べ終わり、まったりと話をしていた。

「なんで茶会に出てないんだよ。じじい。」

「おじいちゃんと呼べ。あんな堅苦しい会にいちいち参加なんぞしてられるか。さぼりださぼり。」

などと言つてはいるが、当主である重国が出ないのは大問題。だといふのに誰も探しに來ないのは不自然であつた。それもそのはず、重国は会には出席したが、すぐに退席したのだ。要が今回も、とうじが休みだと色々理由をつけて述べたあたりで、流石におかしいと感じていた。一度や二度ならばいざ知らず。毎回ともなると不自然だ。理由に関しても嘘だということ、八咫や銀。そして分家の信頼のける者達から聞いており、今回も要の考えだと分かり、会を抜けたのだ。これには要は驚いていたが知つたことではない。

「（奴を禪院家に入れてしまったことは、わしの不覚。奴は禪院家を名乗るのにふさわしくはない。それにここ最近、分家の小僧どもを使つて妙な動きを見せておる。警戒は必要か。）」

「おい。じじい。」

とうじに呼ばれていることに気が付き、思考が現実に戻ってくる。

「俺は、いないほうがいいのか？」

「なに？」

「あの女も綺羅も侍女や分家の奴ら、みんな俺を嫌う。禪院の奥義を使えない屑だと。俺には気がない。それで、気を使って放つ禪院家の奥義は使えない。さっきの、神無だつて使えない。気は見えても、気は扱えない。出来損ないの猿だつて。」

「…」

とうじが吐いた弱音に、黙つて耳を傾ける。

「奥義を継承できないお前は禪院家の恥だと。あの女に言われた。確かに。それに比べたら綺羅のほうがいいだろうさ。気もそこそこ持っていて、武術のセンスもある。俺なんいなくたっていいんじゃないか。」

「そういや、昔そんなこと思ってたっけな。なんで吹っ切れたんだっけ?」

甚爾は昔に思っていた本音を思い出す。

「とうじ。」

重国が言葉を挟む。

「それはお前の本心か?お前は健によく似ておる。顔も言動も性格も。健は馬鹿にされることだけは我慢ならんやつでな、学生の頃だった。自分を笑った相手の家族全員を病院送りにしよった。笑えるだろ?そんな健の息子であるお前が、コケにされて悔しくないのか。やり返したくないのか。」

「ぶっ壊したい!何もかもすべて!」

「ならばとおじ。お前はまずいついかなる時でも、己を保たなければならぬ。そして非情にならなければいかん。お前は誰に事も尊んではないけない。他人も自分すらも。」

「どういうこと?」

「お前は優しい奴だ。そんなお前がいざ戦いにおいて非情慣れきれはしない。奴らを壊したいと思うなら、その時まで非情に徹するのだ。よいな。」

まだ分らないといった顔のとうじを重国は優しくなでる。

「とうじ。天与呪縛は、確かにお前から気を奪った。しかし代わりに誰にも負けぬ肉体と五感を手に入れた。それはお前にしかない才だ。世の中には音を色で感じる色聴というものがある。お前の気の感じ方はそれに似ている。一切持ちえないがゆえに、身に付いた感覚だろう。それを知覚できているならば、奥義とて使えるかもしれない。」

その言葉にとおじは目を見開く。

「いいかとうじ!わしらはしよせん気を使い己を強化しているにすぎん!その延長戦での技だ。だがお前は強化をしたわしらの肉体に、素

で戦える肉体を持っているのだ。猿だ？ 屑だ？ 言わせたいものには言わせておけ。己を磨き部を磨き。狡猾に、そして冷酷に、獲物を狩るその瞬間を待つのだ。そして狩る時こそ思い知らせてやれ!!!」

己に狩られる貴様らは、猿以下の屑であることを！

「相手をあざ笑え！ 貴様らは狩られるだけの獲物だと刻み付けてやるのだ！ とうじ！」

「（ああ、そうだ。そうだったな。ありがとよ、じじい。忘れてた。あんたが教えてくれたこと。けど、もう二度と忘れねえ。俺は常に狩る側に立ち続ける！」

「世話のかかる孫だな。」

振り向くとそこには重国が立っている。とうじと喋っている重国とは別だった。

「なんだ、まだ成仏してなかったのか。じじい。」

「おじいちゃんと呼ばんか！ 全く相変わらずか甚爾。局も変わらないように何よりだ。」

「アイツに会ったのかよ。」

「いや。一眼見てきたただけだ。そういうばお前、曾孫と言うか、姪っ子には会ったのか？」

「アイツのガキか？ 会ったことねえよ。」

「そうか。別嬪だったぞ。お前の許嫁に欲しいくらいだ。」

「あつ！ すごいや勝手に許嫁なんざ決めやがって！」

「なんだ？ 不満か？ 涼音ちゃん美人だったろ？」

「もう俺は家を出た身だつてのに、なんで許嫁なんか決めたんだ。」

「お前は戻ってくる。」

「何で言い切れる。」

「馬鹿タレが。もう一度言わなねえと分からないか？」

狩って己が最強だと知らしめろ！

2人して太々しい笑みを浮かべる。そして重国は背を向けて歩き出す。

「行くのか。」

「ああ、時間だ。つとそうだ、甚爾。おめえ、奥義は何を習得した？」

「あ？黒閃。そこから大黒天に派生させたりもしたけど、それだけだ。なんだよその惚けた面。鼻垂れてんぞ。」

「おっと、いかんいかん。そうか、よりによってあの黒閃か。ふふふ。ハハハハハハッ！」

いきなり笑い出す重国に、甚爾は若干引く。

「甚爾。お前にわしの刀【幻爪】をやる。あと、地下蔵の武器も全部お前の物だ。」

そう言つて再び歩き出す重国。

「本当は、銀の奴に渡しといたんだがいいかのう。」

「は？」

「何でもないわい。後は任せたぞ。」

八十代目禪院家当主 禪院甚爾

「ありがとよ。じいちゃん」

「やつと呼んでくれたか。可愛いバカ孫め。」

|||||

「んう…寝ちまつてたか。」

壁にかけられた時計は夜中の3時を指している。

「…めんどくせえが、やってやるか。」

夢の中で重国との最後の言葉を交わし、甚爾のその眼光は、全てを狩り尽くす獣の眼をしていた。

「行くか」

甚爾は立ち上がり、部屋を出た。その足は迷いなく進む。

「若様！」

「八咫が何してんだ。こんな夜中に。」

「それはこちらのセリフです若様。」

「お前が言ったら考えてやる。」

「えっ、え」と

八咫は局とミサゴそして涼音を、甚爾と一夜を共にはさせまいと、4人で互いに見張りながら寝ていたのだが、禪院家の家臣の立場を利用し仕事が残っていると行って抜け出してきたのだった。

「言えない！若様のお部屋に行こうとしていただなんて！そしてあわよくば、添い寝をしようとしていたなんて。絶対に言えない。」

この女、家臣の立場や仕事もへったくれもなく、ただの私利私欲である。

「まあいい。ついて来い。」

そう言つて、甚爾は再び廊下を進む。

「は、はいー！」

八咫は慌ててその後ろをついていく。だがやがて廊下を進むにつれ、甚爾がどこに向かっているのかを、察した八咫は気を引き締め直す。ついに甚爾が足を止めた。そこは重国の部屋だった。2人は中に入る。すると、そこには夜蛾がいた。恐らく通夜の時間に着けない者達の為に、こうして番をしていたのだろう。

「若様。」

「夜蛾、ご苦労さん。誰か来たか？」

「はい。鶴海姉妹が先程。それ以外はどなたも。」

「そうか。…夜蛾、お前も来い。」

「はい。」

2人を引き連れて、甚爾は昼間にも入った重国の部屋に入る。重国が変わらず眠っている。その横に甚爾が座り、その後ろに2人が控えて座る。

座ったままどれほど時間が経っただろうか？空は太陽が登り始め、微かに青く染まり始めていた。ここでようやく甚爾が口を開く。

「夜蛾。」

「はい。若様。」

「じじいはお前に預けたって言っていたが、何を預かった？」

「何故それを！」

「夢の中でよ、じじいと会った。最後まで厳しいのか甘いのか、分かんねえじいちゃんだったよ。ククツ。」

「！」

そう言つて嬉しそうに笑う甚爾。その姿を見て、夜蛾は涙を流す。幼い頃より見てきた。一度でも呼んだことのない、しかし確かに今言葉にした。じいちゃんと。それだけで、重国が最後に甚爾に会いに行つたのだと理解出来た。

「ならば！ならば若様！」

夜蛾は確信した。遂に甚爾が決断したのだと。ならば自分はどう行くまで。そして甚爾の障害となるものは全て自分が排除する！

「じいちゃん。約束通り朧霞はもらつてくぜ。あとは任せろ。」

八咫も理解が追いつき、涙を流す。涙を流す家臣2人に向き直り甚爾はいつもの飄々とした顔。だが眼だけは獣を宿し宣言する。

「禪院家当主には俺がなる。邪魔する奴は狩る！」

このことはすぐさま伝えられた。皆驚き、歓喜するものそして恐怖し焦り事態を重く見て穏便に済むように準備を始める者。それぞれの動きを見せていた。そしてこの親子も。

「ふざけるな！あの猿がこの禪院家当主の当主になる？当主になるのは綺羅、貴方よ。」

「分かっているよママ。その為に分家当主も僕についてきてくれる、若手に変えたんじゃないか！」

「ええ、そうだったわね。」

「それでもし戦うことになつても僕が勝つよ！」

「当然よ。なんたつて私の子ですもの。」

またとある分家では。

「考え直せ！要様に何を吹き込まれたのかは知らん！だがこのままではお前だけでなく妻と子も死ぬことになるぞ！」

「父さん何を言っているんだ。そんなわけ無いだろう。第一に、10年も家を出ていた甚爾様に、当主は務まらない。それにだ、甚爾様は

氣を一切持つておられない。これだけでも、当主になられる資格はな
いんだよ？もし当主を決める、あの戦いが起ころうとも勝つのは綺羅
様さ。この家の当主は、僕が要様から仰せつかったんだ。もう父さん
が口を出す問題じゃない。」

一切聞く耳を持たない息子に、男の心はもはや諦めがついた。

「そうか。せめて苦しまぬように願っておる。」

そう言つて男は出て行く。

またまた、ある分家の当主姉妹は。

「やっぱり。貴方でなければね、とうじ」

「うん。やっと心を決めてくれたか。遅いのよ全く。けど、よかつた。」

「そうね。早速挨拶に行きましようか。」

そして時間は甚爾達に戻る。

「本当に良いのですね？甚爾。」

「逆に俺が継がなかったら誰が継ぐんだ？」

「あの禪院家の当主にとう君がね。」

「うちは元から旦那様についてゆきます。」

「ここでなぜか甚爾はしらけ顔。」

「涼音。お前そろそろそのしゃべり方止めろ。普通でいい。様も付けるな気色悪い。そもそもお前、俺より一つ年上だろう。敬語なんざ使
うな。」

「じゃあ遠慮なく。流石はうちの旦那。妻の事よう分かっとなね。」

敬語がなくなり一気にフランクになった涼音。切り替えの良さに
楽でいいと思う甚爾。そしてひと段落付き局に向き直る。

「悪かったな。」

甚爾はそう言つて局に、頭を下げる。

「今まで小せえガキみたいに八つ当たりしてた。誰も俺の事なんざ、
見てくれないと思つてた。けど違った。じいちゃんがいた。八咫に

銀。家臣達がいた。それで姉貴、あんたもだ。」

謝罪の言葉に局は段々、目に涙が溜まる。

「本当はわかってたはずなんだ。けど、一度決めたものを否定するのが怖くて、悔しくて、意地になってた。だから……！」

言い終わる前に、頭を優しく抱きしめられる。確認するまでもない。この匂い。この暖かき。この優しさ。その全てで包み込んでくれるのは、母でなければもう血の繋がった家族は姉しくない。

「ごめん。……ごめんなさい甚爾。あなたが辛い時に、一緒にいてあげられなかった、愚かな姉を許して欲しい。本当は、こうやって抱きしめてあげたかった。側で見守ってあげたかった。お父様とお母様亡き後、お爺様と我しか血の繋がりがなかったというのに、今の立場を言い訳に会いに来ることすらもしなかった。そんな我を許してくれるのか？ 其方の姉だと胸を張って良いのか？」

涙ながらに局も、今まで胸の奥に閉まっていた思いを吐き出す。

その局の問いに甚爾は黙ったまま局の着物の袖を掴む。それが答えだった。局の涙腺は崩壊し大粒の涙をこぼす。長い長い姉弟の意地のぶつかり合いが、今終わったのだった。

|||||

「こら！とうじ！一人で裏の竹林に行つてはいけないと言つたでしょう。行く時は、お爺様か我にちゃんと行って、八咫か夜蛾をお供に付けなさい！さあ、こんな時はなんで言うのですか？」

膝を折り、自分の息子と同一年の弟と目を合わせて問う。

「……ごめん……なさい。」

「はい。良くできました。」

ちゃんと謝れた弟を褒める。

「みんな心配しています。帰りましょう。帰ったらオヤツの大福があ

りますよ。」

そう言つて弟に手を伸ばす。弟は、手ではなく姉の着物の袖を握る。毎回の事だった。ごめんなさいをしたら袖を握る。そんな不器用な弟の頭を撫でながら、歩幅を合わせて帰路に着くのだった。その二人の背は母と子の様であり、しかし姉弟だと確かに分かる、そんな後ろ姿だった。

14対1

甚爾が当主になる事を決意した翌日、甚爾の下に面会に訪れた者たちがいいた。

「若様。」

「ん？どうした八咫。」

「はい。鶴海家当主、鶴海 翔鶴様とその妹君、鶴海 瑞鶴様が若様にお目道理を願いたいと。」

「…いないって言つとけ。」

甚爾が八咫に居留守を使い、面会を断わるように指示を出した時、部屋の襖が勢いよく開け放たれた。

「そうは問屋が卸さないわよ！とうじ君！お姉ちゃんが会いに来ましたよ〜！」

「翔鶴ねえ！いきなり走らないでよ。みつともないでしょ〜！」

「あら、私は早くとうじ君に会いたかったんだもの。瑞鶴だつてそうでしょ？」

部屋に入ってきて早々、姉妹でじゃれ合う。めんどくさいのがまた増えた、心の中で甚爾はため息をつく。

「翔鶴様、瑞鶴様。若様の前です。そのくらいにしてくださいませしう。」

八咫が二人を止めに入る。

「で〜？何しに来たんだ？じいちゃんにはもう会ったんだろ？明日は葬式、そこで火葬。それまであてがわれた部屋にでもいろよ。」

「そんなつれないこと言わないでよ。そういえばもう涼音ちゃんには会ったの？」

「風呂で襲われた。」

「襲つてません、愛の営みです。拒まれましたが。」

「涼音様！おられたのですか！」

「瑞鶴が来たタイミングで、廊下で聞き耳立ててたんだらう。」

甚爾の耳は、かすかな足音をも拾い、涼音が聞き耳を立てていることすら見抜いていた。

「明日から忙しくなりそうでしたので、本日は挨拶に。甚爾様この度は、禪院家当主になれる覚悟を決められたそうで何よりでございます。鶴海家当主である私、翔鶴と妹の瑞鶴。挨拶とお願いに参った次第でございます。」

「翔鶴さん。挨拶は分かりますけど、お願いとは？旦那様に何を頼むのですか？」

涼音が、翔鶴に質問をする。甚爾が当主になる覚悟を決めたとはいえ、まだ確定してはおらず、これから葬儀も控えているというのに、何を願いに来たのか見当がつかなかった。

「ハッ。食えね女。」

「私のような女はお嫌いでしょうか。」

「まさかお願いってそういう！」

「まあいいぜ。好きにしるよ。俺にはどうでもいい話だ。」

「ありがとうございます。とうじ君。さあ瑞鶴。これ以上はお邪魔になりそうだから、お部屋に戻りましょう。」

「分かったよ翔鶴ねえ。とうじ…また…ね。」

そう言つて翔鶴は瑞鶴を連れて部屋を出て行った。去り際に、瑞鶴が見せた反応が不覚にも可愛いと思つてしまった。涼音は頬を膨らませる。

「何むくれてんだ？」

「さっそく愛人を二人も作るなんて、新しい当主は何とも逞しいですね。」

「は？何の話だ？」

「今の話！お願いつてそういうことでしょう！もう、翔鶴さんも瑞鶴も前から旦那さんの事が好きなのは知つとったけど、うちの前で言う？まあ知らん仲でもないから、旦那さんが良いならうちは構わないけど。」

「…」

甚爾と八咫は揃つて何言つてんだこいつ。という目で涼音を見る。

「涼音様…はあ。」

「八咫さん。なんで溜息？」

「そりやお前にあきれてるからだよ。」

「ええ！あきれられる理由がわからんのやけど！」

「翔鶴と瑞鶴が言うお願いってのは、お前が思ってるもんじゃねえ。」
「じゃあなに？」

「あいつらは俺が当主になった暁には、自分達が最初に俺の側に着いたって言う証言が欲しいのさ。」

「はい？」

葬儀後に行われるであろう、新しい当主を決める中で甚爾が当主なりそこで鶴海家が、甚爾の陣営に最初に味方に付いたと宣言できれば、今後の分家の中で発言権は高くなり同時に重鎮の中でも一番高い位置に籍を置くことが出来る。翔鶴と瑞鶴がお願いしに来た内容は、まさにそれだった。故にいち早く甚爾に挨拶をしに来たのだった。

「仮に俺が当主になれなかった場合、翔鶴と瑞鶴もあの女に前当主と代わるように言われてなったんだろ？だからもし綺羅が当主になっても、それなりの地位が約束されてる。どっちに転んでもあいつらには得しかねえのさ。だから言っただろ？食べねえ女だって。」

甚爾の言葉に涼音は開いた口が塞がらない。

「そもそも、あいつが当主候補から外れてたのだって、そう仕向けてたからだしな。」

「仕向けていた？」

「あのシスコン、妹が当主になるように裏でずっと動いてたんだよ。次の当主になるはずだった、あいつらの叔父。死因覚えてるか？」

「えつと確か…奥様との仲のもつれで無理心中。まさか！」

「そのまさか。鶴海家に代々受け継がれてきた技は、音に気に乗せ操る技術。それを使って、嫁の方を操って無理心中に見せかけて殺したのさ。」

「犯行現場が家だったからな。鶴海の屋敷ならいざ知らず。この家ならどこにいようが血の匂いがしたら気が付く。それに音も聞こえてたしな。まあ俺の場合、気がないから逆に耐性を得ていたおかげで操られなくて済んだが。」

過去に起きた事件の真相を、まさかこのような形で知ることになる

うとは、誰も思いもしなかった。ただ一人、甚爾だけがうつすらと笑みを浮かべていた。

お経が読まれる中、喪服に身を包んだ分家の者達や家臣達。そして国の重要人物達も葬儀に出席していた。1000年の歴史を持つ禪院家は、政界とも繋がりが深く、分家から嫁を出すことも多々あったからだ。甚爾も慣れない黒いスーツにネクタイをして式に参加している。しかし、今座っている席は親族ではなく、参列者側の席。こうなるだろうとは予測はできていた。若手の分家当主達は疑問にも抱かない。だが、重国の代より支えてきた当主達は違う。この場において死人が出てもおかしくはない。気が気ではなかった。冷や汗が止まらない。

「（あからさまに俺だけを標的にしてやがる。姉貴が親族側の席にいるのがいい例だ。どうせ今は伏黒だからとか言つてこの先にしたんだろう。葬儀の事なんざ初めからどうでも良いんだろう。葬儀が終わった後の当主を決める会議。）」

じわあ。まるで、吸収し切れなかった水のように滲み出る殺気。これに耐えられるのは、果たしてこの場において何人だろう。威嚇でも威圧の意味も持たない、ただ純粹な殺気。過去に一瞬殺気を放つだけで、集団ショック死をさせた男の殺気は、例え武の道を歩む者であったとしても、毒のように蝕み命を奪う。

バタンツ！

「おい！子供が倒れたぞ！」

「妻が！おい早く医者を！」

「お婆様！しっかり！」

老若男女問わず倒れ出す。

「急いで医務室へ運べ！八咫お前は医者の手配だ！」

「はいー！」

頼れる男、夜蛾が指揮を取り倒れた者達の救護にあたる。しばらくして、倒れた者達を運び終え葬儀は再開された。なぜいきなり倒れる

者が出たのか、疑問に思う者達が多かった。中には先代の呪いなどと言い出す罰当たりもいた。そんな中、甚爾の隣に空いた席に座った者が。

「ちよつと甚爾。この場で殺し合いでもするつもり？」

「瑞鶴。」

「あの殺気は故意？それとも無自覚？多分後者だろうけど。それは葬儀が終わるまで我慢して。じゃないと小さい子まで死んじゃう。」

そう言いながら手を握ってくる。そして気がつく。自身の拳を堅く血が流れるほど握りしめている事に。それに気がつき力を抜く。瑞鶴は、持っていたハンカチで甚爾の血を拭う。

「あんたが考えてる事はなんとなく分かる。私も正直、要様の事は嫌い。やり方も間違ってる。このままじゃ、禪院家千年の歴史が終わっちゃう。甚爾、やっぱりアンタが当主になるべきだよ。これは損得抜ききの私個人の本心。だから私も協力する。」

瑞鶴の目は真っ直ぐだ。ただ純粹な思った事を言っている。それが分かったからこそ。

「なら、さっそく一つ頼めるか？」

葬儀が終わり深夜。要と綺羅。そして若手当主が集まり会議を行っていた。

「明日の火葬が終わり次第、ここにいる綺羅の正式な当主継承の宣言をする。無論、先代より使える者達の意見も出るであろうが、最後は多数決。数はこちらが勝る。皆頼むぞ。」

「「「ハッ」」」

最終的な打ち合わせだったのだろう。確認を最後に皆退出する。その中で一人部屋に残った。

「で？奴等の動きはどうだ？」

「はい。甚爾殿は未だ動きも見せておりません。そして一つお耳に入れておきたい事が。」

「なんじゃ。」

「鶴海家当主をあまり信用しない方がよろしいかと。」

「裏切りかい？」

「どちらに転んでも良いように、保険を打っている模様で。奴等とも裏で協力を結んでいます。」

「あの小娘！当主にしてやった恩を仇で返すか！」

「ママ落ち着いて。大丈夫。1人減っても数はまだこちらが上なんだから。」

「そうじゃな。そうであつたな。取り乱した。すまぬ。」

「いかが致しましょうか？」

「もし奴等が邪魔をしてくるとすれば、あの儀式を使うやもしれん。準備は進めておけ。その時は貴様があの猿を殺せ。よいな？」

香本家当主

香本 涼音

その頃、甚爾達の元に重国の代から支えてきた、分家当主達が来ていた。要の策で既に当主を辞めた者、現当主の者すべて。

「こんな夜中になんだ？爺婆どもが。年寄りにはさつきと寝ろよ。それが美人よこせ。」

「甚爾様、ふざけている場合ではございません。明日はいよいよ新当主を決めるのです。綺羅では禪院家に相応しくありません。それに聞き及んでおりますぞ。当主になると宣言をなされた。さすれば多数決ではこちらが不利。貴方様が取れる手段は一つ。」

「多血統血」

「左様。」

「あのおく多血統血ってなに？」

「ここで唯一部外者であるミサゴが質問をする。」

「申し訳ないが、いくら貴女が局様の護衛であろうと、これは禪院家の問題。この部屋から退出していただけますかな？」

至極もつともな意見。しかしそれに局が待ったをかける。

「では、我も退出しよう。嫁に行きもうこの家とは関係ないからな？」
その言葉に老人達は戸惑いを見せる。これでは埒があかない。仕

方なく甚爾がミサゴに説明する。

「多血統血つてのは…」

〔多血統血〕

当主を決めるにあたり、票が割れた際に用いられる解決策。互いを支持する分家を率いて戦う小規模合戦。

- ・互いに全戦力を投入し戦う。
- ・外部の協力者、または戦力投入は禁止。
- ・勝敗はどちらか一方が全滅するまでとする。

上記の三つを原則とし、互いが合意すれば成立となる。

「まあざつとこんな感じ。なんか質問ある?」

「そうねルールの2と3は分かるけど、ルール1これってどこまでが全戦力?」

「言ってる意味がわかんねえな」

「それって局さんみたく外に嫁いだ人も含まれるの?」

「いいや、親族であることには変わりはないが、外に嫁いだ時点で家の方針に対する発言権を失ってる。だから姉貴は戦力としてはみなされない。」

「もう一ついい?」

「なんだ。」

「つまり嫁いだり婿入りして、外に出てしまった時点で多血統血へ出る事は出来ないのよね?」

「だから何だ。」

「それってさ外に出る手段がない、つまりは分家に嫁いで来た人や、子供達なんかはどうなるの。」

ミサゴの発言に、皆息を殺し沈黙を保つ。しかしそれが明確な答えだった。

「全戦力って言うそういう事!??じゃあルール3の全滅ってまさか!」

気がついてしまった。嘘だと言って欲しい。だが予想するまでもなく非情だった。

「ああ、女も子供も関係ない。全滅するまで続く。文字通り、多くの血を流し流させ、一族を統一する血を決める。それが多血統血だ。」

今の現代において、こんな残酷な決め方があるだろうか？女も子供も病を患っていても、怪我をしていても、強制的に参加をさせられ戦わされる。どちらか一方が全滅するまで。

「…蠱毒。」

「ハハッ。確かに言われてみりや似てるな。」

「ここで一人の旧当主の男が発言する。」

「時間は幾ばくもございませぬ。さつそく作戦を練りましょう。」
「必要ない。」

しかし、甚爾はこれを却下する。この後に及んで何を言っているのか。そう思い甚爾を見る。そこには圧倒的捕食者が己を見ていた。目が語る。意見するな。ただ黙って大人しくしていると。

「作戦は明日伝えてやるよ。ハイ解散解散。」

皆何も言わずに部屋を追い出される。局とミサゴを同様だ。

「局様。甚爾様は何をお考えなのでしょう？」

その質問に、局はある確信を持って答える。

「あの子が何を考え、何を思い、当主になろうとしているかはわからぬ。」

局はここで言葉を区切り、再び重く険しい表情と声音で口を開く。

「だが、皆覚悟するのだ。禪院家千年の歴史上、類を見ないほどの惨劇と理不尽が起きるぞ。」

重国の火葬は慎ましく終わり墓に埋葬された。局をはじめ、家臣一同そして重国より支えてきた者達、皆涙を流す。

「さつさと戻るぞ。これから私の可愛い可愛い綺羅の当主になるお披露目会じゃ。」

そう言って本家に戻る要。それに続く綺羅に若い分家当主達。

「あの女！」

「八咫。やめろ。」

「夜蛾さん！しかし！」

「やめろ。」

夜蛾に言われ悔しそうに齒噛みする八咫。

「こんな思いをするのも、後少しだ。」

皆、覚悟を決めた表情だ。これから起こる戦に向け歩みを進めた。

―禪院家― 大広間

現在各分家当主と要、綺羅が集まり新当主を決める話し合いが行われていた。

「では、これより新たな当主を決める会議を始める。と言つても既に決まっているがな。ここにいる、綺羅を六十代目禪院家当主とする。賛成の者は挙手を。」

「お待ち下さい要殿。これから話し合い決めると言うのに、綺羅殿を既に決定しているとは些か強引では？」

一人の当主が発言する。

「然り。それにまだ香本家の当主が来ておられません。」

また一人重国より支えた当主が発言。

「そうじゃった。おい、入るが良い。」

「失礼致します。」

入ってきたのは涼音。その事に老当主達は驚き、要はニタリと笑う。

「言い忘れてあつたな。本日よりその涼音が香本家の当主になる。異論はないな？」

老当主達は、してやられたと齒噛みする。投票に移れば15対13で綺羅に決まってしまう。

「ではあらためて綺羅を当主に賛成の者は挙手を。」

そして手を挙げる。駄目だ。決まってしまった。あの馬鹿親子にこの家は食われる。顔を伏せ心のなかで重国に謝罪を始める者もいた。

「どういう事じゃ。」

突然、要が動揺を隠そうともせず声を上げる。

皆一同に要を見る。その要が見る視線を追うと、翔鶴がいた。

「どういう事だ鶴海殿？早う手を挙げい。」

「なぜでしょう？」

　楽しそうに笑いながら遠回しに拒否をする。

「小娘、よもや当主にしてやった恩を忘れたか！」

「私はお願ひしてもいないのに当主にさせられたので、恩を受けた気はさらさらございません。むしろ、ふぎけんなクソババアと思っております。」

　とてつもなく良い笑顔で言い切る翔鶴。逆に要は、茹で蛸の様に顔を真っ赤にし怒りを露わにする。

「やはり涼音より聞いていた通りか！」

「あら、やはり涼音さんは内通者だったんですね。甚爾殿の許嫁を賜っておきながら。」

「ええ。うちもとい、香本家は前々から要様側。許嫁の件は重国様に恩を売っていたから成立した話。けど最初から見抜かれてたのよね。あの時はびつくりしたわ。」

　――10年前――

「甚爾の許嫁にお前の孫娘をねえ。どう言うつもりだ？」

「いえ、何も他意はございません。ただ孫の願いを聞き入れたい、それだけでございます。それに涼音とは、歳も一つ違いですゆえ悪くないかと。」

「嬢ちゃんはどうなんだ？」

「はい。うちは必ず甚爾様の嫁になると、宣言致しました。」

「宣言ねえ。誰に対してからしらねえが。」

「！」

「まあ良いぜ。甚爾の許嫁として認めてやるよ。」

「ありがとうございます」「ただな」「はい？」

「我が儘小娘がそのまま大人になっただけの奴に、振り回されてるお前らじゃあアイツは到底無理だ。それとも逆か？まあ好きにしな。後は当人の問題。そのまま嫁になるもよし、暗殺するもよし、利用す

るもよし。アイツの試練にはちよつと足りないがいいだろう。精々、悔いの無いよう生きるこつた。」

回想終了

「その言葉にうちもお婆様も冷や汗が止まらなかつたわ。けどようやく今日という日を迎えた。」

その話を静かに聞いていた翔鶴。だが聞き終わると共に上座、要と綺羅を見る。正確にはその後ろにいる2人。

「だそうですよ。甚爾様。」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」

要と綺羅は身体ごと勢いよく振り返る。そこには甚爾と夜蛾。

「そんな事だろうとは思つたけど。お前さあ、俺を騙したかつたらもう少し演技、上手くなつた方がいいぜ？目が雄弁に語つてる。」

ヘラヘラと笑いながら涼音に言う。ここで控えていた夜蛾が前に出て、懐から何かを取り出した。

「ここにあるのは、重国様が亡くなる前に私にお預けになられたものです。今この場をお借りして、僭越ながらこの夜蛾が読ませて頂きます。皆様、どうか静聴願います。」

「七十九代目当主、禪院重国の名を持つて伏黒甚爾を八十代目当主とする。これにより伏黒の姓を返上し、新たに禪院に戻す事とする。」

「ふ、ふざけるでないわ！この猿を後釜に据えるだと！既に死んだ分際で！」

そう言い切る要。カナメの発言に怒りをあらわにする者、逆に賛同する者。だそれは一瞬にして静寂へと戻る。

「がっ！」

グシャツ！

「ママー！」

いきなり顔面を殴られて、大広間の中央まで飛ばされる。鼻血をボタボタと流し、口の中も切れ歯まで折れている。

「き、貴様！何をしたか分かっておるのか。夜蛾！」

要の顔面を殴りつけたのは夜蛾であった。その表情は怒りで染まり、強者の鬨気を放っていた。

「俺は、黙って聞けと言った。」

「ひっ！」

「我慢し続けた。若の事、そしてお前らの振る舞い。亡き重国様に対する今の発言。その一発でこの場は見逃してやる。分かったら最後まで黙って聞け、ゴミども。」

今まで、一度も見たことのない夜蛾の姿に皆慄く。そして理解する。この男は、今ここにいる者達を数分とかからず皆殺しにできると。

「お前がキレたの初めて見たな。」

「申し訳ありません。若様。」

「早く次のやつ読め。」

甚爾はそう言って続きを促す。

「若様。これは重国様から若さに宛てた手紙になります。」

銀は2通目の手紙を甚爾に差し出す。

「夜蛾、お前が読め。予想が正しかったら、爺ちゃんは最後まで爺ちゃんらしいことが書いてあるはずだ。」

「…分かりました。」

2通目の手紙を開け、読み始める。

「甚爾、おめえが当主になるにあたって、ちよいとわしから試験だ。一応だが、お前が当主になるよう任命状は書き残して置いたが、まず間違いない多血統血はやるんだろうさ。そこでだ、甚爾。お前一人でやってみろ。お前が負けたらお前の陣営は全滅して事で全員腹切らせろ。甚爾、昔わしが言ったこと覚えとるか？今それを証明して見せろ。」

夜蛾は読み終え静かに懐にしまった。

「じゃあ改めて聞くとするか。俺が当主に相応しいと思う奴は手エ上げろ。」

その言葉に、老当主達と翔鶴が手を挙げる。

「これで14対14だ。多血統血を行う。文句はねえよなあ?」

「よかろう。だが貴様は我々にたった1人で挑むのだぞ。それを分かって発言であろうな?こちらは約1500人。対してお前1人。せいぜい足掻くが良い。」

「そーいや判定はどうすんの?」

要の言葉を軽くスルーして、老当主達に判定は誰がつけるのかと聞く甚爾。後ろで、スルーされたことに怒り散らしているが知った事ではない。

「それは我に任せよ。」

そう言っに入ってきたのは局。後ろにはミサゴともう一人。

「お久しぶりでございます。伏黒様。いえ今は禪院様でしたね。ですが局様の弟君であらせられるので、甚爾様とお呼びした方がよろしいでしょうか?」

九鬼家従者部隊のクラウドディオがいた。

「判定はこのクラウドディオに任せようと思う。心配せずともジャッジは公平に行う。」

「俺は良いぜ。」

「よかろう」

「では局様より伺いました、多血統血のルールを改めておさらいさせていただきます。」

- ・ 互いに全戦力を投入し戦う。
- ・ 外部の協力者、または戦力投入は禁止。
- ・ 勝敗はどちらか一方が全滅するまでとする。

上記の三つを原則とし、互いが合意すれば成立となる。

「ここに更に追加ルールを加えます。甚爾様陣営は戦力を甚爾様お一人と致します。もし負けてしまわれた場合には、ルール3が適応され

ます。よろしいですね。」

「ああ」

「うむ」

こうして多血統血の舞台へと移動を開始するのだった。

宴

夜。月明かりと、陣を照らすために焚かれた火以外は何も明かりがない。綺羅陣営は綺羅と要を中心に、最後の作戦会議を行っていた。各家のもの達は、すでに配置につかせ指示を待っていた。女も武術に心得がある者は前線に、そうでない者と子供は陣営で給仕を任されていた。

今回の多血統血において、本来のものと違う点がある。

・今回に限り甚爾陣営は、甚爾1人だけということ。

本来ならば二つの陣営同士が争うが、重国の遺言により前例のない構図となった。故に、綺羅達は陣を構えているが、甚爾は構えていない。なので陣を互いに攻めるのではなく、城塞戦のような形になった。綺羅達は、背後から攻められないよう決められたエリア内の1番奥に陣を敷く。これで甚爾は真正面からしか攻められなくなった。

「背後からの奇襲の心配はしなくていい。とりあえず、奴がここに辿り着くためには、一度川を渡らねばならん。まずはそこで仕掛ける。」

「それは向こうも承知の上では？」

「然り。故に既に仕込みは済ませた。」

要は事前に実家の伝手を使い大量の武器を仕入れていた。

「あの川の何処を渡ろうとも一面に地雷を仕掛けてある。それで死なずとも、そこに我らが奇襲をかければひとたまりもあるまい？」

「流石はママだ。よしそれで行こう。みんな僕がみんなを勝利に導くよー！」

既に勝った気でののか、酒や豪華な料理などを振る舞いながらの作戦会議。そして第一の作戦は前線へと伝えられた。

―禪院家―

「この度は依頼を受けていただき感謝致します。冥冥様。」

「いいえ。この程度で三千万も頂けるとは、こちらも感謝しますよ。」

「なにせ私1人では、この広大なフィールドを全て見て回るには少々

骨でしたのでね。それも貴女のお力があればやりやすくなる。それでは私はフィールドの方へ参ります。報告はお任せいたしました。」

「委細承知。ではまた後ほど、クラウディオ殿。」

冥冥。裏世界でも屈指の実力者である彼女を、今回クラウディオは雇っていた。いくらクラウディオと言っても、エリア内を全て監視することは不可能。故に彼女に監視の依頼を出していた。

「ふふ。さあ甚爾。どれだけ成長したのか見せてくれ。」

多血統血開始から3時間が経過した。時刻は午後11時。しかし甚爾が攻めてくる様子がない。定期的に行っている報告でも川向こうに影も形も見当たらないらしい。

「まさか既に川を渡ったのでは？」

「バカね。それなら地雷か爆発するでしょう。」

「怖気付いたか？」

「かもしれないな！」

「ハハハハッ」

当主たちは皆、甚爾が怖付き、隠れて攻めてこないと笑い出した。1人を除いて。

「どうかしたのかい？涼音。」

「…綺羅様。」

涼音である。ただ1人浮かない顔をして、思考に沈んでいた。

「どうした遠慮はいらんぞ。何かあるのならば申せ。」

酒で気分が高揚しているのか、要が肩を組んでくる。

「恐らく攻めて来ないのは作戦かと。」

「「「？。」」」

皆、疑問を浮かべる。作戦？ たった1人で作戦も何も無い。1人で全てを、相手取らなければならぬならば、影に潜み隠れて襲うしか作戦はない。それにはまず地雷の川を渡らなくては。

「多分、こちらの油断と緊張を誘っているのかと思われます。常に対岸を見張り、緊張の面持ちの前線。先ほどのように余裕の構えの我々。互いの精神を二つに分け、もしもの時の指示系統の混乱を誘っ

ているのかと。」

「涼音ちゃん考えすぎじゃない？」

「それに今は深夜。闇は人を弱くします。闇の中にいるそれ自体が恐怖。」

皆黙り涼音の話に耳を傾ける。

「そしてこれは言おうかどうか迷っていたのですが、少し緊張を持った方が良いと判断いたしましたので、言わせていただきます。」

そして涼音は話し始めた。甚爾が裏世界ではなんと呼ばれているか。こなした仕事の数々などを。

「は？曹の精鋭を一人で？」

「ドイツ海軍も。」

「う、嘘だろ。アイツが武闘家殺しだったのか！」

「なぜ今まで黙っておったか！」

「既に周知の事と思っておりました。裏ではこれほどまでに有名な話。奴の事は幾つか聞き及んでいるものと。」

まさかの事に、今更ながら自分たちは何に喧嘩を売ったのか理解する。

しかし、そんなことは関係ないと綺羅は言う。

「噂なんて事実は殆ど嘘だ。ホントだとしてもそれは全体の一分にも満たない。後付けばかりさ。心配入らない！みんなで戦えば必ず勝てる！」

その言葉に安心出来るものなどこの場にはいなかった。

そこに伝達の役目の者が戻って来た。

「報告します！」

それは終わりの始まりを告げる知らせだった。

―数分前―

「なあ。」

「何よ？」

「彼から2時間は経つただろ？甚爾はまだ攻めてこないのかよ。」

「そんなことあたしに聞かないでよッ！」

「わ、悪い。けどそんな怒鳴らなくて…。」

「ごめん。ハァー、結構イラついてた。本当ごめん。」

若いながらもその実力を認められて、前線の一部隊を任された男女。歳は甚爾と同じ年。昔、甚爾とも仲良くしたいと思っていたが、家の言いつけで接する事ができず、現状に少し疑問を持っていた。

「なんで、お互いが殺し合わなくちゃいけないんだろうな。」

「あたしに言わないでよ。けど、もつともな意見ね。そもそも1人対14家。甚爾が勝てる確証はないに等しいわ。それでろくな作戦も立てずに、お姉ちゃん達は陣で先に宴会してるんでしょ。」

「お前、甚爾と喋ったことあるか？」

「ないわよ。近寄るなって言われて。あんたは？」

「俺も。一言でも喋ったら家から追い出すって言われた。多分、要様に命令されてたからだろうけど。」

「もしかしたら、仲良くなれたかもしれないのにね。」

「俺たちは一方的にあいつを知ってるだけ。甚爾は俺たちのことなんか知らないだろ？」

「だから、昔に接することができたら変わったかもしれないじゃない？タラレバの話をしてもしようがないけど。さてと、ほかの部隊からの定期連絡、そろそろよね？」

「もうすぐ伝令係が来るはずだ。」

しばしの静寂。風がかすかに吹き木々が揺れる。

「好きだ。」

「は？」

「こんな時に不謹慎だって分かってる。けどさ、勝つても俺がもし死んでしまつて、想いが伝えられないのは嫌だ。だから好きだ。」

「ちよ、ちよつと待とうか。うん。告白？え？今！いやアンタが言ってることはわかるけど、唐突過ぎない！てか言うかいつから？」

「…5歳の時の迎春会の時から。」

恥ずかしくなったのか、後半につれ小さくなる声。しかし女には

しつかりと聞こえていて、こちらも顔を赤く染める。

「マジ?」

「マジ。」

「ピュアか!ピュアピュアか!え?あたしが初恋なの!」

「返事は終わってからでもいい。」

「いや死亡フラグになりそうだから却下。返事は今する。」

「え!今!」

「あんだだつて、今あたしに告白したじゃん!」

「や、よし。スーハースーハー。よし来い!」

心の準備は万端!期待と不安。初恋が実るか否か!緊張の瞬間。

「あたし「おまえらー!ー!ー!ー!ー!」」

それは邪魔をされた。清々しいほどに。タイミングよく。

「.:」

気不味い。メチャクチャ気不味い。部屋でエロ本見てたら、母親が入って来たぐらい気不味い。これは文句を言っても良いだろう。2人は、告白の返事を遮った者に顔を向ける。

「ちよつとタイミング考えろバカ!」

向けた支援の先にいたのは、別部隊の伝令係の者だった。2人の文句など聞く暇などないと言った顔で、全速力でこちらにかけてくる。

「ちよつと、どうしたのよ慌てて。」

「話してる暇はねえ!走れ!早く!追いつかれ!」

豪ツ!

瞬間、上空からまさに辻風が吹き下ろす。2人の間を抜けた風力の強さに、思わず後退する。女の方は尻餅をついてしまい、自分のお尻を労る。

「あイタタタ。もう何よ今の突風。それでどうしたの慌てて?」

そう言いながら立ち上がり、伝令係の者を見る。だが返答はなく、ただ正規の宿らぬ目でこちらを見て棒のように立ち尽くす。

ズルツ

「え?」

突如、伝令係の顔が地面に落ちた。側面から見たらまるで、後頭部

から顎にかけて袈裟斬りなされたかのごとく。

「キヤアアアアアッ！ ヴツ…おうえ。」

思わず吐いてしまう。先程まで生きていた者の中身を見てしまった。突如として死んだ。訳がわからない。何だこれは？ 疑問がグルグル頭の中を駆け巡る。だがこの者は言っていた。逃げる。何から？ 分かっている。この戦いにおいて、自分たちの敵はたった1人。

「今すぐここから逃げよう。聞いてるの！」

自分の事が好きだと言った男。固まって動けないのだろうか。だがこのままでは2人とも死ぬ。

「…にげ…ろ」

「そう…逃げるよ…早く！」

隣を見る。だがそこにあつたのは、首のない身体だった。

だが先程聞いた声は間違い無く彼のもの。そう言えば自分より下から聞こえて来た。まさか…。そう思いながら下を見る。そこにはこたらを見る男の頭部が転がっていて、逃げろと首の筋肉をピクピクさせながらずっと呟いていた。

「イヤアアアアアアアアアアッ」

じゅわあ。

恐怖のあまり失禁してしまう。もはや立つ力もなく座り込む。

「なんで？…なんで？…なんで？」

うわごとのように呟く。それに返答を返す声がかかります。

「なんで？…そりやお前、これは殺し合いだからに決まってるだろ。」

さも当然と言うように背後から聞こえた声。禪院甚爾がそこにいた。

「あの伝令野郎、森ん中での鬼ごっこは、木の上にも注意しろっての。…？…そういやこれ、前にも誰かに言っただような？…まあ良いか。」

女は甚爾の言葉に耳を傾けることなく、地面に転がった頭部を持ち上げ抱きしめる。

「あたしも好きだよ。」

甚爾は幻爪を鞘から抜く。

「その、なんだ。向こうで会えると良いな？」

そう言つて振り下ろす。その時、女は振り向いた。憎しみでも怒りでもない、ただただ笑顔。

「あんた、優しいんだね。」

その言葉を最後に首から上が飛ぶ。

「優しいかねえ？」

そう言い残し、また闇の中を駆けた。

時間は戻り、前線部隊の全滅を聞かされた本陣は混乱を極めた。

「前線部隊は、皆同様に首を刎ねられ死亡！中央線も被害甚大！」

「どういう事だ！地雷の爆発音はここまで聞こえるはず！不発か！」

「何かしらの方法で川を渡ったものと。」

「今はそんなことよりも早く指示を出さないと！」

「けど作戦なんて最初の以外立ててないだろ！」

そこに別の伝令が来た。

「報告！中央線壊滅！」

中央線も突破されたたった一人に。ありえない。あつてはならない。

もはや誰も言葉を発しなかった。そこに給仕の女がやって来る。それは分家当主の妻であった。

「あ…あなた」

「お前！」

夫である男は直ぐに駆け寄る。その時、頭をよぎったのは先代当主の父の言葉だった。それがまさに現実になろうとしている。

「（そんなことに絶対させるもんか！）どうした？大丈夫。ここにはみんないるし必ず勝てるさ。だけど少し危険になって来た。いいかい、裏から子連れてこつそりと家に戻るんだ。」

だが妻の女はずっと俯いたまま。そして顔をあげる。涙を流しながら笑っていた。

「あなた。ごめんなさい。…あの子を守って！」

ドンツ！と勢いよく突き飛ばされる。それと同時に女は爆散した。どおとおおん！

「うわあああああああ！」

目の前で愛する妻の爆死。男はただ泣き叫ぶ。

「惜しいな。そのまま夫婦共々円満に逝けたらうに。」

笑いながら、体にクローを巻き付けた甚爾がゆつくりと歩いて来る。手には何やらスイッチが握られていた。

「あの女の体に、C4巻き付けてたの気がつかなかったか？本当は何人か巻き添えにできたら楽だったんだが、奥さんに助けられたな？おっと、忘れる所だった。ほらよ。」

甚爾が何かを男の足元に放り投げる。それは息のない赤子だった。それを見た男はどうとう心が壊れる。ただ無気力に座り込む。

「なんだ。もつと怒り狂って向かってくるかと思つたのによお。つまんねえな。」

それを見ていた他の者達が怒り狂う。

「貴様！こんな赤子も容赦なく！それでも人間か！」

「ハハッ。：俺を猿だなんだと言つてのはお前らの親玉だろ？こんな時だけ人間扱いか？いいかお前ら、お前らはその馬鹿にしてる猿に、殺されんだよ。」

ドカアアアアアアアアアン!!!

C4の爆発など比べ物にならない、爆発が給仕場で起こる。

「なっ！」

「そんな！ただの爆発にしてもデカ過ぎる！」

「お前らが懇切丁寧に仕掛けてくれた地雷。アレを一気に爆破した。あつちは簡単に片付いたし、いや〜集めといて良かったわ。」

甚爾を見ながら思う。なぜこの男は笑っていられる。なぜここまでの非道なことができる？私達が何をした？逃げる。逃げられない。殺される。無慈悲に、ただの作業の如く。最初から勝てる見込みなんてない。

「うわあああああ！」

「ちよつと！何逃げてんの！」

「勝てるわけない！嫌だ死にたく…」

パアン!

逃げた男を甚爾が拳銃で背後から撃つ。一体何処から!その疑問はすぐに解明する。

「クロ、次だ。」

そう言つて甚爾は、クロに拳銃を飲み込ませ代わりに、幻爪を取り出す。

「なに、あれ。」

「ああ?コイツか?こいつはクロつて言つてよ、生物だろうが無生物だろうがなんでも格納出来る能力を持つてよ。武器は全部コイツに飲ませて移動してんだわ。」

そこで要が気がつく。どうやって甚爾が川を渡つたのか。

「まさか貴様!その龍に己を飲み込ませて、川を渡つたのか!」

「大・正・解」

甚爾はクロに自身を飲ませて川を渡り、幻爪だけを持って前線と中央線を潰して回つたのだ。クロはその間に地雷を回収し、再び合流したのだった。

「種明かしも終わった。あとは殺すだけだ。」

「皆、武器を取れ!一斉にかかるのだ!」

もはや、やけに近い状態で向かつてくる。

「はあ!」

ドガアン!女がハンマーを振り下ろす。ヒラリと軽く避け、背後からの刀を幻爪で防ぐ。間髪入れずに今度は弓。それを躲そうとするが、背後から奇襲して来たヤツに羽交い締めにされる。

「お?」

「俺ごとやれ!」

「男と心中する気はねえんだわ。」

そう言つてクロが何かを出す。コロんと地面に落ちたそれはフラッシュグレネード。何人かが咄嗟に目を覆う。直後の強い光。その隙に抜け出し男を斬り殺す。立て続けハンマー女も一突。

「くそ!仇をうってやる!くらえ!」

今度は金棒を持った男。甚爾も幻爪を横薙ぎに一閃。

ガキイン。ぶつかる甲高い音。

「殺す！」

「いやもう終わってるし。」

すると男は、スパンと横薙ぎ20枚ほどにスライスされた。

「ありや？こりやちよつと、じゃじゃ馬だな。」

「どういう事！完全に防いでたのに！」

幻爪が有する能力は刀筋の投影。例としてただ真っ直ぐに振り下ろした場合。その刀筋が通ったであろう無数の可能性の刀筋を、そのまま相手に与える。故にいくら防ごうとも、刀が通った可能性がある軌道上にあれば、そこにダメージを与える。ダメージを与えるまでは存在しないゆえ回避は不可能。ただし起動が右から来ていた場合、左からダメージ与えることはできない。故に、多方向から自由自在に斬りつけることができない点を除けば、欠点らしい欠点がないものだった。

「お願い助けて！なんでもぎやー！」

「嫌だ嫌だ！ああああ」

次々と刀の餌食になる。残りは要と綺羅のみ。

「…認めるよ。強い。だけどそれは、その刀があつてこそ。残念だったね。その刀の能力が、どのようなものかは分からないが、僕には勝てない。」

そう言つて取り出した。武器。長くはない。十手のような形をしているが、ナイフに近い。

「これは【天逆鉾】と言つてね。蔵に封印されてた代物だ。君を殺して僕は当主に君臨する！」

「今となつてはお前だけの家でか？」

「なにその辺はママの実家のツテを頼るさ。」

睨み合う。そしてぶつかつた。刃物どうしがぶつかる音。だが、驚すべきは綺羅。本気の甚爾の動きについて来ていた。

「！」

「驚いたかい？これが僕の実力さー！」

スパン！一度距離を取る。だが甚爾頬から血が流れる。

「君の動きは目に気を集中させればいい！そうすれば捉えられるからね！」

「（それはそれで良いとしても、ついて来られるだけの動きは出来ねえはずだ。それに明らかかな興奮状態。）」

そう考えて甚爾が出した結論は。

「ドーピングか。アホらしい。」

「だけじゃないけどね。まあ正解。神経を過剰にする薬を使ってね。要は反射神経を過剰に起こりやすくしてるのさ。」

脳の意識伝達を無視して、行動を起こす反射。それを人智を超えた状態で起こすためのドーピング。

「理には叶ってんなっ！」

背後に周り横一闪。だがこれも防ぐ。上下右左何度も斬りつけるが防ぐ。それ以上に不可解なのが幻爪の能力が発動していない。

「不思議かい？」

「それ発動中の能力の強制解除か？」

「まあ流石に分かるよね。」タラー

突如、鼻血を流す綺羅。

「過度な動きにもう体が耐えらんねえなら、大人しく死ね猿以下。」
「死ぬのは君だよ。クソ猿。」

2度目の睨み合い。だか次に動けば。

先に動いたのは甚爾真っ直ぐに突っ込む。そして振り下ろす。
「何度やっても同じだ！」

天逆鉾で防ぐしかし、衝撃は来なかった。

「！」

「バーカ」

無防備な胴体に放つ奥義。闇より黒く走るそれは。

【黒閃】

そのまま胴体を貫通する。空いた左手で、空中から降ってくる幻爪をキャッチ。刃をぶつけ合う直前に甚爾は、空に幻爪を投げていた。

「別によお、能力無効にされるなら、されない様に戦えば良いだけだろ。お前、実戦不足なんだよ。」

腕を引き抜き屍となった綺羅に言う。

「残るはあんたともう一人。」

「ヒッ！す、涼音！何処じゃ何処におる！はよう助けろ！何のためにわたしが今まで……」

ガシツと要の肩を掴み力を入れる。

「ま、待つのだ！わたしは義理とは言えお前の母親！親を殺すのか！今までのことは謝る！この通りだ！これからはお前を真の息子として愛そうではないか！綺羅など、ロクなものではなかった！だがお前な「黙れ」

「お前が謝るのは俺にじゃない。じじいと親父にあの世で詫びてこい！」

「や、やめろー！」

ザシユ！

鮮血が夜にまう。大地を埋めるは人の屍。獣が喰らい、土へと帰す。

「はあはあくそくそくそくそ！あの能無し共！」

涼音は一人エリアの外に逃げていた。甚爾が陣に現れてから即座に離脱を図っていた。

「一度、家に必要なものを持って海外に！」

「よう。俺の元許嫁は何処に行こうって？」

待ちくたびれましたと言わんばかりの態度で話す甚爾。涼音は、ありえないものを見るような目で、甚爾をみる。

「どうやって追って来れたん？」

「お前の家、気を香に乘せて相手を操ることに長けてたよな？そのせいかお前の匂いは独特だよ。辿ってくるのは楽だったぜ。」

そう、あの場から消えた涼音を甚爾は、臭跡を追って来たのだった。

「本当に獣ね」

「お前だろ？正確には香本家。要と綺羅だけでなく他の13家を操つてたのは？」

「…」

「お前の家は格付けで言えば下の下だ。それに他家からも色々言われてたみたいだな？事の発端は60年前か、お前の婆さんはじじいの許嫁候補だったらしいじゃねえか。」

「よく調べたわね。」

「おう、まあ俺じゃねえけど。」

―昨日―

「なら、さつそく一つ頼めるか？」

「香本家の過去と要が嫁いで来てからの、そうだなひと月程の分家との接触について調べてくれるか？」

「オツケー。任せて。」

「サンキュー」

「ちやんとご褒美頂戴ね。」

「へーへー」

―回想終―

昨日のうちに瑞鶴に頼み、事の真相を調べ上げてもらっていたのだった。

「あいつマジで一晩でやりやがったよ。今は熟睡してんだろ。」

「瑞鶴」

憎いと言わんばかりの声で瑞鶴の名を出す涼音。

「続きだ。結局じじいはその件を破棄して、他の女と結婚。酷かったらしいな？お前の婆さん。家で結婚出来なかったからって回されて使われてたらしいじゃん？その上で産まれたのがお前の母親。そして親子共々酷い目に遭わされ続けた。けど能力を使い当主になり復讐に乗り出す。自分をこんな真面目な思いをさせた、じじい。ひいて

は禪院家にな。」

全てお見通しだと分かり涼音は力なく笑みを浮かべる。

「おまけに言うなら、要にも能力使って洗脳。綺羅の方にも「もういいわ」お？」

「どうせもう意味ないもの。」

「…」

「結局、ゴミのような人生だったわ。物心ついた時から、復讐の業を背負わされてさ。能力もそのために修行して。」

ぽつぽつと話し出す。後悔や怨みなど。

「実を言うとな、うち甚爾と結婚出来んなら良いと思ってた。まあ結局はこうなったけど。」

涼音は甚爾に近づく。甚爾もクロから先程、綺羅が勝ち取った天逆鉾を取り出し近づく。

「なんか最後に言っとくか？」

「じゃあキスして？」

「は？」

「最後なんやしイヤん。ね？…んっ」

唇が合わさる。ソフトから段々エスカレートする。

「んっ…ちゅ…う…んんんっ…ぶっはあ…んっ。」

約1分はゆうに経っただろう。2人は唇を離す。

「じゃね。」

「一応痛みはないようにするが、能力で痛覚は遮断しとけ。」

「もうやってます。」

「…さよなら元許嫁」

こうして多血統血の幕は閉じた。

多血統血から数日後。あの後、決戦に使われたエリアに放置されていた死体を全て片付け、甚爾陣営は三日三晩の宴が模様された。当然の如く主役である甚爾も無理矢理引っ張り出される。今日はその三日目だった。

「若様！よくぞ！よくぞ！この八咫、身を切るような思いで…うう。」

「おい誰だ。コイツに酒飲ませたの。」

「あら、八咫ったらお酒弱かったのね。うふふ。」

そう笑いながら甚爾の隣に来るのは翔鶴。

「何しに来た？」

「あなたにお酌。」

そう言つてピツタリとくっ付きながら、空いたグラスに瓶コーラを注ぐ。

「本当にお酒でなくていいの？」

「醉えないから好きじゃねえ。必要な時以外は飲まない。てかそもそも未成年だ。」

そう言つて翔鶴が抱き締める腕とは反対で、グラスを持ち上げ飲む。一気に飲み干し、そこにすかさず翔鶴がおかわりを注ぐ。

「今回の一件で分家の膿出しも終わって良かったわね。」

「まあ瑞鶴には感謝だな。」

「そうよ。あの子すごく頑張つてたんだから。今度ご褒美上げないとお姉ちゃんが怒っちゃうんだから。」

ぷくーと頬を膨らませて言うが迫力が全くなく。本気なのだろうが、全く怖くなかった。

「女の嫉妬や怨みつてのは怖いな。今回件でよく分かった。後、スゲーめんどくさい。」

「女はそういう生き物よ。」

そう言いながら自分の顔を甚爾近付ける。

「おや？お邪魔だったかな？」

「んな事ねえよ。冥。」

声をかけて来たのは冥冥。今回は監査と事後処理のためにとても奮闘してくれたようで、想定の倍の額を請求されたとクラウドイオが言っていたのを思い出した。局とクラウドイオはすでに九鬼に戻った。いち早く新しい当主が決まった事を報告する為に。帰り際に甚爾を抱きしめて離さず、このまま連れて帰ると駄々をこねていたが、

瑞鶴と八咫が阻止した。ミサゴも今回の護衛の報酬を受け取る為についていった。冥冥は振込。

「一応、年上なんだけどね?」

「今更だろ。」

「また、腕を上げたみたいだね。君は、どこまで強くなる気なのかな?」

「知らん。」

「自分の事なのに?」

「自分の事だからだ。」

「ふふ。まあ何かあったらいつでも呼んでくれ。」

「行くのか?」

「これでも忙しい身でね。時は金成さ。」

そう言つて去つていく。後ろ姿に、相変わらず守銭奴な女だと思う甚爾。

「ちよつと。」

グイツと腕引かれる。

「…何膨れてんだ?」

「知りません。」

何に対し膨れているのか分からず疑問に思いつつも、コーラを飲むそこにまたまた客。

「あつー! いたいたいたいたいたいたいたいたいたいただ。」

瑞鶴が翔鶴と反対側に座る。結果甚爾は美人姉妹を両手に花状態。羨ましげな視線がそこらじゅうから降り注ぐ。

「今回ありがとな。」

「いいよ別に。ご褒美くれるんでしょ?」

「何がいい?」

「うーん改めて言われると良くわかんないなあ。」

「ゆつくり決まれば良いさ。」

「うん」

時間を見れば深夜を回った2時。そろそろお開きの時間帯だ。「お前ら俺は寝る。後やっつけ。」

そう言つて自室に向かう。着くとすぐに布団に横になりボーツとする。

「俺が当主ね」

未だ実感が湧かないと言つた面持ち。するとそこに来客が来た。

「とうじ入つて大丈夫?」

声のからして瑞鶴だと分かり入室を許可する。

「なんだ? 言い忘れたことでもあつたか?」

「いや、そのゝなんて言うか」

「?」

「今回の事でさ、その当主になつたでしょう。」

「ああ。」

「それで涼音さんもさああれだし。」

この場で涼音の話を持ち出した瑞鶴。甚爾は答えが分かつたばかりに押し倒す。

「だからその、隠れて昔から喋つたりしてたあたし…キヤ!」
「で?」

ニヤニヤと笑いながら瑞鶴に顔を近づける。

「だ、だから!」

ニヤニヤ

「ニヤニヤ止めろ!」

「じゃ早く言えよ。」

「うう、あたしを婚約者にしたらどうかって話!」

「したら?」

「して下さい。」

「よく言えました。」

そして瑞鶴の唇に優しくキスの雨を降らす。

「んっ」

「んっ…とうじ」

続きをしようとする前に、不届き者を逃すまいと声をかける。

「2人もどうだ? こそこそ見てないで入つて来い。」

「!」

言われて観念したのか、入ってくる2人に瑞鶴は驚愕する。

「八咫さん！翔鶴ねえ！」

「スミマセン」

「バレちゃった〜」

「話は？」

「聞いてるわ。あなたはどなの？」

「かまわねえよ。それにと」

翔鶴を引つ張り胸に抱き寄せる。

「さつき宴で冥に嫉妬してたろ？」

「なんで今気がつくのよ。」

「で？どうする？」

「言わせないで…んっ」

こちらもただ触れるだけのキス。

「八咫…違えな、菜々。」

「はい。わ、いえご当主様。」

「お前も俺のものになるか？」

「我が身はいつまでも貴方様と共に。」

「ふっ。できた家臣だな。それと若でいいぞ。様なんざ付けるな。命令だ。」

「はい。若…んっ。」

宴は未だ終わらない。

方針

―禪院家―

この日、新たな門出を迎える事に天も喜んでいるのか、雲ひとつないまさに快晴。もうすぐ冬になろうとしている季節の変わり目だが、日が差している今日は、少し暑いくらいだ。そんな天候にも恵まれた今日、禪院家の新たな当主がお披露目となる。誰であろう。禪院甚爾その人だ。

「若、失礼します。」

「おう。」

「皆様準備が整いました。移動をお願い致します。」

「夜蛾。」

「はい。」

「最後までついて来い。」

「この命尽きるまで。」

―大広間―

各分家の当主と家臣一同、そして政界の重鎮や大企業の会長、社長にその息子娘達まで、勢揃いしていた。中でも異彩を放っていたのは、九鬼夫妻だった。妻の弟であり、自分にとっても義弟。この日を祝うために、連日の忙しい業務をさらに突き詰めて、今日一日時間を作って出席していた。

「本日はあの子の為にありがとうございます。帝様。」

「なに、愛する妻のそして、俺の義弟の晴れ舞台。最後に見たのはまだ赤ん坊の頃だっけか？」

「ええ。母が亡くなり、その葬儀の時に。」

「そうだった。」

話の区切りがついたタイミングで、夜蛾が入ってくる。

「皆様、長らくお待ちいたしました。六十代目当主になられた。禪院甚爾様が来られます。」

ドンツ！ドンツ！ドンツ！ドンツ！ドンツ！ドンツ！

畳の音が鳴り、皆姿勢を正す。

当主様のおなぐりぐり

その声と共に襖が開く。

「……え?」

皆の目が点になる。そこには甚爾の姿は影も形もなく、手紙が一つ置かれていた。

「どういう事だ!夜蛾!」

分家の老当主が夜蛾に慌ててたずねる。

「いえ!先程まで確かにここで待つておられたはずです!」

「お待ち下さい!この手紙は?」

八咫が手紙を手に取り読み始める。

「八咫。何と書いてあるんだ?」

「拜啓、皆様様方。この度はご足労いただき恐悦至極にございます。手紙での挨拶になったこと、誠に申し訳ございません。お詫びと言つてはなんですが、我が姉、局が何かしらお詫びの品でも用意するでしょう。」

「は!」

「本来ならば…めんどくさ、硬っ苦しいの嫌だから簡単にまとめるぞ。まず、当主には俺がなった事を認めろ。それと、もう暫く放浪すつからよろしく。家の事は夜蛾、お前が中心でなんとかしろ。翔鶴や瑞鶴あたりにも頼め。八咫お前も夜蛾のフォローしろよ。まあ半年ぐらいしたら帰ってくるかもな。もしそれまでになんかあったら、姉貴や冥冥に頼んで頑張つて探せ。」

追伸：地下蔵の武器は全部貰つていく。

禪院家60代目当主 禪院甚爾

「……」

「ああ」バタンツ

「つ、局様!」

「若……」

局は弟の行動に倒れ、夜蛾の叫びがこだまする。彼を聞きながら、甚爾はほくそ笑む。

「頼んだぜ。」

背を向けて門の外へと歩き出す。さてまずは何処に行こう。この前は北海道にいたから、九州にでも行こうか？それとも海外？イタリアなんかいいかもしれない。まだ見ない土地に期待を膨らませながら、門をくぐり、捕まった。

「うふふ。何処へ行くの？とうじ？」

「翔鶴ねえの言う通りになるなんて。」

後ろから翔鶴と瑞鶴が腕を組んできて、動きを止める。

「この度はおめでとうございます。ですが我が主人達を困らせるのはいただけませんね。」

「フツ、相変わらずの様だな。伏黒いや、今は禪院甚爾。貴様、コロコロと名が変わるな。」

門の外には、九鬼家従者部隊のヒュームとクラウディオ。まさに前門の虎後門の狼。

「なんで？」

「昨夜、私達が眠った後にこつそりと手紙を認めてるのを見てね。」

「お前起きてたのかよ。」

「たまたまよ。」

「さあ！大人しく戻るよ！」

そう言うが2人とも動こうとはしない。疑問に思い2人を交互に見ると、どちらも何かを堪えているのか内股でかすかに膝が笑っている。

「おいまだキツいんなら無理すんな。俺は行くけど。」

「わかってるなら言うな！」

顔を真っ赤に染めながら反論するも、そその要因でしかない。

「ならば俺が力尽くで戻してやろう。」

「リベンジマッチか？受けてやるが…今度は殺すぞ？」

二人の殺気が急激に膨れ上がる。両隣の震えが昨夜のダメージのものではなく、恐怖による震えに変わる。

「…やめだ。」

「怖気付いたか？」

「いや。こいつらがあまりに体を擦り付けてくるから、もう一回喰いたくなつてな。」

「／＼／＼！」

「フン。」

「おら、戻んぞ。」

一人片腕で抱え上げ、家に戻って行く。

「どうです？以前と比べて。」

「半年前の比ではないな。」

そんな話をする従者達。以前戦った時よりも強くなった甚爾に警戒心をさらに上げるのだった。

「つー訳で戻った。」

「そこに座りなさい。」

「姉貴。」

「何ですか。」

「…もう座ってるけど？」

「正座なさい！」

鶴海姉妹を連れて戻って早々、局に捕まり大勢の前での説教タイム。だが、説教など意に返さずヘラヘラも笑う。

「若。今後はこのようなことは控えていただきたい。」

「やめろとは言わないんだな？」

「無理な事と承知してますので。ですが、このような重要な時はお願いします。」

「あいよ。」

「聞いているのですか！甚爾！」

「姉貴もいい加減にしとけよ。今一番恥ずかしいの姉貴だからな？」

「誰のせいだ！誰の！」

「じじい。」

「お前だ！」

方や常に弟を心配し、方や姉さえも殺そうと思っていた。そんな二人の姉弟と言えるやり取りに、涙を流す者も。

「とりあえず、お集まりの方々改めてご挨拶させてもらおう。禪院甚爾だ。このたび当主となった。異論がある奴は潰すからよろしく。」

（理不尽）

心の声が意図せずして、一致した瞬間だった。

「硬っ苦しいのはこんぐらいで、飯にしようぜ？」

「では皆様此方に。既に準備は整ってございます。」

こうして当主襲名のお披露目会は筒がなく進んだ。

「話ってなんだ？姉貴。」

夜。参加者の皆様がお帰りになった後、局の呼びかけで、甚爾、夜蛾、八咫、鶴海姉妹、分家当主筆頭、帝が集められた。夫妻の後ろにはヒュームとクラウディオが控えている。

「その前にいいか？この度はおめでとさん、義弟。」

「誰だおっさん。」

「……」

空気が凍った。義弟と呼ばれている時点で、局の夫たる帝だと言うことは分かりきった事。それをおっさんと真顔で言い放った。

「ハハハハッ。確かにお前からしたらおっさんだわなあ。一応お前さんの義兄になる。九鬼帝だ。まあ前に会ったのは、まだ赤ん坊の頃の一回だけだし、わかんねえか。よろしくな。」

「じゃあ兄貴で。」

「おうー！いいぞー！いいぞー！」

「んんっ！では双方の紹介も済んだ所で、今後のことについて話し合おうと思う。」

視線が局に集中する。

「まずは、甚爾。」

「おう。」

「学校に通いなさい。」

「話は終わった。お疲れ！」

「こら逃げるな。」

即座に瑞鶴に捕獲される。

「離せ瑞鶴。」

「ダメ。これもアンタの為なんだからさ。ね？ちゃんと局長の話聞こう？」

「黙れおっぱい2号」

「誰がおっぱいか！てか2号!?!？」

「ふふ、仲がいいことは何よりだけどとうじ、ここは瑞鶴の言う通りよ。私もあなたにあれこれ言いたくないわ。だから座りましょう？」
「うるさいおっぱい1号。」

「あらあらウフフ。」

スラツと瑞鶴は腰から刀を抜き、翔鶴は懐から横笛を出す。顔は笑顔だが、その奥に確かに般若がいた。

「一時と場所を考えろ。」

「ハア〜」

大きなため息を一つ吐き出して、観念して座った。

「よっこいせ。」

「ちよつと！」

そのまま瑞鶴の膝に頭を乗せ寝つ転がる。いわゆる膝枕状態になった。

「よろしい。では改めて甚爾、学校に通いなさい。」

「えっ！このまま話進めるんですか!!」

瑞鶴の反論は軽く無視される。そして甚爾は、何も言わず体ごと瑞鶴側に寝返りを打って無言で嫌だと訴える。

「こつちに体を向けるな！匂いも嗅ぐな！」

「呼吸しないと死ぬだろうが。流星の俺でも呼吸なしは無理。」
「うう〜」

それ以上の反論も無駄だと悟り、ついに観念する瑞鶴。

「甚爾、貴方が聡明である事はここにいる誰もがわかっています。ですが貴方はまだ16歳、本来であれば高校に通っている年齢です。」

「…」

「甚爾、禪院家当主たる者ならば、教養を身につけ皆のお手本とならねばなりません。それに貴方為です。同じ年代の交友関係など鶴海姉妹ぐらいでしよう？学校に行けば、良き友人に先輩後輩にも巡り会えます。」

「…」

「甚爾。」

「分かった。わかったよ姉貴。別に姉貴を困らせたくて嫌だと言ってるわけじゃねえ。そんな泣きそうな顔してんじやねえよ。」

「何か嫌な理由があるのですか？」

「俺は裏の世界でずっと生きて来た。殺した数なんざ覚えちゃいねえ。そんな俺が表の世界、しかも同年代達と上手くやれるわけがない。もう洗つても落ちない程の血が、俺には染み込んでる。」

ポンツと瑞鶴が甚爾の頭に手を置いて撫で始める。

「あ？」

「あんたはさ、これまで散々苦しい思いもして来た。まあだからって、奪って来た命まではフォロー出来ないけどさ。それを言ったら私だって、あんたには及ばないけど家の仕事で人も殺した。そんな私でも学校も通って、友達も頼りになる先輩も可愛い後輩達もいる。あんたは自分の為だとか言いながら、人の為に何かをやる。覚えてる？始まってあつた時のこと？」

「ああ。お前が初めて家に来て庭で遊んでたら、綺羅に怪我させちゃった時だろ？」

「そう。それで要様、違うねあのババアに大目玉喰らいそうになつて怖くて泣いてたら、あんたが来てボコボコにしてさ。それで代わりに怒られた。」

懐かしい日を思い出し少し童心に帰る。

「あんたが優しいのはみんな知ってる。初めて会って、いきなり仲良くなつて誰だつて無理だよ。でも大丈夫。きつと分かってくれるよ。それに、…わ、私だつてあんたと一緒に学校行きたい。」

「…」

「な、なんか言つてよ。」

「長つたらしい言い訳して、結局は自分と一緒に行きたいだけか。」

「ちがつ！…：そうよ！悪い！」

「いや、悪くねえ。」

ガバつと勢いよく起き上がり、局の方を向く。

「女にここまで言わせちまったからな、行くよ学校。」

その言葉に局は母の様に、優しく微笑んだ。

「そうか。そうか。ならばお前が通う学校だが…」

「瑞鶴と一緒にだろ？お前どこの学校？」

「都内にある女子校。」

「おい。」

「…：フイツ

顔を背ける瑞鶴。

「この話やっぱ無し！」

「いや、瑞鶴お主にも甚爾が通う学校に転入してもらう。」

「えっ！」

「2人が通うのは、我の子供達も通う所だ。その名も！」

「川神学園！」

神奈川県川崎市にある学校。文武両道を掲げる学園。この学園には他と見比べて一つ変わった校則が存在する。

決闘システム

互いの意見が割れた際、決闘において決めるという一風変わった校則である。その為か全国各地、はたまた海外からも武の心得のあるものが多く通う。

「一部じや魔境なんて言われてるのよ。」

「ふーん」

「興味なさげね？てかッ！なに今度は、翔鶴ねえに膝枕してもらってんのよあんたはー！」

「私の膝の心地はどう？」

「キスもくれたら言うことなし。」

「それは今度ね。」

「甚爾。以前にお前に依頼していた件、覚えているか？」

「…なるほどね。いるのか？そこに、武神が！」

1を知り10を知る。全てのピースが甚爾の頭の中で繋がった。

「要はこうだろ？九鬼のクローンが世界に発表されると同時に、九鬼の本部もある川神学園へと編入する。そのタイミングで俺達も編入し、露払いもとい、武神がちよっかいかけてくるのを防ぐ。ってところか？クローンを一年時から入学させない辺り、何かしらの理由がありそうだが、まあ詮索はしないでおくか。」

その思考、そして感の良さに口には出さないが驚愕する。我が弟ながら末恐ろしいとさえ思った。

「いいねえ。とうじ、お前さ九鬼で働かね？」

「兄貴、喧嘩なら買うぜ？」

「売ってねえよ。ハアゝ欲しいなあ。」

「ともかくそういう訳で頼めるか？」

「クローンって事は、歴史的武人だよな。」

「…！…」

クローンとしか言っていないのに甚爾はそれを武人だと確信した。

「なら、遅かれ早かれ、挑戦者が絶えなくなる。提案だが、そいつらを武神に当てたらどうだ？それなら俺に依頼料を払う必要もないし、武神の抑え？武陵の慰め？にもなるだろ？それに1人も挑戦させないなんて、お前ら九鬼がするはずがない。その選別にもなる。どうだ？」

「お見事。」

九鬼の4人は、クラウドイオが発した言葉以外、発せられるものな

どいなかった。

「それに、まだあんだろ？」

「(本当に、どこまで見抜いておられるのか。未恐ろしいですね。)」
「さっきの案、別に俺が提案しなくても誰かが出しただろうさ。わざわざ俺を雇う理由。武神と戦わせたい理由がお前ら、違うな。お前らのガキの中で理由がある奴がいる。そうだな。」

「!」

反応を示したのは、従者の2人。

「言え。」

ぞわっ!

嘘偽りは許さない。無言で殺気を放ち強制させる。今ここにいるのは、まさしく六十代目当主だと訴えた。当主である俺に、ただの従者であるお前達に反論の余地はない。

「あ、恐れながら申し上げます。我々は決して貴方様を騙すつもりはもうとうございませぬ。」

「利用はするつもりだろ？」

ドツパアアアアアン!

2人の背後にあつた壁は吹き飛び、庭が丸見えになっていた。甚爾はいつの間にかクロを出し、手には游雲を握っている。

「俺に、嘘をついたか？」

「あ、いえ決して!」

「遠回しに言っただけとも取れますよね?なんてのは嘘と一緒だ。ワライな、姉貴達。優秀な従者が1人死ぬ。」

♪~~

すると笛の音が部屋に鳴る。辿ると翔鶴が横笛を奏でる。どこか落ち着き、戦闘意欲が失せる。そして笛をしまうと甚爾の唇を自分の唇で塞ぐ。

「ちゅっ……んん……ぷは。どお?落ち着いた？」

「ん」

ひとつ頷き座り直す。

「翔鶴に免じて見逃してやる。ちやっちやと企んでる奴吐け。別にそいつになんもしねえからよ。」

「…はい。」

クラウディオは全てを吐いた。それはただの兄妹の敵討ちをしたかった、純粹なものであった。

「以上でございませす。」

「ならそのガキに言っておけ。相手を選べ。あと次に俺を利用しようとするもんなら、姉貴達のガキだろうが関係ない、殺してやるってな。たとえ九鬼と戦争になろうとも。」

「確実に。」

「よし。」

「姉貴。」

「すまぬ。」

「もういい。学校はまあ、行ってやるよ。姉貴の頼みってことでな。」

「甚爾」

「まあなんだ。今度、弟の頼みきけよ?」

「もちろんだとも。」

こうして川神学園へと編入が決まった。だがいくつか問題があった。

まずは住む所、最初は九鬼の本部ビルに住めば良いと提案されたが、これを却下。では寮に住むか?これも却下。甚爾は、時間はかかるが家から車でいいと言うが、行かんせん東京の郊外から神奈川まで距離がある。そこで翔鶴が提案する。

「なら、私達3人で住むのはどう?」

「3人?」

甚爾と瑞鶴が首を傾げる。

「そ。川神に一つマンションを家がオーナーとして保有しているわ。そこに住んだらどうかしら?」

そして耳を近づけささやく。

「そうしたら、私達を可愛がってくれますでしょ?」ボソツ

それがトドメとなった。こうして鶴海家がオーナーをしている、高級マンションに決まった。

「編入時期ですが、おっしゃる通りクローン達と合わせて編入して頂きたい。」

次上がる問題が編入時期である。それまでどのように過ごすか。

「その辺は大丈夫です。」

夜蛾がここで割り込む。

「若には家の仕事をしていただきます。」

「お前やれよ。」

「当主になられた今、貴方が仕切らねばなりません。」

「現場がいい。」

「ダメです。」

「へーい」

決定！こうして編入まで当主としての仕事をする事に。

「それでは、決める事は決めたな。今度のそうだな、一週間後に川神学園の学園長に挨拶に伺おう。予定を空けておいてくれ。」

「かしこまりました、局様。」

「なんで夜蛾に言うの？なんで俺に言わねえの姉貴？」

「お前は逃げ出すから。」

反論は一瞬にして論破された。

「では続いてですが」

今度は老当主もとい、相談役からの議題のようだ。

「此度の件で許嫁であった、香本涼音の裏切り。これにより白紙になり、若の許嫁を早急に決めなくてはなりません。」

「あら、その件ならば既に解決済みですよ？」

「なんですと？」

「私達が嫁入りするので。」

「！」

「もう初夜もま済ませましたから、ね？瑞鶴。」

「翔鶴ねえ！なんでここで言うの！」

「事はハッキリしておかないと。」

「そうだけど！恥ずかしいでしょう！」

「ちなみに、八咫も一緒でした。」

「二「3人一緒！」二」

まさかのカミングアウトに、相談役は腰を抜き、夜蛾は八咫に当主に何してんだお前という視線を送り、局は呆れ、帝は口笛を吹き、従者2人は沈黙を保った。

「ではこの件は解決ですね？」

「し、しかしそうなる、鶴海家はどうなされるおつもりか？翔鶴殿、貴女は鶴海家当主。分家当主が嫁ぐなど。」

「そこは心配いりませんよ。」

そしてまさかの衝撃発言

「だって鶴海家は私達姉妹以外、皆亡くなりました。」

「ど、どういう事ですか！」

「だって、私が当主になったことを良く思わない人達が多くて、そのせいか裏でクソババアと通じてたんですよ。ですので、多血統血の前に処分して来ました。あ、資産とか諸々の権利などは事前に私と瑞鶴に移し替えておいたので、今まで通りで大丈夫です。嫁入りして宗家の事務仕事は増えますが、そこは私達が担当しますのでご心配なく。」

「女ってこえーな。」ボソツ

「何か？」

「翔鶴は美人な上、器量の良い女だなって。」

「それ褒めてる？」

「褒めてる褒めてる。」

相談役は頭が追いつかないのか、目頭を抑え項垂れる。しかし何とか頑張って自身を納得させた。

「わ、分かりました。では若の許嫁は鶴海姉妹と言うことでよろしいか？」

「いや、よろしくはないな。」

「まだ何かあるのですか若！」

「いや、その、何だ。」

「とうじ、あなたまさか…他に女がいる。なんて、言わないわよね？」
ギギギイと聞こえて来そうな感じで、首だけをこちらに向ける翔鶴。

思わず反対に顔を向けるが、そこにも光のない目をした瑞鶴が刀に手をかけていたので、正面を向く。だが、同じく光のない目を向ける八咫。

「…」

「「ねえ?…どうなの?」」

「正直に言つといた方がいいぞ。俺もまあなんだ局以外との子供が1人いてよ。そんな時はヤバかった。」

「マジ?」

「ああ」

義兄がまさか、姉以外の女と子供を授かっていたとは思ってもよらず、素直に驚く。

「そいつが今回、お前に依頼を出した奴なんだけど。」

「あ、そうなの?」

それからしばし沈黙、そして…

「いる。2人。」

「…」

「だからって、お前らへの好意も嘘なわけじゃねえ。」

「…」

「かと言って他の2人も蔑ろに出来ない。」

「…」

そして甚爾は、未だ己の体に巻き付いたままのクロから、天逆鉾を取り出して、床に置く。

「そいつで俺を殺せ。お前らにはその権利がある。他のやつは口出しすんな。いいな?」

「…」

天逆鉾を手を取ったのは瑞鶴。甚爾はそつと目を閉じて待つ。

「クロ、これさっさと閉まってちょうだい。」

いいの？とでも言いたげな目で瑞鶴見つめるクロ。コクリと一つ頷く瑞鶴を見て天逆鉾をしまった。

「どうじ動かないでね。」

バチインツ！真つ赤な紅葉が頬に出来た。

「これで私は勘弁してあげる。けど、私たちを蔑ろにしたら許さないからーその時は心中してやるー！」

「じゃあわたしも。ほら八咫貴女も。」

「では若様失礼いたします。」

続けて残る2人もビンタをかます。

「今度、その2人もここに連れて来てね？その2人にもビンタをしてもらうから。」

「了解」

それからも議題は続き、この日は九鬼夫妻も泊まって行くこととなり、九鬼夫妻と甚爾三人で静かな夕食を楽しんだ。

ー九鬼本部ビルー

あれから一週間が経ち甚爾と夜蛾は川神へと来ていた。今日は平日の為、瑞鶴は学校に行っている。

「首いてえわ。」

「高いですね。」

2人はビルを見上げ、その高さに若干引いていた。

「耐震設備大丈夫かこれ？」

「その辺はしっかりとされていることでしょう。しかし、遅いですね。」

なぜここまで来て、いまだに中に入らないのか？それは局が入り口まで来たら迎えをよこすと、事前に言っていたのでこの男にしては珍しく約束時間の10分前に来たのだが、約束時間を20分過ぎても迎えが来ない。

「姉貴に関して嘘をつくとは思えねえ。」

「誰かの独断と言うことですか？」

「ああ。つうかあいつじゃね？」

「さつきから上から見下ろしてくる、あの黒ドレスのご婦人ですか？」

「多分な。あれは、要と違った意味で殺したくなる人種だ。」

「ご命令とあれば。」

「いい。今は待とう。」

そこへ、執事とメイドがやって来る。あの2人が案内人だろうと、夜我が声をかけようとする。

「貴様ら何者だ！」

「はっ。」

「ここは九鬼の本部ビルです！即刻立ち去りなさい！」

なんと出て行けと警告。

「おいおい、何の冗談だ？」

「我々は局様から、今日ここで待つように言われたのだが？」

「そのような指示はされていない。」

「怪しい人達ですね。捕らえさせていただきます。」

男はメリケン、女は鞭を取り出し攻撃を仕掛けて来た。

「若、ここは。」

「めんどくせえから任せる。」

夜蛾が前に出て2人を迎え撃つ。

「覚悟！」

「お前ら、誰に攻撃しようとしてるかわかってんのか？」

銀の言葉と共に2人は、鳩尾に強い衝撃を喰らう。そしてそのまま気絶。

傀儡操術

己の気を人形に流し込む事で、自由自在に操作する。気の量によって、強さや強度などが決まる。

「お待ちせいたしました。」

「じゃあ待つっても来ないし、行くぞ。」

「はい。」

こうして2人はビルの中へと入っていった。中に入るとそこには、己の得物を携えた九鬼従者部隊が待ち構えていた。

「ハハハッ。…そっちがその気なら、やってやるのも一興か。夜蛾。」
「分かりました。」

九鬼本部ビルのエントランスにて、戦闘が開始されるのだった。

一方その頃、局はと言うと。

「あの子はまったく。まだ着かぬのか？」

「報告は入って来ておりませんね。」

「む？」

「どうしましたヒューム？」

「あの夜蛾とかいう男の気だ。このビルに入ったようだな。ここまで隠すのが上手いとは思わなかった。この俺がビルに入らなければ気が付かないとは。」

「夜蛾がいると言うことは、あの子も来たようだな。全く説教だ。」

「お待ち下さい局様。」

「何だ？」

「どうやら、1階のエントランスにて戦闘が行われているようです。」

「何だと！どう言うことだ！ヒュームすぐに確認に迎え！」

「ハッ！」

一瞬にして消え去り、一階へ向かうヒューム。

ーエントランスー

「おいおいこの程度で主人をすっかり守れんのか？」

甚爾は小太刀で、的確に向かってくる相手の腱や筋肉の繋ぎ目を切った後、腹部を数回刺して沈めている。この一連の流れを僅か1秒弱でこなす。

「くそっ！遠距離が得意なやつを主体に攻めろ！相手は…ゴバツ」

先ほどから指示を出す男を頭と仮定して、喉を一突きで沈める。

「よくも！ハアアアアアア！」

果敢に突進し、槍で突きを連撃で繰り出す。それを全て紙一重でかわし、足払いからの両肩の付け根を刺す。腕の力が入らず槍を落とす。女は構わず蹴りで攻める。

「あの男が言ってたろ？遠距離主体って。俺の間合いに、なってない蹴り技で攻めてくるなんざ、舐めてんのか？」

蹴りを体で受ける。入った！と女は思った。しかし、それと同時に蹴った足に激痛が走る。折れていた。あらぬ方向に向き、足をつくことができず尻餅をつく。

「うそ。」

「蹴りはこうやるんだよ。」

甚爾の強烈な回し蹴りが顔面を捕らえる。壁に激突し崩れ落ちる。

「夜蛾。そっちはどうだ？」

「話になりませんね。弱すぎる。」

見れば夜蛾の方は、既に全員血の海に沈んでいた。殆どが意識がなく、数名がなんとか保っている状態だ。

「なん…で……にん…ぎょうが」

「うう…」

「若いつまで遊ばれるおつもりで？」

「そうだな。……はい終わり。」

ブシューーーーーー

一気にかけて、首を小太刀で切り裂いた。ざっと2人して150人程を倒し、これからどうするかを話し合う。

「お疲れさん。」

「このまま上にいきますか？」

「！」

2人してこのフロアに向かう。者を感じ取る。

「来たか。」

「ですね。」

「これは一体、どういうことですか？禪院家当主殿？」

「コイツらが襲って来たんで、返り討ちにした。躰がなってねえな。」

「…この度は大変失礼をいたしました。こちらへ、局様がお待ちです。」

この者らは我々にお任せを。」

こうしてヒュームに連れられ、やっと局と出会うこととなった。部屋に入ると血相を変えた局に迎えられる。

「甚爾！」

「おう姉貴。従者の躰ぐらいしろよ。」

「夜蛾、何があつた！」

「はい実は……」

夜蛾はこの全てを伝えた。それに局は怒りを露わに、クラウディオとヒュームは驚きの表情。ここにいる誰もそんな指示は出していない。今日のこの時間に弟が来るから迎えを用意させるよう指示した。

「！迎えを用意させたのは誰だ。」

「はい。マープルです。」

コンコン、失礼致します。と外から声がかかる。その声の主は九鬼の者たちは誰が来たのかが分かり部屋へ入る許可を出す。入ってきたのは、黒いドレスに身を包んだ老婆。

「マープル、これは一体どういう事だ。」

ヒュームが怒気を含んだ声で質問をする。他家の当主、しかも主人の弟を襲わせるなどなつてはならぬことだ。

「申し訳ありません局様。しかし、確認しなかったのです。本当にこのものに力があるのかどうか。裏の世界では、武闘家殺しなどと呼ばれてはおりますが、真実をこの目で確かめなければなりません。それにそのようなものが、局様の弟などと。」

「貴様！この方は禪院家当主となられたお方だ！それを襲わせるなど万死に値する！」

夜蛾が怒り人形を数体動かす。

「私は判断を間違つたとは思っておりません。」

「貴様にはそれ相応の罰を与える。おつて沙汰を伝える。出て行け。」

「失礼致します。」

「待てよ。」

「！」

今まで黙っていた甚爾が待ったをかける。皆が動けぬほどの殺気を振り撒きながら。

「ババア、テメエは目的果たせたから満足なんだろうが、俺は許しちやいない。」

そう言つて何かのスイッチをマープルに渡す。

「これは？」

「さあな？押したら分かるんじゃないか？怖いか？ババア。」

押さねば今貴様を殺す。と言外に言われていると分かり、迷う事なく押した。

しかし何も起こらない。

「甚爾殿？一体なんのスイッチだったのですか？」

ジリリリリリリリリリリリリッ

突如鳴り響く。

「これは！」

『火災が発生しました。火災が発生しました。場所は20階治療フロア繰り返します。火災が発生……』

火災アナウンスが鳴り響き、火災が発生したと伝える。20階には先程の従者部隊150名がいた。

「まさか！」

「お前が殺したんだよ、クソババア。そいつはC4の起爆スイッチさ。お高く止まって気持ち悪い。大量殺人ご苦労様www」

スイッチを落とし膝をつく。自分が殺した事に呆然とする。

「ワリイな姉貴。あんなカスどもはまた補充しといてくれ。それとこのババアの生殺与奪の権利は貰うぜ？2度と俺に舐めたことができないようにな。」

「…それは勘弁してもらいたい。こちらで罰を与えるから頼む。」

「チツ。姉貴に感謝するんだな。だが覚えとけ？今度俺にお前の独断で間接的にでも関わってみろ…老い先短い人生、すぐに終わらせる。」
「ヒューム。此奴を連れてゆけ。クラウディオ、事態の解決に当たれ。」

「かしこまりました。」

―数時間後―

爆発したフロアは、九鬼の建設部門が直すこととなり、マープルは処罰の為に権限は凍結されたのだった。

「姉貴お疲れ。」

「半分はお前だということを忘れるな。」

「やられたからやり返したただけだが？」

「お子様達も、帝様と海外に出ておられて良かったですね。」

「まったく。後で電話がくるだろうが、問題ないと伝えておけ。」

「かしこまりました。」

「甚爾お前も、このままやり返したで済ますわけには行かん。それは分かっておるな。死んだ者達にも家族や恋人はいる。天涯孤独のやつもいたが、全員ではない。どうするつもりだ。」

「状況だけを見たら俺は、自分が助かるかそれとも、150人を犠牲にして助かるか2択を迫って選んだのはあのババアだ。多少強引ではあったが最終的に選んだのは奴だ。そもそもあんな奴を信用してたあんたらの責任じゃないか？」

「私達は呼び出され、襲撃を受けた。身を守る為の防衛。使えなかった奴らを、裏で指示を出していたものが殺した。客観的に見たらそう思うでしょう。」

「まあ揉み消しぐらい手伝ってやるよ。」

「ハア、もうそれで良い。」

「姉貴、老けるぞ？」

「誰のせいだ！まったく。さあ、対応で時間を食った。急いで挨拶に向かうぞ。」

―川神院―

車から降りると院の門前に老人とジャージを着た中国人がいた。

「ようこそ川神院へ。九鬼局殿。」

「ようこそ、オいで下さいマシター！」

「お久しぶりでございます。川神鉄心殿。この度はお時間を取って

ただき誠にありがとうございます。」

「いやいや、老ぼれは時間を持て余していかんのでのう。まったく問題などありませんよ。そちらは大丈夫じゃったかのう？朝に爆発が起きていたようだが？」

「ええ、我々の技術を狙うテロ組織が攻めて来たのですが、たまたま来ていた弟が全て捕らえてくれましたので、問題はございません。」

朝の件は架空のテロ組織が攻めて来たこと、嘘の報道を流して有耶無耶にすることにしたのだった。

「して。その弟君は？」

「はい、少々街を見てみたいとのことで歩いて向かっております。もう暫くお待ちいただけますでしょうか？」

「ホッホッホ、なに全然構わんよ。ゆっくり見て周りこの街を知ってもらわねばのう。出迎えの方は門あたりに来ればワシカルーが気がつくじやろうて。」

「ありがとうございます。」

「さき、立ち話もなんじゃ茶でもどうかな？」

場所は変わり、甚爾は現在九鬼の監視付きで街を散策していた。

「これが川神ねえ。」

「いかがですか？」

「いかがも何も、何だ？あの橋。いきなりフル○ンのオツサンが出て来て、川に落としたと思ったら、メチャクチャ際どい下着の女が出てくるって。」

「ありや通称変態橋って言ってよ。その名の通りかなりの頻度で変態が出んだよ。」

「は？なにそれ？いいのそれ？警察何してんの？てかお前らの監視の目を超えてくる変態って何？」

「「さあ？」」

「つかお前ら誰？」

「ファック！お前忘れたとは言わせねえぞ！」

「ステイシー、相手はあの禪院家当主、局様の弟君でもあらせられま

す。失礼ですよ。」

ステイシーと李が監視としてついて来ていた。そもそも川神院の位置が分からないので、おとなしく監視されていたのだった。

「ほー仕事熱心だな。感心感心。」

「フフツ。聞いてくださいステイシー新しい駄洒落ができました！監視に感心。フフフツ。」

「あのダージーパイ買おうぜ。」

「あつ！良いな！コーラも付けよう！」

2人は華麗にスルー。けどへこたれない。がんばれ李！

ベンチに座り、早速買ったばかりのダージーパイを頬張る。

「へー意外と食べやすいな。」

「コーラとも合うなあ！」

「美味しいですね。」

座りながら歩く人々を観察する。都会と言っても、武の心得のあるものたちが集う場所だと言っても治安はいいみたいだ。

「表向きはつてか」

「?。」

「あるんだろ？アウトローな奴らがいる所。」

「ああ、親不孝通りだな。」

「あそこはとても治安が悪い。オススメはしません。」

ふと、時計を見る。時刻は3時を少し過ぎた頃。そろそろ川神院に向かっても良い頃合いを指していた。

「そろそろ行くか。」

「かしこまりました。あら？」

「李、どうしたよ。ああ。」

なぜか納得する2人。一体だなんだ？2人の視線を追うと、そこには人だかりができ、中心には細身ながらも一目で武闘家だとわかる男と、どこかの学校の制服を着て、黒髪を靡かせ、前髪をクロスさせた巨乳の美少女。

「なにあれ？」

「これから面白いもんが見られるぜ！」

「もう1人は？」

「あそこ」

見ると李いつの間にか、男女の真ん中に。

「これから始まるのは武闘家同士の決闘さ。」

「僕の名は猪山！猪真拳伝承者！武神と名高い川神百代手合わせ願いたい。」

「良いだろう！久々の挑戦者だ！楽しませてもらう。」

「そして僕が勝ったら、嫁に来て欲しい。君に惚れた！」

「ほう。まあいいぞ。勝てたらな。」

外野が盛り上がりお祭り騒ぎだ。この町では珍しくもないのか、皆楽しそうに観戦モードだ。

「あれが。」

「そう。あれが武神。川神百代。わかるだろあの気の量。それだけじゃねえ。武術の才も合わさって、世界的な壁越えの実力者さ。つておい！何処行くんだよ！」

ステイシーの静止を聞かず真っ直ぐに進む。

「まさか！おい、李！今すぐ甚爾様を止めろ！」

「え？」

男はまるで猪の牙のように腕を構える

「くらえ猪真拳！王者の牙突！」

そしてそのまま勢いよく百夜に突進する。

「真正面から来るか面白い！受けて立つ！川神流！無双正拳突き！」

2つの技がぶつかるその瞬間

「お前が武神ねえ？女って事は知ってたが、筋肉マッチョゴリゴリを想像していたが、へえ美人だな。」

間に割って入り、正面から百代の拳を、背後には男の技をくらう。しかし、そんなものどこ吹く風。ダメージなど見受けられず、ヘラヘラと品定めをするかの如く笑う。それに対して驚愕している2人。己の技を防ぐのでもかわすのでもなく、受けてピンピンしているこの

男に驚愕する。

「（私の拳を！本気ではなかったとはいえ、タダで済むはずがない！しかも受けた箇所、心臓だぞ！何なんだこの男は！）」

「貴様！何者だ！僕たちの決闘の邪魔をするな！」

そして男はもう一度技を放つ。

「くらえ！猪真拳！」

だがその時、苛立ちを隠そうともせず振り返る甚爾。その圧倒的な圧にこの場の全体が飲み込まれる！

「壁の前にすらたどり着けてねえ奴が、糞がつてんじゃねえよ。」

その言葉と共に、甚爾の腕が少しブレたと思ったら、男は真後ろに水平に飛んでいき、そのまま電柱にぶつかり砕け散った電柱の下敷きになった。そして改めて甚爾は百代に視線を戻す。

「この程度の殺気に吞まれてる様子じゃ話にならねえな。ガツカリだよ武神。」

「さて！お前は一体誰なんだ！」

「また会おうぜ。」

甚爾が去っていく。慌てて李とステイシーが後を追う、この場から消えて行った。しかし、百代は去った後もしばらくは、その場から動けずにいたのだった。

転入・再会・連なる者

チチチツ、チュンチュンチュン

朝。夏にさしかかり、起きると寝汗をかいている。なんて事は、誰もが経験した事があるだろう。人間ならば誰しも汗をかく。例外はない。そう、この男においても例外ではない。

「…あちい。」

体を起こし、体にかけていた、タオルケットをどかす。己の寝汗の感覚に、不快感を覚えているのは誰であろう。甚爾である。うなじ辺りを触ると、ベタつとする感覚が不快だ。

ガチャ

「あら、おはよう。」

そう言って入って来たのは翔鶴。シャワーでも浴びて来たのか、バスローブを巻き、頭をタオルで拭いている。どおりで、隣に1人足りないわけだと納得する。

「今日が編入初日なのに、昨日あんなにスルんだから。汗すごいわよ？ 瑞鶴と一緒に浴びて来たら？」

「ああ、そうする。…んっ。」

「んっ…じゅぷ…ふ…ぢゅうう…ちゆる…んふ…れる…んんちゅ…これ…んん！…い…ちこ…んん…しちゃんんっ！」

長い長い口付け。離せば2人を繋ぐ糸の橋がかかっている。ダメ押しに橋と翔鶴の唇を舐め、ようやく離れる。

「もう。朝ごはん作ってるからね？」

「おう。」

そう言ってサツサと服に着替え、寝室を出ていった。そして自分も早くシャワーを浴びなくてはと、隣で眠る瑞鶴を起こす。

「おい。いつまで寝てんだ。」

「起きてる。」

「ならさつさと「無理」は？」

「腰。ダルくて立てない。」

完全に己のせいだと分かる。

「(そーい、最後の方、コイツ気絶してたよな。)」

夜の記憶を呼び起こし、原因は分かっていたが編入初日に遅刻したとなれば、局になんと言われるかわかったものではない。

「だから、ねえとうじ…抱っこして?」

口元を枕で隠し、上目遣いで抱っこを要求してくる瑞鶴に、断る事など出来ず抱っこしようとするが、避けられる。

「おい。抱っこしろって言ったのお前だろ。」

「違う。ん!ん!」

違うとは?抱っこをせがんだ。しかし違う。だがどう見ても、いまだに抱っこを求め両腕をこちらに伸ばす。数秒考えついに答えに至った。そして瑞鶴をヒョイツと軽々持ち上げる。

「これで良いんだろ?お姫様。」

「うん。」

満足そうな笑顔で甚爾の胸板に顔をすり寄せる。そのせいか服を着ていないため、瑞鶴の女性の部分が色々とあたり朝から我慢ができてそうにない。2人がシャワー出て来たのはそれから30分後だった。

―川神学園―

「ね?今朝のニュース見た?」

「見た見た!英雄のクローンでしょう!」

「今日の朝礼で会えるんだよね?楽しみー!」

学園内どこでも、九鬼が現代に過去の英雄のクローンを誕生させた話題で持ちきりであった。なんでも今日、この学園に転校してくると今朝のニュースで報道されており、皆が浮き足立っていた。

「源義経・那須与一・武蔵坊弁慶、超ビッグネームだ!クウ、早く会いたいぜ!」

そう叫ぶのはF組の風間翔一。通称風間ファミリーのリーダー。

「お姉様もハイになってるからね。でも…」

「ああ、かなり無理してるな。半年前からずっと…心ここに在らずって時が多い。」

そう武神こと川神百代がおかしくなったのは、約半年前だ。朝に会った時はいつも通りだったが、金曜集会に来た時には心ここに在らずといった感じになっていたのだ。それからと言うもの、鍛錬中に虚空を見つめ何かを呟き、何も無い空間にあたかも敵がいて自身は何もできず動けない状態の様な感じで、ただ立っただてている事が見受けられる。

「だが、もも先輩とて英雄のクローンが相手となれば前みたいに戻るに決まっている。」

「クリスに賛成。今はもも先輩を見守ってあげよ。母親の如く母性に溢れる女です。大和結婚して。」

「お友達で。」

「ちっ、ダメか。」

「前半の言葉に賛成の言葉を返したら、そのまま後半も賛成したことになりそうだったからな。」

そんな風間ファミリーの、いつものやりとりをしていると、担任である小島梅子が教室に入ってきて来た。

「みんな、おはよう。」

「」「おはようございます！」「」

「早速だが、これからグラウンドで全校朝礼を行う。すみやかに廊下に整列して移動を開始するように。」

ーグラウンドー

「ウオッホン。皆おはよう。」

川神学園学园长、川神鉄心が挨拶をする。

「今朝のニュースで既に知っておるだろうが、今日より学友が増える。高め合う相手としても最高級じゃ。仲良くするように。ちなみに転校してくるのは、8人。」

え？8人？とそこらかしこで疑問の声が上がる。義経、弁慶、与一の3人では？ニュースでも3人と報じられていた。

「ホッホッホ。皆の疑問は最も。武士道プランの申し子は4人。2人

は関係者。後の残りの2人はまた別組じゃ。まずは3年生、3―Sに1人入るぞい。」

「ほう、私のクラスか。…物好きな奴もいたものだ。」

そう発言するのは3Sの京極彦一。言霊を操るイケメンだ。

「残念で候。しかしこの時期にSとは、随分な学力で候。百代?」

3―Fの矢場弓子が百代に話しかけるが、彼女は上の空。歴史的武人のクローン。この武神が、食い付かないわけがないと思っていたのに、この反応。2人は百代が大丈夫なのか本気で心配になって来た。

「それでは葉桜清楚、挨拶せい。」

鉄心の声とともに、しゃなりと女の子が前に出た。そのまま、ゆっくりと壇上が上がっていく。

「…これはこれは…なんとという清楚な立ち振る舞い。」

男子達からは、はあーと言うため息が漏れた。

「初めまして、葉桜清楚です。皆さんと会えるのを、楽しみにしていました。これからよろしくお願いします。」

男子達から歓声の声上がる。まさに、大和撫子といった振る舞いに皆歓喜した!

質問タイムに移り、卑猥な質問をしたものは、梅子にしばかれる。

だが、皆気になっていた質問が上がった。葉桜清楚は誰のクローンなのか? 葉桜清楚などと言う武人は、存在しない。

「実は、私も知らないんです。」

?

「で? 実際のところどうなんです? 英雄。」

質問するのは葵冬馬。

「実の所、これについては我にも知らされておらんのだ。」

答える男は、九鬼英雄。甚爾にとつての甥である。

彼女は、自身が25の歳を迎えるまで誰のクローンなのか教えてはもらえないらしい。なぜ25歳なのか? 謎は深まるが次の者の紹介に移るのだった。

「皆、テンションが上がって来たようじゃな。よいぞ、よいぞ! 2年に入る5人を紹介じゃ。全員が、2―Sとなる。」

「ほう、此方達たちのクラスとは命知らずな奴。」

「まず、源義経、武蔵坊弁慶。両方女性じゃ。」

その言葉に、義経は美男子と語られていたことから、美少女だと皆思ったが、弁慶は違う。ゴリマッチョの厳つい女だと誰もが想像した。

「こんにちは、一応、弁慶らしいです。よろしく。」

まさかの、おねいさん系の美人だった。

「結婚してくれーーーーー！」

「死に様を知った時から、愛してましたーーーーー！」

皆、手のひらを返すのが早かった。

2人も早速自己紹介に移ったのだが、そこで弁慶が川神水を飲み酔っ払ってしまった。なんでも、学年3位をキープするのを条件に学校内で川神水を許可されたのだった。

「では次に那須与一、出ませいー！」

しーーーーーん。

「「「「「？」「」「」「」」」」」

姿を探すも、どこにも影も形も見当たらない。

与一は…サボった。この時点で弁慶によるお仕置きが決定したのだった。当の本人はと言うと、屋上のベンチに寝転がり

「ふん。たかだか2年の付き合いで、何故群れる必要がある。」

得意武術 弓

性格 中二病

「ふう、仕方がないのお。では切り替えて、続いて残りの2人を紹介と行きたいが、家の用事で遅れると連絡があり、最後にするぞい。続いては1ーSに入る2人じゃ。」

その時、校門にリムジンが止まり九鬼の従者達が並んで肩を組み始める。そしてその上を優雅に歩く少女。

「ふははははははー！」

全校生徒が悟った。

「何を隠そう、我の妹であるー！」

((((見たら分かるわ!)))

「見たら分かるわ!」

((((よく言った!不死川!)))

心の中で皆が称賛を送る。

「この度、飛び級で入る事となった九鬼紋白である!皆よろしく頼むぞ!」

「自分が恋に落ちる瞬間を、自覚してしまった。」

ロリコンハゲが何か言っつて、周囲の女子達から冷めた目で見られる。

「あの、もう1人は?」

壇上に立つのは紋白とその護衛。まさか?

「1ーSに入る事となりました。ヒューム・ヘルシングです。皆さんよろしく。」

もう何も言うまい。

「あの人が。」

「強いで候?」

「強いなんてもんじゃないぞ。九鬼の零番だ。けど、お年かな?思っただよりも強くなさそう。」

「打撃屋としては筋肉量が足りないなあ。」

「いつの間に背後に!」

「今わかった。お前もまだまだ赤子だ。」

シュン!

「消えたで候!」

ヒュームが消えると同時に、壇上にはクラウディオが現れる。

「皆様、私は九鬼家従者部隊序列3番クラウディオ・ネエロと申します。今回、武士道プランを成功させるべく我々、従者部隊が校内に立ち入ることになります。どうぞ心配はなさらないでください。」

まさに紳士といった振る舞いで、理解を得たのである。

「というわけじゃ。皆は気にせず勉学に励むが良い。」

ここで生徒の中から質問が上がる。

「残りの2人の紹介はまだですか?」

ギャーーーーー！

女子からは興奮の声があがり、男子からは希望が打ち砕かれた悲鳴があがる。

「だから先に言っておきます。他の男子に靡く気は全くありませんので、諦めてください。あと、その眼鏡をかけた方。先ほどから私に流し目を送っていますが、正直気持ち悪いです。」

「…」

「トーマの視線キモいつてw」

「ドンマイ若」

「マジ！あのエレガントクアット口の冬馬君の視線さえも！」

「マジやばい！てか、その許嫁どんだけイケメン系!？」

「葵でダメならガクトじゃ希望もクソもないね。」

「くそーーーーー！」

「大和に惚れるなんて事はなさそう。」

「(うーん、どうにかして連絡先を交換したいけど無理そうだな。)」

「大和。連絡先交換は諦めた方がいいかも。」

「あれ？京、俺口に出してたか？」

「そんな顔してた。」

各クラスでいろんな反応が確認されたが、それほど夢中にさせる許嫁とは一体何者？と囁かれる。

「では、次で最後じゃ。出ませい！」

しーん

与一に続いて、最後の転校生までもがサボリという状況に皆驚く。すると何処からか悲鳴が聞こえ始め、それはだんだんと大きくなっていき、それが上空から聞こえてくるものだと分かり、皆が視線を上げると空から与一が降って来た。

「与一！」

これには義経と弁慶が共に驚愕。

「あ、姉御！受け止めてくれ！」

「何やってんのアンタは！」

与一を受け止め、そのままに起こったのかを問いたです。

「お、屋上にいたら、急に体を持ち上げられてここまで投げ飛ばされた。顔は見えないが、この学園の制服を着ていた。もしかしたら組織からの刺客が既にこの学園に！」

「何バカなことやってんの！」

お仕置きに弁慶からチョークスリーパーを喰らう。

「ギブ！ギブ！」

そんなやりとりを見守る中、大和は考える。

「(学園の制服を着て、かつ男を屋上からここまで投げ飛ばせる人間。そんなの姉さんやマルギツテ、あずみさん他は数名程度しか知らないぞ。もしかして。)」

「ホッホッホッ。与一を連れて来てくれて感謝するぞい。しかし、もうちよい丁寧にしてやらんか。」

鉄心が百代に視線を向けながら話す。正確にはその後ろに。

「あれで怪我や死のものなら、英雄なんぞやめちまえばいいだろ。その程度のやつだった。それだけだ。」

「「「「「！」「」」」」」

突如として聞こえた声は、ある者は警戒し、ある者は変わらないと苦笑いを浮かべ、ある者はこの半年もの間、探していた声の主とようやく会うことが出来た。

「お前は！」

「よお。同じ日にこの短時間で、2度も背後取られるとか。ヒュームが赤子扱いする訳だ。半年前と変わっちゃいねえ。弱いわ、お前。」

音も立てず、気配すら悟らせず、周囲の者たちですら普通ならば視界に収めていたはずなのに、声を発するまで気が付かなかった。天からの呪縛を受けた怪物。禪院甚爾がそこにいた。

「あ、あいつだ！あいつが俺を屋上から投げたんだ！」

「黙れ中二病。今度は人気のない場所にでも投げてやろうか？」

目が本気だと語る。

「おい！」

「あ？なんだ武神。」

「私と勝負しろ！」

「…アハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

百代からの申し出を腹の底かは笑う。

「お前。本気か？」

「当たり前だ！」

「そうか。」

すると突如、甚爾の身長が伸びる。

（なんだコイツ！いきなり高く、いや違う。私が低くなったのか？ひびきを…ついて。あれ？なんか頭がクラクラする。まずい意識が。）
そしてそのまま百代は這いつくばる。その光景に誰もが驚く。あの武神がやられた！いつの間に！どうやって！何が起こったのか分からずただただ驚愕する。

「ヒュームがさっき親切に押さえてたろ？お前の頼りの瞬間回復。それを封じる方法の一つだ。瞬間回復がオートなら別段意味はないが、結局はお前次第のマニュアル発動。ならそれを行う思考や集中力を出来なくさせてやればいい。簡単な話、俺が今やったのはお前の顎先を殴って脳震盪を起こさせた。ただそれだけだ。」

「…っ」

「あ？どうした。もしかして、俺の拳が見えなかったのか？」

そう。百代は甚爾の拳どころか、殴られた事にさえ気が付かなかった。

甚爾はどうでもいいとばかりに、壇上に向かう。ゆったりと歩く。自然と皆が避け道が出来上がる。そしてそのまま、壇上に上がる。

「で？何を言えばいいんだ？」

「軽く自己紹介ぐらいで良いぞい。」

「んじやまあ、禪院甚爾。よろしく。」

「「禪院！」」

反応を示したのは、大半がSクラスの者たち。有名な資産家から古い武家の家柄まで色々な上流階級が集うSクラス。そんな者達ですら度肝を抜く。

「これからよろしく。」

こうして波乱の朝礼は解散となったのだった。

121S教室1

「そんな訳で、今日からこの5人が新しく仲間になるから。おじさんちよつと不安だわ。」

2Sの担任、宇佐美巨人は本音を吐く。

「じゃあ、聞きたいことある奴とかいたら質問していいから。」

巨人がそう言った途端、席を立ち前が出るドイツ軍人。マルギツテ・エーベルバツハ。

「お久しぶりですね。甚爾。」

「よお。半年ぶりか？つか、なんで日本にいやがる。軍はどうした？」「以前に言ったではないですか、お嬢様が日本に留学すると。その護衛です。」

「へえ。この学園だったのか。」

「ええ。向こうリユーブツクと川神は姉妹市の関係でこの学園に。」

「なるほどね。そりゃ知らなかった。で？そんな近況報告をし合うために出て来たんじゃないやねえだろ？」

その言葉を待っていた。そう言わんばかりの顔をするマルギツテ。

「ええ、この学園のシステムについては？」

「聞いてる。」

「では分かりますね？」

そう言ってバツジを机の上に置く。

「この学園では新参者に歓迎の意味を込め、決闘を申し込むのが通例です。洗礼をくれてあげましょう！」

「ちよつと待って。」

「ん？」

すかさず瑞鶴が割って入った。

「その決闘、私じゃダメかな？」

「おい。」

「とうじ、アンタ今の顔ヤバイよ。まだ朝の熱が尾を引いてる。勢い余って殺しちゃう。だから変わって。」

「…」

反論しない。いや、出来ない。なぜならば、瑞鶴が言っていることは本当の事であるから。申し込まれた決闘。多血統血から戦っていない甚爾は、是非とも戦いたかった。だが、ここまで真剣に言われている…。

「チツ、構わないか？マル。」

「構いません。では瑞鶴、グラウンドに出なさい。」

ーグラウンドー

HR中だと言うのに、全校生徒が決闘を見る為に外に出たり教室から覗くなりしている。今回の審判を務めるのはルーだった。

「それでは双方構えて。」

互いに、レプリカの武器を構える。マルはファイティングポーズ、瑞鶴は、鞘にしまったまま体を少し斜めに構える。

「始め！」

先に仕掛けたのはマル！ではなく瑞鶴。構えからして、居合いの類いを使う剣士だと思っていたマルは、驚きつつも防御の構えを取る。

「いくよ。」

「来い！」

刀を抜刀。そしてそのまま振り下ろす。甲高い音が響く。

「(速くそして重い！)」

瑞鶴の連撃は止まらない。まるで舞を舞うかの如く繰り出される美しい攻撃に、皆が見惚れる。

2ーF

「すごい。」

「うん型の繋ぎの隙がない。」

「私も戦ってみたいわ！」

「ワン子はその男と戦ってみたいんじゃないのか？」

「うん。お姉様に膝をつかせた実力を確かめたい。けど瑞鶴とも戦い

た〜い。」

教師陣

「スゲ〜。」

「思わぬ収穫だ！こんなにも素晴らしいデータが取れるなんテネ！」

「オ〜マーベラス！強くそして美しい！」

「なんとという動きだ。あれでは私の鞭すら簡単にかわされるな。」

「ホッホッホ、こりやたまげたわい。純粹ではないとはこう言う事かの。」

「どう言うことですか、学園長？」

「そろそろじやろうて。」

鉄心の言った通り事態は動こうとしていた。

「トンファーブリッツ！」

かわしながらの反撃。マルが反応して避ける。だがそこで足をもつれさせ膝をつく。本来ならばあり得ないミス。

（なんだ！頭が痛い！）

「いくよ」

「！」

【遠鳴】

（なんだ！耳が！痛い痛い痛い！頭が割れる！）

「そこまで！勝者、鶴海瑞鶴！」

「ごめん。大丈夫？」

「ハアハアハア、今のは？」

「私はね、刀のぶつかる音や空を切った時の音を利用して、相手を攻撃したり平衡感覚や幻覚を操るの。」

「!」

「そうか」

「分かったで候?」

答えにたどり着いた京極に弓子が質問する。

「彼女はワザと、マルギツテがギリギリで避けることが可能な攻撃をしてその音を利用したのだろう。刃を交えてもダメ、避けてもダメ。なかなか厄介だ。」

「な!そんな事が可能なので候!?!」

「現に彼女はそれを行なった。」

「(無理無理無理!挑戦してみようと思ったけどそんなの勝てない!けど遠距離なら…ダメだ。簡単に避けられて、接近される未来しか見えない)」

ようやく回復してきたマルギツテは、瑞鶴の手を借りながら立ち上がる。

「参りました。素晴らしい腕です。もしよければ猟犬部隊に入りませんか?」

「ありがとうございます。だけど私は支えないといけない奴がいるから。」

「そうですか。しかし、一言あの男に物申さねばなりません。」

「ジークさんでしたっけ?彼、彼女のことも考えてますよ。いつかこちらに呼ぶ考えもあるみたいです。」

「そうですか。ではそれは当人同士に任せるとしましょう。今回は得るものが多かった感謝します。」

「こちらこそ。」

握手を交わす2人に賞賛の拍手が贈られるのだった。

「さーてお前ら、教室戻るぞ。」

「少し待て。」

「お?なんだ九鬼、今度はお前やんの?」

「そうではない。」

九鬼英雄は真つ直ぐと瑞鶴に視線を向ける甚爾に近づく。その後ろにあずみが続く。

「話は母上やヒューム達より聞いております。お初にお目にかかります。我は九鬼英雄、お会いできて光栄です。叔父上。」

「叔父上！」

「お前がねえ。はは、どことなく兄貴に似てるな。」

「兄貴とは、父上のことでありますでしょうか？」

「まあな。ん？お前過去に無理して肩でも痛めたか？服の上からで分かりづらいが、少し変に繋がってんな。」

甚爾の言葉に驚く侍従。

「はい。過去にテロに巻き込まれた際に怪我を負いました。」

「そうか。だが生きてるだけいいだろう。姉貴が泣く。」

「はい。」

「おい英雄。」

「何でしょうか叔父上。」

「それだ。」

「え？」

「学園で叔父上はやめろ。公式の場ならともかく、ここは学園で俺とお前はクラスメイト。分かるな？」

甚爾の言葉を噛み締めるように、目を閉じて数秒固まり再度目を開く。

「うむ！これからよろしく頼むぞ甚爾！」

「…はは、それでいい。」

「我々にも紹介してくれませんか？」

英雄が振り向けば、冬馬達3人組がいた。

「そうだな！甚爾、こちらは我が友の葵冬馬、榊原小雪、井上準だ。こちらは説明は要らぬだろう。禪院甚爾、我の叔父にあたる。」

「初めまして、葵冬馬と申します。仲良くしてください。色んな意味

「でね。」

「ウェーイ、マシユマロ食べる?」

「若には気をつけろ。どっちもいける口だから。」

「そう言つて各自が自己紹介をしてくる。」

「禪院家六十代目当主の甚爾だ。好きに呼べ。あと俺はそっちの趣味はねえから。許嫁いるし、てか瑞鶴。」

「何?」

「いつの間にか英雄とあずみに挨拶をしていた瑞鶴を呼ぶ。近づくと肩を抱き寄せる。」

「ちよつ!」

「コイツがそうだから。さつきみたいな視線を送ろうものなら消すぞ?」

「肝に銘じておきます。」

冬馬にしつかりと釘を刺し、そろそろ時間かと巨人がHRを終えようとする。

「待つのじゃ!」

「なんだ不死川?」

「禪院甚爾!」

「あ?」

「此方は不死川 心。此方の苗字に覚えはあろう! 貴様よくも!」

まるで仇を見るような目をして迫る。

「?」

「そう言われても、初対面である心と覚えがあるだろうと、言われてもないとしか言いようがない為、返答に困る。だが、隣の瑞鶴は何か気が付いたようでブツブツと小さく呟きはじめた。」

「おい。なんか分かったか?」

「もしかしてだけど。ねえ不死川さん、貴女もしかして要様のご親戚?」

「いかにも! 此方は要姉様の従姉妹! 禪院甚爾、貴様よくも姉様を! 許さぬ!」

要は心の従姉妹だった。要の両親はカナメが産まれてから離婚し、

川神学園

キーン コーン カーン コーン

休み時間になり、2Sの教室前は多くの生徒がひしめいている。一目義経達を見ようと集まっていた。

「仕方がありません。私が追ひましよう。」

そう言つてマルギツテが教室を出ていき、生徒達を散らしたはずだったのだが、なぜか何人か教室に入ってくる。その中に知った顔があり、甚爾はなるほどと納得した。入つて来たのは風間ファミリー。そのメンバーの中にクリスがいる。だからマルギツテも通したのだらうと、考えていると本人が近づいて来た。

「久しぶりだな！とうじ！」

まさか甚爾と面識があるとは思わなかった風間ファミリー面々は、驚きの表情。

「おう。」

「あの時の事は本当に感謝している。ジークもお前に会いたがつていたぞ？そう言えば連絡先も交換していないそうじゃないか。ほらコレがジークのメアドと電話番号だ。時間ができたら連絡してあげてほしい。」

「勝手に他人の連絡先渡して良いのかよ。上司であるお前はいいのか？マル。」

「むしろジークは喜ぶでしょう。近々ドイツに赴いては？」

「…そうだな。」

縁がある2人と話していると、風間ファミリーが寄ってくる。

「貴方凄いわね。お姉様に膝をつかせるなんて。今度私と勝負しましょうー！」

「だれ？」

「私は川神一子！よろしくね！」

「武神の妹か？」

「そうよ！」

「俺は島津岳斗！なかなかやるじゃねえーか。まあ俺様の筋肉には敵

わないがな。」

「僕は師岡卓也。よろしくね。」

「椎名京。」

「アンタすごいな。姉さんといいい勝負が出来るなんて。俺は直江大和。よければ連絡先を交換したいんだけど、どうかな？何か手伝えることがあれば手伝うし、逆に手伝ってくれると嬉しい。」

「…」

「どうじ。」

「あ?」

「面倒って顔に出てる。」

瑞鶴に指摘され、思わず本音が顔に出ていた事にさらにめんどくさいと思ってしまう。

「貴女もすごかったわね！マルとの勝負見てたわ！私とも勝負しましょう!」

「ぜひ自分とも頼む!」

一子の誘いに便乗するクリス。

「申し訳ないけれど、それは無理。」

返答はNO

「えっ!どうして!マルとは戦ったじゃない?」

「この学園の通過儀礼みたいなものなのでしよう?歓迎の意味を込めたの決闘は。そもそもあの決闘は、マルギツテさんがとうじに挑んだのだけど、理由があつて私が代わりにやったのよ。本当なら勝負はしないわ。」

「えーいいじゃない!楽しいわよきつと!ね?勝負しましょう!」

それでも諦めない一子。それに呆れた瑞鶴。どうやって諦めさせようかと瑞鶴が悩んでいると、助け船が出された。

「ワンコダメだろ、鶴海さんが困ってる。人には色々事情がある。」

「…そうね。ごめんね瑞鶴。」

「いいえ気にしないで。ありがとうね。えつと…」

「直江大和。」

「直江。」

「どういたしました。お礼に連絡先交換してくれない？いつでも力になるよ。」

「は？」

瑞鶴が発した声に教室内の気温が下がったように思えた。

「悪いけれど、初対面で連絡先交換はしないわ。助け舟を出してくれただことには感謝するけれど、それとこれとは別。」

「ご、ごめん。」

不味いと察しすぐに謝る大和。後ろで声を殺して甚爾が笑う。

「何笑ってるのよ。」

「ククク。少しは加減してやれ。武神で慣れてはいるだろうが、至近距離で殺気を浴びる事はそうそうないだろからな。見てみる、膝震えてんぞ。」

甚爾に指摘され、大和は自分の膝が震えている事を初めて自覚する。

甚爾程ではなくとも、裏社会の家業をこなして来た瑞鶴の殺気を手加減されながらも浴びた当然の条件反射。無意識の警告。

「ごめんなさい。少しやり過ぎたわね。けれど、君も少し強引過ぎると思うから気をつけた方がいいよ。それに、夫持ちの女にそんなに強引に迫ったら、犯罪だよ？」

えっ？夫？瑞鶴の発言にまさかと思う一同。そんな考えをよそに、瑞鶴はするりと甚爾の横に行くと、そのまま甚爾の腕を抱きしめる。

「私は禪院家の分家の者。ここまで言えば流石に分かってくれると思うけど、一応言っておくわね。私は甚爾の許嫁、鶴海瑞鶴。あらためて皆様、どうぞよしなに。」

そう言って優雅に微笑む。その顔に男子生徒達が少し前屈みになる。理由は察せ。

「ん？」

「どうしたの？」

「嫌な予感。」

甚爾の直感が自身に迫る何かを感じた。この直感がハズレた事がない為に、めんどくさい事が起こると既に諦めモードの甚爾。そして

それは来た。教室のドアを蹴破つて。

ドガシヤアアン！

「私と勝負しろ！禪院甚爾！」

「盛ってんじゃねえよ。てめえも知性ある人間だろうが、発情したら抑えの効かない獣じゃあるまいし。」

入って来たのは百代。もう我慢の限界と目が、発する闘気が言っている。今からお前を襲うと。

「まてえい！・少しお待ち下さい。」

だがそこに、待ったをかける声が2つ。鉄心とクラウディオであった。

「どけ！じじい！なんと言われようとも、私はそいつと戦う！」

「モモ、今回ばかりそれは認められん。」

「知ったことか！」

鉄心を無視して、甚爾に迫る百代。だが、そうやすやすと見逃す川神流の総代ではなかった。

【顕現の式・持国天】

鉄心の技で吹き飛ばされる百代。百代が吹き飛ばされる光景を見て驚愕する生徒達。対して甚爾は冷静に状況を楽しみながら見ている。

（へえ。威力はお粗末。だがそれと引き換えに絶対必中効果を得てるわけだ。だが、威力がお粗末に感じるのには一定のレベルを超えた奴らぐらいだろうな。雑魚が喰らったんじやひとたまりもねえ。あのじいさん、全盛期を過ぎて弱くはなってるだろうが、技の熟練度は比べ物にならないほど段違いってわけだ。おもしろいな。）

「ご無事でございますか？甚爾様、瑞鶴様。」

甚爾が考えを巡らせていると、クラウディオが声をかけてくる。

「ああ。それより英雄の方を心配するのが普通だろうが。」

「それにつきましては、あずみが付いていますので心配には及びません。貴方様は、我等の主人の弟。そのような方に、傷の一つでも負わせては顔向けが出来ません。」

淡淡と事実を返すクラウディオに、もはや宗教の域だなと感じる甚爾。

「いきなり何するんだ！じじい！」

傷など見当たらない百代が戻って来た。

「モモ今度ばかりはいかん。あきらめい。」

「私が理由をご説明いたします。」

クラウディオがささず前に出て、百代に甚爾と戦えない理由を説明し始める。

「甚爾様は我等、九鬼財閥のトップたる九鬼帝様の妻局様の実の弟君で有らせられます。そして、平安の時代より続く禪院家の今代の御当主様でも有らせられます。故に傷を負わせる事を良しとは出来ません。」

「そう言うことじゃモモ。格式ある家の当主に傷を付けたとなれば大問題じゃ。故に決闘を受理するわけにはいかん。それにこやつとお前の決闘をもしやるとしても、この学園が被害を被る。」

2人の言葉を黙って聞いていた百代。

「そんな事知ったことか！私には関係ない！どけ！」

説得は無意味だった。気を練り上げ放出しまくる百代。致し方ないと鉄心は心を鬼にして、孫娘をこの場で気絶させようと動く。

「別に構わんぜ？てかお前らが勝手に決めるな老害ども。お前から消そうか？」

「しかし、甚爾様。貴方様にもしもの事がありましたら、我々は局様に顔向けが出来ません。」

「無駄ですよ、クラウディオさん。」

「瑞鶴様。」

ゆつくりと百代に歩み寄る甚爾を見ながら話す瑞鶴。

「今朝呼び出された件。アレがなければもう少し甚爾も抑えられたのでしょうが、もう無理です。」

「今朝の件については誠に申し訳ございません。」

「いいんですよ。私が被害を被ったわけではありませんし。それよりも揚羽様はご無事ですか？」

その言葉に英雄とあずみそして、鉄心と百代も食いついた。

「姉上がどうかしたのか！」

英雄が姉である揚羽に何かあったのか？クラウディオに問う。主に隠し事はできないと、今朝何が起こったかを話し始める。

登校前、甚爾達は局に呼ばれ九鬼ビルまで来ていた。今度は襲撃される事もなく、頭に鉢巻を巻いた青年執事、武田小十郎と名乗る者に部屋まで案内された。案内されるまではよかった。通された部屋に呼び出した局以外の人物がいなければ。背後の扉が閉められ外から施錠される。

「で？なんだお前？大方見当はついてる。用があるならさっさとしろよ、姪っ子。」

「フハハハハ！まずは初めましてと言っておこう叔父上。我は九鬼揚羽！九鬼家軍需鉄鋼部門の統括をしておる。先程案内させたのは私の側付きの小十郎。奴とも仲良くしてやってほしい。」

「ご丁寧にどうも。禪院家当主、禪院甚爾。お前の叔父だ。姉貴は何処だ？呼び出しを受けてんだが？来るまでお前が話し相手か？」

ニヤリと笑いながらゆっくりと距離を詰めてくる揚羽。体から発する気が今後の展開を容易く教えてくれる。

「ええ、母上は現在ブラジル支部との連絡を行っております。故に我が叔父上を退屈させぬようにと。」

「お気遣いどうも。それと気持ち悪りいから敬語はやめろ。年はそっちが上だ。けど俺は敬語なんざつかわねえからそのつもりで。」

「構わぬ。では楽しい楽しいお喋りタイムと洒落込もう。」

「最初からその為に、姉貴の名を語って呼びつけたんだろうがアゲハ！」

「ゆくぞトウジ！」

最新の技術の大結晶とも言えるビルを、大きく揺らしながら叔父と姪の遊びが始まった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「全くあの子らは落ち着きのない。」

「未来に進む若者は元気が一番でございます。」

局の空いたティーカップにお茶を注ぐクラウディオ。

「揚羽は放課後まで待てなかったのか？これでは確実に遅刻ではないか。」

「午後からは各部門の一斉会議の予定が入っており、この時間しか空きがなかったようです。」

「全く。頼めるか？」

「はい。これから私も学園に向かいます。遅れることはお伝えいたしまししょう。」

「頼んだ。」

ふうーと息を吐き、一口お茶を飲むのだった。

「フハハハハハ！」

場所は戻り、現在2人は元気に戯れあっていた。

【九鬼雷神金剛拳】

百代の拳に引けを取らない技が惜しみなく浴びせられる。

「こりやなかなか効くなあ」

「効くのならば、多少は痛がるふりをしてから言え！はあああ！」

拳をわざと打たせまくる甚爾。顔は余裕綽々、涼しげだ。対して揚羽は内心焦っていた。

（想定はしていたが、想定以上！何というタフネス！体の何処を攻撃してもまるで鉄より硬い何かを打っているかのよう。加えて彼方からはいまだに攻撃らしい攻撃が来ない。）

己の技の数々が、躲すそぶりも見せず全て受けて立っている目の前の男。先ほどから自分ばかり攻めに出て、向こうは立ち一辺倒。

「貴様、やる気はあるのか？」

「あるわけねえだろ。軽く二百発は超えたか？そんだけ打たせてやつてもこの程度。遊んでやる価値もない。」

再度突撃を仕掛ける揚羽。顔面に向けてのラッシュ。そのまま右手の貫手で喉を一突き二突きと段々増えていく！

一度バックスタッフで離れて十分な距離を確保。そして着地と同時に特攻。ヒールで右足を踏み抜き、地面に縫い付けそのまま顔の側面へ左回し蹴り。

「これで多少は…！」

「流れるような技の繋ぎにそのパワー、お見事。だがまだ届かない。」
甚爾は変わらず立っていた。

「貫手が意味を成さないと理解して、蹴りに変えただろ？馬鹿が、その時点で諦めろ。気を込めた貫手で貫通出来なかった俺の体に、打撃はきかねえよ。」

「ではこれで最後！」

揚羽が急接近。

「！」

「くらうがいい！九鬼家決戦奥義！」

【古流掌底破】

顔面にクリティカルヒット。されど後ろには倒れない。

「タフだな」

「最後のはなかなか良かったぜ。」

スウーーーーー

大きく息を吸い込み！

「！……………」

ビリビリビリビリ！

ビルすら揺らす大声量による鼓膜の破壊と脳震盪を起こさせ気絶させた。

「あ、アゲハ様……………」

勢いよくドアを開けて入ってくる小十郎に向けて、アゲハへの伝言

を伝えた。

「久々に血がたかぶった。そう伝えろ。」

そしてそのまま学校へと向かうのだった。

「あのバカ！後でしばく！」

瑞鶴を忘れて。

「と言うことがございまして、現在は治療は既に終え仕事に励んでおられます。」

「そうか、大事なのだな。流石は姉上！」

「まったくでございます！英雄様！」

英雄は流石は姉だと尊敬し、その姉を声量だけで倒した甚爾をも尊敬する叔父と捉えた。しかしあずみは真逆の恐怖を覚える。

（おいおい、嘘だろ？揚羽様を声量で倒すだあ？そんな事、武神でも無理だったろうが！やべーよマジやべーよ。元とはいえ揚羽様は武術四天王の1人だったんだぞ！それを声量だけでなんて。アイツの機嫌ひとつで命なんかあっさり決まっちゃうじゃねえか。もし戦うなんてことになったら守りきれない。）

そう思いながら甚爾と武神を見る。2人は今にもキスが出来そうなほど顔を近づけて、睨み合っていた。

「で？どうする？今やるか？」

「もちろん。」

スツと甚爾が離れる。

「いいぜ。ただ条件付きだ。」

「なに？」

「さつきコイツらが言ったように、俺とお前が戦えば被害は絶対。俺はかまわねえが、コイツらは戦いを認めない。だから条件をつける。」

甚爾が出した条件は五つ

・攻撃はターン制で互いに一回ずつ行う。

- ・ 防御又は回避を行なってはならない。
- ・ 建物または他の生徒に被害が及ぼしてしまうと負け。
- ・ 相手を殺める攻撃は負け。

「最後の一つだがコイツを使う。」

そう言つて甚爾がポケットから取り出したのは、アストロダイス。

「ここに2つダイスがある。同時に投げて青い方がかけられる数、赤い方がかける数。もう分かるな？両方同時に投げて出た数かけた数が攻撃回数だ。最初のルールの1ターンに出た回数相手に攻撃を仕掛けていい。ただし、最初に決めた攻撃回数の変更はなしだ。質問は？」

「ないーさっさと始めるぞー！」

およそ美少女とはかけ離れた獣がそこにいた。

最初にダイスを振るのは百代

青Ⅱ2 赤Ⅱ10 2×10Ⅱ20

百代は計20回の攻撃権を得た。それを見た周りの反応は、うわアイツ終わったなあ。と言ったものばかり。百夜の強さを知っているからこそその反応である。

続いて甚爾

青Ⅱ3 赤Ⅱ1 3×1Ⅱ3

甚爾の攻撃権はたったの3回。それを見て周りには完全に百代の勝利ムード。百代もニヤニヤしながら問うてくる。

「どうする？もう一度やり直すか？私は一向に構わないぞ？」

きゃーモモお姉様ステキーなど姐さん流石っす！とモブどもの声が聞こえるがそれを打ち破るかの如く発せられる殺気！

「！」

「気の弱い者は下がるのじゃ！破！」

甚爾が発した殺気を鉄心がギリギリ打ち消す。

「変更はない始めるぞ。」

こうして始まった変則の決闘。

「先行はもらうぞー！川神流、無双百烈拳！20回バージョン！」

本来百発の正拳を20回に絞りさらに打たない80回分の威力も

込められた。風圧で土煙が舞う。そこまで！と鉄心の声に動きを止めた。他の教職員が担架を用意し始めすでに終わりムードだった。数秒前までは。

「朝も言ったか覚えちやいないが、半年前とかわらねえ。弱すぎる。」
「ばかなー！」

土煙が晴れるとそこには、両手をポケットに突っ込み仁王立ちする甚爾。

百代の動揺は周囲のものよりも凄まじかった。

（バカな！顔に5発、首に3発、両肩に1発ずつ、脇腹に2発ずつ、腹に6発叩き込んだんだぞ！それを無傷！ありえない！）

「次は俺の番か。」

「くっ！」

「たったの3発だ。耐えろよ？そんじゃ始めるか。」

3発で神を狩る。

1発目顔面を捉える。受けた百代は仰向けに倒れた。そんなこと知ったことではないと、そのまま2発目をまたも同じ顔面に喰らわせる。そして倒れる百代を中心にクレーターが出来上がる。3発目最後は己の黒閃でと思っていたのだが。

「それまで！勝者、禪院甚爾！百代はすぐに病院に運ぶのじゃ！」

「救急車の手配は済んでおります。こちらに。」

流星はクラウディオ。そう思いながらグラウンドから立ち去る。その後ろ姿を誰もが恐怖の眼差しを向けていた。たったの2発で武神を倒した男の背中を。

武神の敗北。その情報は瞬く間に世界に広まった。

「武神が負けただと！倒したのは一体誰だ！四天王の誰かが!？」

「いえ、転校生との事で。」

「すぐにそいつを調べ上げろ！」

―また別の場所―

「武神の敗北か。倒した者の名は？」

「はっ！禪院甚爾師父にございます。」

「アハハハ！そうかトージがククク。」

―またまた別の場所―

「社長、ご報告したいことが。」

「君。今はレディと商談中だ。後にしたまえ。」

「いえ、私は構いませんよ。どうやら此方も何かある様です。」

「失礼。で？なんだ、大事な商談の話し合いを遮ってまで。」

「そ、それが武神が敗北したとの情報が。」

「なんだと！…レディ申し訳ない。私はすぐに本社に戻らなければいけない案件が発生したようだ。この話し合いは、また後日でもよろしいかな？」

「ええ、此方も緊急の案件がもしかしたら、そちらと同じかもしれないわね。」

男は一礼して去って行く。

「久しぶりに会いたいわね甚爾。」

「招待状を出されてはいかがでしょうか？」

「理由はなんて？」

「そうですね。こたびの当主になられたお祝いならば、招待を受けてくださるかと。」

「そうね。けれど、まだ時期ではないわ。ありがとう。ユン。」

「もったいなきお言葉です。宝様。」

―またまたまた別の場所―

「武神が敗北した。」

「…え？」「…」

「伝える事は以上だ。さあ、持ち場に戻れ。」

「いやいやいや！え？マジで!？」

「さつきからそう言っているだろう。」

「隊長が勝負を挑み勝ったのですか!?!まさか、クリスお嬢様!」

「どちらでもない。」

うだけれど。それを容認して来たツケかしらね。」

「単なる孫バカか。甘いな。」

話の区切りもつき、時計を見ると深夜をちようど回ったあたり。いい感じに瞼も重くなつて来た。

「…寝るか。」

「そうね。ねえとうじ。」

「ん?」

「ギユツて…して?」

上目遣いにそう言ってくる。拒否する事なく要望に応える。

ギユツ

「んっ…あなたの匂いがするわ。」

「そりやそうだろ。」

「今日一日、仕事ばかりだったから、少し瑞鶴が羨ましかったわ。私も

一緒に学園生活したかったなあ。」

「年齢ばかりはしょうがないだろ。まあヒュームやマルギツテ、あずみなんかは理由ありきで通つてはいるが。」

「分かつてる。これは単なる愚痴よ。…ねえ、朝まで離さないでね。」

「ああ。」

こうして学園生活初日の夜は更けていく。

醤油とカラシの割合7：3

闇の中を歩く。

一歩が重い。

今までに感じたことのない感覚。

これはなんだ？ここは何処で、私は今何をしている？何処までも無限に続く、暗い、暗い空間。

一歩、また一歩と、進むごとに息が切れる。音が聞こえない。私自身の声すらも聞こえない。

声を発することもできない。

目だけは見える。ただそれだけだ。

私はお化けが苦手だ。だってアイツら殴らないんだぞ！倒す手段がないじゃないか！ノーダメージで反撃してくる。無理ゲーだろ。

はぁ。

現実逃避してる場合じゃないな。そろそろ真面目に考えよう。

まず私、なんでこんな所にいるんだ？

OK、OK！一から順に振り返ろう。

今日は、弁慶ちゃん達が編入してくるから全校集会があった。

←
そこで半年前に会った男。禪院甚爾までも、編入してきた。

←
HRが終わってすぐに、2Sの教室へ、アイツと決闘する為に向かった。

←
じじいと九鬼の従者に止められたが、アイツが了承して、条件付きの決闘をやった。

←
結果　私はたったの2発で負けた。

←
そうだ。私は負けたんだ。あの男に！

“半年前とかわらねえ。弱すぎる。”

思えば半年前に会ったあの日、アイツから決闘の時みたいなおうらを感じなかった。だが、去り際に一瞬感じた殺気。その殺気に私は動かなかった。認めたくなくて、半年間探し回った。その間の修行もサボって。

そりゃ、そう言われても仕方がないよな。

あいつの拳は、まるで私にこの半年何をやっていった？そう問いただす感じがした。いや、実際アイツが思っていた事を、そのまま拳に込め結果、私にちゃんと伝わった。

アイツは、とうじは嘆いていた。その気持ちは、痛い程によく分かる。

私もずっと感じていたから。

孤独

強者ゆえの孤独。喪失感。対等に闘えるものを欲していた。

私はその期待を裏切ってしまった。私自身求めていた者！その相手が目の前にいて、私は全身の細胞が、歓喜を挙げるほどに喜んでいく。だがアイツは、とうじは、見つけたと思った矢先に期待を裏切られた。

情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！
情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！
情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！
情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！

！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！情けない！

初めてだ！こんなにも自分を殺したいと思う事は！
すまない、とうじ。

私が弱かったばかりに、お前に失望させてしまった。

私は、お前の対等に闘える相手に相応しくなかった。

そしてこれからワガママを言う。

私は今一度、1から鍛え直す。これまで嫌いだった、精神修行もこなし、心・技・体の全てを一から。

お前にはまた孤独の時間をしいてしまう。

だが待っていてくれ！必ず、必ずお前と対等に闘うに値する武闘家となつて、もう一度！もう一度……

―病院―

お姉様が決闘に敗れて3日。未だに目を覚まさず、病院のベッドの上。風間フアミリーのみんなと、お爺様でお見舞いに来てる。お医者さんは脳に異常はなくて、一週間程で目を覚ますって言っていたけれど、心配だわ。

「二子」

「大和」

大和目の下にも隈ができてる。

「まさか姉さんが負けるなんてな。」

私も、今でも信じられない。あのお姉様が負けるなんて。

「モモ先輩を倒したって事は、次の武神はアイツなのか？」

「ガクト！今そんな事を言ってる場合じゃないでしょう！」

「けどよモロ、負けちまった事実はかわらねえだろ？医者だって、もうすぐ目を覚ますって言ってるんだぜ？心配なのは俺だって同じだ。けどよ、先輩が目を覚まして、俺たちがクヨクヨしてたら元気にならないだろ？」

ガクトの言葉にみんなハツとする。

「そだね。ガクト珍しくナイス発言。」

「京の言う通りだな！病は気から！暗い雰囲気では、モモ先輩も起きてはくれまい！」

「おいクリ吉、病気で寝てんじやねえんだぜ！気もクソもカンケーねえよ！」

「こ、こら！松風！そのような失礼な事を言っではいけません！」

「よーし！それならここでカラオケ大会だ！この間、バイト先で貰った携帯カラオケ機！コイツを使う時が来た！」

「キヤップ！病院では静かに！」

みんなお姉様を待っています。早く起きてね。え？

「お姉様!?!」

「どうした一子？」

「お姉様が泣いている。」

大和が、私の言葉に驚いてお姉様を見る。そこには眠ったまま涙を流すお姉様。

「姉さん。」

そつと大和は涙を拭ってあげた。その時。

「……………す…まない。」

「姉さん・お姉様！」

お姉様が目を覚ました！まゆつちが、すぐにナースコールを押してくれていたから、すぐに看護婦さんとお医者さんが来て、私達は病室を出された。数分ほどして入室の許可が出た。入ると、上半身を起こして虚空を見つめるお姉様の姿があった。

「モモ、体の方はどうじゃ？言うても、起きたばかり故しばらくは、本調子とはいかんじやろうが、今は静養せい。」

お爺様が最初に声をかける。でも、お姉様は虚空を見つめたままだ。こんなお姉様は初めてだ。

「…すまない」

ただ一言すまないと口にする。

「なに謝ってるんだよ姉さん。何も謝ることなんてないだろ？」

「そうだぜモモ先輩。」

「うんうん」

「退院したらアジトでパーティーしようぜ！」

「そだね。」

「おいしいお料理たくさんご用意します。」

「稲荷ずしも用意するぞ！」

みんながお姉様を励ましてくれる。

「そうよお姉様！早く元気になって、また一緒に修行しましょう！」

ポタポタと白い掛布団にシミができる。見ればお姉様が静かに涙を流していた。

「すまない…すまない…すまない」

それだけを、ただ連呼し続ける。その様子を見てみんなも黙ってしまふ。

「百代。もしやお主…」

「すまない…失望させてしまつて。こんなにも弱い私を許してくれ。」

何を、何を言っているのよお姉様。

「お姉様何言ってるの、お姉様は弱くなんかないわ！」

私の言葉にみんなが頷く。

「分かつていたのに、私が一番分かつていたはずなのに。辛く悲しいことは、分かつていたのに。」

言葉の意味が分からず皆が困惑する。お爺様を除いて。お爺様は、お姉様が何に対して嘆いているかが、わかっているのだろうか？

「期待を裏切ってしまった私を許してくれ。私は己が情けない。何が武神だ！何が最強だ！こんな肩書なんていらん！待っていてくれ、私は一から鍛えなおす！今度こそ、お前に失望されないように。だから、だからもう少しだけ待っていてくれ。」

「ありがとう。」

その日私達は、誰一人困惑を隠せないまま帰路に着いた。

晴れ渡る青空の下、甚爾は授業をさぼって屋上で昼寝を満喫していた。武神との決闘から一週間。廊下ですれ違う生徒からは、恐怖のまなざしを向けられる。本人にとっては、どうでもいいの一言に尽きるのだが。だが、昼寝を妨げるこの視線だけは、許しがたい。

「??？」

（あの子が武神を倒したっていう、禪院甚爾君か。何というかわいルド系だねえ。依頼を受けて早々、その依頼があの子に達成されたから、破棄されると思ったけど依頼は継続されるみたいだし、良しとしようか。…だけど全然起きないなあ。寝顔はちよつとタイプかも。……あれ?!? いない!! どこに!）

「誰を探してんだ? 良ければ手伝ってやろうか?」

「ッ!」

一瞬気を抜いた際に、探していた人物に背後をとられていた。

―甚爾―

（ジロジロ見やがってうつとうしい。…馬鹿が気を抜いてんじやねえよ。）

己を覗き見る人物が、一瞬気を抜いた隙をつき背後に回る。案の定甚爾を見失ったことに慌てて、探している。

「誰を探してんだ? 良ければ手伝ってやろうか?」

「ッ!」

「で? さっきからなんだ、何か用か? 決闘なら禁止されてるから、受けてはやれねえぞ。」

「驚いた。いつの間に背後に回ったのかなん。まあ、私が一瞬気を抜

いたあの時だろうけど。だけど音もなくって、鉢屋じゃあるまいし。」
「お前何年だ?」

「三年」

「先輩かよ」

「そ。けど明日から転入するんだけどね。」

「は?」

「とりあえず自己紹介しとくね。松永燕、以後よろしく!お近づきの印に松永納豆をどうぞ。武神を倒した禪院甚爾君。」

(松永…こいつミサゴの言ってた娘か!)

前に、ミサゴが言っていた事を思い出す。髪の毛の長さは違うが、伸ばしたら間違いなく、ミサゴと瓜二つと言えるほどに似ている。

「…マジだったんだな。」

「え?」

「いや、こつちの話だ。」

実際、甚爾はミサゴの言ったことは、独身ではないと嘘を貫くための虚言だと思っていたので、いざ娘本人に会って真実だと分かり少し驚いていた。

「ねね!モモちゃんはいつ退院するか知ってる?」

「噂なら明日らしいが、どうでもいい。」

「そつか。ありがとね。じゃあとージ君また明日ね!なつとう!」

謎の掛け声と共に屋上を去った燕。

(今度、ミサゴに会ったら謝ろ。)

「これより松永燕と川神百代の決闘を始める。」

次の日、言葉通り転校してきた燕。そして退院した百代。甚爾が登校してきてそうそう、百代は甚爾に会いに来て謝罪した。

「すまない。」

「は?」

甚爾からすれば、なんのこつちや?と言いたところだった。来て早々に武神に謝罪された。意味が分からない。

「私は、お前に失望させてしまった。だが、もう一度チャンスが欲しい。私は、一から鍛えなおす。お前のいる所まで登って見せる。そしてたまた、私と戦ってほしい。今日はそれを伝えに来た。悪い時間をとらせたな。」

言うだけ言って去っていく百代に、いや拒否権とかないのかと言いたくなる甚爾だった。

「先輩なんだった？」

「強くなったらもう一度戦えだよ。」

「いや、そんな上からじゃなかったでしょうが。むしろお願いだったよあれは。」

「あら、弁慶。おはよう。」

「おはよう。瑞鶴。」

「禪院くん、瑞鶴さん、おはよう！」

「義経もおはよう。」

じーつと甚爾を見つめる義経。

「…」

「…」

「挨拶くらい返してあげなさいよ。」

「…はよ」

「うん！おはよう！」

「そういえば与一は？」

「ここにいる。おはようアニキ、瑞鶴の姉御。」

自分から進んで挨拶をした与一。そのことに驚く、義経と弁慶。

「凄いな二人は。与一が自分からなんて。」

「二人はとてつもない力を秘めている。強者に付き従うのは自然の理だ。」

「また訳の分からないことを。」

「そういえば聞いた？今日転校生がくるって話。」

「この前、私達が転校してきたばかりなの？」

「うん。今度は三年に一人だつて。」

その話を聞き、即座に燕の事だと分かった甚爾。すると、廊下に響

き渡る声が。

「おおーい！転校生とモモ先輩が決闘するってよー！」

「マジー！」

「この間、禪院にやられて入院してたのに大丈夫かよ。」

などという声が、廊下から教室にまで聞こえてくる。窓の外を見ると、既に多くの生徒が観戦の為に外に出ていた。グラウンドには二つの影。百代と燕だ。

「よろしく、モモちゃん。」

「こちらこそ、よろしく頼む燕。」

「ありや？」

「どうした？」

「いや、なんでもないよん。（聞いてた性格と違うね。トージ君に負けたことが影響かな？慢心がない。これは厄介な相手になっちゃたなあ。）」

「それではこれより決闘を始める。使用する武器は、こちらで用意したレプリカのみ。制限時間はチャイムが鳴るまでの、一本勝負。」

用意される様々なレプリカ。そのすべてが、燕の背後に置かれる。

「おいおい、あれ全部使うつもりか！」

誰かが声を発する。確かにあの武器の数々、すべて極めていたとすれば脅威だろう。

「それでは、始め！」

両者共に同時に相手に向かって駆ける。

まずは、両者共に拳で攻撃しあう。互いに、レベルの高い攻防を繰り広げていく。だがここで、燕の繰り出した打撃を、百代がつかみ取り、そのまま背負い投げる。空中で体勢を立て直し着地するが、そこに追撃をかける。避けきれないと判断し、そのまま受ける燕。受けた勢いそのまま後ろに後退。衝撃を受け流す。

「さすがだね、モモちゃん。じゃあコレ、使ってみようかな。」

燕がつかんだのは槍のレプリカ。感触を確かめるように、数回振り回す。

「いくよー！」

宣言と共に、一気に近づき怒涛の突きの連打。これに対し百代は、焦ることなく突きの一つ一つを堅実にさばく。

「ほう。」

「クククッ」

場所は違うが、戦いを見ていたヒュームと甚爾が、笑いと関心を示す。

「どうしたのだ、何か驚くことがあったかヒューム？」

「ええ。今までの百代ならば、この場面わざと受けていた。しかし、奴は突きを堅実にさばいて見せた。この意味、お分かりになりますか？」

紋白は、しばし考えたのち答えた。

「それだけ燕の突きが鋭かった、ということか？」

ヒュームは首を横に振る。

「いいえ。奴の今までの戦い方は、受けずともよい攻撃をわざと受けていた。それはなぜか。」

「瞬間回復。」

「その通りでございます。一瞬で治るから大丈夫。他にも百代の弱点はありますが、今まではそれが大きな欠点でした。しかし…」

「その慢心が消えて、強固な壁をなしている。今までの武神とは比べ物にならないぜ。」

「それってやっぱりとうじに負けたからだよね？」

「だろうな。」

「川神さん、すごい。」

「だね。もう甚爾も勝てないんじゃない？」

「それはないだろ。」

弁慶の発言に、与一がそれは有り得ないと、待ったをかける。

「防御をするようになったとしても、それだけだ。技量が上がったわけじゃない。瞬間回復があるとしても、前回は負けた。仮に、持久戦に持ち込んだとしても、アニキにはそもそも気がない。そうなれば、

気を切らしちまったら武神の負けは確定。一つ手が増えたところで変わらんさ。」

この中二病、変なポーズで観戦してる割には、状況判断や分析力がすごい高い事に、感心しながら戦況に再び視線を戻す。そして朝のことを思い出す。

『もう一度チャンスが欲しい。』

「…」

『お前のいる所まで登って見せる。』

「…ククツ」

「どうじ？」

「アハハハハハハハハハハハハッ！」

突然、笑い出した甚爾に驚く瑞鶴。しかし、声色に歓喜が含まれていると気がついた。

「金にはならねえが、いいぜ。受けてやるよ。」

だから早く、俺がいるところまで上がって来い！

武神、川神百代！

今、私は確かに耳にした。

いいぜ。受けてやるよ。

いいのか!?! 本当に!?!

だから早く、俺がいるところまで上がって来い！

ああ！待っていてくれ！すぐに、お前のいるところまで行く！

武神、川神百代！

そうだ、私は！

「えっ！」

攻勢に出ていた燕は、咄嗟に防御に全力を注ぐ。

「私は、武神だあああああああああああああ！」

【川神流 無双正拳突き】

槍の芯を捉え、そのまま燕を吹き飛ばす。吹き飛ばされた勢いを、殺しきれず好きだらけの姿勢で、なんとか着地をした所に、上空からのかかと落としの追撃が来る。

「まずっ！」

ドドオオオン

「うそ…」

そこには巨大なクレーター。まさに武神の名に恥じぬ暴力。

慢心など、一片のかけらもない瞳が燕を貫く。

「エンジンかかって来たみたいだね。なら、こっちも行かせてもらおうよ！」

今度は刀に持ち替える。

「ッ！」

しなやかに、そして力強く攻める。まるで新体操選手のような。その独特の動きに、観戦する生徒達も目を見張る。

「葵」

「彼女、なかなかやりますね。」

「だね。」

「おつ？また武器持ち替える気か？槍に刀と来て、今度はなん……え？マジか！」

「葵冬馬。」

「これはこれは、マルギツテさん。」

「隣、お邪魔しても？」

「ええ、大歓迎ですよ。」

「では、失礼する。今来たばかりなのですが、戦況はどのような感じですか？」

「先ほどまで、転校生の方が攻めていたのですが、今度は川神さんのターンのようです。」

「散らばっている武器は、全てあの転校生か？」

「はい。そして今度は……」

「ヌンチャクとは、これはまた味な武器を使う。」

l s i d e o u t l

ヌンチャクを振り回しながら近づく。蹴りで牽制、そのまま叩きつける。両腕を正面で構えて防御する百代。

「器用だな。」

「それが取り柄だからね。」

短いやり取り。再び戦闘を再開させる。

百代の足技が、幾重にも浴びせられる。紙一重で避けながら……。

(ここだ！)

左足を捕らえ、ヌンチャクで巻きつける。

「！」

「どりやあああ！」

そのまま振り回して投げ飛ばす。

―甚爾―

「槍、刀、ヌンチャクか。凄いな彼女は！色んな武器を扱えるなんて！義経も負けていられない。」

「バカか？」

「え？」

「ちよいと、いくらアンタでも主をバカにするのは許さないよ？」

甚爾の言葉に噛み付く弁慶。だが、知った事ではないと言葉を続ける。

「確かに、燕は多種多様な武器を使ってる。使ってるだけだ。極めてるわけじゃない。そこらの有象無象が相手なら、あれで充分。壁越え、もしくは壁越えの一步手前には、意味はさほどねえよ。」

「！」

燕は、ただ多種多様な武器を高レベルで扱える。言ってしまうえば、高レベルな器用貧乏。甚爾の言うように、一定のレベル以上の相手では、さほど意味をなさない。

「それに、扱えるって言ってもやっぱ、得手不得手はあるみたいだな。」

「なるほどそう言うこと。」

「瑞鶴の姉御どう言うことだ？」

「見れば分かるはずよ。」

与一はグラウンドに視線を戻すと、先ほどまで使っていたヌンチャクではなく、今度は小太刀を使う燕。

「さっきまでの、槍や刀の使用した時間より短い。扱えるけど、扱えるレベルがあるみたい。」

「ああ、特殊な武器や、癖のある武器なんかはお粗末なんだろうさ。こういう武器も使えますよって、ブラフ貼る為なんだろうけどな。」

（お前は、ミサゴと違ってあんまり面白そうじゃねえな。）

「寝る。」

そう言つて、甚爾は机に突っ伏して寝てしまった。

「まったたく。」

そう言いながらも、寝てしまった甚爾の頭を撫でながら、グラウンドに視線を戻す瑞鶴。

（まあそうよね。あの人は、多分だけど知略タイプ。そして、多種多様

の武器を扱う。言ってしまうえば、完全にとうじの下位互換だもんね。そりゃ興味もなくすか。」

l s i d e o u t

「ふう ふう ふう」

「はあ はあ はあ」

攻防の末、武器が散らばるグラウンド。勝負は佳境だった。

「そろそろチャイムが鳴るな。」

「そうみたいだね。なら、やるつきやないよね！」

同時に駆け出す両者。そのまま勢いに乗せて、拳を振る互いの顔を捉える。

キーンコーンカーンコーン

僅か、1cmにも満たない距離で互いの拳が止まる。風圧が互いの髪をなびかせる。

「時間一杯！この勝負、引き分けとする！」

オオオオオオオオオオオツ！

生徒達の大歓声が響き渡る。互いに本気ではない勝負とは言え、一定のレベルではない者達にとっては、ハイレベルな戦いだった。

「流石だね。久々にヒリヒリしたよ。」

「いや、私はまだまだ弱い。」

「そう言われちゃうと、私も弱いんだけど？」

「あつ！いやすまない。燕が弱いと言いたいんじゃないぞ！その、あの、えつと!？」

「ふふっ！分かってるよ！」

「クラスは何処になるんだ？」

「3ーFだよ。モモちゃんとクラスメイト！」

「そうか、よろしくな。」

互いに握手を交わし、互いを称え合った！そして、声援を送ってくれた生徒達にも、サービスを忘れない。

「みんな！声援ありがとう！なんで私がここまでやれたかと言うと、コレ！松永納豆！これを毎日食べたおかげ！みんなも食べて粘り強くなろう！今なら100円！100円だよ！」

買ったー！俺には2つくれ！私もー！

なぜか納豆を売り込む燕であった。

「あつ！あつたコレだよ。」

「モロどうした？」

「納豆小町！今売り出し中のご当地アイドル。ほら、このネット記事。」

PCのニュース画面には、納豆小町と書かれていて、燕の写真も掲載されている。

「通りで見たことあるわけだ。」

「それに商売魂もすげーな」

(だけど、姉さんと戦えた実力は本物。禪院といい。まったく、とんでもない人達が入って来たな。)

「あれ？」

「どうしたんだ京。」

「まだ、何かあるみたいだよ大和。」

「え？」

京に言われ、視線を戻すとそこには、自身の担任である小島梅子と、一見すればスーツを着たサラリーマンに見える、高身長男性。グラサンをかけ、髪型は7:3で分けている。まさにクールで知的と言った感じだ。

「ホッホッホ。両者共に先程の決闘素晴らしかったぞい。ではここで、今日から新たに赴任なされた先生を紹介する。」

12S教室1

「えっ！嘘でしょ！」

「どうしたんだ？瑞鶴さん？」

新しく赴任して来た先生を見て、顔色を変えた瑞鶴さん。急いで禪院くんを起こしている。あの、そんなに刀の鞘で叩いたら怒られるよ？

「起きて！とうじおきて！緊急事態！早く早く！」

「その前に刀しまえ！痛いんだよ！」

「そんなことどうでもいいから！」

「よくねえよ！」

「あれ！」

瑞鶴がグラウンドを指さした。なんだってんだ？どつちが勝とうが負けようが、俺にはどうだっていいんだよ。仕方なく指差す方へ視線を向けた。そして戻した。

「そうか、まだ俺は寝てんだな。これは夢か、よかった。」

「うん分かる。けどちゃんと向き合って。」

「…なんでアイツがここにいんだよ。」

「知らないわよ！私だってびっくりしてるんだから！」

瑞鶴と言い合っていると、態度からしてあの男性が何者か、知っているのは明白。何者なのか聞こうと人が集まってくる。

「甚爾。」

「悪いが後にしろ、英雄。」

「あの、新たに教師になる者の事を、知っているのだな？」

「確かにそれは気になりますね〜英雄様〜！」

（強いなああの男。少なくとも、私じゃ時間稼ぎにもなりやしない。一見すりゃ、ただのサラリーマンにしか見えねえのによお。アイツらの反応からして、禪院家の関係者か。）

主人が襲われた時の為、思考を巡らせるあずみ。しかし、どう考えても太刀打ちできない相手だと分かってしまう。

「とうじ、知っているのならば吐きなさい。なんですかあの男は？スーツで一見すればサラリーマン。しかし、服の下は鍛え上げられた肉体がある。私の目は誤魔化せません。」

「マルギツテ、お前もか。」

しばらく考えたのち、ため息を吐きもういいやと、投げやりに答える。

瑞鶴が。

「あと任せた。」

「えっ！あたし！」

視線が一気に、甚爾から瑞鶴に移る。引き腰になりながらも、どうにか心を落ち着かせ、何者なのかを説明し始めた。

「彼は禪院に使える家臣の1人。名前は…」

l s i d e o u t l

ーグラウンドー

「さてさて、この後は教師たちによるエキシビジョンマッチじゃ。その前に、今回赴任された新しい先生を紹介しよう。自己紹介頼めるかどうか？」

「はい」

前に出て、グラサンを掛け直す。

「皆さん初めまして。今日からこの学園でお世話になります。」

七海 建人

どうぞよろしく。

束の間

「お久しぶりです、若様。ご挨拶が遅くなり、申し訳ありません。瑞鶴さんも、お久しぶりです。」

「別にいい。それより、何でお前が教師なんだ？」

昼休み、屋上にて甚爾、七海、瑞鶴の3人の姿があった。

「夜蛾さんの指示です。」

「他は？」

「他とは？」

「知らぬ存ぜぬを貫くつもりならやめとけ。後々分かる事だ。」

七海は、フウッと息を一つ吐き、やれやれと言ったように首を振った。

「流石ですね。局様と言うより、九鬼からの依頼です。もし、若が暴走、もしくは類似する事態に陥った際の、ストッパーとして雇われました。まあ、この学園に入る上で、教員免許を持っていた私が適任だったので、家臣の代表として依頼を受けました。」

「七海さん、教員免許持ってたんですか！」

変なところで食いついた瑞鶴を無視して、なぜ七海が選ばれたのかを、考える。

（まあ、俺がちゃんと授業を受けてるのか、それを報告するところまで依頼なんだろうな。それに、コイツの能力と性格なら、俺を抑える為に選ばれる人選としては妥当か。）

「そう言えば、受け持ちのクラスはどこなんですか？」

「3ーFです。勝手かとは思いましたが、夜蛾さんと私で少々、裏で手を回しました。」

言外に、武神の監視と紋白が雇ったと思われる、燕の監視を引き受けてくれるのだろう。七海の事だから、燕が甚爾の代わりとして、雇われた事は承知のはずであると、すぐに考えついた。この場で、多くを語ろうとしないのは、やはり九鬼の監視のせいだろう。もはや、鬱陶しいぐらいに、見張られている。

「へえ、まあいいや。じゃあ互いに、表世界を楽しみますか。」

「私は一応、仕事なのですが？」

「まあまあ、七海さん。それより、今朝の小島先生とのエキシビジョンマッチ、すごかったですね！」

「ありがとうございます。」

「よつ、ナイス手抜き〜」

「…」

「何だよ。事実だろ。」

「ええ、ですが分かったとしても言わないのが、大人のマナーと言うものですよ。少しは、瑞鶴さんを見習って下さい。」

「チツ」

「私は授業の準備がありますので、これで失礼します。それと…若。」

「んだよ。」

「これから学園内で会う際、もしくはそれ関連で行動などする為、郊外に出た時は『先生』と呼ぶように。いいですね？」

「は？ふざけ「いいですね？」…分かったよ七海センセ」

（しかし、あいつが教師ね。労働はクソって公言してるわりには、しっかりこなす奴だから問題はないだろう）

授業を聞き流しながら、ぼんやりと七海とのやり取りを思い出す。

「……」

何も無い普通の日常。だが何故か、甚爾の心はざわつき落ち着かない。

（今よりも、戦いの中に身を投じていた方が心が落ち着くとか思わなかったなあ）

「どうじ、大丈夫？」

「あ？」

横を見れば瑞鶴。どうやら、いつの間にか授業は終わっていた。

「…帰るか」

「うん」

「・・・」

沈黙を保つ甚爾。Sクラスの者達は、黛は死んだなと誰もが思った。

「・・・なあ」

「は、はい！」

「俺と勝負がしたい理由は何だ？武神を倒したからか？この学校の通例である歓迎のためか？名を上げたいからか？」

「・・・いいえ。どれもありません。」

「・・・」

「最初にも言いましたが、一手御指南願いたいのです。貴方の動きの中には刀の動きにも通ずるものがありました。それに、その手のタコ。他の武器を扱う際にできたものに混じってはいますが、刀を握るものにしかできない箇所にもございます。と言う事は、貴方は刀をも扱える。」

「・・・」

終始黙って入るが、甚爾は少々警戒を強める。

「ですからどうか立ち会っては頂けませんか？」

「やなこった。第一俺にはメリットがない。勝負して欲しけりや金を持って来るか、面白いと思えるくらいには鍛えて出直せ雑魚が。」

そのまま傍を通り教室を去っていった。

「良かったの？」

「何が？」

「あの子、剣聖黛十一段の娘さんでしょう？」

「だったら？」

「いつものあんたなら、あんなご馳走ほっとくはずなのに」

「さつきも言ったろ、弱すぎる……………チツ」

「つけられてるわね」

「次の角、右に曲がるぞ」

何物かの尾行に気が付いた二人は、気が付いていないふりをしながら曲がり角を曲がる。

「???」

あれが、武神を倒した男か。

ああ、強いな。強すぎる。この距離でもあいつは俺を殺せる。

俺自身、壁越えとまではいかないが、そこその実力はある方だと自負していたが、これはダメだ。

今すぐにも逃げ出したい。裏の世界で生き抜くには、一瞬の判断が生死を分ける。相手の実力を見抜き、例え僅かでも無理だと悟ったら逃げに徹するそれが常識だ。俺のような中途半端な実力だったらな。

しかし、時と場合によってはそれも許されない。今回ののはそれだ。

クソが！武神を倒した者の顔を見たい好奇心なんかで、依頼を受けたあの時の自分を殴りたい。

それに隣を歩くあの女、あいつもヤバい。美しいバラには棘がある、なんて言葉があるがじょうだんじゃあない！棘なんて生易しいものじゃあない。毒だ！それも猛毒！

一見すれば、ただの普通の学生カップル。周囲の人間にはそう映っているだろう。危険な香りもオーラも見せていない。だが、裏社会で10年生きてきた俺には分かる！

誘いだ。あいつらは、自分達に今後訪れることを予想している！俺のように調べたり接触してくる者たちの事を！そして少しでも、自分達の意に背くような輩であれば。

「…」ゴクッ

落ち着け、無理に接触する必要はない、今回は、あくまで私生活の

様子を探る事のみ。

「！」

クソ！考え事にふっけている間に距離を開けすぎた！角を右に曲がった！

「チッ！」

俺は走って追いかける。そして二人が曲がったほうに行くとは…

「な、なに！」

そこには誰もいなかった。

「い、一体どこに消えた！角を右に曲がったこの道は！」

火災が発生しているというのに！

「ふーん、その幻覚かけたのはやっぱり瑞鶴？」

「うん。なーんか考え事しながら尾行してたから、簡単にかかったけどね。」

「感情がせめぎ合ってたんだらうよ。実力差がハッキリとわかっていなのに、多分国のお偉いさんからの依頼だから、失敗しましたなんて報告したらどのみち消されるからな。」

尾行者が考え事にふけている間に、瑞鶴がかけた幻覚で起きてもいない火災を見てしまったのだ。

「まさか、周囲の人間の歩く音を調節して幻覚をかけるなんてな。その為に、普段のお前なら絶対やらないフラフラした歩き方してたのかよ。」

「正解」

道の譲り合い。

皆さんも経験はあるだろう。道を譲り合い何度か相手と自分が同じ方によけてしまうことだ。瑞鶴はそれを利用して、周囲の人間の足を調節し幻覚を見せた。

「刀がないとできないと思ってたんだがな」

「いざ武器が手元になかった時でも、戦えないと意味ないでしょう」

こえー女つと本気で思った甚爾だった。

「それより、さっきのはどこのスパイかしら？」

「知らん。まあ二、三日程度の監視なら見逃してやるさ。」

この話はここまで、という風に締め括り、2人は再び帰路についた。

ーとある居酒屋ー

「で？失敗したと？」

「すいません」

「まあ仕方がねえさ。俺でも無理だろうからな」

「え？」

「俺は一度、戦場で見たんだよ。あの化け物を・・・な。3年前さ、俺が以前までどこにいたか知ってるだろ？」

「は、はい。3年前はキューバにて、現地諜報を行っていらつしやいましたよね？」

「そうだ。テロ組織に潜り込んで、夜中に機密データをコピーしていた時に、奴は現れた。いきなり空気が変わった。だが、侵入者を知らせる音も、慌ただしく動く音も聞こえない。言うなれば静寂さ。」

「・・・」

「データをコピーした後、即座に脱出を図った。外に出た時、俺は目を疑った。女がいたんだ。それも、まだ子供と言つていい年齢のな。そ

んな子供と対峙していたのは、テロ組織の中で1番腕の立つ奴だった。組織の中でも信頼の厚いな。一瞬、侵入者であるその女を捕らえようとしているのかとも思った。そこで俺はようやく気が付いたよ。」

「・・・何をですか？」

「男は虚な瞳で、手には奴が最も得意としていたナイフ。奴だったんだ組織を壊滅させたのは。」

「え？」

「そして女が、指を奴の耳元で鳴らすと、まるで電池が切れたかのように倒れた。」

「それってつまり？」

「洗脳されて、何もかも感じなくされてたんだろうよ。自分が既に死んでいるなんて思わず、操られ仲間を皆殺しだ。」

「なっ！」

「お前、運が良かったな。武闘家殺しと音斬り相手にこうして、生きてんだからよ。」

「・・・」

「お前はすぐに本国へ戻れ。1度目は見逃されたが、2度目は多分ない。例の話は俺から伝える。」

「ありがとうございます」

そう言って部下は居酒屋を出て行った。

残った男は、1人酒を飲む。

「最後の酒になるかもなあ」

「お隣よろしいですか？」

突如隣から相席を誘う人物が現れる。

見るとそこには、スーツを着た女。

丸の内OLです、とでも言われれば即信じそうなその外見。

しかし、男は分かっていた。この女は裏の人間だ。

（おいおいおい、酒が入っているとはいえこの俺が？この至近距離まで接近を許した!?!）

「そう警戒なさらないでください。申し遅れました、私は^{アルファ}aと申しま

す。」

そう言つて、隣に座つた女の胸元には天秤が描かれた、プラチナバッチ。

「ま、まさか！『Libra』！」

Libra・・・ラテン語において天秤を示す。

国際的に活動する組織で、各国に強いパイプを持つ組織。

裏ではならず者達の仕事の斡旋や、各国が表沙汰に出来ない依頼などを請け負う組織だ。

「最後のお酒、そんな悲しい事は仰らないでください。私どもが今回、あなた方の上から依頼されたのは、あなた方の代わりに今回のお話を伝える事とそのサポート。ですのであなたも本国に帰国して下さい。」

「それは本当か？」

「ええ、ここに正式な依頼書も」

「拝見する」

A4サイズの依頼書。

どうやら本物らしく、男は安堵した。

どうやら人生最後の酒はまだ先の様だった。

「では、伝える話の内容は？」

「既にお聞きして居りますので、問題ございません。」

「分かったよろしく頼む」

「必ず」

ピリリリリリリリイ・・・ピッ

「もしもっつー」

ヤンデレ？不可解

日曜日の朝、時間で10時頃。

学生ならば、学校が休みのこの日。

家でくつろぐ、学友達と遊ぶ、家族と出かけるなど思い思いに休みを謳歌するだろう。

一人で散歩、これもいいかもしれない。

その場所が、青色が広がる海辺なら尚の事。

しかしながら現実

青ではなく、赤が広がる血の海と化した戦場である。

その中を、まるで近所を散歩しに出掛けるかの如く歩く1人の青年。

誰であろう禪院甚爾その人である。

遡る事3日前…

「a！さっさと話せて言っただろうが！」

「はいはい… あっ！c a f eに入りましたよ！」

久しぶりの知人、と言うよりビジネスパートナーから久方ぶりの、依頼の電話を受けた甚爾。

本来であれば、電話で話を聞くだけで十分なはずであるのに、なぜか直に会ってからではないと依頼内容は話せないと言われ、気が向かないながらもなんとか待ち合わせの場所に来た。

だと言うのに、かれこれ2時間もの間何をしてたかと言うと単なる買い物だ。

「やっぱり日本の品は質が高くっていいわね」

「で？本当にそろそろ聞かせろ。どんな依頼だ」

「…依頼してきたのはフランスよ。依頼内容は護衛。」

「じゃあココの支払いよろしく」

「ちよつとー！」

「護衛は正直めんどくさいんだよ。金欠でも起きなきや、あまり受けたくねえ。」

「ハア、まあそう言うかなとは思ってはいたけれど、これは国からの正式な依頼よ。拒否すれば、貴方も私達も報復される可能性が高い。」
「だからどうした？そんなもん、怖くて裏世界で好き勝手出来るか。くだらねえ、俺は帰るぜ。」

「そう・・・けど」と言いたいところだが「・・・何？」

「お前らが絡んで来たんだ、何かあるんだろ？」

「相変わらず勘の良い奴。」

そう言うときaは、端末を取り出して説明を始める。

「今回あなたに依頼したのは、ごめんなさい正確にはあなたに依頼してきているのは、ルーヴル美術館で行われる式典に出席する誰かよ」

「・・・あ？」

「式典が行われ「待て待て待て待て」もう何よ！」

「誰かって誰だよ？」

「誰かは誰かよ」

「答えになつてねえぞ。あれか？要約すると、護衛対象の名は明かさないうが襲われたら守れと？」

「そう言うことよ。分かっているじゃない」

「よし、俺が殺す」

「なんでそうなるの!!」

「ふざけた依頼をして来るんだ、それ相応の対応を取るまでだ。」

まったくもってふざけた依頼だった。護衛する対象の正体は秘密。だが危険からは守れ？こんなものは、甚爾でなくともふざけるなど一喝する案件だ。

「これには訳があんのよ。」

「まず最初に、あなたにこの依頼を持って来ようとしていたのは、フランスの正規軍。だけれど、私達にこの依頼を仲介する様にしたのも、同じ正規軍。この意味はお分かり？」

つまり

「つまりあれか？お前らはフランスの正規軍、その上層部内で起きている内輪揉めで、殺されそうになっている奴から俺に依頼しようとし

ていた軍人に、あたかも貴方の代わりに私達が依頼を伝える事になったと伝え、実際は殺したい側からの依頼を既に受けていて、俺に護衛されると厄介だから、あえて名を伏せ守らないようにしている?」

「そう言うことよ。」

「な・る・ほ・ど」

なるほど、なるほど。

自分に言い聞かせるように、何度もなるほどと繰り返す。

死ぬか?
殺るか?

事実上の死刑宣告。

「私を殺すのは構わないわ。けど、理由を聞いてからでも良くない?」

「・・・」

「この発端は、今から約半年ぐらい前よ。選挙で、フランス大統領が変わった事は知っているわね? 最初、大統領を支持していた軍のある派閥の人間が、独断でテロリストを雇い入れたことが発端よ。」

「・・・」

「そのテロリストの名はブルー」

「・・・」

「どうしたの?」

どこかで聞き覚えのある単語に、思わず固まってしまう。

はて?どこで聞いたのだったか?

「まあいいわ。それで密かに支援していて、しかもそれを容認していたの。だけれど、黙っていなかっただのは攻撃を受けたドイツ。それで大っぴらに始末出来ないから、暗殺が計画されたんだけど、いち早く察知されたみたいでね。」

「そこで、ブルーを単独で殲滅した俺を、今度は雇って、破産に走ったわけだ。けどそうすると、暗殺出来ないからあえて依頼は受けさせるが、守れない状況を作るしかなかったと。・・・なんか悪いな」

「思っても無いことを」

「じゃあ今度の護衛、守ってるフリだけしとけて事ね。了解、了解」

「ええ、報酬はいつも通りに」

ー現在ー

(少し飯我慢して、フリだけして金貰える、簡単な仕事のはずだったんだがなあ)

「死ねええええええええ! 同胞の仇ダア!」

向かってくる敵は、手に持っているナイフを一閃。

それだけで地に沈める。

だが、それだけでは終わらない。

そのまま後方に投げる。

「ガッ!」

そして、息を潜めていた敵の額に刺さる。

(チツ・・・護衛してたらいきなり爆撃攻撃だあ?最初は、天井爆破ぐらいだと思ってたのによお。瓦礫どかして見たら、辺り一面攻撃されてるし、何処からともなく攻撃して来るし、ハアくめんどくせえ)

辺りは一面、爆撃攻撃による灰色の世界と化し、他の海と化してい

る。

そして、甚爾も向かって来る敵を殺す事で、さらに濃く染まる。そしてまた、いや、今度は個々の敵ではなく

「！」

何かに気が付いた甚爾。

何を思ったか地に伏せて、耳を地面に当てる。

(少人数?・・・いや、1人先行してるな。そして、その遥か後方に支援部隊。接敵まで・・・15秒)

体に巻きつけていた、クロから幻爪を抜き放つ。

そして、高速で先行して来る者に対し、カウンターの要領で斬りかかる。

「わっ!」

「避けるか、おもしれえな!」

追撃とばかりに幻爪を振るう。当然、幻爪が有する能力も発動。

至近距離特化の能力だが、逆を言えば至近距離で勝つ事が出来るものは少ない。

剣筋の投影。左から右に振り払う。

先行は上に飛んで避ける。が、その飛んだ軌道上に剣筋が走り、相手を斬りつけた。

「痛った!」

「あ?」

「えっ!?なんで?!?あたし完璧に避けたよな!なんで切られてんの?」

有り得たかもしれない剣の道筋。それを振るうごとに、幾万も可能性を現実にする力に、敵は理解が追いつかない。

速攻で仕留める為、甚爾が駆ける。

「死ね」

「ちよっ!ストップ!ストロープツ!」

まさに紙一重。ほんの少しでも、甚爾が刀を静止させなければ、ま

なぞ攻撃をやめた?簡単な事だ。聞き覚えがあった。

「リザ・プリンカー?」

「よ、よっス〜．．．久しぶりとうじ。とりあえず、刀しまつて??？」
「．．．殺す。」

「なんで!!!」

「お前よお、戦場で出会ったら、顔見知りでも、敵同士ならば．．．．．．
殺し合うに決まってるだろうが！」

その言葉と共に、一気にリザに接近する。

「!？」

しかし、それはリザに後方から放たれた狙撃に気が付き、咄嗟に大きく後方へ跳ぶ。

（おいおい、いくら狙撃の腕が高いからって、まさか仲間の頭を紙一重で当たらない様に狙撃って、マジか？）

「無事か！リザ！」

「マル！」

「ハア〜だよなあ、リザがいるんだ、当然の如くお前もいるに決まってるよなあ。」

リザを庇う様に、間に割って入ったのは、クラスメイトであり、ドイツ軍の猟犬部隊の隊長マルギツテだった。

そして、続々と猟犬部隊の面々が到着する。

皆、甚爾の顔を見るなり、驚いた者、現場の悲惨さに納得する者、涙を流す者、様々な反応を見せる。

（おいおいおい、冗談じゃあねえぞ。あーあ、完全に臨戦態勢じゃねえか。）

「とうじちゃん！」

「よお．．．ジーク」

よろよろと、涙を流しながら甚爾に向かって歩いて来るジーク。
そして、そのまま甚爾に抱き着く。

「うわあ〜〜〜ん!!!本物だよおおおお！」

「おい」

口で文句を言いつつ、ジークを抱きしめ返す。

「あれ？私との扱いの差、あり過ぎじゃね？」

などと言う言葉を聞き流しつつ、戦う気が失せてしまった為、幻爪

をクロにしよう。

「まさかフランスで会うとはな」

「それはこちらのセリフです。なぜここに？」

「その前にマルギツテ……なんだそのドレス？」

そう、甚爾はマルギツテがこの場に現れてから、常々疑問で合つたことを質問する。

「今回、我々が受けた任務は護衛任務です。作戦上、これ以上話す事はできません。そちらは？」

「同じく。ただし俺の方はフリだけどな」

「フリ？まあそれは良いでしょう。しかし大胆にも爆撃機を使って来るとは」

「何だ、どこの誰が攻撃して来たか知ってんのかよ。それからジーク、そろそろ離れろ」

「いや」

「んんっ……ええ。今回の攻撃は、ドイツ軍とフランス軍の連合部隊によるものです。」

予想の斜め上の返答が来た事に、一瞬だけ甚爾の思考が停止する。

「お前も関わった一件、ブルーの事件を覚えているな？その支援をしていたのが」

「フランスの、前大統領を支持してたやつなんだろう？」

マルギツテの言葉を引き継いで、事の経緯を説明するフィーネ。しかし、甚爾に少し先回りされた為、少し驚いている。

「そうだ。フランスが内々に処分するに、我々としては納得がいかない。よって、今回は煮湯を飲まされたもの同士、連合を組織する流れになった」

しかし、それではおかしい。

ドイツ軍と連合を組んで、裏切り者を始末するのは良い。そこは理解できる。

ならばなぜ、わざわざ護衛、正確にはフリだが依頼を出したのか。

最初は、裏切り者が出した依頼だったのだろうが、Libraを仲介してまで、引き受けたフリをする依頼を出す意味などないだろう。

軽い一撃をデコに決めて、ジークを引き剥がす。
何がどの様な目的で、動いているのか分からない今回の一件。
甚爾は信用の置ける、猟犬部隊に合流する事に決めたのだった。

敵は

ーパリー

パリの中心地にあるとあるホテル。そのスイートルームに主要面々は集まっていた。

「今回の作戦、成功と見るべきかはたまた、失敗と見るべきか。」

「まさか、あの爆撃を受けて生きてるなんて、噂通りの様ね。武闘家殺し」

「部隊を投入しようとしたタイミングで、狩猟部隊が出て来てしまうとは。」

「で？今後どの様にして動くつもり？」

「今しばらくは、機会を待とう。しかし、次こそ殺すぞ……禪院甚爾」

場所は変わり、甚爾と狩猟部隊はリユーベックへと移動していた。久しぶりのリユーベック。

しかし、ここで問題に上がるのが、甚爾の宿泊する場所はどうするかと言うことだ。

すでに現地時間の夜中に当たる時間だ。

飛び込みで入れる、安いモーターなどは探せばあるだろうが、思い出してみたい。

以前、甚爾がリユーベックに来た時、何処で寝泊まりをしていたのか。いや失礼。

誰と衣食住を共にしていたのか。

甚爾は狩猟部隊と別れ、現在はジークの家を寄せていた。

当然、普段は彼女の一人暮らしである為、ベッド一つに2人が入っている。

「フフフツツ」

「なんだ突然？なんかおかしな事あったか？」

「いいのかい？ 禪院家、それも当主である君を呼び捨てなど」

「公共の場でもあるまいし、それに同学年の父親からは流石にな。前回の件もあるし。」

「では遠慮なく、とうじ君と呼ばせてもらおう。君も気兼ねなく、私の事をフランクさんとでも呼んでくれたまえ。」

次の日、甚爾はフランクも含め、猟犬部隊と情報交換を行なっていた。

その結果、明らかになったのは3つ。

- ・ 連合軍が組織されたのは、上層部同士の合意の上である事
- ・ 爆撃に使われた機体は、どちらの軍のものでもない事
- ・ 今回の、護衛兼抹殺対象は、爆撃で死亡した事

「そうなって来ると、新たに浮かび上がる問題がある」

「ウム、第3の勢力の存在」

そう、今回の連合軍は正式な交渉と書類を成した上での、正式な組織だった。

武器や弾薬は、必ず使用リストをまとめてある為、今回の件で弾丸が何発使用されたかまで分かっている。

そして、連合軍が組織されたのは理由も消えた。

そうなれば、疑問が残る。

・ 爆撃に使われた機体は、どちらの軍の物なのか

しかし、どちらの物でもない、ましてや今回の作戦で使用する予定は全くなかった。

よって、第3の勢力の存在が浮かび上がる。

「真実を知っていきそうな人物はやはり」

「a・・・だろうな。依頼を持って来たのもあいつだし。だが、俺が聞いた時は、フランスからの正式な依頼だと聞いた。」

「そこだ。それがおかしい」

「そうだよなあ、おかしいよなあ。おかし過ぎるんだよなあ。わざわざ、フランスの正式依頼にしなくてもいいんだ。二度手間になるし、本来出す意味もない。」

「と言う事は、やはりそうなんだね？」

「それしかねえだろう」

俺を殺す為だけに仕組まれた

これ以外にはない、そう言い切る甚爾。

では一体、どこの誰が狙ったのだろう。話し合いは、その論点へとシフトする。

「まずは、フランスがあげられるな。」

「隊長のおっしゃる通り、その可能性は高いでしょう。ですが今回、爆撃に使われた機体はフランスの物では無い為、除外してもいいかと。」

「ならば、次は我がドイツとなるが」

「それは初めから除外だ」

「では・・・Libraしかありませんか。」

「だが、あの組織は基本、仲介組織にしかすぎん。それに、依頼人の情報、得られないとみた方がいい。彼等のような生業の者たちは、信用を得ることで成り立っているからね。」

「・・・」

(上層部内で起きている内輪揉め・・・本当にそうか?)

今更、そこに疑問を持つのかと、自身で思いつつもやはり、aが言った言葉にどこか引つ掛かりを覚える甚爾。

「おい」

「何かね？」

「フランスが、新大統領の体制になってから、何か変わった所はあるか？もちろん、テレビとかで取り上げてる以外でのな？」

「それは、軍の内部などかな？」

「・・・」

「なるほど。マルギツテ」

「はい。フランスの軍内部での大きな変化は、特にこれと言って大きな変化は見られません。現大統領側の軍上層の者が、権力を強めた程度でしょう。」

「やはり、大きな変化は「なるほどな」何かわかったのかね？」

「ああ、だがここでは言わない。まだ確証がないからな。」

そう言うと、立ち上がり部屋を出ていく。

その後ろ姿を見てフランクは、飢えた獣を連想するのだった。

「スウースウースウー」

「…」

夜、ジークの家のベッドの中に、二人の姿はあった。

当然のように、一糸まとわぬ姿でだ。

隣で眠るジークを起こさぬよう、どこかに電話を掛ける。

「俺だ。……ああ、問題ない。……少し頼みたいことがあってな。今から言う人物と、これまでの事を調べてくれ。……頼んだぞ。」

「んツ…とーじちゃん？」

「起こしたか？」

「ふみゆ」

電話の声に起きてしまったジークを、そっと抱き寄せ頭をなでる。

「…寝てろ」

「うん」

そして再び、深い深い眠りへと落ちていく。

それにつられるように、甚爾も眠りへと落ちていくのだった。

目を覚ませば、朝の五時。

今日は日曜日なので、通勤のための人通りは少ない。

そんなリニューベックの町中を歩く小柄な女の子。

コジマ・ロルバッハは協会に足を運んでいた。

彼女が、協会に足を運ぶようになった切っ掛けなどは、ここでは割愛しよう。

毎週の日課となっている教会でのお祈り済んで、朝一で何か食べようかと考えながら外に出ると、知人が一人立っていた。

「おお！とうじだ！」

「よお、とりあえずこれ食うか？」

差し出してきたのは香ばしい匂いと、焼きたての証拠である湯気が上るクロワッサン。

「いいの！たべるたべる！」

彼女は小柄ながらよく食べる。それはもう食べる。知らない人が見れば引いてしまうほどに。

今回も、甚爾が差し入れた焼きたてクロワッサン20個を、三分程度で平らげてしまった。

「美味しかった！ご馳走様でした！」

「おう。」

「とうじはどうしたの？今日日曜だよ？ジークとどつか出かけなくていいの？」

「心配すんな。それよりもお前に聞きたいことがあってな。」

「コジマに？」

「ああ、お前よく協会に行くじゃねえか。そこで最近、協会内で噂に上がる話とかないか？」

「噂？」

「ああ、どんな些細な事でも構わない。」

「うーん、それって悪い噂とか？」

「できればそうであってほしいな」

「じゃあ聞かないな。」

「そうか」

「でも、いい噂話は聞いた。」

何でも、かつての聖女の魂が復活したというものだ。

話を聞いていくうちに、その魂がかなりのビックネームである事に、内心笑えてきてしまった甚爾。

「いきなりニヤケてどうしたんだ？」

コジマに指摘される始末。

「いや、何でも。悪いな、ちよいと用事が出来た。そら、これで朝飯を食って来い。」

「いいの！とうじありがとう！」

朝食代をもらい、朝一に駆け出していくコジマを見送って、丁度いいタイミングでかかってきた電話に、ワンコールで出る。

「よお、流石だな。一晩で調べて報告を寄こすなんてよお。」

電話の相手は、昨夜に甚爾が何かを調べるように頼んだ相手だった。

相手からの報告に、またもや先程、自分が考えたビックネームが出てきて、甚爾の推測が確信に変わる。

黒幕は分かった。なぜ俺を狙うかも。そして、自分がやるべきことも。

「さて、忙しくなるな。散々コケにしてくれたんだ。覚悟しとけよっ。」

「？」
“ 様、準備が整いました。”

「わかったわ。」

「失礼するよ。」

「あら？貴方が私の部屋に来るなんて珍しいわね？何かあった？」

「ああ、その前に君、下がってくれるかな？」

「かしこまりました。」

侍女を下げて、男女だけが残る。

「今フランス政府は、我々の手に落ちたも等しい。だが、まだ足りない。」

「分かっているわよ。それに、貴方に煮え湯を飲ませたあの男を殺さないかね。」

「ああ、直観だけど相まみえるのは近い。そんな気がするんだ。」

「そう。でも大丈夫よ。貴方は二度と死なないわ。いいえ死なせない。」

「ああ、そうだね。愛しているよ。」

「ええ、私もよ。」

「本当に愛おしいよ。僕の」

ジャンヌ・ダルク

「その話は本当かね！」

「ああ」

「まさか！」

甚爾は、フランクとマルギツテに今わかっていることのすべてを伝えた。

「それで君はどうする？ 残念ながら、我々は表立って協力はできないよ。ことが事だけにね、国同士の争いだけではなくてしまう。」

「ああ、今回は一人で片を付ける。いや、俺が肩をつけないといけません。」

「何か必要な物はありますか？」

「乗り物を手配してくれ。もう一度パリに行く。」

「分かりました。すぐに手配させましょう。」

「じゃあなフランク中将」

「ああ、今度は日本で会おう」

フリードリヒ邸を後にして、急いで空港に向かう。

「軍専用のジェット機を用意させました。」

「悪いな。」

「いえ。それと人数分の携帯食料も用意しておきましたが、すぐにも片が付くそうならば、そのまま差上げます。」

「…おい、俺以外に誰を？」

車を降りながら聞くと、答えは日本にいるはずの者から返答された。

「そんなの私達に決まっているでしょう？」

そこにいたのは

「瑞鶴」

瑞鶴だけではない。翔鶴に夜我に七海までもがいた。

「お前等、何でいる？」

「愚門ですね若。」

「フフツ」

「言ったはずです若、この命尽きるまでついていくと。」

「本来なら、家臣全員で来るはずだったんだけど、さすがにそれはまずいって局様に言われてね、他のみんなは留守番。」

「それに、妻が夫の傍にいるのは普通では？」

「あとは戦力的に考えて、このメンバーなら最適でしょう。」

何とも自分の家臣らしい奴らだと感心する。

「なら、行くか。」

そう言っつて、先頭を切って歩き出す。

「容赦はするな。ただ目の前の敵を殺せ。」

「二」「御意」「二」

ーパリー

ぎわぎわ　ぎわぎわ

「おい！出てこられたぞ！聖女様だ！」

「聖女ジャンヌダルク様よ！」

パリの中心部にある教会。そこでは、現代に復活したジャンヌダルクを一目見ようと、多くの人が集まっていた。

「皆さんよく集まってくれました。」

たった一言。それだけで、人々は膝をつき涙を流す。

それを見て、ジャンヌは慈愛の笑みを見せる。

だが内心は、その笑顔裏腹にどす黒いものだった。

（ああ、もうそんな顔で見るな気持ち悪い。まったく、信者を集めて死を恐れない奴隷を増やすためとはいえ、こんな奴らに私の笑顔を見せてやらないといけないだなんて、マジキモイ。）

ジャンヌは異能ともいえる力を有していた。

ジャンヌの声は、人々と精神に働きかけ洗脳してしまう。

その力によってフランス政府を陥落させた。

「皆に神の加護があらんことを」

今日は週に一度行われるミサの日で、多くの信者が訪れていた。

多くの者が訪れることが出来る。

それすなわち、入り込むことも可能ということだ。

ドカーン!!

「何事ですか！」

「爆発だ！」

「逃げろー!!!」

教会はパニックになり、もみくちゃになりながら我先にと皆逃げ出す。

その間にも、爆発は続く。

「一体何なの!」

「ジャンヌ!」

男が駆け寄ってきて、ジャンヌを抱きしめる。

「ついに来たみたいだ」

コッコッコツ

「ええ、その様ね」

コッコッコツ

「貴様ら!何者だ!」

「聖女様と教祖様を守れ!」

ジャンヌと男を守ろうと、侵入者に向かっていく。

しかし、向かっていった者たちは、一瞬にして絶命した。

床におびたらしい量の血をぶちまけて。

「よお、久しぶりだな。まさか生きているとは思わなかったぜ?教祖様」

いや

綺羅

「やあ、本当に久しぶりだね無能の猿。」

「参考までに教えてくれよ、どうやって生き残った?俺確かにこの手で殺したと思ったんだけどなあ?」

「ああ、殺したさ。俺のクローンをな!」

多血統一で甚爾は、綺羅を殺した。

だがそれは、クローンだということに驚きはない。

武士道計画で、クローン達とはクラスメイト。

しかし、気がかりなのは九鬼のクローン技術を綺羅がどこで手に入れたか。

「Mという謎の人物が協力してくれたのさ。実際に会ったことはないがな」

「なるほどね。ジャンヌダルク、テメエは」

「お察しの通りクローンよ」

2人は、いや綺羅はクローン技術を用いてジャンヌダルクを現代に復活させたのだった。

「全ては、お前を殺すための計画だ。」

「用心深いな。」

「俺は俺とは違う。あいつとは母にばれないように入れ替わった。そしてお前を入念に調べていくうちに、お前の危険性は俺の中で膨れ上がっていった。俺があの家から出たのは、母から離れる為。あんなのといったら俺まで無能になっちまう。」

「これがオリジナルの綺羅か。なんかクローンよりかはましね。」

瑞鶴の言葉に、内心皆が同意する。

「まあ、過程の話は今はいいでしょう。」

「そうだな七海。」

「今は綺羅を殺す」

「違うな。もう殺した。」

上半身が消し飛んだ。

綺羅だけでなく、ジャンヌダルクもだ。

「ペラペラしやべってるうちに、お前らはもう翔鶴の術中だ。最後にいい夢は見れたか綺羅」

何ともあつけない結末である。

だが殺しとは、本来時間をかけてはならない。

時間をかければかけるほど、リスクが上がる。それ故に手早く、終わらせる。

物語のような展開はいらない。

現実には、どれだけ時間をかけて計画を練って準備を整えても、あつけなく終わるのだ。

ゆえに、喜びもない。

これが当然であるから。

E X

俺の名前は花御 開花。一般の私立高校に通う極々普通の高校生だ。

朝起きて、学校行つて、友達とバカやって、面倒臭い従業を受け：たまに居眠り。放課後になればバーガーチェーン店で駄弁ったり、カラオケ行ったり・・・えっ？デート？ハハツ・・・年齢Ⅱ彼女いない歴ですが何か？チクシヨウ。

まあ、そんなこんなで本当に普通だ。

そして、今日もごく普通の学校が終わる・・・。

キーンコーンカーンコーン

「それじゃあ今日のHRは終わり。委員長、号令」

「はい。起立、礼！」

担任が教室を出て行くと、部活動へ向かう者、教室に残りだべり出す者達、バイトや遊びに向かう者と様々に別れる。俺もそんな中の人。

「くあくあ、やっと終わった〜。」

「でっかい欠伸してんじゃないわよ！」

「痛ッ！」

俺の頭にイイ一発をお見舞いしてくれやがったこの女子生徒、名を

牧村 葵。

所謂、幼馴染と言うやつだ。

同じ病院で1日違いで生まれ、保育園、幼稚園、小学校、中学校、そして現在まで同じ・・・クラスもだ。

もつと言うと・・・

「さあ帰るわよ！オバさん、アンタのお母さんから今日の夕飯準備し

てあげてほしいって頼まれてんだからサツサと買い物して帰るよ！」
そう、家族ぐるみの付き合い。

家も隣同士だから何をするにも一緒。

どちらかの家の親が仕事で遅い時は、どちらかの家に泊まりなどは普通の事だった。今日は両親が婆ちゃんに呼ばれてばあちゃんが住む花御家の屋敷に向かった為、帰りが遅くなるのだそう。

多分、例の件についてはなしだろう。

「ねえ？聞いてんのッ！」

「ウエツ!? ああ、聞いている。うん、聞いている。」

「そう？なんかボーとしてたけど？」

「大丈夫ちゃんと聞いてたつての。」

「そうじゃあ晩御飯は決定ね。」

そうとも、例の件が家にどの程度影響してくるかは分からないけど、そういうのは大人達の仕事。俺はのんびり「じゃあ今晚はアンタの大好きなパクチー鍋に決定」・・・なんですって？

「・・・え？ハッ!? ちよっ・・・えッ?? ちよいと葵さん!?!？」

パクチー!!? パクチーだと!?!? おいおいおいおい、ふざけんな! あんな物は食いもんじゃねえ!

テレビとかで有名店がパクチーなんかかって料理を紹介してるだけ

口の中が・・・ああダメだ、想像しただけで・・・うぶ。

「はい、やっぱり聞いてなかった」

ヤベ、墓穴掘った!?!?

「ねえ、本当に大丈夫なの?」

顔を向けると、不安そうな表情を浮かべる葵がいた。

「かつちゃん、この間からたまにボーとしている事増えて、その度に大丈夫って! オバさんもオジサンも最近しよっちゅうお家空けてるでしょう? 何かあったんじゃないかって・・・不安で私」

かつちゃん・・・か、久しぶりに聞いたな。

小さい頃はかつちゃん、あーちゃんって互いの事をそう呼んでた。

葵は学校では絶対に呼ばないが、プライベートでテンションが爆上がりの時や、今回の様に不安になると無意識で昔の呼び名に戻る事があった。

けど、それだけ心配させてしまった。

「・・・あーちゃん」

「・・・」

「本当に・・・本当に大丈夫。前に話した事あったよね？俺の家の事。総本家の方でちよつとしたゴタゴタがあつてさ。末端の家であるこつちまで駆り出されてたから、ちよつと疲れが溜まつてて・・・けど、もう解決したんだ。だから心配入らないよ。・・・ありがとう。」

じつと俺の目を見て何も言葉を発さない。

俺も目を逸らさない。

「・・・信じる。」

「・・・うん。」

しばし無言の時間が過ぎて行く。

互いに気まずい。

「はいっ！もうこれでお終い！帰ろ！」

「おう。」

今この時、あーちゃんの優しさに心から感謝した。

「はーい！お待たせ！葵の特製！」

「パクチー鍋だよ！」

「……」

ふ・ぎ・け・ん・な！*？（＾○＾）／*！

「……うつぷ」

「おいおい、大丈夫かよ？朝から気分悪そうだけどよお。保健室行つた方がいいんじゃない？」

「いや……うげえ……今日は午前授業だから……グツ………ここまで来たら……あと一限は耐えれ……る。」

「いや、全くもってそんなふうに見えないから言ってるんだが？」

友人に心配されるのも無理はないと、自分自身でも分かっている。だが、こうなつた元凶を作り出した葵を悲しませることだけはいけない！

それだけはいけない！

なぜ、ならば前に一度「これ美味しくない」といったことがあつた。それから飯をひと月もの間作りに来てくれることがなくなり、餓死寸前まで追い詰められた長い記憶があるから。

え？親は作ってくれなかつたのかつて？

三ヶ月ぐらい総本家の仕事で海外に行つてたんだよそんな時。

込み上げてくる気持ち悪さを耐えつつ、本日最後の授業に取り組むのだった。

「それじゃあ今日のHRは終わり。委員長、号令」

「はい。起立、礼！」

「……() () () チーン」

「おい、どうした！菩薩通り越して完全なる無と化したその顔!!？」

「開花く帰るよ」

「……() () () スツ」

席を立つ開花。

「いやいやいや！なんで普段通りなの!?!牧村これ！開花のこれになんのリアクションもなし!?!どう見たって大丈夫じゃねえよ！もう苔生えてそうな顔しちやつてますけど!?!」

「ああ、大丈夫大丈夫！じゃあ私達、買い物あるからまた月曜日に。バイバイ！」

「……開花の奴、変な調教でもされてんじゃねえだろうな。まあ、強く生きろよ？」

―下駄箱―

「やつと終わった」

「ごめんごめん。今日はちゃんとアンタの好きなもの作ってあげるよ。」

「頼むぜ本当に」

「はいはい、ホラ早く買い物行くよ！」

「てかさ、どうせなら外で食ってかね？今日早く終わったんだし。」

「早く終わったから、早く帰るんでしょうが。帰って掃除と洗濯しとけば、明日からの土日遊べるんだから。それと無駄な出費はダメよ。それとも何？私のご飯は飽きたって？」

「いや誰もそんな……ん？」

「どうしたのって……何あの人だから？」

校門の辺りに人だかりが出来ている。

近づいてみると、一台の黒塗りの高級車。

うわっスゲく、あれって確かRolls-Royceの8代目新型車『ファントム』だよな。だか、そんな高級車よりも周りの視線を一気に集めている人がいた。

「デ、デカイ！」

「そんでもってエロい！」

「あれってコスプレ？」

「髪すごく綺麗」

「北半球がこんにちわ*？（^o^）/*」

「もしかして本物のメイドさんだったりして。」

そうメイド。メイドがいるのだ。腰辺りまで伸びた綺麗なストレートな白髪。胸が堂々と見えているメイド服。きめ細やかな肌。まるで湖かのような色をした瞳。等身大の人形と言われても信じてしまいそうなほどに美しいメイドが立っている。

「何見惚れてんの」

「いや、別に」

「あつそう。けど綺麗な人ね。」

「ああ」

けど、ウチの学校にあんな高級車で通学してる奴がいたら普通に目立つし、入学してからそんなのは見たことがない。となると来賓客が来たのか？それで待ってるのか？いや、それなら学校の駐車場に停めるだろ。わざわざこんな堂々と校門の前に駐車しない。

それに

「あの人さつきから周囲を見渡して・・・誰かを探してんのか？」

「え？」

「ほら動作はないけど視線だけ動かしてる。それもごく最小限に。」

本当に注意深く見ないと気が付かないほどだ。

「え？そうかな？全然分かんない。」

本当に彼女は一体何者だ？

まるで隙がない。集まっている人ばかりを避けて帰宅している人達にまで注意を払っている。

すると不意に俺と彼女の視線が合う。

「ん？」

「・・・」ニコッ

そのまま優しく正に聖母の様な微笑みのまま真っ直ぐにこちらに

歩いてくる。一定の歩調。乱れる事なくただ真っ直ぐに。

人だかりはまるで、彼女の歩みを止めてはならないと言わんばかりに左右に割れる。

「いや、モーゼかよ」

あつやべ、つい心の本音が。

「ウフフ、私のかの聖人の様に偉大な者ではありません。ただのメイドでございます。」

そして彼女はスカートを軽く摘み礼をする。

「お初にお目にかかります花御 開花様。私の名前はベルファストと申します。以後お見知り置きくださいませ。」

彼女、ベルファストはそう言った。

「「ハアアー!!!」」

「お前このメイドさんと知り合いか!？」

「花御、許すマジ!」

「もしかして、花御先輩って実は御曹司だったんですか!？」

いきなり周囲からの質問攻め。

いや俺が知りたいわ。確かにウチは特殊ではあるが一般家庭だし!っーか金持ちはウチのばあちゃんだよ。

「はいはいみんな落ち着いて、開花が困ってるでしょ。」

おお! 葵! やっぱ頼りになる流石我が幼馴染!

「開花」

ああなんだ我が頼れる幼馴染こと葵様よ!

「帰ったらちゃんと説明してもらおうから・・・ね?」

「・・・」

「それで、あの、貴女は開花に何か御用でしょうか?」

ハッ! え? 何今の。夢? 俺今夢見てた?

「はい。花御様、本日私めが参ったのは貴方様を連れてくる様にとの

命を受けた次第です。」

え？

「・・・俺を？」

「はい」

そう言うのとベルファストさんは後部座席のドアを開ける。

「さあどうぞお乗り下さい。」

「え？いやそんないきなり!?？なんか説明とか理由は？」

「全て移動中にご説明致します。」

「いやですから「どうぞ」だから！」

わけわからん！絶対に拒否する！

「これは総本家当主様の御命令です。」

は？今なんて？

「総本家・・・当主・・・様」

「さようでございます。さあどうぞ、当主様がお待ちです。」

うそ・・・だろ？当主が？末端の家の俺なんかに？一体なんの用があつて？となるとまさか。

「ウチのばあちゃんはこの事は」

「はい、花御家現当主であらせられる貴方様のお婆さまも、今回の件に關しまして既に別のものが事前にお伝えしております。もちろんご両親方にも。」

俺に拒否権は最初からなかったわけだ。いや、そもそもが総本家当主様の御命令だ。逆らうも何もないって話だよな。

「分かりました。」

俺は大人しく助手席側の後部座席に乗り込む。

その時、一瞬だがベルファストさんからヤバい何かを感じたが、すぐに消えてしまった。気のせいかな？

「待って下さいー！」

え、葵？

「何でしょう、牧村 葵様。」

「なんで・・・私の名前。」

「事前に花御様の周辺調査を行なっておりますので。」

「・・・私も連れて行って下さい。」

「何故でしょう?」

「他所様の家の問題だって事は重々承知です。本当なら私が首を突っ込んでいい問題じゃない事だって雰囲気で見分かります。」

「・・・」

「でも開花は! 貴女の話聞いた時の開花は、一瞬驚いた! それと同じく恐怖の感情も! 一体開花をどうするつもりなんですか! 無事に帰ってくるんですか!?! もし、開花がその当主の人に嫌な事をさせられそうになるなら私が言っただけで一緒に行くんです。そつちで勝手にやっつてろ、開花を巻き込むなって!」

「葵」

「かつちゃん、家の事話す時すごく嫌な顔してる。私は昔からそれが嫌だった。だから私も一緒に行く!」

葵・・・分かったのか。

「残念ですが、牧村様を一緒に連れてくる事はできません。」

「でしょうね、なんとなく分かりますよ開花一人だけ連れて来いとか、ドラマでありそんな命令をベルファストさんは受けてるんですよね?」

「はい。私は当主様より総本家へ花御 開花様のみお連れする様、命を受けております。」

「なら私は勝手に乗り勝手について行きます。ですので貴女が罰せられる事はないと思います。」

いや、葵さんやそれ極論

「なぜそこまで? 何かをされると決まったわけでもございませんが?」

「・・・それは」

3秒、5秒と黙って下を向いてしまった。葵?

「・・・」ぼそ

「はい?」

「お、幼馴染だから!」

あ、葵! アンタ幼馴染の鏡やで!

顔を真っ赤にしながら発した言葉。それに対して帰って来たのは「なるほど、愛ですか。」

「あ、愛って！ちちち違うわ！」

ベルファストさんは実はロマンチスト？そう思った俺は悪くない。「牧村様のお気持ちは、このベルファスト理解致しました。その上で言わせていただきます。」

ベルファストは冷静に淡々と言葉を紡ぐ。

「小娘、貴女そのその夢物語の様に行くわけがないでしょう？総本家は昔からこの日本を裏で支えて来た格式ある家です。そこに貴女のようなものを間違っても入れるなどあつてはなりません。それに知らないとは言えこの私……メイド長である私にその様な事を言うとは」瞬間、まるで立っていられない様な恐怖の感情だけが渦巻いた。

発元はベルファスト。

足が震える。さっきまで少し暑いとも思っていたのに、今では裸で極寒の地に放り出されたかの様な寒さ。

「お仕置きが欲しいのかしら？」

「ひっ！」

そんなものを間近で受けた葵は腰が抜け座り込んでしまう。

「葵！」

「では失礼致します。」

後部座席のドア閉め。運転席に乗り込むベルファスト。そのままエンジンをかけて車は走り出したのだった。

俺を乗せた車は、高速道路に乗って東京方面に向かって走っている。だが、今はそんな事どうでもいい。

「ベルファストさん」

「はい、何でございましょうか？花御様。」

「あんた、葵に向けて……それに周囲にいた一般人の生徒もいるってのに、殺気を放つただろ。一体どう言うつもりだ！」

「ご安心下さい、軽く撫でた程度でございませぬ。」

「そう言う問題じゃない！」

「いいえ。あれはそう問題です。あの場において、何よりも優先すべき事は貴方様を当主様のもとにお連れする事。」

それに、と言葉を区切る。

「もし、牧村様を本家へとお連れしたと致しましょう。その場合、この車を降りた瞬間に命を落としている可能性があります。私が花御様をお連れする命を受けているのは、本家の者たちは皆知っています。私の独断でお連れしたとしても、私も罰を受け牧村様も殺される。これが現実的に一番可能性が高かったのでございます。」

では、あの時ベルファストが殺気を放ってまで葵を止めたのは

「ご両親がご不在の間、お食事を用意さして下さる方などそうそうありません。……ただの幼馴染と言うには少し微笑ましく思えますね。彼女を大事になさって下さいね。」

そう言うってベルファストはバックミラー越しに微笑んだ。

葵を守ってくれた。この人は信用できるのではないだろうか？

そんな考えが浮かばないはずもなく、気が付かないうちにベルファストの事を少しばかり信用できる人物かもしれないと思い始めていた。

「それでは花御様、この度当主様が貴方様を本家に連れて来るように言った理由をご説明いたします。」

来たか

「花御様も既にご承知かとは思われますが、改めてご説明いたします。この度の多血統血にて多くの方が亡くなられました。と申しましても、敵陣営のみですが。されどこちら側にも問題が。」

そうだった。本来ならば総力戦の多血統血。それを当主一人で。

「こちら側の陣営に関しては、次世代を担う当主様や花御様の様に若い人材が少ないのが現状。上の方々と下の方々との間が空き過ぎている為、今回は同年代が少ないのならば少ないなりに結束を強めれば良いのではと言うことになりまして、当主様と同年代の方々を本家にお連れすることになった次第です。」

聞けば、何ともまともな話。

なんだ緊張して損したじやないか。

当主は一つ下の歳だったはず。

多血統血の事はあったが、これからのことをしっかり考えてるんだなあ。

「ちなみに今回の提案は当主様ではなく、夜蛾様のご提案です。当主様は現在本家にお住まいではございませんので。」

前言撤回。

家臣筆頭の夜蛾さんが一番頑張っている様だ。

「ですのでそう気を張らず楽になさって下さい。御夕食も振る舞われる予定でございますので、それまでの間の顔合わせをして他愛ないお話などをなさるだけです。」

車が高速を降り東京郊外を目指す。

東京の割に、なんと言うか……。

「田舎っぽいですか?」

「えっ?」

「うふふ、顔に出ておりましたよ。東京と言っても郊外はこんなものですよ。」

そして、車が止まる。

「どうぞ、足元にお気をつけ下さい。」

ベルファストが後部座席のドアを開けてくれ、車を降りる。目の前には、the・日本家屋としか表現出来ない豪華絢爛な建物。

「……すっげ」

思わずそんなことしか言えなかった。

何だこれ?え?

何坪あるのこれ?

東京ドーム何個分?これが本家……マジパネエ。

「花御様」

「ウエッ!ああはい!」

チクシヨウ恥ずかしい!変な声出ちまった!

「さあこちらへ」

ベルファストの後に続き、本家の門の前まで来ると

「・・・」

なんか見るからにヤバいグラスンがいる。

「夜蛾様」

あつ、やつぱりこの人が夜蛾さんなんだ。

にしても強いな。

目の前に立つとことさらよくわかる。

思わず生玉を飲み込んでしまうほどに、耳に心音が聞こえてしまうほどに緊張してしまっている。

「初めましてだな少年。俺は夜蛾正道だ、当主様の補佐をしている。」

「は、はい！本日はお招きいただきましてありがとうございます！は、花御開花です！ここここ、こちらこそよろしくお願ひします！」

噛みまくって少し内頬噛んじまった。ほらもう、ベルファストさん口に手を当てて笑ってるよ！夜蛾さんは無表情だけど！

だが、それも一時で二人は並ぶととても洗練された礼をとり深々と頭を下げる。

「改めまして、長い道のりお疲れ様でございました。」

「この度お呼び致しました方々は、まだ皆様ご到着に時間が掛からますので今しばらくお待ち下さい。」

まるで当主に対するかの様に。

「いやいやいやいや！やめて下さいよ！そんなここに来るまでなんてシートの上り心地を堪能してただけだし、それに集められてる皆さん、学校とか道の混み具合とかあるだろうから、気にしてませんよ！」
それに末端の家の俺に、そんな礼を取られたらどうすりゃいいか分かんないってのが本音なんですけど！！？」

「・・・」

「あれ？」

俺の返しにお二人は、何を言っているんだコイツ？つて目を向けてくる。

「え？あれ？俺変な事・・・言いました？」

「花御様、何を勘違いしていらっしやるのかは分かりませんが」

「小僧、お前にわざわざ俺とベルファストが礼をとるわけないだろうが。」

それに・・・お前も禅院家の分家の者であるならば、サツサとこちらに来て礼を取らないか！」

「ハ・・・エ？」

「おや？もしや花御様・・・気がついていらつしやらなかったのですか？最初から？」

え？最初？

「ん？ベルファスト、どう言う事だ？」

「あ、はい夜蛾様。花御様をお連れする際、ごく自然体でいらつしやるご様子でしたので、このベルファストいたく驚きと感心をしておりましたが、まさか気が付いていらつしやらないだけであつたとは。」

えくと話が見えてこないんですが？

「なるほど、そう言う事だつたのですね。花御様、私がお迎えにあがつた際に後部座席のドアを開けましたが、なぜ開閉したドア側の席お座りになられたのですか？」

え？だつて貴女が開けてくれたからですけど？

「人によりけりかとは思いますが、普通は奥に詰めるか中心の座席に座ろうとするハズでございます。」

「確かに、閉める時当たらない様にそうするかも。」

あれ？だとしたらなんで俺は？

「結論から言わせていただきます。花御様は座らなかつたのではございません。座れなかつたのでございます。」

「・・・」

「なぜならば既に座つていた方がいらつしやつたのですから。」

「・・・」

「知覚は出来ずとも、身体が本能で感じとり座る事を避けたのです。」

あ、あの狭い空間の中・・・隣にそれよりも俺を迎えに来た時から車の中にいて、俺が乗り込んだとしても気がつけない人物。まさか・・・嘘だろ？まさか・・・ベルファストさんの話を本当だとするとそんな事が出来るのは！

「つーかよ、お前いつまで俺の前に立ってんだ？」

ありえるはずがない。真後ろから若い男の声。

そう言えば、ベルファストさんはここについて後部座席のドア開けて俺が降りた後も数秒閉めなかった。それはなぜ？

それはもう一人降りる人が居たから！
バツ！と振り返る。

開花よりも10センチ程背が高く、猛獣の如き瞳、学生離れした服の上からでも分かるほどの鍛え抜かれた肉体。

「禅院 甚爾！」

バツ！ガツン！

「ガハッ！」

「様をつける！その頭は飾りか小僧!?？」

突如、夜蛾に頭を掴まれ地面に叩きつけられ強制的な土下座を強いられた。

だがこれは自分の落ち度だ！当主である甚爾が後ろにいるなんて状況に驚いていたが、それでも当主に対してタメ口！

「も、申し訳・・・あり・・・ません。」

なんとか声を絞り出す。

「クククツ話してやれよ。別に気にしちやいないぜ？」

「しかし」

「2度は言わねえ」

夜蛾さんが手を離し、解放される。

起き上がりはするが立てない。さっきので足に力が入らない。

「ククク」

そんな俺を見て笑う。

「若、遊びも程々に」

「わりいわりい、まさか最後まで気がつかないとは思わなくてよお。」

「まったく」

「お〜いカイ」

カイ？お、俺のことか!?

「開花だからカイでいいよな？はい決定。立てる様になったら女中の誰かに案内してもらえ。俺先入ってるわ。」

そう言つて甚爾は、ベルファストと夜蛾を従えて本家へと入って

「行った。
.....
やっちゃまった」